

福岡市  
高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告VI  
**博 多**  
— 高速鉄道関係調査(3) —  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第156集

1987

福岡市教育委員会

福岡市

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告VI

# 博 多

— 高速鉄道関係調査(3) —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第156集

1987

福岡市教育委員会

## 序

福岡市教育委員会では、交通局の委託を受け、昭和51年以來路線内遺跡の調査と出土遺物の整理を行って参りました。発掘調査は完了しましたが、出土遺物の整理作業は現在も継続しています。

本書は昭和54年に実施した地下鉄1号線関係の博多遺跡群の調査について報告するものです。

旧博多部は中世における大陸文化流入の門戸として日本史上特異な発達をとげ、貿易陶磁を初めとする多量かつ多様な出土遺物がそれを物語っています。

この報告書が埋蔵文化財への認識を深める一助となり、また研究資料としても活用いただければ幸甚に思います。

発掘調査から資料整理に至るまで、交通局をはじめ、指導委員の先生方など多くの人々の御協力に対し深甚の敬意を表するものであります。

昭和62年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

## 例　　言

1. 本報告書は、福岡市交通局（旧高速鉄道建設局）が福岡市教育委員会に委託した、高速鉄道（地下鉄）建設地内における埋蔵文化財発掘調査の報告書の第6冊目で、「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 VI」とする。博多遺跡群における高速鉄道関係調査の第3集めである。
2. 博多遺跡群をめぐる歴史の上で不可欠な遺跡である「袖ノ湊」に関する、文献史からの研究成果の一部を、「博多袖湊関係史料(1)－地誌編－」として付録に収録した。玉稿を寄せていただいた、神奈川県立金沢文庫 福島金治氏、福岡大学 佐伯弘次氏に謝意を表したい。
3. 題字は、故筑紫豊先生の揮毫による。
4. 本文中で用いている貿易陶磁の分類は、すべて「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV 博多 1984年 別冊）に掲げている。
5. 本文の遺物実測図中に示したグラフは、土師皿、杯類の計測グラフであり、まとまった出土状態をもつ遺構について主に掲げた。実線が糸切底、破線がヘラ切底を示し、縦軸が器高、横軸が底径、II径をそれぞれ半径で表している。
6. 今回報告する地下鉄祇園町工区E・F・G区の発掘調査は、浜石哲也を中心に折尾学、池崎譲二が担当し、福岡市教育委員会文化課諸氏の協力を得た。
7. 本文の編集と執筆は、折尾、浜石と協議の上、池崎と森本朝子が分担して行った。
8. 遺構の実測は、浜石、池崎、信行千尋、日野孝司、大橋隆司、岩切幹嘉、井手透、古田健一、大野淳一郎、上山千重、山口美矢、樋口一明、柴田喜瑞、坂本真二、香月聰が行った。
9. 遺物の実測とトレースは、森本、田崎真理、入江のり子、撫養久美子、池崎が行った。
10. 写真撮影は現場関係を折尾、浜石、池崎、白石公高、宮島成昭が、遺物写真は木村厚子、萩尾朱美の協力を得て白石が担当した。
11. 遺物、図面整理には以下の方々の手を煩した。  
木村厚子、溝口美津代、里村海子、山田由美子、江藤百合子、有島美江、伊藤裕子、楠崎多佳子、田尻寿麻子、今村淳子、田子森牧子、豆田陽子、下尾美成子、撫養久美子、近藤聰子、的場由利子、能美須賀子、竹下ひろみ、西原年枝、古谷宏子、萩尾朱美、安武智子、森本朝子、田崎真理、入江のり子、西崎南紗子、日高さゆり、浜砂美津代

## 本文目次

第1章 地下鉄路線内遺跡調査の経過.....	3
第2章 博多遺跡群における発掘調査概要.....	4
第3章 紙園町工区E・F・G区の調査.....	7
1. 調査の経過.....	7
2. 調査の組織.....	8
3. E区の調査.....	9
1) 遺構と遺構出土の遺物.....	9
2) E区遺構外出土の遺物.....	54
4. F区の調査.....	63
1) 遺構と遺構出土の遺物.....	63
2) F区遺構外出土の遺物.....	89
5. G区の調査.....	100
1) 遺構と遺構出土の遺物.....	100
2) G区遺構外出土の遺物.....	131
6. まとめ.....	139
付編 博多袖ノ湊関係史料集 (1) 地誌編	

## 挿 図 目 次

Fig. 1	高速鉄道路線内遺跡地図 (1/75,000) .....	2
Fig. 2	博多遺跡群地形図 .....	折込み
Fig. 3	博多遺跡群地下鉄1号線関係調査区全体図 (1/1,000) .....	折込み
Fig. 4	E・F・G区造構全体図 (上部検出遺構) .....	折込み
Fig. 5	E・F・G区造構全体図 (下部検出遺構) .....	折込み
Fig. 6	E・F・G区土層図 .....	折込み
Fig. 7	101号土壤出土遺物 .....	9
Fig. 8	103号土壤 .....	10
Fig. 9	103号土壤出土遺物 .....	11
Fig. 10	104号土壤出土遺物 .....	12
Fig. 11	105・106号土壤出土遺物 .....	13
Fig. 12	107号土壤と107号土壤出土上遺物 .....	14
Fig. 13	108・153号土壤と108号土壤出土遺物 .....	15
Fig. 14	109・120号土壤と109号土壤出土上遺物 .....	16
Fig. 15	110号土壤と110号土壤出土遺物 .....	17
Fig. 16	112・113・114・119・121号土壤 .....	19
Fig. 17	112・113・114号土壤出土遺物 .....	20
Fig. 18	115号土壤と115・117号土壤出土遺物 .....	21
Fig. 19	117号土壤 .....	22
Fig. 20	118号土壤出土遺物 .....	23
Fig. 21	119号土壤出土遺物 .....	24
Fig. 22	120・121号土壤出土遺物 .....	25
Fig. 23	122・123号土壤出土遺物 .....	26
Fig. 24	124・125号土壤と125号土壤出土遺物 .....	27
Fig. 25	105・126号土壤と126号土壤出土遺物 .....	28
Fig. 26	129・130号土壤と129号土壤出土遺物 .....	30
Fig. 27	131・168号土壤と131号土壤出土遺物 .....	31
Fig. 28	133号土壤と137号土壤出土遺物 .....	32
Fig. 29	141・143・146・148号土壤出土遺物 .....	33
Fig. 30	146・150・151号土壤 .....	34
Fig. 31	152・156号土壤と150・152・156号土壤出土遺物 .....	36

Fig.	32	157号土壤と157号土壤出土遺物	38
Fig.	33	158・159号土壤と158号土壤出土遺物	39
Fig.	34	160・161・164・166号土壤	40
Fig.	35	160・161号土壤出土遺物	41
Fig.	36	162号土壤出土遺物	42
Fig.	37	167号土壤と165・166・167号土壤出土遺物	43
Fig.	38	168・169号土壤出土遺物	44
Fig.	39	11・12号溝出土遺物 (1)	46
Fig.	40	12号溝出土遺物 (2)	47
Fig.	41	12号溝出土遺物 (3)	48
Fig.	42	12号溝出土遺物 (4)	49
Fig.	43	12号溝出土遺物 (5)	50
Fig.	44	12号溝土層断面図	51
Fig.	45	E区遺構外出出土遺物 (1)	55
Fig.	46	E区遺構外出出土遺物 (2)	56
Fig.	47	E区遺構外出出土遺物 (3)	57
Fig.	48	E区遺構外出出土遺物 (4)	58
Fig.	49	E区遺構外出出土遺物 (5)	59
Fig.	50	E区遺構外出出土遺物 (6)	60
Fig.	51	201号土壤と201号土壤出土遺物	63
Fig.	52	203・209・216・219・228号土壤と203号土壤出土遺物 (1)	64
Fig.	53	207号土壤と203号(2)・204・207号土壤出土遺物	65
Fig.	54	208号土壤と208号土壤出土遺物 (1)	66
Fig.	55	214・217・220号土壤と208号土壤出土遺物 (2)	67
Fig.	56	210・214号土壤出土遺物	69
Fig.	57	215号土壤と215・216号土壤出土遺物	71
Fig.	58	217号土壤出土遺物 (1)	72
Fig.	59	217号土壤出土遺物 (2)	73
Fig.	60	210・218号土壤と218号土壤出土遺物	74
Fig.	61	219号土壤出土遺物	75
Fig.	62	220号土壤	76
Fig.	63	220・224・225号土壤出土遺物	77
Fig.	64	227号土壤と227・228号土壤出土遺物	78

Fig.	65	229号土壤出土遺物	79
Fig.	66	231・236号土壤と231号土壤出土遺物 (1)	80
Fig.	67	231号土壤出土遺物 (2)	81
Fig.	68	234号土壤と232・233・234号土壤出土遺物	83
Fig.	69	236号土壤出土遺物	84
Fig.	70	237号土壤と237号土壤出土遺物	85
Fig.	71	239号土壤と239号土壤出土遺物 (1)	86
Fig.	72	239号土壤出土遺物 (2)	87
Fig.	73	241号土壤出土遺物と21・23号溝出土遺物	88
Fig.	74	F区遺構外出土遺物 (1)	90
Fig.	75	F区遺構外出土遺物 (2)	91
Fig.	76	F区遺構外出土遺物 (3)	92
Fig.	77	F区遺構外出土遺物 (4)	93
Fig.	78	F区遺構外出土遺物 (5)	94
Fig.	79	F区遺構外出土遺物 (6)	95
Fig.	80	F区遺構外出土遺物 (7)	96
Fig.	81	F区遺構外出土遺物 (8)	97
Fig.	82	301・302・303・304・306・310号土壤出土遺物	101
Fig.	83	313号土壤と312・313号土壤出土遺物	102
Fig.	84	315・316号土壤出土遺物	104
Fig.	85	324・326号土壤出土遺物	105
Fig.	86	327号土壤と327号土壤出土遺物	107
Fig.	87	332号土壤と332号土壤出土遺物	109
Fig.	88	334号土壤と334・335・336号土壤出土遺物	110
Fig.	89	336・337号土壤	111
Fig.	90	337・338号土壤出土遺物	112
Fig.	91	339号土壤と339号土壤出土遺物	114
Fig.	92	341・344・349号土壤と341・344号土壤出土遺物	115
Fig.	93	358号土壤と345・352・357・358号土壤出土遺物 (1)	117
Fig.	94	358号土壤出土遺物 (2)	118
Fig.	95	359号土壤と359号土壤出土遺物	119
Fig.	96	362号土壤と362号土壤出土遺物	120
Fig.	97	363・365号土壤出土遺物	121

Fig.	98	366号土壤と366号土壤出土遺物 .....	123
Fig.	99	368号土壤と368・370・371号土壤出土遺物 .....	124
Fig.	100	373号土壤と373号土壤出土遺物 .....	126
Fig.	101	374号土壤と374号土壤出土遺物 .....	127
Fig.	102	378・379号土壤と375・378号土壤出土遺物 .....	128
Fig.	103	31・32号溝とPit 出土遺物 .....	130
Fig.	104	G区遺構外出土遺物 (1) .....	132
Fig.	105	G区遺構外出土遺物 (2) .....	133
Fig.	106	G区遺構外出土遺物 (3) .....	134
Fig.	107	G区遺構外出土遺物 (4) .....	135
Fig.	108	G区遺構外出土遺物 (5) .....	136
Fig.	109	G区遺構外出土遺物 (6) .....	137
Fig.	110	A～G区検出主要溝概念図 .....	140

### 表 目 次

Table.	1	地下鉄路線内遺跡調査一覧表 .....	3
Table.	2	博多遺跡群調査地点一覧 .....	6

## 写真図版目次

- PL. 1 吉州天目碗 (G区遺構外出土)  
PL. 2 青白磁灯明台 (G区362号土壙出土)  
PL. 3 博多遺跡群周辺航空写真  
PL. 4 博多眺望 (博多駅上空より)  
PL. 5-1 下水管移設立会調査風景  
2 中間杭布掘立会調査風景  
PL. 6-1 祇園町工区遠景 (北から)  
2 G区調査風景 (南東から)  
PL. 7-1 E区調査風景 (東から)  
2 E区12号溝調査風景 (南から)  
PL. 8-1 103号土壙 (東から)  
2 113号土壙 (西から)  
PL. 9-1 114号土壙 (南西から)  
2 117号土壙 (北から)  
PL. 10-1 12号溝全景 (南から)  
2 12号溝土層断面 (南から)  
PL. 11-1 F区調査風景 (南から)  
2 F-I区遺構全景 (南東から)  
PL. 12-1 F-II区遺構全景 (南東から)  
2 F-III区遺構全景 (南東から)  
PL. 13-1 F-III区21号溝 (北東から)  
2 237号土壙、馬骨検出風景  
PL. 14-1 237号土壙上面、馬骨出土状況 (南西から)  
2 237号土壙下面、馬骨出土状況 (南西から)  
PL. 15-1 G-I区上部遺構全景 (北西から)  
2 G-I区下部検出遺構全景 (北西から)  
PL. 16-1 G-II区下部遺構全景 (北西から)  
2 G-III区下部遺構全景 (北西から)  
PL. 17-1 311号土壙 (南西から)  
2 313号土壙 (南から)  
PL. 18-1 316号土壙 (北から)

- 2 332号土壤（北から）  
PL. 19-1 334号土壤（西から）  
2 335号土壤（北から）  
PL. 20-1 337号土壤（北西から）  
2 337号土壤、墨書き白磁出土状況（北西から）  
PL. 21-1 341号土壤（北から）  
2 341号土壤上層断面（西から）  
3 341号土壤、ガラス玉出土状況（西から）  
PL. 22-1 357号土壤（東から）  
2 358号土壤（北から）  
PL. 23-1 362号土壤（西から）  
2 362号土壤土層断面（北から）  
3 362号土壤、灯明台出土状況（北東から）  
PL. 24-1 373号土壤（南から）  
2 374号土壤（北から）  
PL. 25-1 31号溝（東から）  
2 31号溝（南から）  
PL. 26 103・104・105・107・108・109号土壤出土遺物  
PL. 27 110・111・112・113・114・115号土壤出土遺物  
PL. 28 117・118・119・120・121号土壤出土遺物  
PL. 29 122・123・125・126・129・131号土壤出土遺物  
PL. 30 131・138・141・143・146・148・150・156号土壤出土遺物  
PL. 31 157・158・160・161・162・165・166・167・168号土壤出土遺物  
PL. 32 12号溝・E区遺構外出土遺物  
PL. 33 E区遺構外・203・204・207・208号土壤出土遺物  
PL. 34 208・214・215・216・217・218号土壤出土遺物  
PL. 35 218・219・220号土壤出土遺物  
PL. 36 224・227・228・231・232・236号土壤出土遺物  
PL. 37 237・239号土壤・F区遺構外出土遺物  
PL. 38 F区遺構外・301・306号土壤出土遺物  
PL. 39 313・315・316・327・336・337号土壤出土遺物  
PL. 40 338・339・341・345・357・358号土壤出土遺物  
PL. 41 358・362・363・365・366号土壤出土遺物

- PL. 42 366・373・374・375・378号土壤・G区遺構外出土遺物
- PL. 43 G区遺構外出土遺物
- PL. 44 出土遺物墨書集成(1) E区
- PL. 45 出土遺物墨書集成(2) E区
- PL. 46 出土遺物墨書集成(3) E区
- PL. 47 出土遺物墨書集成(4) E・F区
- PL. 48 出土遺物墨書集成(5) F・G区
- PL. 49 出土遺物墨書集成(6) G区
- PL. 50 出土遺物墨書集成(7) G区

# 博多遺跡群

— 地下鉄路線内の調査(3) —



遺跡略号 HKT  
遺跡調査番号 7833

I 高速鉄道関係埋文化財調査概要

2

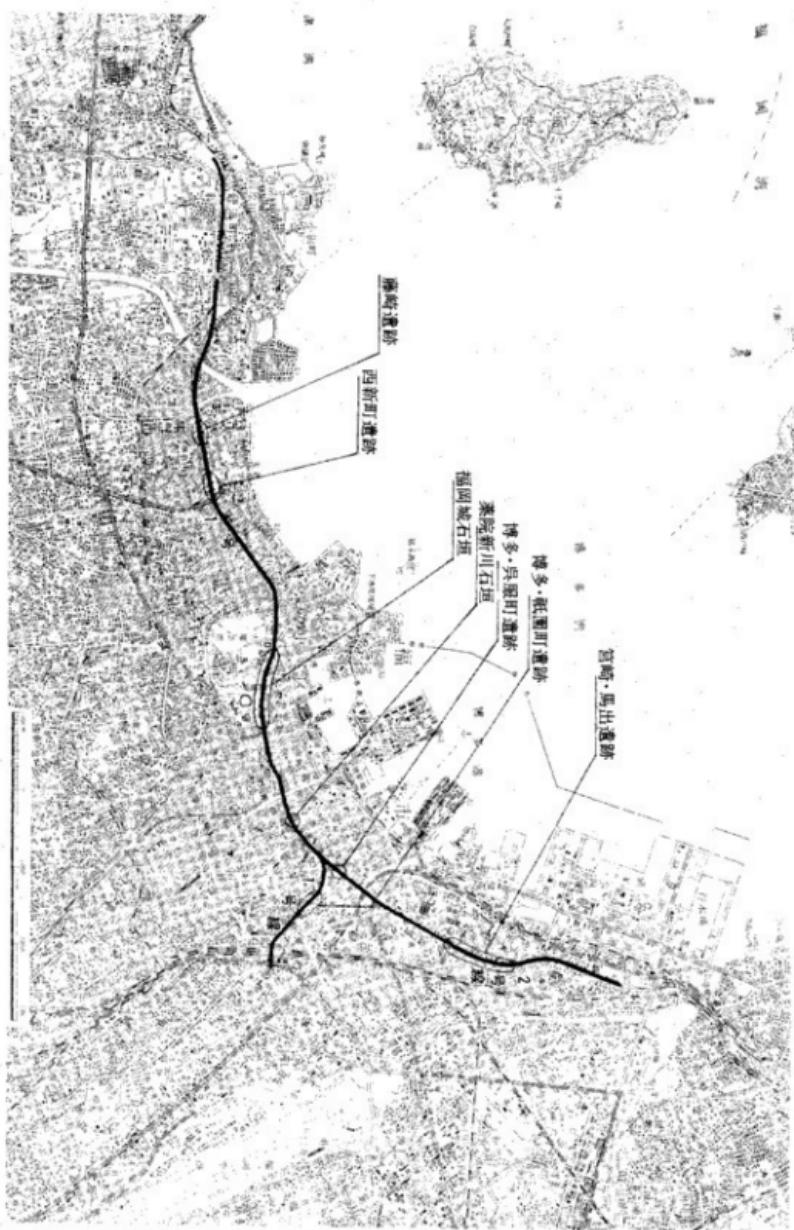


Fig. 1 高速鉄道路線内遺跡図 (1/75,000) 原図 国土地理院5万分の1地形図「福岡」

## 第1章 地下鉄路線内遺跡調査の経過

昭和51(1976)年8月に地下鉄路線内遺跡の調査として、西新町遺跡の調査にまず着手した。以後、地下鉄工事各工区の発注とともに、下表のように各遺跡の発掘調査が進められ、昭和59(1984)年4月の博多遺跡群における祇園駅P-2出入口地点の調査をもって、路線内遺跡の調査は完了した。

この間、地下鉄工事も順調に進行し、昭和58(1983)年3月の1号線の開通に続き、昭和61(1986)年1月には、2号線箱崎九大前駅まで、更に同年11月には貝塚駅までの2号線全線が営業運転を開始し、今やまさに福岡市における交通網の大動脈として、市民にとって不可欠の足としてその機能を発揮している。今後更に福岡空港までの延長も具体化し、都市交通体系の花形として、その存在はますます脚光を浴びることになる。

この地下鉄開通という具体的な成果とともに、発掘調査で得られた考古学的な成果も、福岡市の歴史的重要性を明らかにする上で極めて価値の高いものであった。これらについては下記の如く順次発掘調査報告書を作成しているところであり、総をもって完結する予定である。

### 高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書

I	『藤崎遺跡』	福岡市埋蔵文化財調査報告第62集	1981
II	『西新町遺跡』	第79集	1982
III	『福岡城址 内堀外壁石積の調査』	第101集	1983
IV	『博多 高速鉄道関係調査(1)』	第105集	1984
V	『博多 高速鉄道関係調査(2)』	第126集	1986
VI	『博多 高速鉄道関係調査(3)』	第156集	1987

Table 1 地下鉄路線内遺跡調査一覧表

遺跡名	所 在 地	時 代	性 格	調査期間	調査面積	備 考
藤 崎 遺 跡	西区藤崎西山田地蔵前	弥生時代	共同墓地	昭和52年4月 ～同53年6月	4,925m <sup>2</sup>	
(西新町工区)	西区西新町前	弥生時代 古墳時代	生 活 残 痕	昭和52年12月 ～同53年4月	920m <sup>2</sup>	藤崎と西新町に入る
西 新 町 遺 跡	西区御厨町高砂原	*	共同墓地・住居跡群	昭和52年8月 ～同53年1月	6,230m <sup>2</sup>	
福岡城内堀・石垣	中央区荒戸・大手門・平和台・赤坂	江戸時代	施 工 壁	昭和52年12月 ～同53年9月	14,900m <sup>2</sup>	
福岡城東北普請石垣	中央区天神 (三隈庁舎)	*	武家の街と博多町人街とを分けた石垣	昭和52年3月 ～同53年6月	500m <sup>2</sup>	
博 多 遺 跡 群	兵 工 区	博多区・土橋町・兵庫町・通地 (旧電車通り)	平安 ～室町時代	寺 世 の 海 刃	昭和52年11月 ～同53年5月	200m <sup>2</sup>
	店 屋 口 工 区	博多区御領所町長与前	*	寺 世 の 博 多 の 街	昭和52年12月 ～同53年12月	1,832m <sup>2</sup>
	祇 园 駅 T 区	博多区祇園新町	*	*	昭和52年3月 ～同53年12月	4,500m <sup>2</sup>
博 多 遺 跡 群	博多区博多駅前	鎌倉 ～室町時代	*	昭和52年12月 ～同53年8月	4,500m <sup>2</sup>	
真 城 为 出 遺 跡	東区高崎町若葉・馬出	鎌倉 ～室町時代	高崎官邸街	昭和52年4月 ～同53年12月	約5,000m <sup>2</sup>	

## 第2章 博多遺跡群における発掘調査概要

博多遺跡群 (Fig. 2) は、福岡市博多区に所在し、那珂川と石堂川（御笠川、旧比恵川）の沖積作用によって生じた沖の浜、博多浜（柳田浜）と呼ばれる二つの砂丘（洲）に立地しており、旧那珂郡に属す。近世城下町としての「福岡」に対する商業都市「博多」の指し示す地域とはほ等しく、これはとりもなおさず中世港湾都市の中心域を占めていたものと思われる。

博多が日本における海外先進文化流入の門戸として果たした役割的重要性については、主に文献史学の立場から多くの先覚が旨とされており、他言を要しない。また考古学的立場からも中山平次郎、岡崎敬氏らをはじめとする研究がなされている。しかしながら、昭和40年代までは本格的な調査が行なわれておらず、博多遺跡群の内容、広がり等は具体的に把握することが困難な状況であった。

博多における本格的な発掘調査の嚆矢となったのは地下鉄1号線店屋町工区の調査（章末文献3）であった。その予想を上回る成果をもとに、各種開発に係る発掘調査体制は整備され、現在まで、Tab. 2 に示すように多くの発掘調査が行なわれてきた。その結果、博多における考古学的な視座を点から線へ、更に面から立体にまで広げることが可能になりつつある。しかし各調査の整理作業は充分に進行しておらず、それらのまとめはこれからのことであるが、その概要を記しておきたい。

博多遺跡群は平安時代末から戦国時代までを中心とし、更には江戸時代を経て現代に到るまでの都市遺跡としての性格がまず挙げられる。しかし遺跡としては弥生時代中期まで遡り、甕棺墓地の形成や、集落も見られる。古墳時代には前方後円墳(28次)や方形周溝墓(17、27次)をはじめ、古墳時代初頭の集落址や墓地が見られる。奈良時代～平安時代の律令期については良好な遺構は多くないものの、石帶、帶金具をはじめ須恵器、土師器、越州窯青磁、長沙窯陶器、製塩土器等が地点によっては多く出土しており官衙的施設の存在も推定されている。このように博多遺跡群は弥生時代から現在まで、連綿として人々の生活が営まれてきた複合遺跡である。

博多における歴史地理的な変遷も、文献史学、地理学方面との連繋もあり、徐々に明らかにされつつある。「袖の湊」に関しては「袖の湊平清盛整備説」とともに「袖の湊呉服町交差点説」がほぼ定説となっていたが、地下鉄関係の呉服町交差点の調査では、11～12世紀代の建物、側溝、墓などが検出され、「袖の湊呉服町交差点説」は否定された。しかしその周辺の調査(16、29次)では、交差点の東西に低湿地があり、15～16世紀頃に徐々に埋め立てられていたことが明らかにされ、Fig. 2 の等高線に見られるように、沖の浜側に通じる陸橋のような地形をなしていたことが明らかになった。現在のところ両側の人江状低湿地が「袖の湊」跡と考え易い。また沖の浜の形成時期も碇石の出土したこと(5次)によって、奈良、平安時代と推察される。

出土遺物は調査地点によっては諸相に変化があるものの、その種類、量ともに豊富であり、

人々の豊かな生活ぶりを彷彿させるに充分である。なかでも中国製品を中心とする貿易陶磁の量と種類の多さは特筆すべきであり、国際貿易都市博多の性格を見事に代弁しているといえる。浙江・福建・広東省を中心にそれらの産地も様々である。これら貿易陶磁の中には墨書をもつ例が少なからず含まれ、中国人姓と認められるものも多い。これらは地点毎に姓の偏りがあり、中国商人の居留地であった「宋人百堂」「大唐街」などの伝承を裏付けるものである。また、白磁を山の如く廃棄した地点（14次）や、同種の青磁碗、皿を大量に一括廃棄した井戸（店屋町工区出入口2・3）など、陶磁器を取り扱っていたと思われる商人の存在をうかがわせる出土状態も見られる。

長期にわたる都市遺跡であり、人々のエネルギーッシュな営みによって様々な遺構が刻まれている。井戸および廃棄物処理土壌の密度は漸まじく、複雑に互いに切り合って、遺構、遺物の把握を困難なものにしており、町屋等の建物群は殆んど復元されていないのが実情である。しかしながら、溝および道路等については比較的明瞭にえらされている。35次調査では幅6m程の両側に側溝をもつ室町～戦国期の道路が出土し、少なくとも6回の道路改修が行なわれていることが明らかになっている。また、町割りに関すると思われる溝、道路等も各地点で見られ、現在までのところ、鎌倉時代末までの南北の町割、35次調査の道路に見られる町割、戦国時代末以降の太閤町割と、3回の町割の変遷が推定される。

#### 博多遺跡群関係埋蔵文化財調査報告書 (Table. 2 の報告書番号に一致する)

1	『博多 I』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集	1981
2	『博多 II - 図版編』	第86集	1982
3	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 IV 博多 (1)』	第105集	1984
4	『博多 III』	第118集	1985
5	『博多 IV』	第119集	1985
6	『博多 V』	第120集	1985
7	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 V 博多 (2)』	第126集	1986
8	『博多 VI』	第144集	1986
9	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 VI 博多 (3)』	第156集	1987
10	『博多 VII』	第147集	1987
11	『博多 VIII』	第148集	1987
12	『博多 IX』	第149集	1987
13	『博多 X』	第150集	1987
14	『中部地区埋蔵文化財報告 II』	第146集	1987

Table.2 博多遺跡群調査地点一覧(昭和62年3月現在)

## 公共事業関係

井号	調査番号	調査原因	所在地(博多区)	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	船番	備考
A	7725	地下鉄建設	御供所町	1,412	77.33 78.11	3.7	店屋町上区
B	7833	*	御供所町外	4,500	79.3~12	9	祇園町工区
C	7835	*	店屋町、上呉服町外	200	78.11 79.11		吳服町工区
D	7949	*	博多駅前一丁目外	4,500	78.11 79.11		駅前上区
E	8037	*	上呉服町	100	81.3		吳服町換気塔
F	8038	*	冷泉町、祇園町	435	80.10~12	3	祇園町2~3分出入口
G	8148	*	御供所町	70	81.9		祇園町4号出入口
H	8149	*	祇園町	184	81.10~11		祇園町5号出入口
I	8150	*	祇園町、東福原町	380	81.4~5		東福原町出入口
J	8435	*	博多駅前二丁目	215	84.4		祇園駅P2出入口
K	8224	道路拡幅	上呉服町	630	82.3 83.3		整港線1次
L	8331	*	*	564	84.2~9		整港線2次
M	8404	*	*	417	85.2~12		整港線3次
N	8527	*	御供所町	383	86.3 87.3		整港線4次
O	8653	*	*	380	86.10~11 87.3~11		整港線5次

## 民間事業関係

井号	調査原因	所在地(博多区)	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	船番	備考
1	前骨堂建設	御供所町、東長寺境内	360	78.11 79.1		本調査
2	7928 ビル建設	店屋町99	約100	79.4		立会、十層作成
3	7929 前骨堂建設	祇園町、萬行寺境内	240	79.11		本調査
4	7930 ビル建設	冷泉町7-1	1,100	79.12 80.12	1.2	本調査
5	7931 ビル建設	下呉服町346	10	79.12		試掘調査、地盤下4.5mから砕石土
6	7952 ビル建設	冷泉町155他	640	80.3~4		本調査
7	8023 ビル建設	祇園町130	210	80.6~8		本調査
8	8024 木造建設	御供所町、東長寺境内	600	80.8~10		本調査
9	8025 ビル建設	下呉服町75		80.9		試掘調査
10	8026 ビル建設	冷泉町474-9	54	80.12	1	本調査
11	8027 ビル建設	御供所町3-30		80.12		試掘調査
12	8127 ビル建設	中典町152、153		81.6		試掘調査
13	8128 ビル建設	祇園町1丁目121~127	30	81.7		トレンチ調査
14	8129 ビル建設	祇園町4-15	255	81.7~9		本調査
15	8130 車場建設	上呉服町569	100	81.8		試掘調査
16	8131 ビル建設	祇園町216~248	150	81.9		本調査
17	8132 ビル建設	祇園1丁目98	910	81.11 82.2	4	本調査
18	8136 ビル建設	祇園2丁目8~14	10	82.1		試掘調査
19	8323 社務所建設	鶴田神社境内	200	83.4		本調査
20	8324 ビル建設	祇園1丁目99	980	83.4	4	本調査
21	8325 ビル建設	祇園1丁目18~1	150	83.5	4	本調査
22	8327 ビル建設	冷泉町189他	840	83.9	4	本調査
23	8334 木造建設	龜宮寺境内	約300	84.2		本調査
24	8433 ビル建設	冷泉町1-1	250	84.4~5	5	本調査
25	8434 ビル建設	祇園町1-1	100	84.5~6	6	本調査
26	8506 ビル建設	上呉服町34	134	85.5~6	8	本調査
27	8507 ビル建設	祇園町1-11	350	85.5~6	14	本調査
28	8508 ビル建設	御供所町70-2	1,800	85.5~8	10	本調査
29	8509 ビル建設	祇園町22-67	330	85.7~9	11	本調査
30	8605 ビル建設	御供所町36、37、38、39	495	86.5~7	12	本調査
31	8606 ビル建設	御供所町65、66	190	86.5~7	13	本調査
32	8608 ビル建設	祇園町21-1	約1,000	86.5~7		本調査
33	8618 ビル建設	祇園町8他	898	86.7~11		本調査
34	8645 ビル建設	冷泉町238~244	40	86.10~11		本調査
35	8648 ビル建設	上呉服町56	655	86.11~		本調査



Fig. 2 博多道路群地図(1/600) 博多道路

● 博多道路群範囲  
■ 調査地点(記号・数字はTab. 2に一致)  
— 現在の等高線

## 第3章 祇園町工区、E・F・G区の調査

### 1. 調査の経過

博多遺跡群における地下鉄1号線関係の調査は、昭和51(1976)年12月に行った試掘調査の結果、店屋町工区、祇園町工区の両工区を本調査の対象とした。博多駅前工区については、博多遺跡群の推定範囲よりはずれるかと思われたが、遺跡群南端の確認と遺跡の立地する砂丘の状況把握のために工事中立会し、土層図を作成することとなった。店屋町工区はシールド工法によるため、遺構面に影響を与える堅坑部、薬液注入部のみが対象とされたが、祇園町工区についてはオープンカット工法によるため、全面を調査対象とした。本調査に先行して、昭和 年月に下水管移設工事の立会調査(PL. 5)や、土留個壁柱のガイドウォール工事、中間抗埋設物確認坪掘り等の立会調査(PL. 5)を行ない、本調査のための基礎データの集積につとめた。

祇園町工区は、祇園駅舎部と地下鉄一般路線部工事区とからなり、駅舎部で幅約18.5m、一般部のせまい部分で幅約10mで総延長300mに及ぶ。調査の便宜上、路線を20mを基本として、店屋町工区からアルファベット順にA～Sに区分した(Fig. 3)。このほか本体部工事終了後、祇園駅舎4号出入口、5号出入口、P-2出入口の調査も行なった。これらの調査区のうち、J～L区は交差点内であり昼間の道路占用が不可能であることから夜間調査を余儀なくされ、またL～S区は旧博多駅舎および、旧鹿児島本線のプラットホームにあたる部分であることがら擾乱がひどく、一部調査不能の区もあった。

今回報告する祇園町工区E・F・G区は、祇園駅舎部にあたり、現地表面の標高はほぼ5m前後を計る。博多区御供所町に所在し昭和36年に旧国鉄博多駅が現在地に移転するまで、駅前商店街として賑わっていたところである。発掘調査はG・F・E区の順に行なったが、店屋町工区調査の経験によって調査日数をかなり要すると判断し、工事工程との調整から同時に2ヶ所の調査を並行して行うこととした。また、交差点部分の夜間調査区も長期間を要し、昼夜間並行調査の日々も続くという厳しい面があった。このため、調査員の勤務時間について労使協議の上変更を行ない、埋蔵文化財係の職員諸氏の協力を得て、昼夜間交替で調査を行うことになった。F・G区については地下鉄工事占用地内の調査であったが、E区については、主要幹線道路である県道博多停車場東本町線内にあたるため、道路覆鋼ののち、半分づつを占用し覆鋼桁の下で調査を行った。

それぞれの調査区は2列の中間杭によってI～III区に大分し、それぞれを4mを基準に細区分している。また遺構最下面である地山白色砂層の標高は3.5m前後であり、現地表面との比高1.5mと浅く、表土擾乱層を機械で除去したのち、上部、下部のほぼ2面に分けて調査を行なった。浅い包含層の中に、多くの遺構が営まれており、遺構の残存状態は良好でない。

## 2. 調査の組織

### 福岡市交通局—調査委託

交通事業管理者 西津 茂美  
理 事 岩佐 春生 松原 弘和  
総務部長 松本 伸 総務課長 満川 常博  
工事部長 川原 隆幸 工事課長 川口 広恭  
技術部長 角 能裕 設計課長 萩原 兼秀  
計画課長 徳田 昭実  
計画第1係長 斎藤 順敏

### 福岡市教育委員会—調査主体

教育長 佐藤 善郎  
文化部長 河野 清一 埋蔵文化財課長 柳田 純孝  
埋蔵文化財課第1係長 折尾 学

事務担当 松延好文・岸田隆生

調査担当 折尾 学・浜石哲也・池崎謙二

調査協力 飛高憲雄・塙屋勝利・山崎純男・力武卓治・井沢洋一・山崎龍雄  
下村 智・大庭康時・小畑弘巳

前任 古村澄一・戸田成一・西津茂美・志鶴幸弘・清水義彦・井上剛紀・甲能貞行  
三宅安吉・木村義一・岡島洋一・古藤国生

調査協力団体 地下鉄祇園町工区担当 三井建設株式会社九州支店 高木建設株式会社

発掘調査参加者 白石公高・信行千尋・日野孝司・海津静江・真鍋秀子・緒方チヨエ・清水  
文化・高宮ノブエ・森永史子・藤タケ・高田ヒサノ・大齒みづ子・黒木アサノ・安  
部サエ子・永田恭子・真鍋恵美子・杉村文子・安部国忠・真鍋政江・斎藤小春・横  
溝忠美子・横溝ヨシノ・柴田スマ子・吉野清藏・都島重雄・緒方寿・大橋隆司・大  
野淳一郎・松本俊介・池田昌徳・柴田喜瑞・坂本眞二・岡田智明・安川雅敏・横尾  
明彦・樋口一明・城川英二・阿部穂高・補橋伸二・清水由美子・森京子・小水辰  
美・齋明伸・原優子・山口美久・上山千重・岡村裕・吉田昌代・山部陽一・平川昭  
一・境弘己・詫問敏博・岡真一郎・江崎孝志・清瀬智仁・国友達也・瀬口恵介・井  
手透・岩切幹嘉・森順子・緒方良親・清水百枝・長尾慎一郎・田中章二・川口義  
典・小川活章・田代昌子

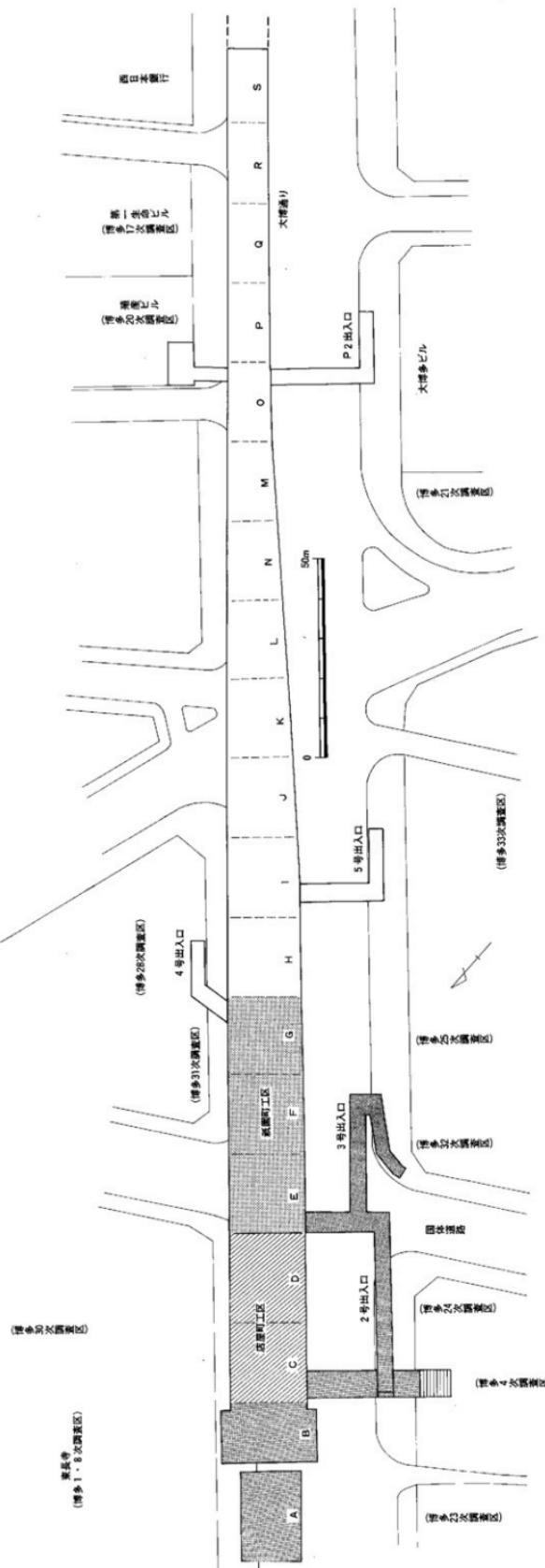


Fig. 3 博多通跡地地下鉄1号線開業調査区(出屋町・祇園町工区)全体図(1/1000)

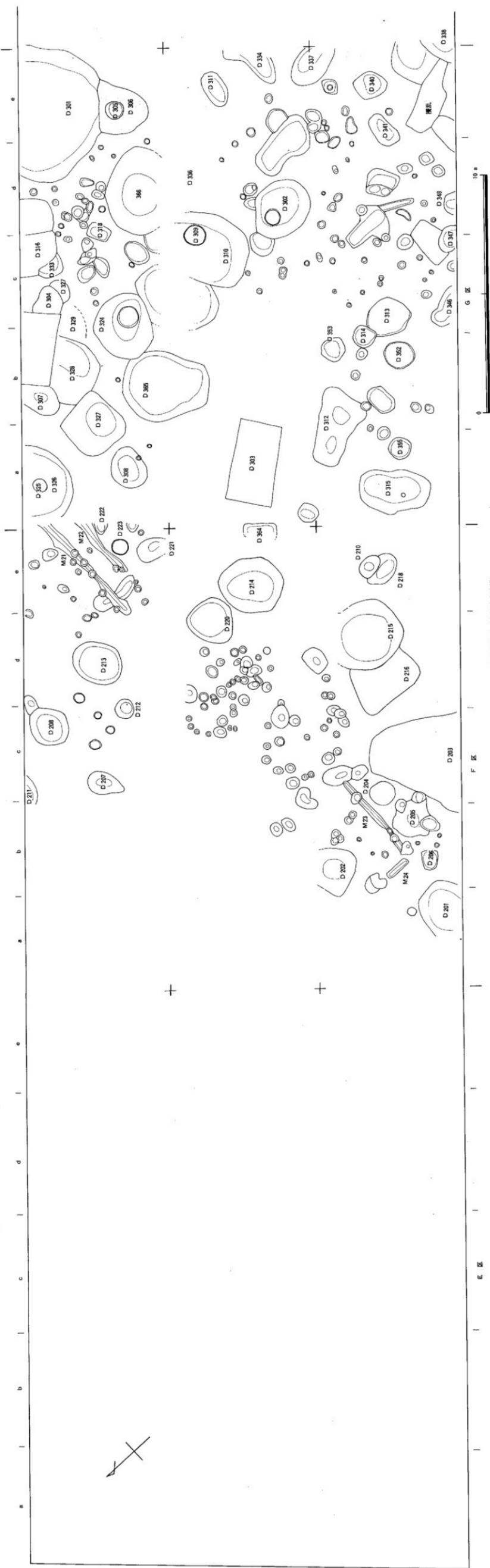
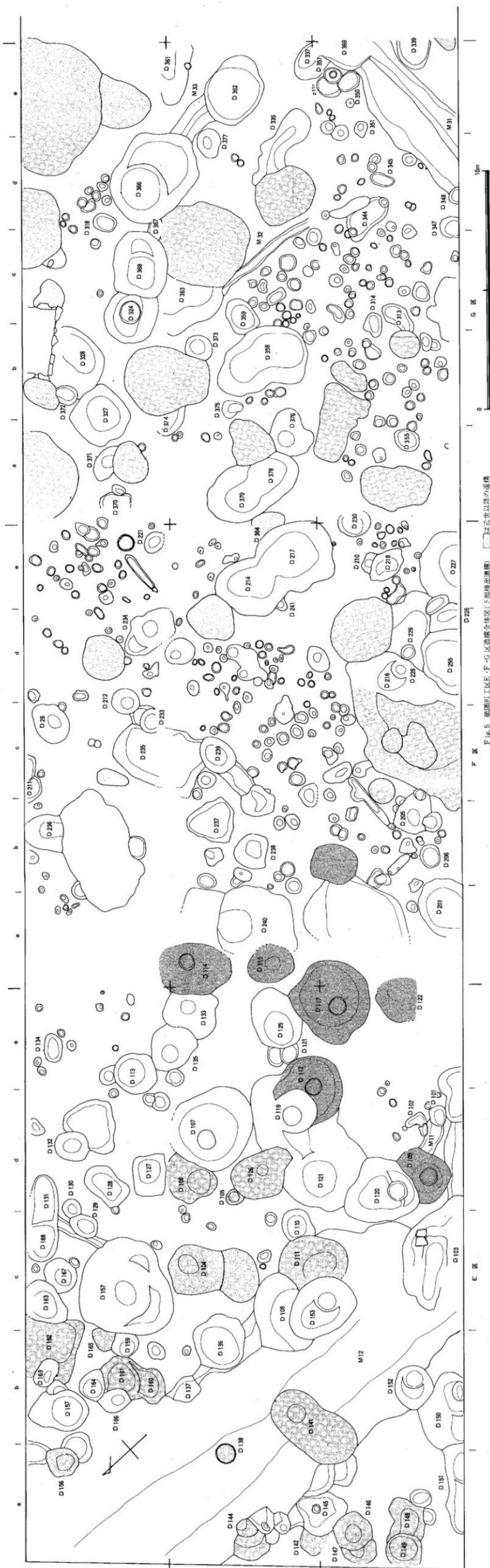
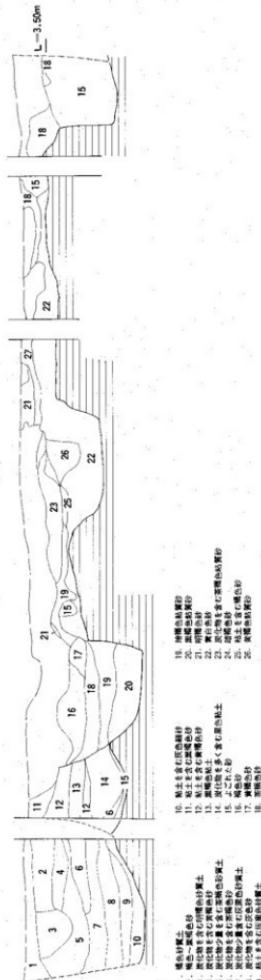


Fig. 4 试掘面E-F-G区局部全图(上部冲积层)

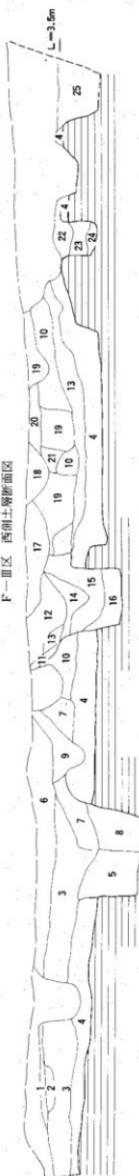
D:土壤  
M:冲积物



E—Ⅲ区西侧土质断面图



F—Ⅲ区 西侧土质断面图



G—Ⅲ区 西侧土质断面图

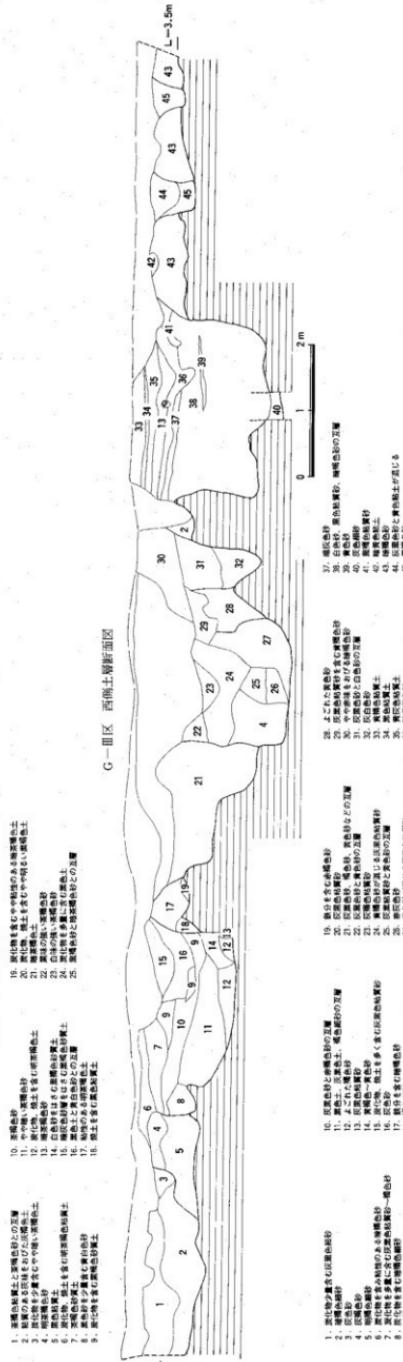


Fig. 6 E—F—G区土质剖面图

### 3. E区の調査

E区は地下鉄1号線祇園町工区の北西端にあたり、前年度報告した店屋町工区D区に接続する。地下鉄路線と固体道路との交差部分にはほぼ合致する。幅18.2m、長さ24mの調査面積436.8m<sup>2</sup>である。発掘調査の必要性と、道路供用を続けねばならぬ幹線道路であることから、路面覆工を先行して行ない、発掘調査は道路の半分を占用して2回に分けて覆工桁下で行うことになった(PL. 7)。G、F区のうち10月1日より11月8日まで、馬場新町夜間調査地点と昼夜並行して行なわれた。覆鋼板開閉の関係上、F-II-a区の一部にもE区の遺構番号が付してある。なお、桁懸け作業のため表土の除去は深くなり、上下2面に分けての調査はできず1面で処理している。

#### 1) 遺構と遺構出土遺物

**101号土壤** (Fig. 7 PL. 44) E-I-c区検出遺構、0.8m×0.55mの長円形で深さ0.8mを計る。図示した遺物は内面に備えられた高台の高い白磁碗で、高台内に花押の墨書きがある。この花押は103、104、110号土壤をはじめ、周辺調査区に多く集中して出土している。遺物はやや多い。計測可能な土師小皿は2点あり、いずれも糸切底で口径9cm、器高0.9~1.2cmである。12世紀後半に位置づけられよう。廃棄物処理用土壤か。

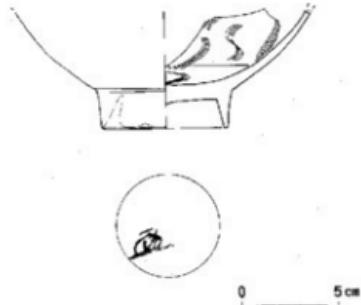


Fig. 7 101号土壤出土遺物

**102号土壤** E-I-d区検出の不定形土壤である。遺物は少量であるが奈良時代土師器や須恵器に、白磁片、陶器片、土師皿片が混じる。13世紀代に位置づけられるが性格不明。

**103号土壤** (Fig. 8・9 PL. 8, 26) E-I-c区検出遺構。土留壁に切られ全体形不明。12号溝を切る。現存底でも4.5mを計る大きな掘方で、2.3mと深い。2段のテラスをもち、井戸の可能性が強い。掘方部分の下位に一辺50cm弱の砂岩切石が2個置かれていた。遺物は白磁4点、青磁8点と磁器類が少ないので比べ、中国製陶器類は破片数で144点と多い。古窯系の陶器も4点みられる。土師皿類も多くみられ、計測表に示すとおりいずれも糸切底である。図示した遺物は1が101号土壤例と同じ墨書きをもつ白磁碗である。2は逆台形の高台を削り出す天目碗で、胎はセメント様の磁質で、見込の天目釉は設青釉風の発色をなし美しく流れている。3は磁灶窯系の小型の盤で、胎は多量の砂粒を含み粗いが薄手である。4は同じく

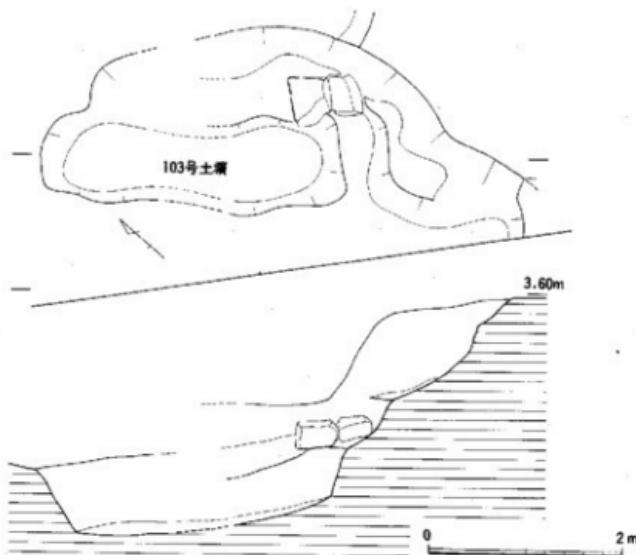


Fig. 8 103号土壌

小口瓶であるが胎は精良である。5は準A群に属す四耳蓋、6は磁灶窯系の深い盤で内面にベージュ色不透明釉がかかる。底部および口縁部に目跡が残される。このほか陶器B群の灯明白台破片も見られる。井戸廃棄後に廃棄物処理に用いられたものか。14世紀前半頃に位置づけられる。

**104号土壌** (Fig. 10 PL. 26・44) E-II-c 区検出の近世土壌である。近世の陶磁や七輪などとともに少量の中世以前の遺物も混在する。図示した遺物は、1が18世紀代に位置づけられる焼塙壺で外表面部に刻印が見られるが器壁が荒れ判読できない。内面底に粘土塊を詰めて底部を塞いだもので、細かな布目压痕を残す。2、3はヘラ切底土師杯で、ほぼ同形同大のものが他に3点出土している。4は101号、103号土壤例と同じ花押墨書きをもつ白磁碗である。

**105号土壌** (Fig. 11・25 PL. 26・44) 径0.6mの円形の掘方をもつ近世の廃棄物処理用土壤である。浅い土壌中に多量の遺物がぎっしり詰められている。1、2は肥前系の近世染付で外底に呉須書きの印が見られる。3は櫛描文をもつ同安窯系青磁碗、4は蛇ノ目高台の越州窯系青磁碗、5、6は白磁碗、7が同高台付皿である。8、9は黒粒を含み灰色の胎をなす半磁質の陶器で灰オーリーブ色の透明釉を上面にかけている近世の器蓋である。産地は不明。10

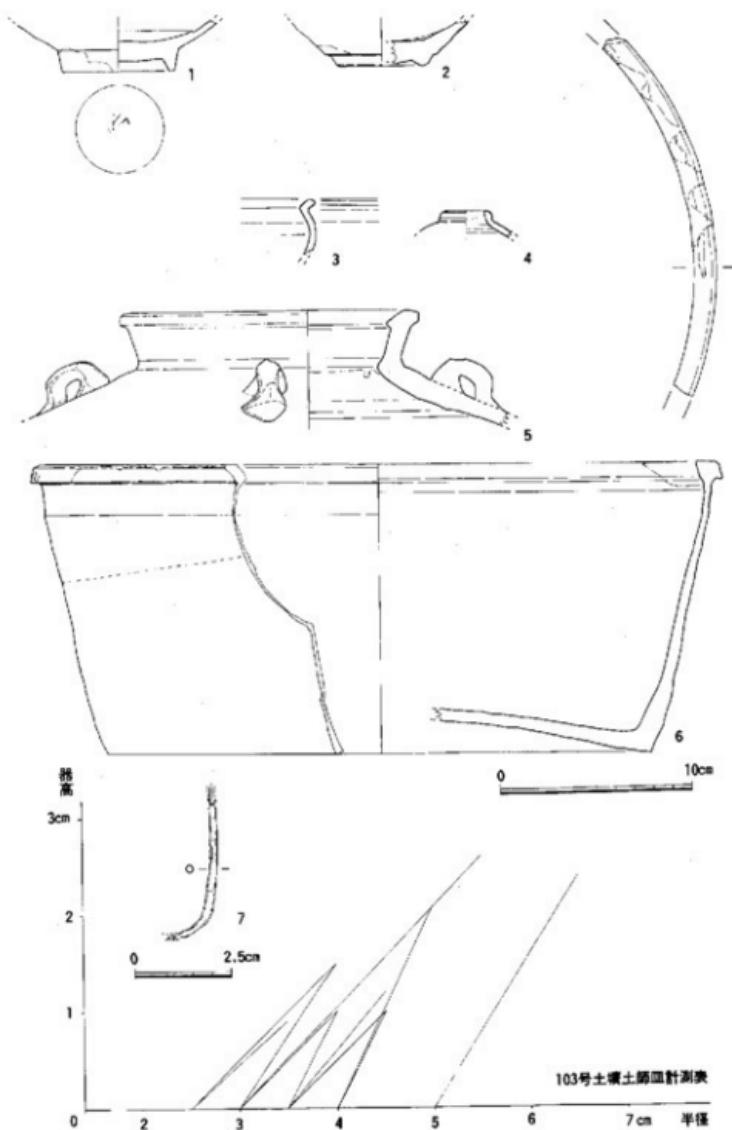


Fig. 9 103号土壤出土遺物

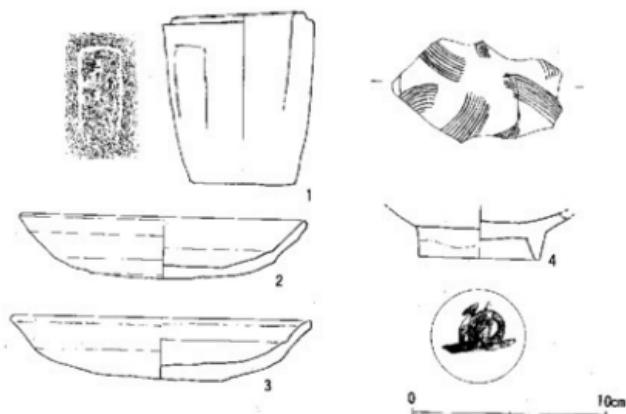


Fig. 10 104号土壌出土遺物

ある。口縁は平坦に近く、上面に砂状の目跡が推定4箇所につけられる。外面に光沢のある緑茶褐色の釉がかけられている。口縁内側には重ね焼の器暈が付着している。14はヘラ切底土師皿であるが焼成は硬質で瓦器に近い。この他白磁鉄絵の鉢も見られる。

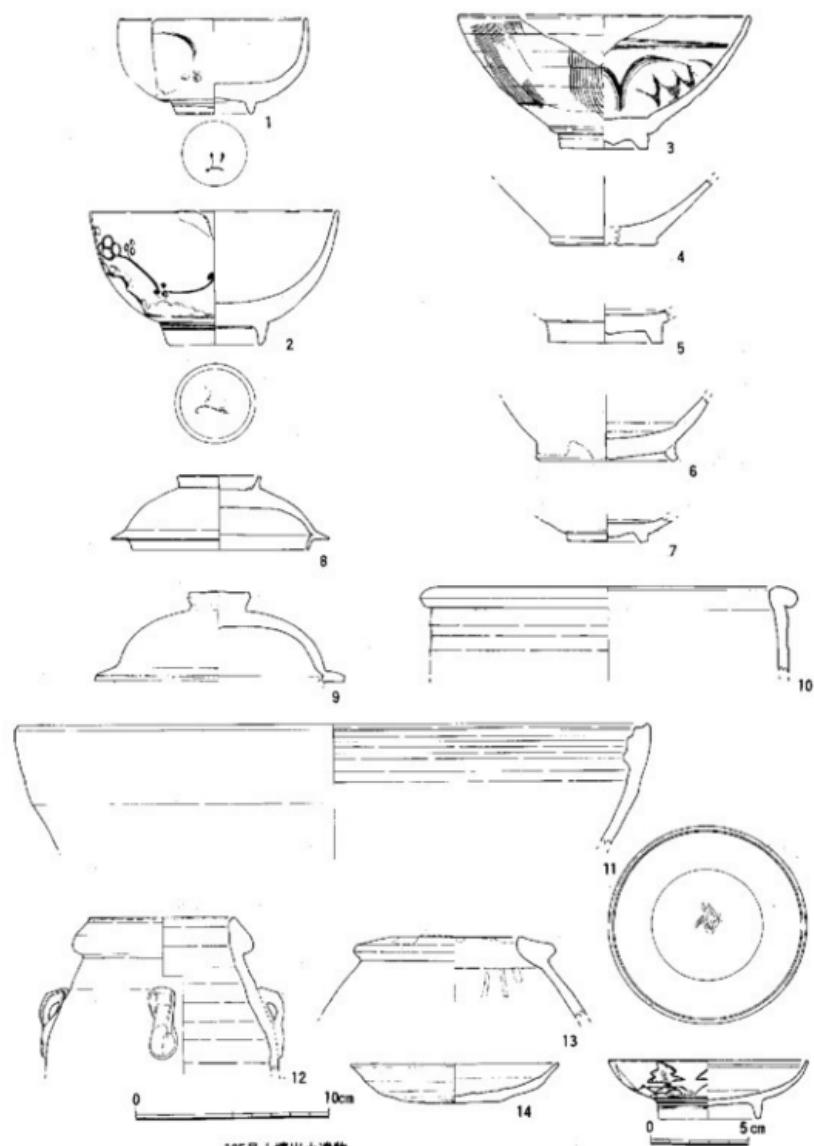
**106号土壌** (Fig. 11) E-I-d区検出の近世の廃棄物処理用土壌である。遺物は少ないが、肥前系の染付皿の完形品が出土している。

**107号土壌** (Fig. 12 PL. 26・44) E-II-d区検出の井戸である。一部を中間杭掘乱に切られるが、長軸3.6m、短軸3.3mの卵形の大きな掘方をもつ。底面に径0.8mの水溜掘方が穿たれている。木桶組合の痕跡が残っている。遺物は瓦片、陶器片等を中心多く出土しているが、その大部分は内部からの出土である。図示した遺物は1が龍泉窯青磁碗で高台内露胎部に墨書が見られるが判読できない。2は白磁碗で見込釉を輪状に削りとり、中央部が凹む。3は磁灶窯系の広鉢口縁の大盤で、内面には黄釉下に鉄絵を施し、口縁端直下と直上に白いアルミナの目跡が付着している。4はC群の捏鉢1に属する陶器で、外面に濃オリーブ色の不透明釉がかかる。土師皿類は計測表に示すとおり全て糸切底で、器高の高い小皿も見られる。14世紀半ばに位置づけられよう。

**108号土壌** (Fig. 13 PL. 26) E-II-c区検出遺構で、12号溝、153号土壌を切る。遺構は2分割の調査区境にかかる全体形は明確でない。12号溝の壁中位まで掘り込まれている。遺物は少なく、実測可能なものとしては片切形花文をもつ白磁皿が見られる程度である。土師皿類が見られず時期の判断は困難であるが、13世紀以降である。性格は明確でない。

**109号土壌** (Fig. 14 PL. 26) E-I-d区検出遺構で、120号土壌を切る。近世の井

はC群の陶器鉢であるが、胎はB群に近く硬質である。11は陶器C群の捏鉢である。12はC群陶器で、四耳付長壺である。外面に艶やかな茶褐釉がかけられている。口縁端部に重ね焼きの目跡が残されている。14群部が上方に極端に伸びる例は博多ではあまり見られない。13もC群の壺である。



105号土壤出土遺物

Fig.11 105号、106号土壤出土遺物

106号土壤出土遺物

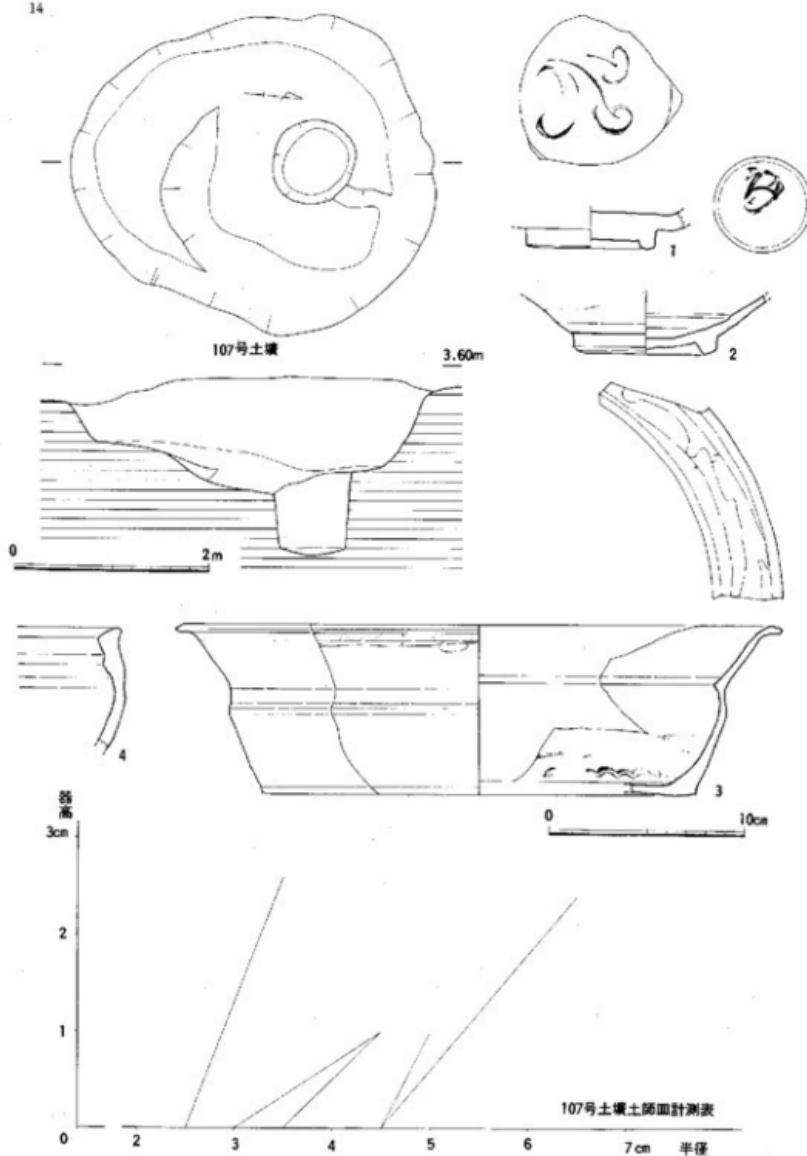


Fig.12 107号土壤と107号土壤出土遺物

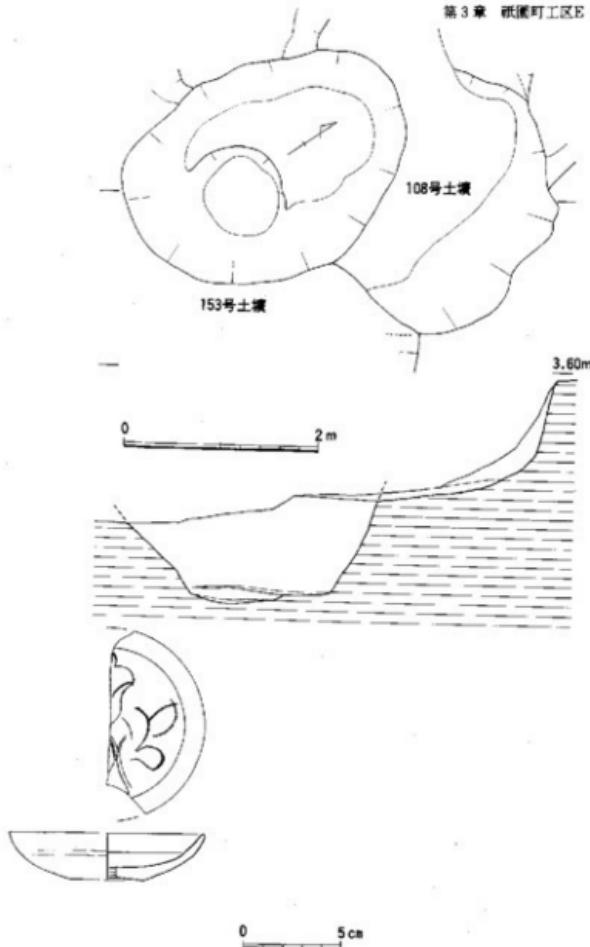


Fig.13 108号土壤、153号土壤と108号土壤出土遺物

戸である。水溜部に木桶組の痕跡が残る。掘方埋土を中心に遺物は多く見られるが各時期混在する。図示した遺物は1が天目碗、2、3が陶器である。1は内面と外体部中位まで黒褐釉がうすくかけられている。見込に明確な段をもち、外底中央をヘソ状に削り残すなど、通例の天目碗とは器形が異なる。同安窯系青磁碗に共通する器形で福建省南部産であろう。2は準A群の四耳大壺、3はC群の壺である。

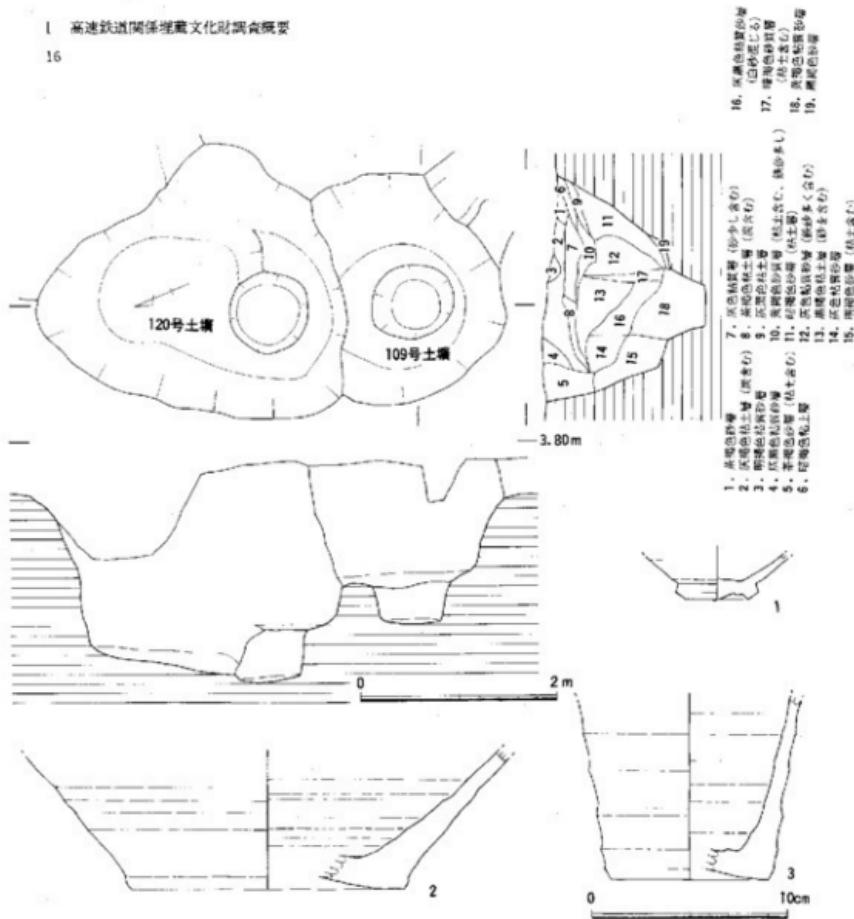


Fig.14 109号, 120号土壙と109号土壙出土遺物

**110号土壙** (Fig. 15 PL. 27・44) E-II-c 区検出造構で、111号土壙に切られている。一辺1.3mの隅丸方形掘方で、深さ0.7mを計る。図示した遺物は、1が越州窯青磁壺である。胎は緻密で灰色、外底高台内の一部をのぞいて光沢のある灰オリーブ色の釉がかかる。無文。2は口縁を外反させる白磁碗V類、3は内面体部を白堆線で6区分する白磁碗II類で、ともに高台内露胎部に同一の花押墨書きが見られる。4は口縁を6輪花にする青白磁碗で、胎は白いが粗く、高台内をのぞいて淡青色ガラス質釉がかかり貫入が多い。露胎部に墨書きが残るが判読で

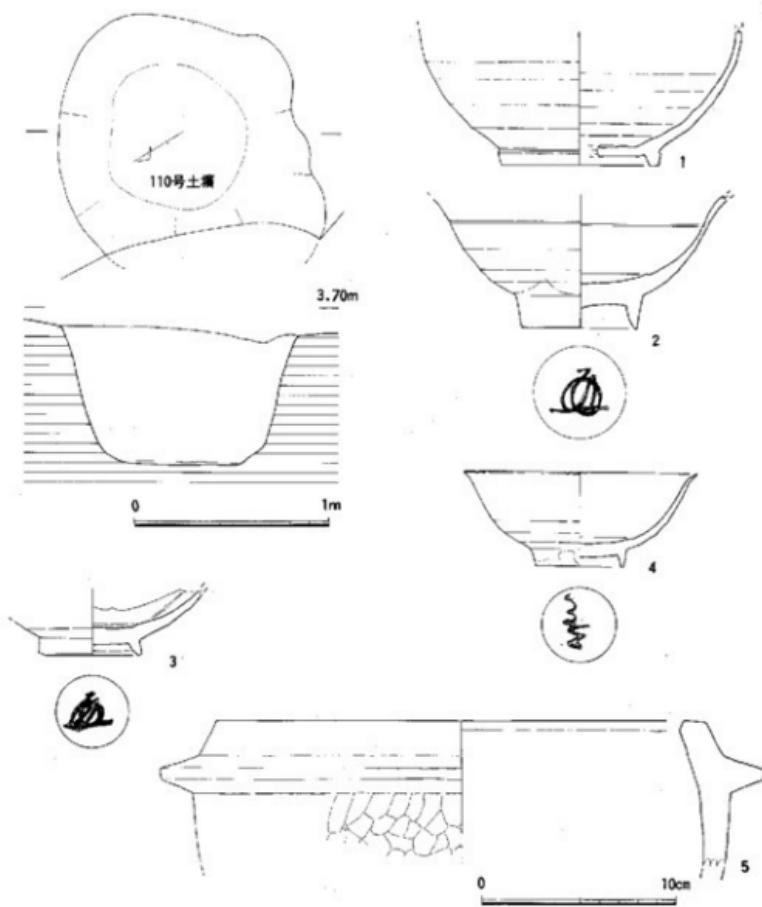


Fig.15 110号土壤と110号土壤出土遺物

きない。5は鉢をもつ滑石製石鍋である。白磁片39点、陶器29点があるが、龍泉、同安窯系の青磁は全く見られず、また土師皿類ではヘラ切底の小破片が見られるにすぎない。12世紀初めの廃棄物処理土壌であろう。

**111号土壤 (PL. 27)** E-II-c区検出の径2.8mの大きな掘方である。分割区境にあり全体形不明であるが108号、110号土壤を切る。近現代の擾乱土壌であり、近代瓦、陶磁に混つ

て白磁片や青磁片などが少量出土している。

**112号土壌** (Fig. 16・17 PL. 27) E-I・II-d・e区検出の近代瓦組井戸である。119号土壌を切る。遺物は各時期混在し、量的にも少ない。図示した遺物は陶器B群に属する茎筒底をなす鉢である。

**113号土壌** (Fig. 16・17 PL. 8・27) E-II・III-e区検出遺構で114号・135号土壌に切られる。井戸である。径0.8mの木桶組井戸である。水溜部から犬の下顎骨が出土している。図示した遺物は、1が外面に錦運弁文を、見込に片切彫の花文をもち、2が見込および内面体部にヘラ描および細かな柳描文をもつ龍泉窯青磁碗である。青白磁水注の把手もみられる。遺物量は多いが、各時期の遺物が混在する。土師皿類は小破片で計測できないのが殆んどであるが、器高の高い小皿が見られ、14世紀代に位置づけられよう。

**114号土壌** (Fig. 16・17 PL. 9・27) ほぼF-II・III-a区にかかる。113号土壌を切る。近世の井戸掘方である。木桶組構造の痕跡が残る。18点の近世国産陶磁に混じって多量の輸入陶磁が出土している。図示した遺物は、1が河安窯系青磁皿で見込にヘラと柳による文様をもつ。2は見込に片切彫の魚文を一匹配している龍泉窯系青磁皿である。3は龍泉窯青磁小碗で外面口縁直下を凹ませ輪花をなす。5は内面体部にのびやかな片切彫の花文と柳描文をもつ白磁碗で口径19.5cmのやや大型である。6は鉄錆色の釉を施した天目碗である。4、7、8はいずれも陶器である。4はB群に属す壺で平底をなし越州窯青磁風の釉が内外面にかかる。7は準A群に属す四耳大壺の口縁である。8はB群の鉢で口縁内側と体部外面上位に重ね焼きの痕跡がある。このほか内面に灰色透明釉を、外面には高台脇まで黒釉をかける磁器壺が見られる。

**115号土壌** (Fig. 18 PL. 27・45) F-I-a区の検出遺構である。長軸1.9mの長円形をなすと思われ、深さ0.65mの深皿形の掘方をもつ。近世陶磁数点に、多量の中世陶磁が混在する。近世の廐棄物処理用土壌であろう。図示した遺物は、1が口縁を水平に外に出す白磁碗の完形で、内面体部上半と底部との境に2本の沈圓線がめぐる。2は白磁平底皿で黄味の強いベージュ色の不透明釉が外面体部下半までかかる。3は内面底に片切彫の花文をもつ白磁平底皿で、VI類に属し、外底露胎部に「周太」かと思われる墨書きが見られる。4は陶器B群に属する壺と思われる底部破片で胎はやや粗いが、内外全面に越州窯青磁風の灰青色の釉がかけられている。壁土かと思われるスサ入り粘土の焼けたものもある。

**116号土壌** E-II-d区検出遺構である。1.5mほどの径をもつ不整円形で深さ0.2m程の浅い皿状の茶褐色砂の落ち込みで、遺物は全く出土しておらず、明確な遺構とは言えない。

**117号土壌** (Fig. 18 PL. 9・28) E-I・II-e区検出遺構である。径3.1mの大きな掘方で底面に径0.9mの木桶組水溜の痕跡が残る。近世陶磁が4点出土しており、近世以降の井戸であるが、中世以前の遺物も混在する。図示した遺物は、1が内面底に片切彫の双魚文

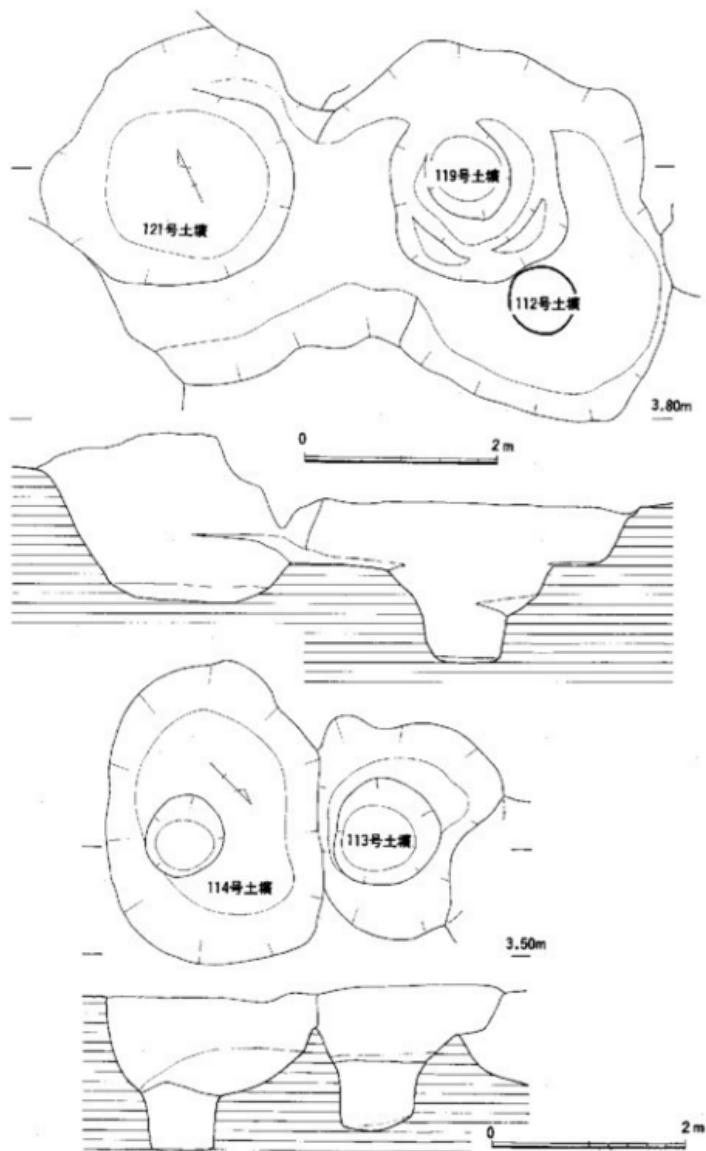


Fig.16 112号,113号,114号,119号,121号土壤

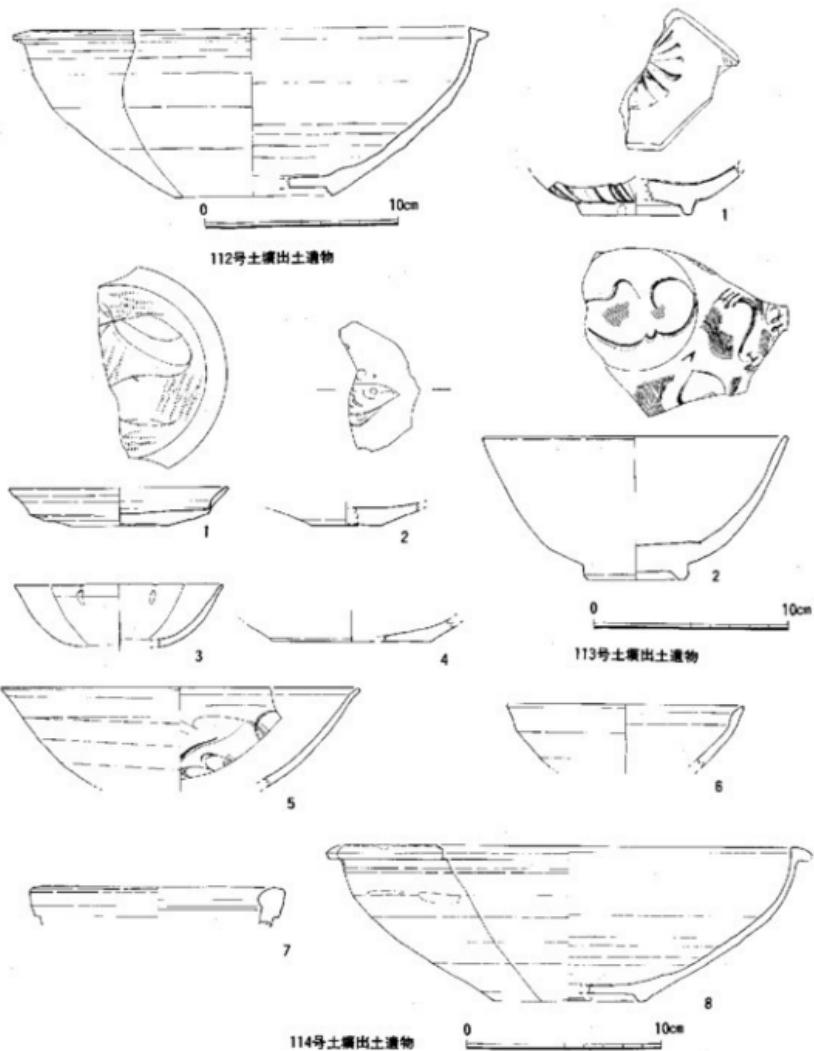


Fig.17 112号, 113号, 114号土壤出土遺物

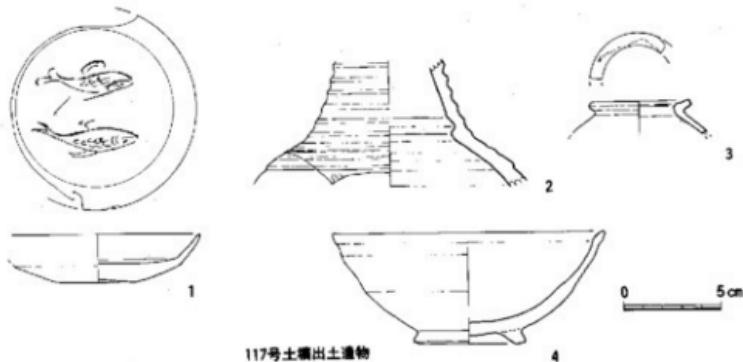
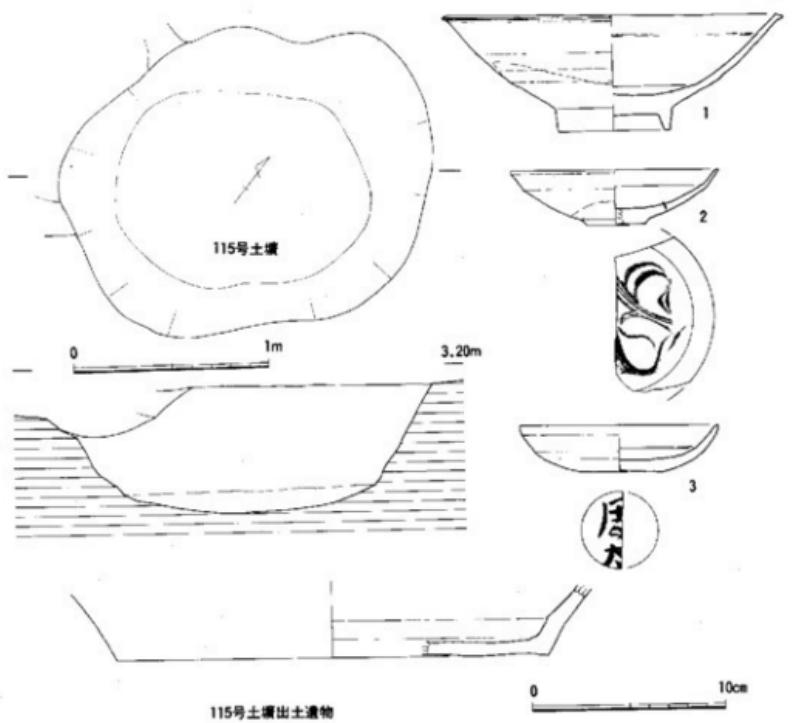


Fig.18 115号土壌と115号、117号土壌出土遺物

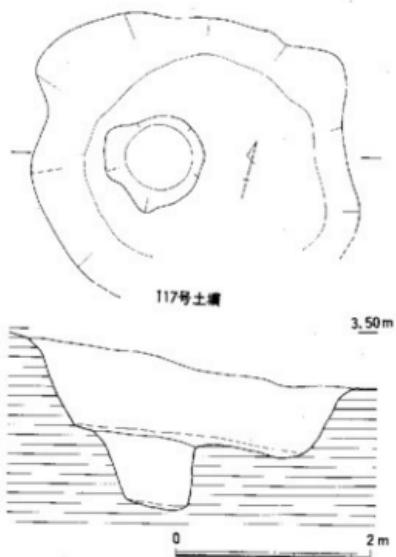


Fig. 19 117号土壙

を配しているが、一般に見られる双魚文とは違い、同一方向を平行して向く。2は青白磁壺で、頸部から肩部にかけて幅広の凹線が巡り肩部下半に柳描文が見える。頸部と肩部との接合部が明瞭で胎は黒粒を含み、やや粗いが堅緻、内面頸部および外面に淡い水色のガラス質透明釉がかかること。3は陶器壺で灰色の胎をもち不透明灰オリーブ釉がかかること。4は土師質の高台付碗で、内外面に研磨が施されているが、アバタ状に器壁全体が荒れている。

**118号土壙** (Fig. 20 PL. 28) E-II-e区の上面で検出されている。径1.3mのほぼ円形で浅い。図示した遺物は、1が白磁碗O-II類。釉はピンホールが目立つ。2は高台付白磁皿である。3は陶器A群に属す鉢であり、内面のみに黒釉を施す。外面は削りによって調整され薄い胎をなす。4は陶器B群に属すが胎上精良で灰色、外面底部下半まで越磁風のオリーブ色の釉がかかること。土師皿類で計測可能なものは表に示すとおりで、いずれも系切底である。13世紀代の廃棄物処理土壙であろう。

**119号土壙** (Fig. 16・21 PL. 28) E-II-d区検出の井戸である。近世瓦組井戸である112号土壙に切られ、121号土壙を切る。径3.2m程の大きな掘方で中央部に径0.9mの豊穴を穿ち木桶組構造の痕跡をもつ。遺物はやや多く各時期混在する。図示した遺物は、1が龍泉窯青磁碗で外面底部にヘラ描の平坦な蓮弁文をもつ。2も同じく龍泉窯青磁碗で鑄蓮弁文をもちスカイブルーの半透明釉がかかること。3は見込に柳描文をもつ龍泉窯青磁皿、4は同安窯系青磁皿である。土師皿類は計測表に示すように全て系切底であるが、杯に径のバラつき

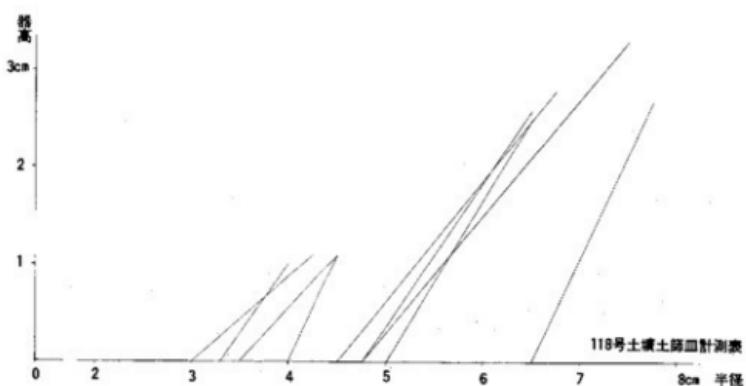
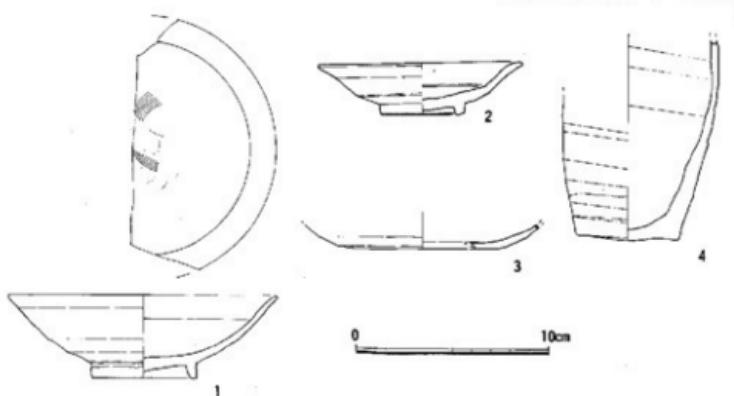


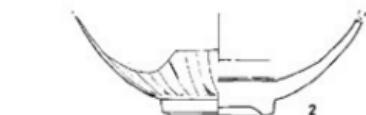
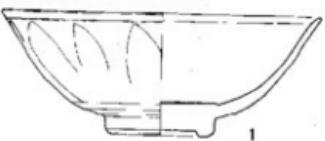
Fig. 20 118号土器出土遺物

がある。13世紀後半から14世紀前半頃の時期を考えておきたい。

**120号土壤** (Fig. 14・22 PL. 28) E-I-d区検出遺構である。近世井戸である109号土壤に切られる。長径3m以上、短径2.8mの大きな掘方で、南側に偏して径0.85mの木桶組と思われる井戸水溜が見られる。遺物量は多いが各時期混在している。図示した遺物は、1が内面に、2が内外面に横描文をもつ同安窯系青磁碗。3、4が陶器C群に属す胎の粗い無釉の盤口水注で、同一個体であろう。5は陶器B群に属す長瓶で胎は灰色で緻密、外部下位まで越磁風の釉がかかる。6は同安窯系青磁碗と思われるが、くすんだ半透明オリーブ釉の口縁外直下釉垂れ部分が澱青釉風の美しい発色をなしている。土器皿類は小片で、糸切底のほか、ヘラ切底も見られるが混入であろう。13世紀代と思われる。

I 高速鉄道関係埋蔵文化財調査概要

24



0 5 cm



4

器高  
3cm

2

1

0

2 3 4 5 6 7 8cm 半径

119号土壤土器回計測表

Fig. 21 119号土壤出土遺物

**121号土壤** (Fig. 16・22 PL. 28) E-I・II-d 区検出遺構である。中世井戸である119号、120号土壤に切られる。径3.5mもの大きな掘方をもつ。内部構造の痕跡は見られないが井戸掘方であろう。9世紀代の遺構を掘り抜いたものと思われ、当該期の遺物が多い。図示した遺物は、1が見込釉を輪状に削りとる白磁碗で高台は丸味をもつ。2は高台置付まで施釉する白磁碗。3は青白磁合子蓋で上面に印花文をもつ。5はB群の陶器長瓶で底に目跡が残る。4は内外に黒褐釉を施す陶器壺でC群に属す。外底に他の器物が付着し重ね焼の痕跡を残す。6は土師器皿で外体は継ハケ目、外底はケズリ調整を行ない赤褐色を呈す。7は土師器甕で口縁部は横ナデ、外体部は継ハケ目、内面は斜めのヘラケズリ調整を行なう。8は須恵器甕である。13世紀半ば頃に掘り込まれたものであろうか。

**122号土壤** (Fig. 23 PL. 29・45) E-I-e 区検出の近世廃棄物処理土壤である。近世

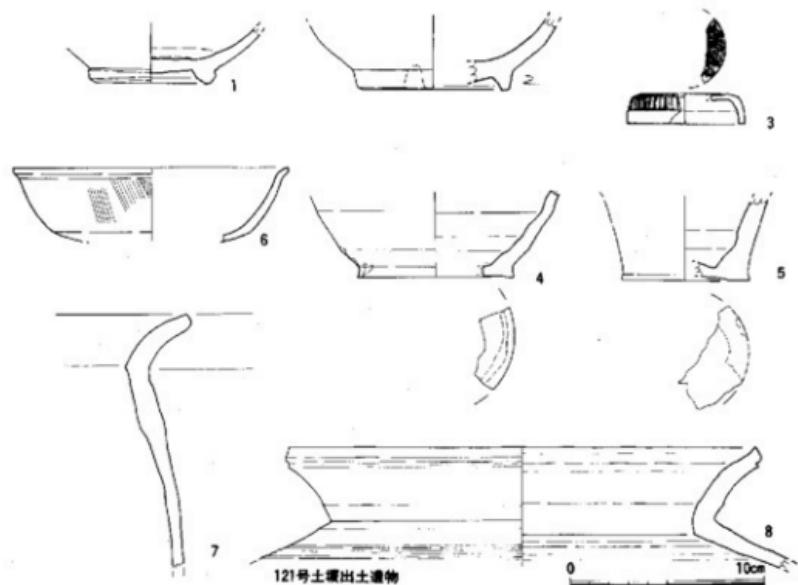
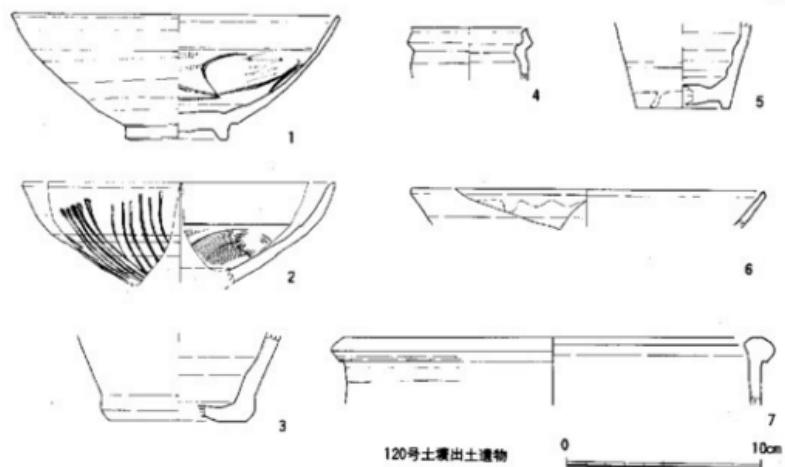
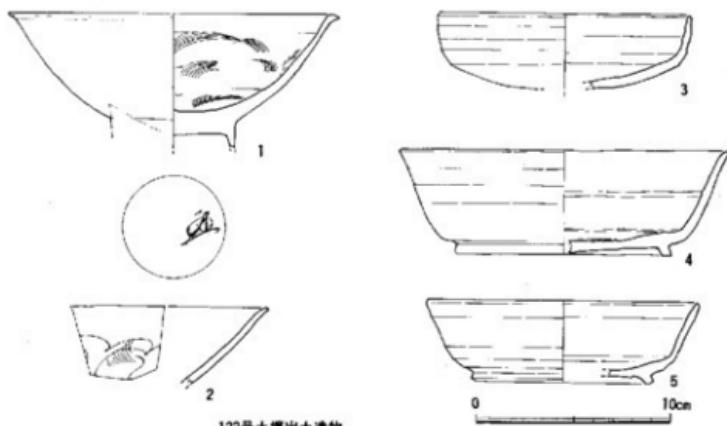
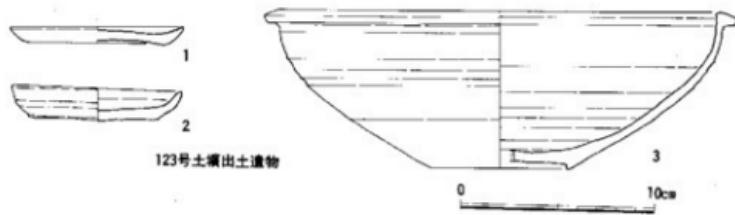


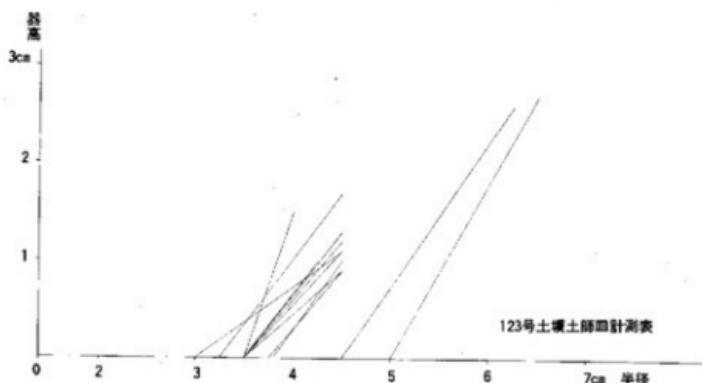
Fig.22 120号, 121号土壤出土遺物



122号土壤出土遺物



123号土壤出土遺物



123号土壤土師四計測表

Fig.23 122号、123号土壤出土遺物

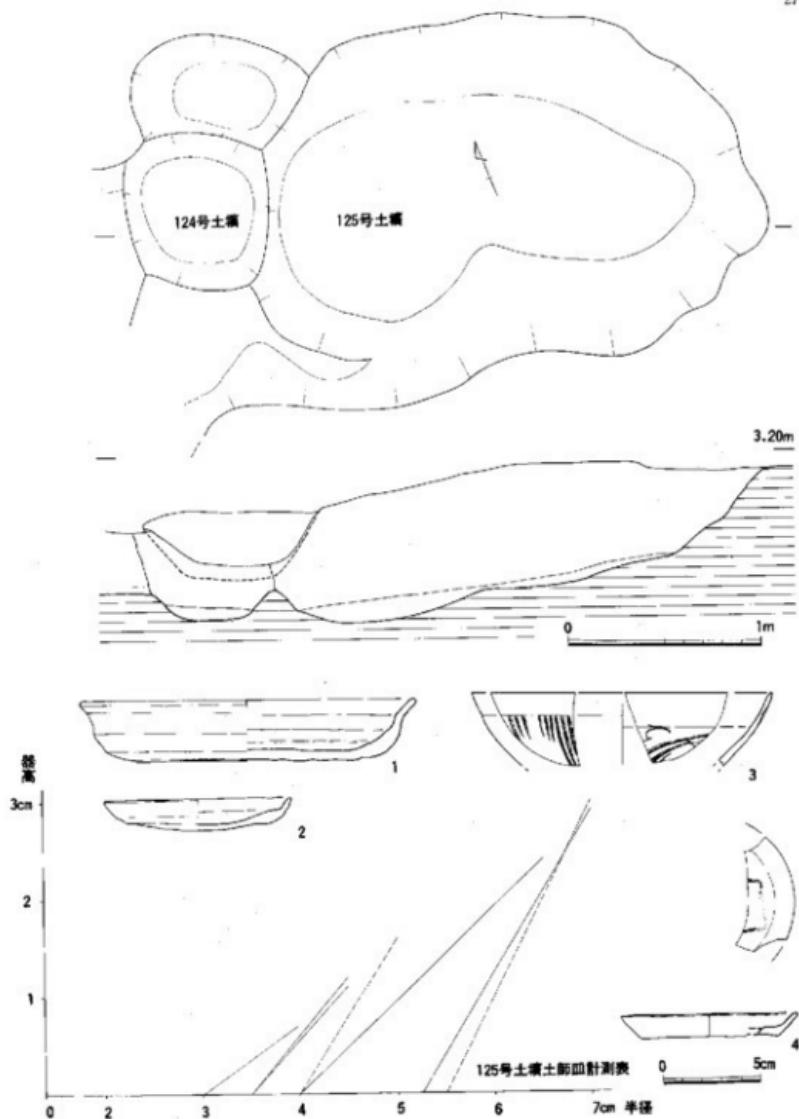


Fig.24 124号, 125号土壤と125号土壤出土遺物

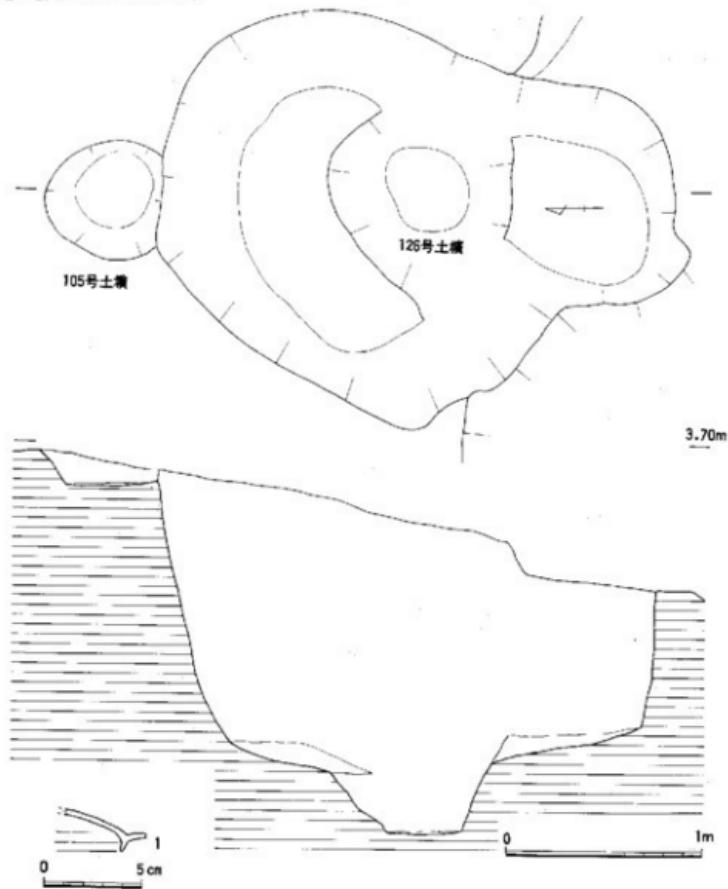


Fig. 25 105号, 125号土壙と126号土壙出土遺物

陶磁に混じって9世紀代以降の遺物が混在する。図示した遺物は、1が外底露胎部に花押墨書きをもつ白磁碗である。2は内面体部に片切彫と樹描の文様を施す青白磁碗。3は土師皿で体部はほぼ直に立ち横ナデ調整、外底は丸味をもちヘラケズリ調整を行う。赤褐色を呈す。4、5は須恵器高台付杯である。この他図示していないがガラスの増焼に使用された陶器C群の蓋がある。

**123号土壙** (Fig. 23 PL. 29) E-II-e区検出遺構である。長軸1.8m、幅1.3mの浅

い土壌である。遺物量は少ないが土師皿類がまとまって出土している。土師皿類は糸切底で計測表に示したとおりである。3は陶器B群の平鉢で3/4程遺存する。13世紀代の廃棄物処理土壌であろう。

**124号土壌** (Fig. 24) E-II-e区検出の径0.8mの円形土壌である。112号土壌に切られ、125号土壌を切る。近世の掘方で近世陶磁に混じり、土師皿4点が見られるにすぎない。

**125号土壌** (Fig. 24 PL. 29・45) E-II-e区検出の長軸2.5m以上、幅1.9m、深さ0.7m程の深皿形の掘方をもつ。出土遺物はそれ程多くない。土師皿類は図および計測表に示すとおりであるが、糸切底とヘラ切底がみられ、法量にもバラツキがある。図示した遺物は、3が同安窯系青磁碗、4は内底に墨書きをもつ糸切土師小皿である。13世紀代に掘り込まれたものであろうか。性格不明。

**126号土壌** (Fig. 25 PL. 29) E-II-d区検出の近世井戸である。多量の近世陶磁に少量の中世遺物が混じる。図示した遺物は陶器A群の蓋である。

**127号土壌** E-III-d区検出の1.6m×1.3mの長方形の掘方であるが、遺物は全く出土しておらず、時期、性格ともに不明である。

**128号土壌** E-III-d区検出の1.8m×1.2mの長方形掘方である。127号土壌に隣接するが、ここでも遺物は出土しておらず、時期、性格ともに不明。

**129号土壌** (Fig. 26 PL. 29) E-III-c区検出の1.2m×1.0mの長円形土壌である。計測表に示したようにヘラ切土師小皿の良好な一括資料が得られている。11世紀後半の時期が考えられる。1は同安窯系青磁に類似する文様構成をもつ青磁鉢であるが、器形は11世紀後半に位置づけられている袖下鉄絵の白磁と同じであり共伴に矛盾はないと思われる。2は陶器B群に属する壺である。他には白磁破片が少量みられるにすぎない。廃棄物処理土壌であろうか。

**130号土壌** (Fig. 26) E-III-c区検出の径0.7m程の浅い円形土壌であるが、遺物は出土しておらず、時期、性格ともに不明である。

**131号土壌** (Fig. 27 PL. 29, 30・45) E-III-c+d区検出遺構であるが、土留壁によって一部切られ、また168号土壌を切る。土師皿40点程出土しているが、計測可能なものは杯が2点でそれぞれ口径14cm、16cm、器高3.3cm、2.7cm、小皿が2点で口径いずれも9cm、器高1.3cm、1.2cmを計りすべて糸切である。12世紀後半から13世紀前半に位置づけられるが、他の遺物は混在する。図示した遺物は、1が龍泉窯系青磁で無文。外底露胎部に「二」と思われる墨書きをもつ。2は越州窯青磁の壺で、肩の張った体部にラッパ状に聞く長い頸部がつく。肩と体部に割花文が施されている。頸部内面まで半透明の濃緑オリーブ釉がかかる。3、4はそれぞれ高台付、平底の白磁皿である。5は菊花文型造りの青白磁合子蓋でスカイブルーの釉をかける。6は同産の緑釉碗で内面に線描文が見られ、胎はネズミ色で粗い。7は天目碗であ

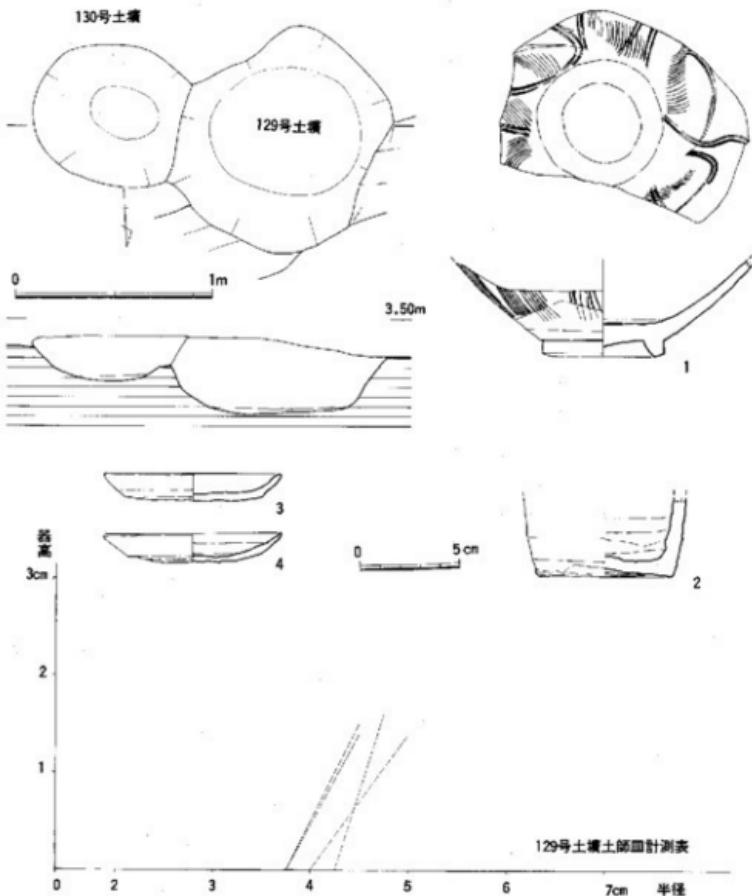


Fig. 26 129号, 130号土壙と129号土壙出土遺物

る。13世紀前半代の廃棄物処理土壙であろう。

**132号土壙** E-III-d区検出遺構であるが、遺物は見られず、時期、性格ともに不明。

**133号土壙** (Fig. 28) E-III-e区検出遺構である。径1.6mの円形で、深さ1.75mの掘方であり壁はほぼ直になる。他の井戸遺構掘方と同じレベルまで掘り下げられ涌水点に達していることから、井戸等の痕跡は確認できないが、井戸であると思われる。遺物は少量である。

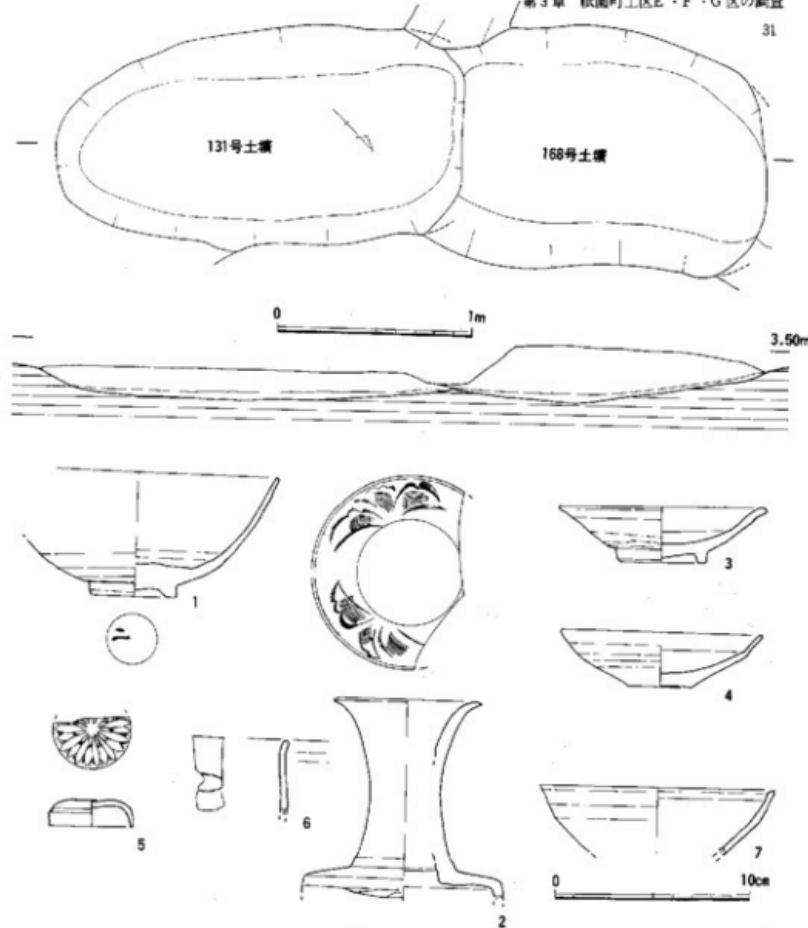


Fig. 27 131号, 168号土壙と131号土壙出土遺物

14世紀代か。

**134号土壙** E-III-c区検出の長軸1.2m、幅0.7m、深さ0.3mの浅い掘方である。土師皿小破片1点が出土したのみで時期、性格ともに不明である。

**135号土壙** 中間杭布掘り時の確認坑である。以上E区南半部確認遺構である。

**136号土壙** E-II-b区検出の径2.1mの円形掘方で、0.8m程の深さをもつ。出土遺物は少なく、時期は明らかにしがたいが、12号溝が埋没してから掘り込まれており、14世紀半ば以降

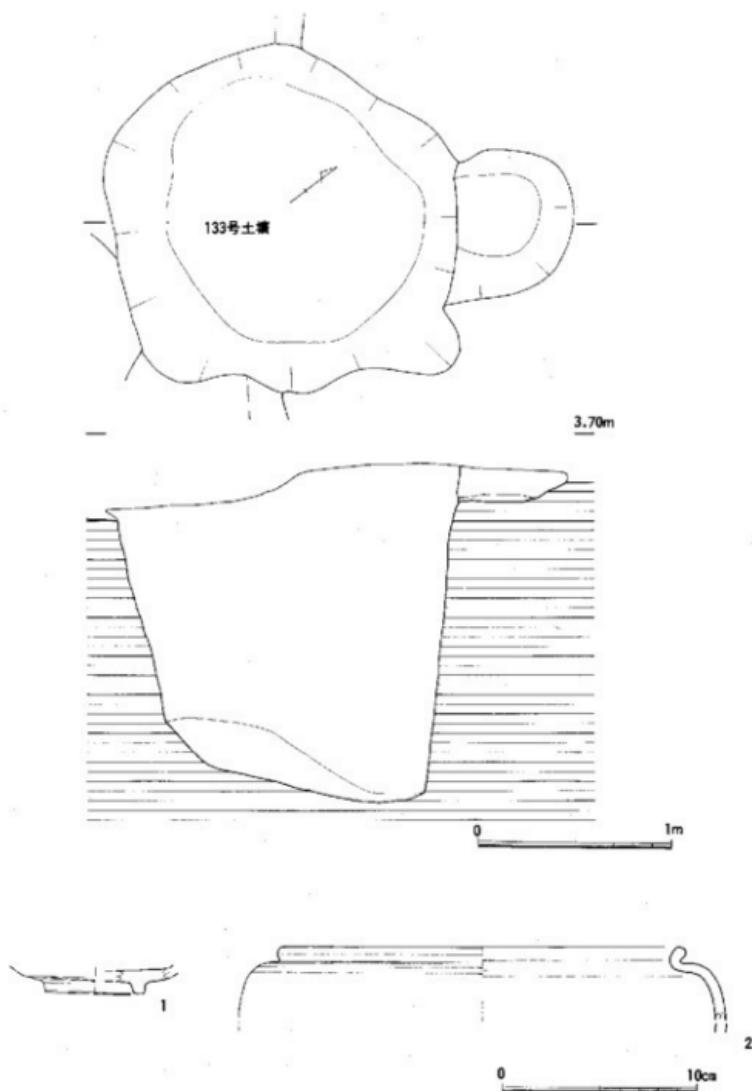


Fig.28 133号土壙と137号土壙出土遺物

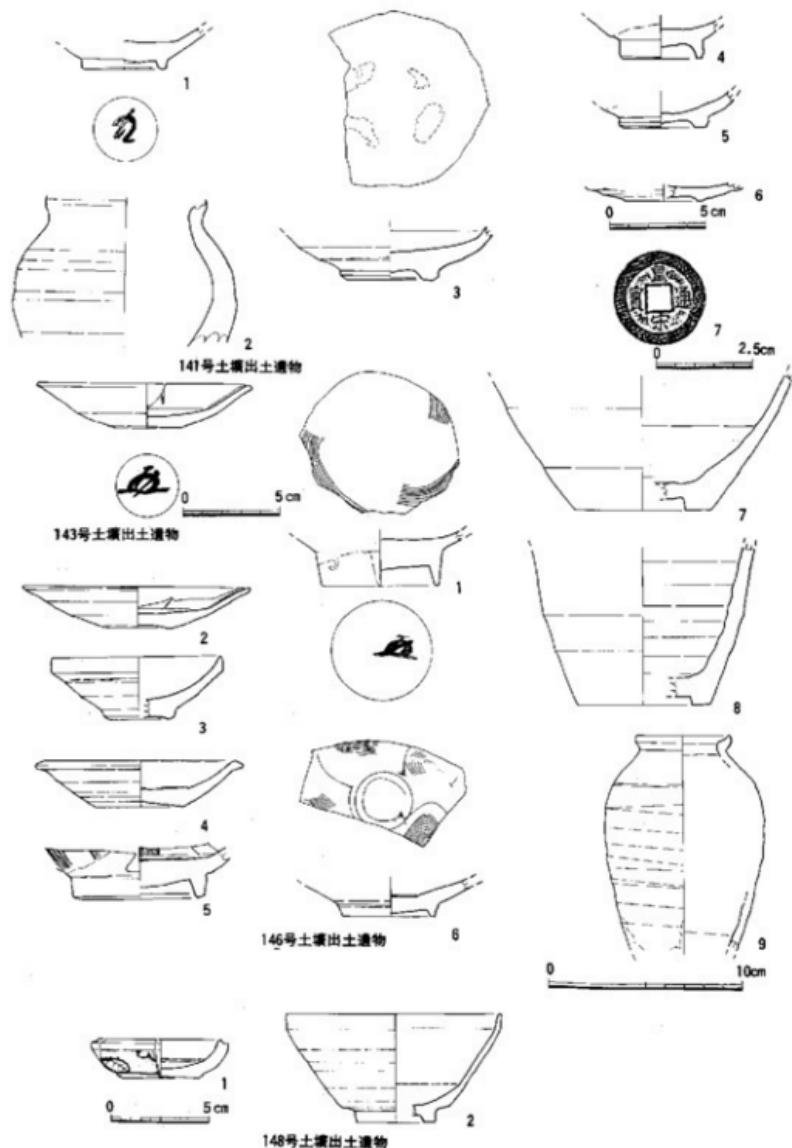


Fig.29 141号, 143号, 146号, 148号土壌出土遺物

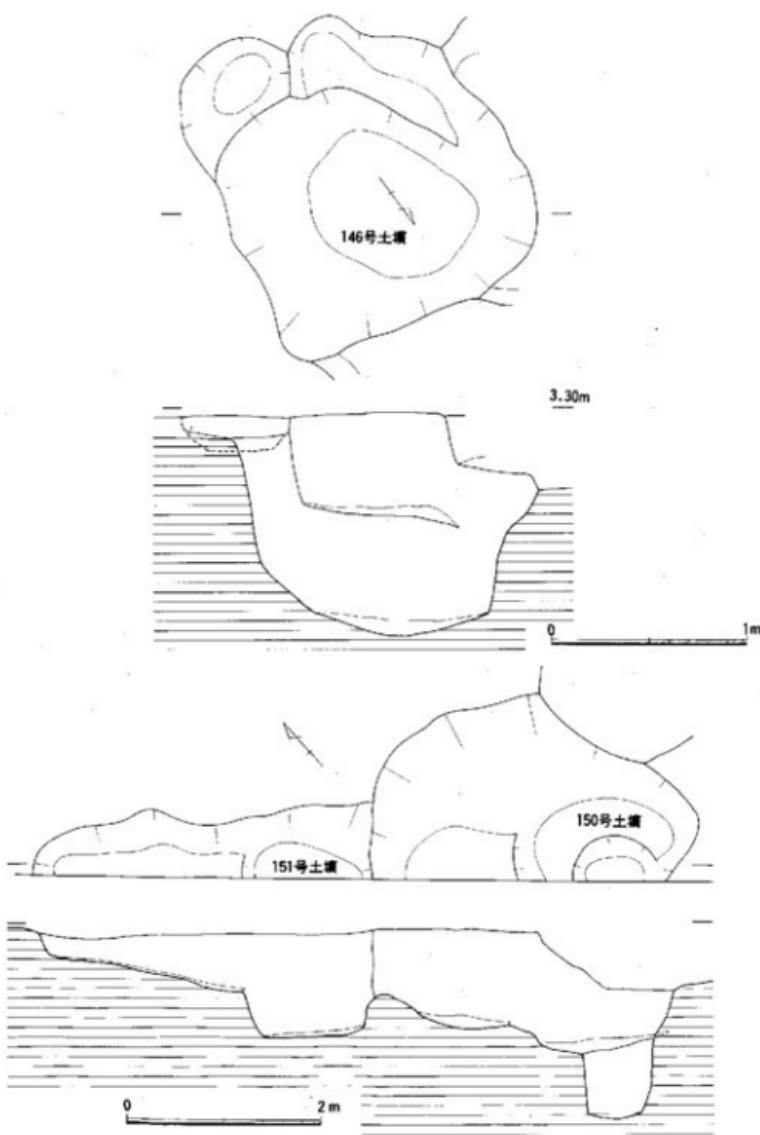


Fig. 30 146号, 150号, 151号土壙

の遺構である。性格不明。

**137号土壤** (Fig. 28) E-II-b区検出遺構である。不定形の浅い掘込で、12号溝の東壁上面にあり、テラス状をなしている。12号溝の一部であるかもしれない。出土遺物は多いが、各時期混在する。図示した遺物は、1が龍泉窯系青磁碗で貫入の多い茶オリーブ釉がかかる。2は陶器C群に属す鉢で、紫灰色の胎をもち黒褐色の釉をかける。土師皿類も多数出土しているが、微細な小片がほとんどで、計測可能なものは2点だけである。いずれも系切で口径10cmと9cm、器高はいずれも1.1cmである。

**138号土壤** (PL. 30) E-II-a区検出遺構である。近代瓦組井戸で、近代陶磁に混じって中世遺物が出土している。

**139号土壤** E-II-a区検出の小土壤である。12号溝の上面に掘り込まれた近世攪乱である。遺物は少ない。

**140号土壤** E-II-a区検出の長方形の小土壤である。12号溝の上面に掘り込まれている。近現代の廃棄物処理用土壤であろう。

**141号土壤** (Fig. 29 PL. 30・45) E-I・II-b区検出の12号溝の中央部を穿った近世井戸掘方である。掘方最下層の標高は0.68mと深い。多量の近世遺物に中世以前の遺物が混入している。図示した遺物は、1が龍泉窯系の青磁小碗で、外底高台内露胎部に「九」または花押かと思われる墨書きが残されている。2は備前系の陶器壺、3は唐津系の陶器皿で見込に4箇所の目跡が残る。4は唐津系と思われる陶器碗であるが、体部下半以下を除いて粘りのある天目釉がかけられている。5は中国製白磁皿である。6は唐津系の陶器皿で黒褐釉がかけられている。7は「皇宋通寶」である。

**142号土壤** E-II-a区検出の浅い土壤で不定形である。遺物は少ない。近世磁器1点に、白磁碗片3点、土師皿片4点が見られるのみである。近世の攪乱土壤である。

**143号土壤** (Fig. 29 PL. 30・45) E-II-a区検出の小土壤で、12号溝埋没後に掘り込まれている。遺物は少ない。図示した遺物は白磁平底皿で内面体部を白色堆線で5区分しており、外底露胎部に周辺遺構で出土しているものと同例の花押墨書きが書かれている。口径12cm、器高2.9cmの系切土師杯1点もある。14世紀半ばに位置づけられよう。

**144号土壤** E-II-a区検出の近代攪乱土壤である。近代磁器1点、鉄砲の弾丸3点に、青磁片2点、骨片2点などが見られる。

**145号土壤** E-I・II-a区検出の不整形の掘方である。深さ0.7mを計るが出土遺物はほとんど見られず、時期、性格ともに不明。

**146号土壤** (Fig. 29・30 PL. 30・45) E-I-a区検出遺構で147号土壤に切られる。近世磁器5点があり、近世の廃棄物処理土壤であろう。中世以前の遺物も多数混在する。図示し

I 高速鐵道關係埋藏文化財調査概要

36

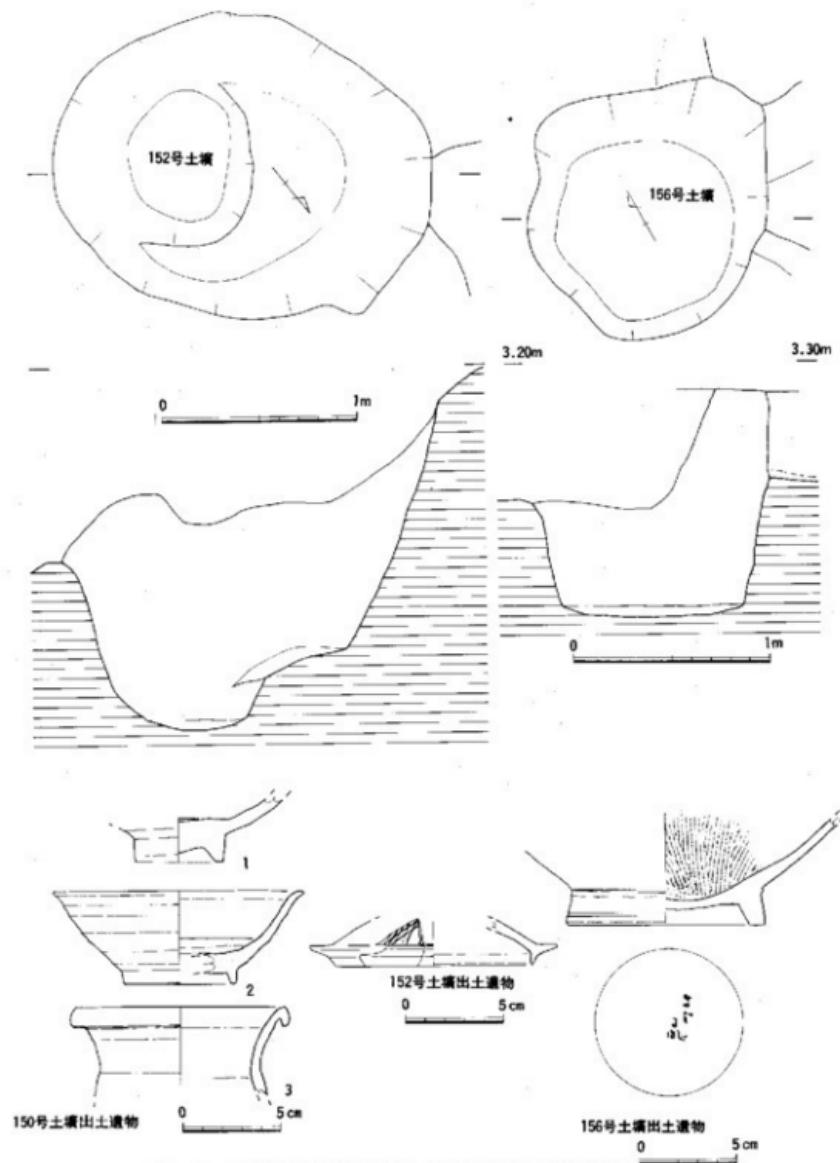


Fig.31 152号, 156号土壤と150号, 152号, 156号土壤出土遺物

たものは、1が見込に櫛描文をもつ白磁碗で、外底露胎部に例の多い花押の墨書きをもつ。2は143号土壤例と同じく白色堆線で内面体を区分する白磁平底皿、3は高台付白磁皿である。4は口縁端を外下へ屈折させる白磁平底皿である。5は体部内外に櫛描文をもつ青磁鉢で分厚く、茶味の強いオリーブ色釉をかけ、見込は輪状に削りとる。6は青白磁碗で内面に片切形と櫛描による文様を施す。外底疊付以内は露胎で、以外にスカイブルーの美しい透明釉をかける。7～9はいずれも陶器B群に属す壺類である。このほか口径9.5cm、9cm、器高1.6cmのヘラ切底土師皿2点も見られる。

**147号土壤** E-I-e区検出の近世攪乱土壤で146号土壤を切る。遺物量は多くない。

**148号土壤** (Fig. 29 PL. 30) E-I-a区検出の近代攪乱土壤で、各時期の遺物が混在して出土している。図示した遺物は、1が龍泉窯青磁合子身で体部に葉の浮文をもつ。わずかに黄味をおびた濃緑色半透明釉がかけられている。外底と接合部は露胎。2は磁質の天目碗で、高台疊付を除いて玳瑁風の黒褐釉がうすくかけられている。近世の国産品であろう。

**149号土壤** E-I-a区検出の近現代廃棄物処理土壤であり、中世以前の遺物は微量。

**150号土壤** (Fig. 30・31 PL. 30) E-I-b区検出遺構である。土留壁柱に切られ全体形は不明であるが、掘方底面端に木桶組の痕跡を残す穴が穿たれており、井戸掘方である。土師皿類は30点あるが小破片で計測しない。14世紀代と思われる。遺物は各時期混在する。図示した遺物は、1が同安窯系青磁碗で内面無文、高台を高く小さく削り出している。2は白磁浅碗で見込釉を輪状に削り取る。3は白磁四耳壺または水注の颈部である。

**151号土壤** (Fig. 30) E-I-a区検出遺構であるが、土留壁柱に切られ詳細不明。

**152号土壤** (Fig. 31) E-I-b区検出遺構である。径20m程の二段掘りをなす掘方で底面は標高1.3mを計り湧水点に充分達している。水溜等施設の痕跡は見られないが井戸であろう。出土遺物は少なく、瓦片19点が口立つ。図示した遺物は青磁蓋で上面にのみ淡黄緑色のガラス質の強い釉がかけられている。上面に斜格子の櫛描文がある。他に龍泉窯青磁香炉小片がある。14世紀代であろう。

**153号土壤** E-II-c区で検出の154号土壤(井戸)の掘方。欠番。

**154号土壤** E-I-II-c区検出の井戸である。径3.0m×2.4mの長円形の二段掘方である。標高1.13mまで掘り下げられている。遺物は少なく、口径13.5cm、器高2.4cmの糸切底土師杯が1点出土している。12号溝埋没後に掘り込まれたもので、14世紀半ば以降の井戸である。

**155号土壤** 103号土壤と同じであり欠番。

**156号土壤** (Fig. 31 PL. 30・45) E-III-a区検出の近世廃棄物処理土壤である。図示した遺物は国産の近世描鉢で、外底に墨書きが見えるが判読できない。

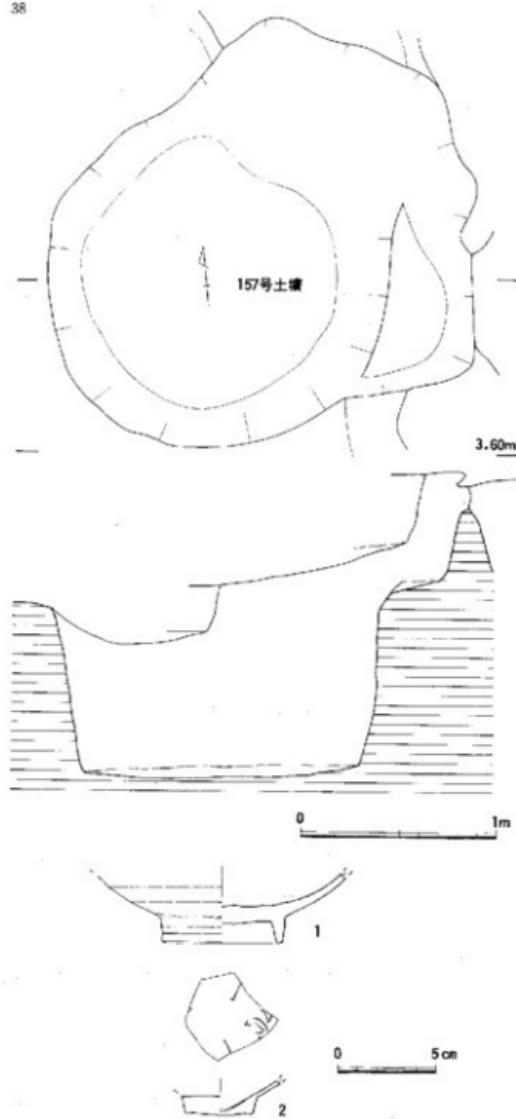


Fig.32 157号土壙と157号土壙出土遺物

**157号土壙 (Fig. 32 PL.**

31) E-III-b 区検出遺構である。径1.7m程の円形掘方で、深さ1.6mを計り、底面標高は1.92mである。壁はほぼ直に立つ。出土遺物はまとまりがない。図示した遺物は、1が白磁碗で、見込に異物がゴマ粒のように付着している。外底露胎部に墨書の痕跡を見るが判読できない。2は青白磁碗で内面体部にヘラ描文をもち、外底部をのぞいてライトブルーの美しい釉がかかる。内底に深い茶溜りがある。土師皿は少量かつ小破片で時期は明確にしがたい。14世紀頃の井戸であろうか。

**158号土壙 (Fig. 33 PL.**

31) E-III-c 区検出遺構である。径3.9m程のはば円形の深皿状の井戸掘方で、深さ1.7m、底面標高は1.76mである。出土遺物は奈良、平安期の土師器、須恵器片がやや多く、中世以降の遺物は微量である。古い遺構を掘り抜いたものであろう。図示した遺物は、1が口縁を外方に平坦に伸ばし、体部に丸味をもつ白磁皿。2は7世紀代の須恵器小壺で、肩に刺突文をもつ。

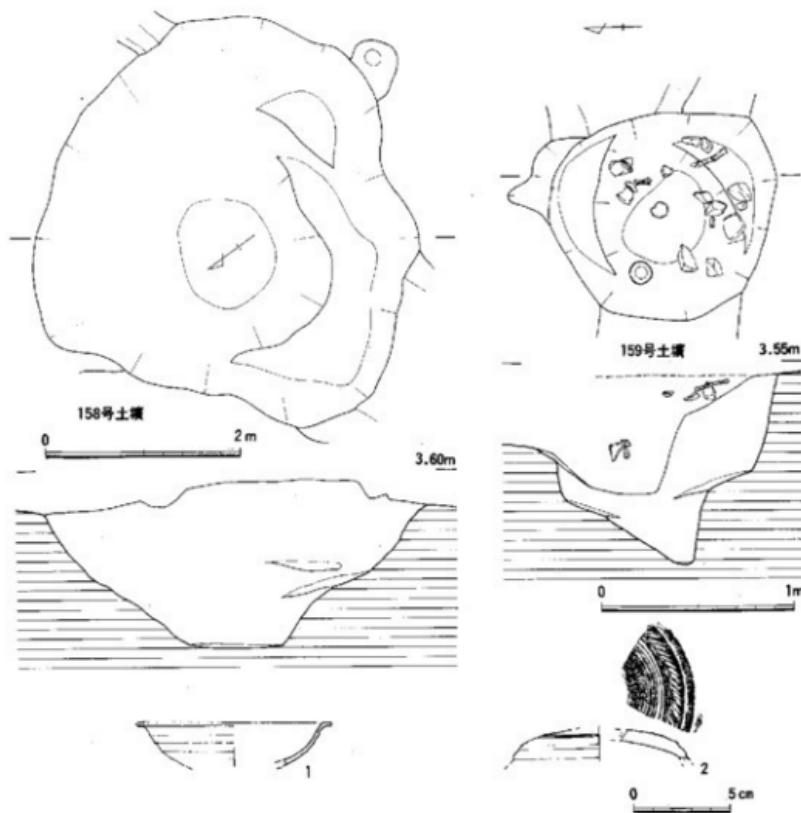


Fig.33 158号,159号土壤と158号土壤出土遺物

土師皿類も小破片のみで明確な時期はわからないが、14世紀半ば頃の掘方か。

**159号土壤** (Fig. 33) E-III-b 区検出の径1.1mの円形土壤である。黒褐色土の覆土中に動物骨片、焼石、土師皿類が散在する。計測可能なものは、ヘラ切底の杯で口径17cm、器高2.8cmの大型のもの1点と、小皿はいずれも糸切底で、最小口径7.0cm、器高1.1cm、最大口径9.0cm、器高1.5cmのものまで7点があり、各時期混在する。以外の遺物には瓦小片6点、白磁、青磁片各1点、陶器6点などがある。おそらく14世紀半ばの廃棄物処理土壤である。

**160号土壤** (Fig. 34・35 PL. 31) E-III-b 区検出遺構で、161号土壤を一部切る。近

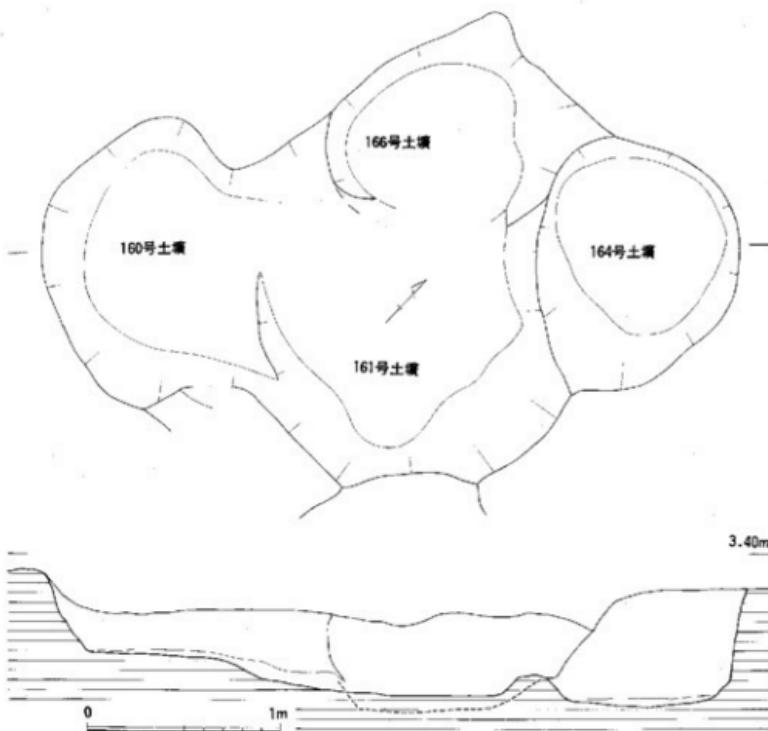


Fig.34 Fig.34 160号, 161号, 164号, 166号土壌

代擾乱上層。遺物量は少ない。近代国産陶器擂鉢や磁器に混じり、少量の中世陶磁がある。図示した遺物は、磁灶窯系の陶器蓋で無釉、上面頂部のみヘラ削調整で、他はナデ調整を行う。

**161号土壌 (Fig. 34・35 PL. 31・45)** E-III-b 区検出遺構で、160号土壌に切られ、164号、166号土壌を切る。少量の近世陶磁に、多量の中世以前の遺物が混じる。近世廃棄物処理土壌である。図示した遺物は1が龍泉窯系青磁碗で、内面体部を2条の沈線で5区分した間に飛雲文を描く。見込に4箇所の目跡が残り、外底露胎部に墨書が見られるが判読できない。鶯色不透明釉がかかる。2は見込沈線内にヘラ描ともえ文、体部にヘラ、櫛による花文をもつ青磁碗である。体部は丸みをもち龍泉窯青磁碗のプロポーションに近いが、胎上、釉、高台の削りは同安窯系青磁碗に近い。3は唇付部のみ露胎で他に茶味のあるモスグリーン色の釉が

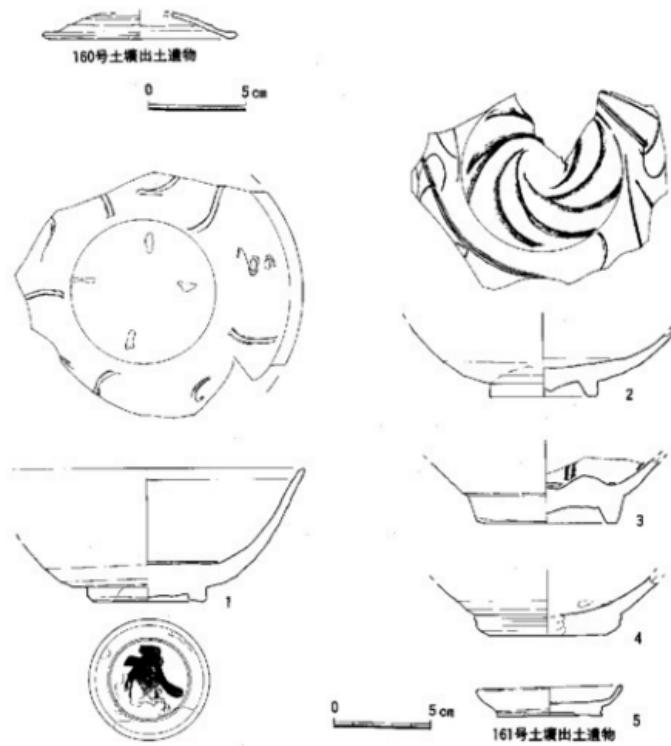


Fig.35 160号, 161号土壤出土遺物

かかり、見込に輪状の目跡が残る。底には火ぶくれがあり粗製であるが、越州窯青磁とB群陶器との中間的印象がある。4は越州窯系青磁碗で体部下半を削り高台状にする。底部の脇に目跡が斜めに残る。5は糸切底土師小皿で口径7.8cm、器高1.6cmを計る。

**162号土壤** (Fig. 36 PL. 31) E-III-b区検出遺構である。163号土壤に接するが前後関係不明。土留壁柱に切られ全体は不明であるが、0.3m程の浅い掘方をもつ。土師皿類がまとまって出土しているが計測可能なものは表に示したとおりで、いずれも糸切底。小皿はやまとまりを見せるものの杯はまとまらず、12世紀後半から13世紀代まで混在しているようである。近世遺物も少量であるが混在しており、以前の遺構を再び掘り起こした近世廃棄物処理土

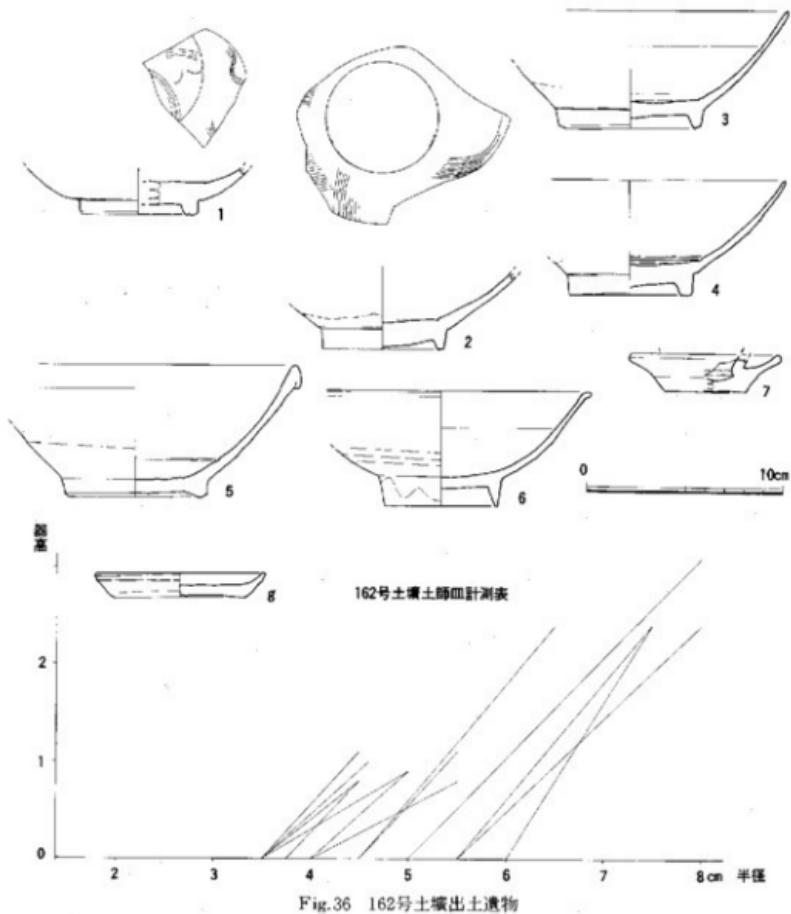


Fig. 36 162号土壤出土遺物

壙であろう。図示した遺物は、1が龍泉窯青磁碗、2が内面体部に柳描文をもち、見込に段をもつ白磁碗で、淡黄色の貫入の多いガラス質透明釉が体部下半までかかる。3、4は白磁碗Ⅳ類で見込釉を輪状に削りとる。6は白磁碗VI類である。7は国産の糸切底の灯明皿で、無釉、レンガ色の胎をもつ。

163号土壙 E-I-c 区検出の遺構であるが、土留壁柱に切られ全体形は不明。出土遺物

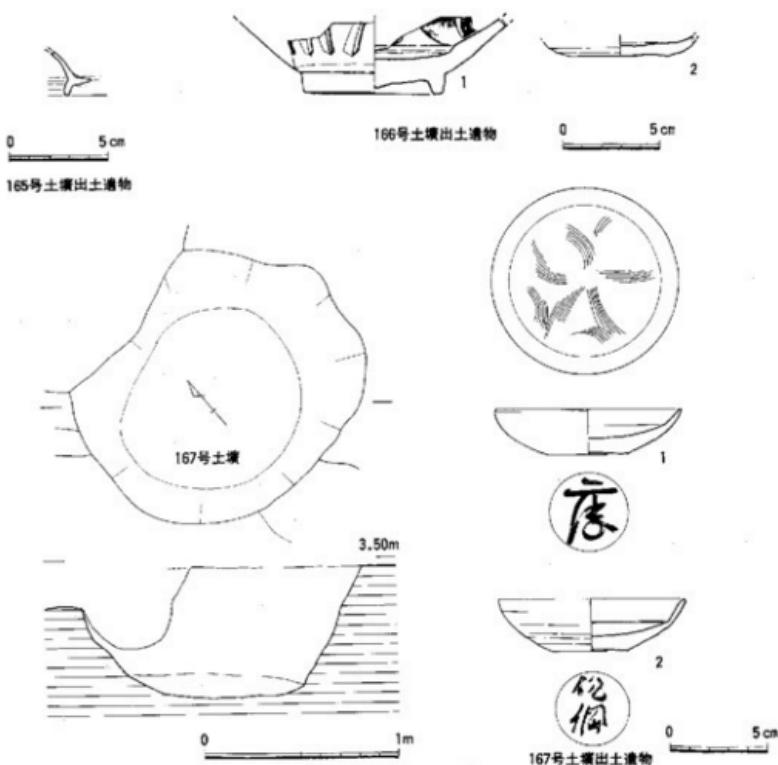


Fig. 37 167号土壌と165号、166号、167号土壤出土遺物

は骨片少量を除いて全く見られず時期は不明である。土壤墓であろうか。

**164号土壤** (Fig. 34) E-III-b区検出遺構で、径1.1~1.2mのほぼ円形で深さ0.6mを計る掘方をもつ。遺物は少量で中世末かと思われる瓦破片9点が見られるのみである。性格不明。

**165号土壤** (Fig. 37 PL. 31) E-III-b区検出遺構である。径0.9mの円形で、深さ0.7mの掘方をもつ近世上層である。近世陶磁に混じり少量の中世遺物が混じる。図示した遺物は青白磁蓋である。上面にのみ明青色の半透明釉がかかる。

**166号土壤** (Fig. 34・37 PL. 31・46) E-III-b区検出遺構である。161号土壤に切られる。径0.9m程の円形をなすと思われ、深さ0.53mを計る。多量の骨片に混じって、中世遺物が多く見られる。図示した遺物は、1が釉下鉄彩の鉢で、外面体部に放射状の片切彫が見られ、

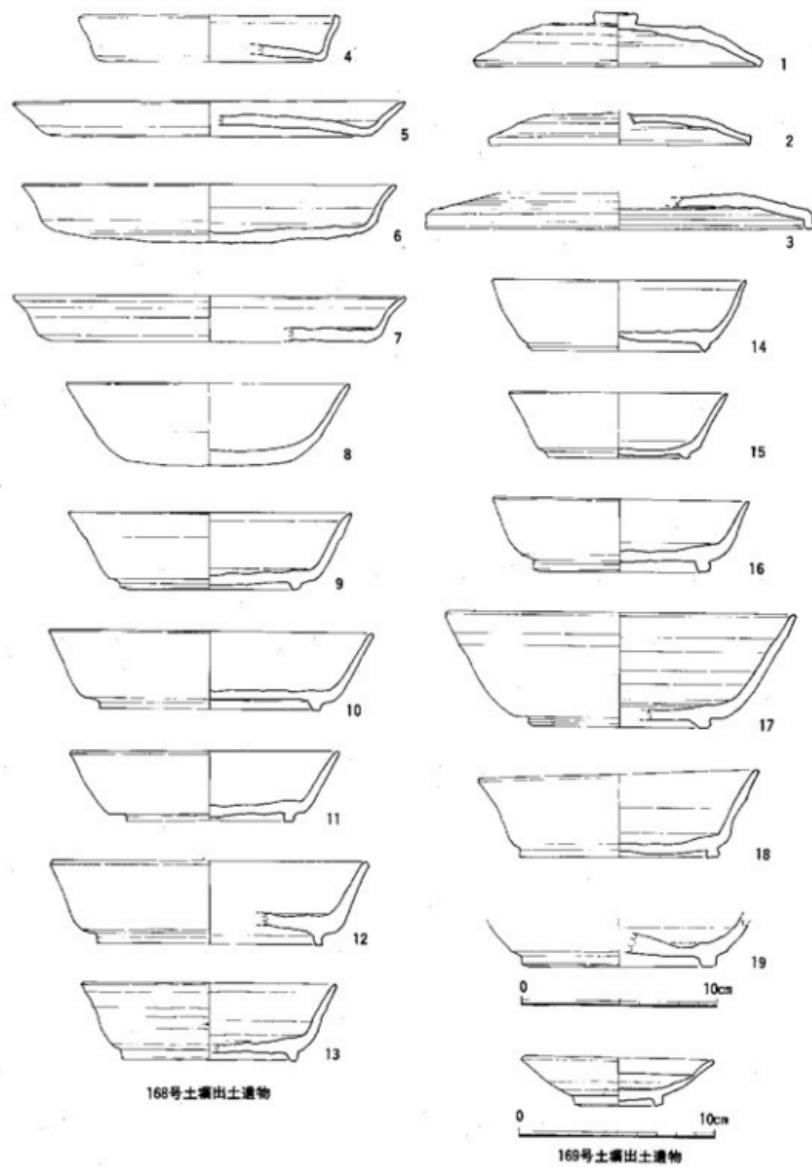


Fig.38 168号,169号土壤出土遺物

見込に段をもち、見込で釉を粗雑に輪状に削りとる。胎はネズミ色～肌色でやや粗いが堅緻で暗いオリーブ色の釉が施され青磁に近い。2は同安窯系皿で見込で釉を円形に削りとっている。この他、玉縁をもつ磁灶窯系の盤などがみられる。土師皿類は24点が出土しているが、計測可能なものは糸切杯1点のみで、口径13cm、器高2.3cmを計る。13世紀後半代の廃棄物処理土壙か。

**167号土壙** (Fig. 37 PL. 31) E-I-III-c区検出遺構である。1.5m×1.2m程の梢円形で0.68mの深さをもつ掘方である。遺物は多く、白磁43点、青磁6点、陶器30点等が土師皿類55点や瓦23点等の国産遺物に混じる。土師皿類はいずれも小破片で計測できないが、ほとんど糸切底である。図示した遺物は、1が見込に櫛描文をもつ白磁平皿V-1類に属するもので、外底部をのぞいて全面に乳白色の不透明釉がかけられ、ピンホールが多い。外底露胎部に遺存状態のよい墨書きが残るが判読できない。2は白磁平皿VI-2類に属するもので、無文、体外半袖で灰オリーブ半透明釉がかかる。外底露胎部に「□網」と読める墨書きがある。時期を限定することはむずかしいが、おそらく13世紀代の廃棄物処理土壙であろう。

**168号土壙** (Fig. 27・38 PL. 31) E-I-III-c区検出遺構である。131号土壙と土留壁柱に切られ全体形は不明であるが、深さ0.25m程の浅い皿状の断面形をなす。奈良時代の土師器片198点と須恵器片130点が集中して出土している。図示したものは須恵器のみである。1～3は蓋である。いずれも天井部のみに回転ヘラ削調整を行う。1、2の受け部は断面三角形をなし、内側に明確な段がつく。3の受け部は下方に折れ、断面四角形をなす。4～7は皿である。4は体部が外方に開かないもので、体部最下位から底部を回転ヘラ削調整を行っている。5～7は口径が大きく、体部は外方に開き、ヘラ削調整を行わないものである。8～19は杯である。8は丸底をなし、体部最下位から底にかけて回転ヘラ削調整を行っている。9以下はほぼ断面四角形の高台を貼りつけるもので、9、10、12、13、16が体部最下位から底部にかけて回転ヘラ削調整を行っている。ほぼ8世紀前半から半ば頃の遺構である。当該期の遺構の検出例は少ないが、遺物は各遺構から混在という形で出土しており、かなり広い範囲に同時期の遺構群は広がっていたものと思われる。

**169号土壙** (Fig. 38) E-I-III-b区検出の遺構である。1.1m×0.8m、深さ0.7mのほぼ長方形の掘方をもつ。出土遺物は図示した高台付白磁皿1点のみである。13世紀代の土壙裏の可能性がある。

**11号溝** (Fig. 39) E-I-d区検出の溝状遺構である。101号、109号土壙に両端を切れ全体形は不明であり、幅0.6m、深さ0.5mの掘方が1.2m程続くのみで溝とは断定できない。出土遺物も少ない。ほぼ12世紀後半代と思われる。図示した遺物は須恵器蓋で天井部のみを回転ヘラ削調整する。8世紀後半代のものか。計測可能な土師皿2点もあり、それぞれ口径9cm、10cm、器高1.3cm、1.0cmである。

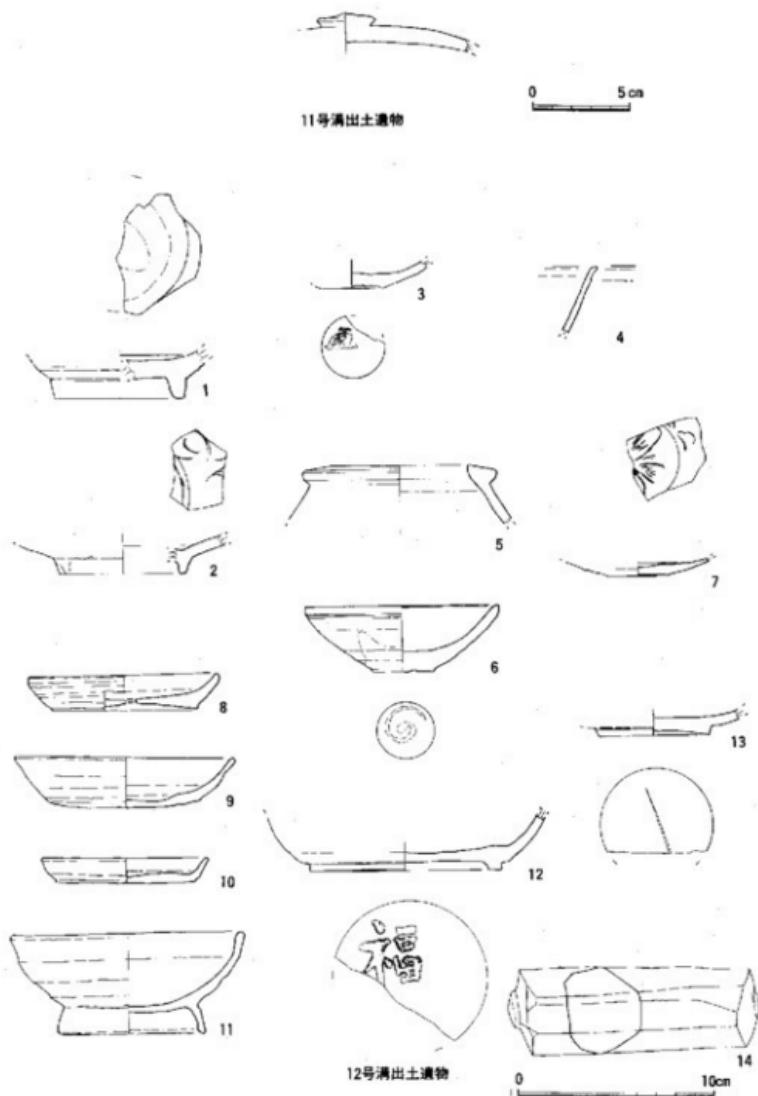


Fig.39 11号,12号溝出土遺物(1)

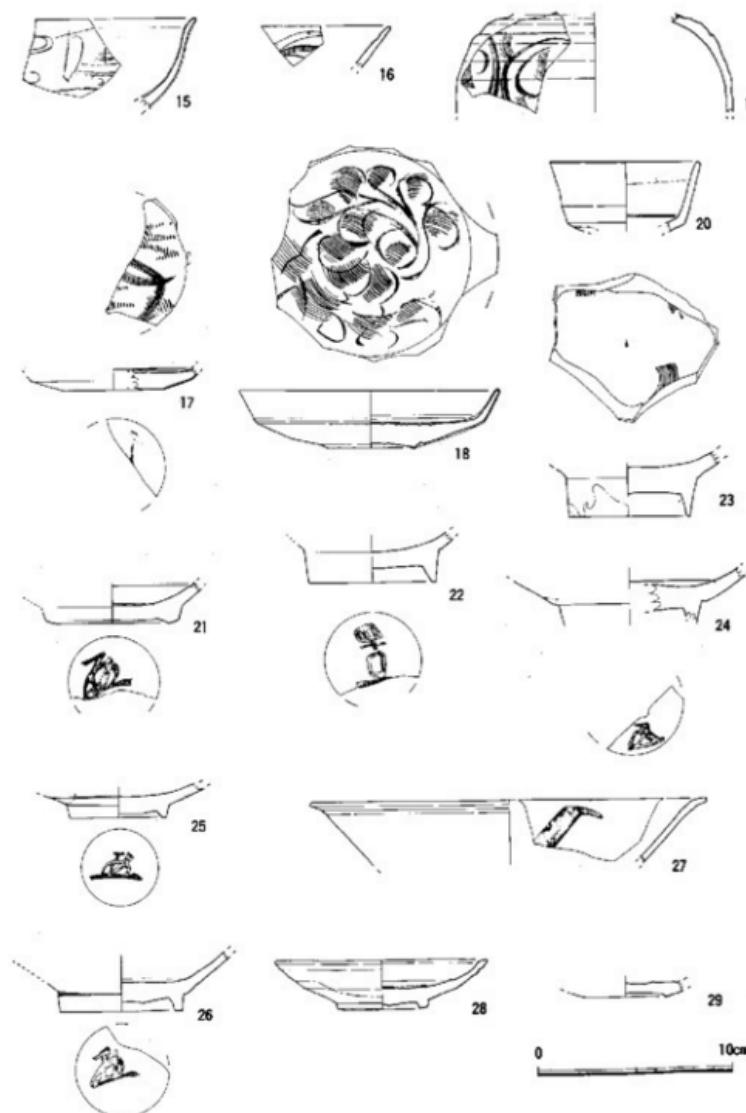


Fig.40 12号溝出土遺物(2)

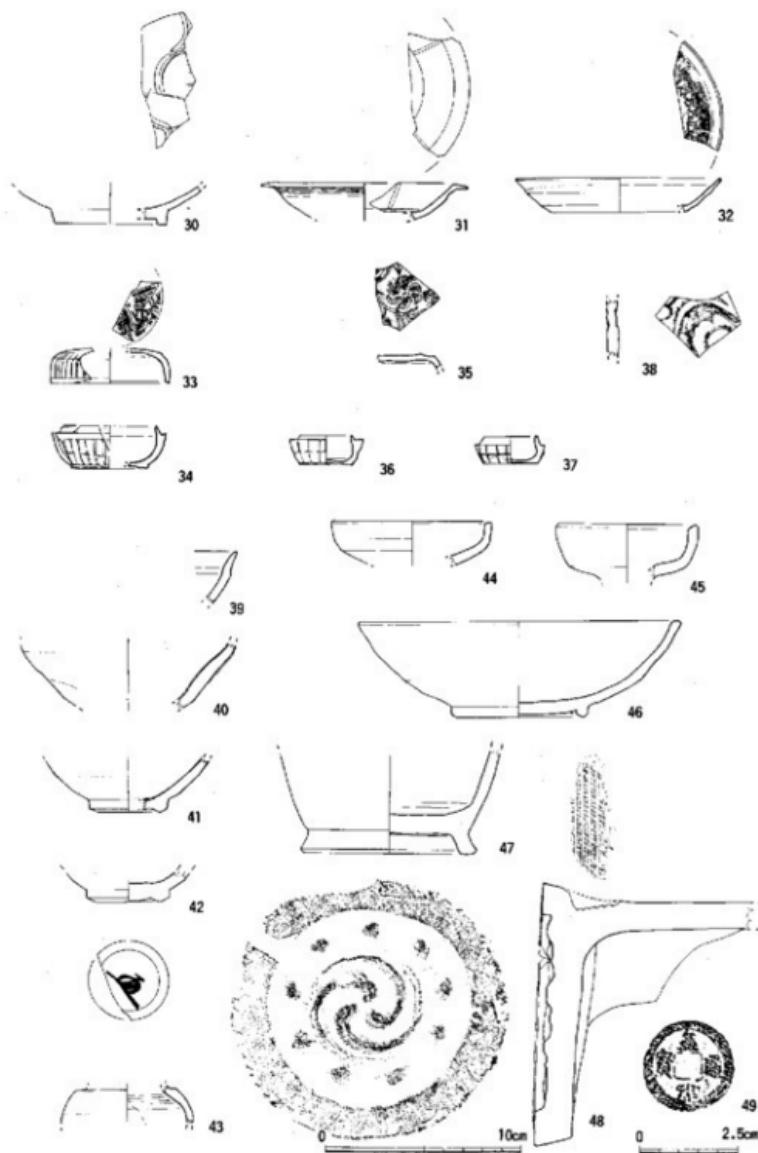


Fig.41 12号溝出土遺物(3)



Fig.42 12号溝出土遺物(4)

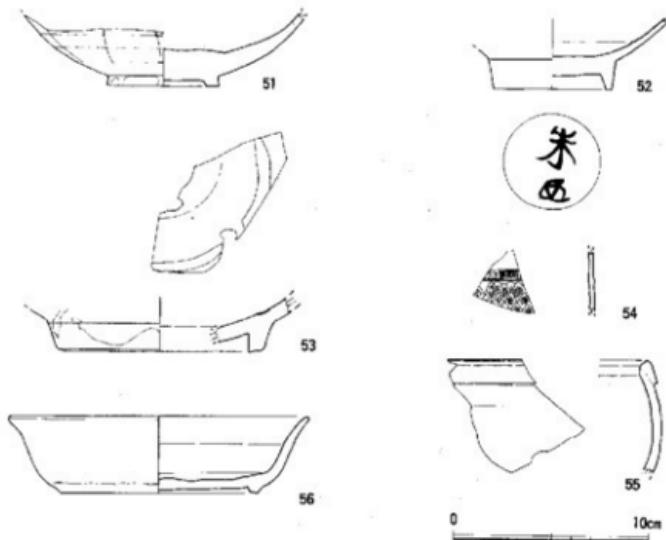


Fig. 43 12号溝出土遺物(5)

12号溝 (Fig. 39~44 PL. 7・10・32・46) E区北側調査区を中心に調査区を斜断する形で検出された大規模な溝である。E区の北西に接する店屋町工区D区の調査でもこの溝の一部が検出されており、確認された長さは23mになる。多くの遺構等によって切られており、特に東側の壁面の上面は明確でないが、溝の上端幅は最大6mにもなると思われる。底幅は2m強で、高低差は最大1.7mもある。溝断面形はV字形をなす。この溝の主軸はほぼ真北を向き、誤差はあっても2~3°東に振れる程度である。この方位については、同様の規模をもっていた店屋町工区A・B区で検出された2号(5号)溝の方位N-88°-Eや、小規模であるがG区からH区にかけて検出された31号溝とはほぼ直角をなしている。Fig. 44に示した土層断面図は、中間杭列に沿っており、溝の斜断面土層図となっている。この図からも看取できるように、溝は地山黄白色砂層を掘り込んで作られたものである。壁面には土留施設等の痕跡は残されておらず素掘であったかもしれない。底面および壁面の下層部分には、薄い砂層が何枚も堆積して

おる。壁面の崩壊と水の流れによるものであろう。これらの下層部の堆積の上には、土器片を多く含む黒褐色で粘性を有する砂質土が厚く堆積しており短期間のうちに埋められたものであろう。遺物は極めて多量であり、便宜上溝上面検出時の出土遺物を上層、黒褐色の粘性のある厚い砂質土中のものを中層、以下のものを下層と区分している。しかしながら、多くの遺構の切込等があり混じり込みも見られると思われる。それらについての除去等の操作は行っていない。以下出土遺物のうち図示したものについて説明する。

Fig. 39-1~14 は上層出土遺物である。1は白磁碗で見込軸を粗雑に削りとるものである。2は白磁碗で内面体部に割花文をもち、見込との境に段をもつている。3は白磁平皿で体外半釉、内面は釉むらがありやや粗雑である。外底部には周辺に類例の多い花押の墨書きが残されている。4は白磁碗である。口縁部を外方に丸く突き出す。全体に淡い透明オリーブ色釉をかけているが、内面上端は重ね焼のため他の器物が付着した痕跡があり、その部分だけ釉が剥げている。5は陶器群で黒褐釉がかかる。6は陶器皿である。口縁端部を施釉後平坦に削っている。7は陶器皿で、見込に菊花かと思われる印花文を施し、外面をのぞいて透明な茶オリーブ色の釉がかけられている。A群の胎土に近い。8は糸切底

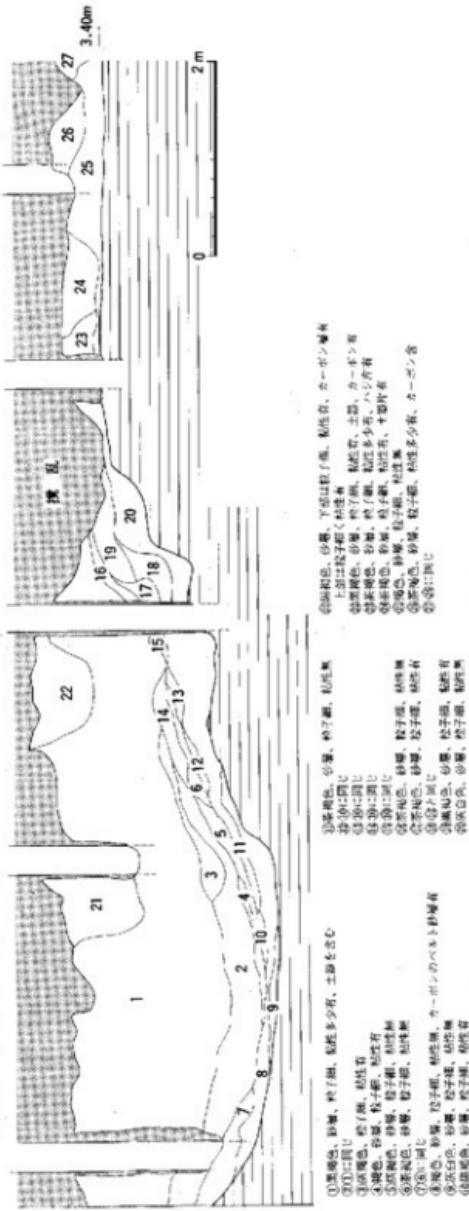


Fig. 44 12分溝上層断面図

土師小皿で底部中央に穿孔が見られる。口径10cm器高1.8cmである。9はヘラ切底土師杯で口径11.3cm、器高2.5cmを計る。10は糸切底土師小皿で口径8.5cm、器高1.3cmである。11は高い高台のつく土師器碗である。12は断面四角形の高台を貼りつける須恵器杯で、体部最下部と底を回転ヘラ削調整をなし、外底部に「福」の墨書を残す。13は円盤高台の縁釉陶器で、外底にヘラによる記号があり、三叉トチンの痕跡と思われるゴマ粒大の目跡が残る。洛北古窯群の産であろう。14は目の粗い硬砂岩製で、六角柱状に面取りし、両端に突出部を設けた石器である。時期、用途とともに不明。

Fig. 40~42 15~50は中層出土遺物である。15~19は青磁である。15は龍泉窯青磁小碗で内面体部に一部漢字かと思われる線描文をもち深い貼手風の釉がかかる。16は内面に劃花文をもつもので胎は灰色で緻密、灰オリーブ色透明釉がかかるが、口縁端部は茶色の発色をなす。龍泉窯系である。17は同安窯系青磁平底皿で、内底に櫛描文をもち、外底露胎部に墨書が見られるが判読できない。18は龍泉窯青磁平底皿で内底に片切彫と櫛描による花文を施し、外底と体部の境に小さな沈圓線をめぐらせ高台風にする。透明な黄緑色釉が外底の一部にまで厚くかけられ、大きな貫入が見られる。19は青磁壺の肩から胴部にかけての破片で、境に一条の沈線をめぐらし、胴部にはヘラと櫛による劃花文をもつ。内外面にややくすんだ灰青色透明釉がかかる。龍泉窯に近い胎をもつ。20~29は白磁である。20は香炉で内面体部上半と高台脇まで灰白色半透明釉がかかる。21は碗Ⅳ類に属するもので外底露胎部に25、26と同じ花押墨書をもつ。22は碗Ⅵ類で内底に櫛描文をもち、高台内に「四十口」と読める墨書がある。23、24も同じく碗Ⅵ類である。24の高台内には墨書が見られるが判読できない。26は碗Ⅴ類で見込釉を輪状に削りとるタイプのものであるが、高台内に花押墨書をもつ。25は高台付の皿で、未分類、胎は灰白色で黒粒を含み粗く、内面と外面体部下半にまで乳白色の不透明釉がかけられている。高台内に花押墨書をもつ。27は釉下鉄絵の白磁鉢である。口縁端はやや水平に外方に開き、体部は直線である。酸化炎焼成のためか、胎は肌色で、鉄絵は灰色に釉はベージュ色の発色をなす。28は白磁高台付皿のⅡ類に属し、見込釉を輪状に削りとる。29は白磁平底皿であるが、未分類で外底をわずかに削り込み基部底風をなすものである。胎は灰白色で精良、釉は外面体部下端までかけられている。30~37は青白磁である。30は内面体部に櫛描文をもち内底を凹ませ茶溜りを作っている。胎は白色で精良、堅緻、わずかに綠味をおびた青白釉が豊付をも含め全体にかけられている。31は皿でおそらく平底になるものと思われる。口縁部は外に水平に薄く開き、体内面は推定5本の白色堆線で区切られている。胎は白く精良。淡青白釉が全面にかけられている。32は口ハゲの印花平底皿である。内面体部中位に雷文、下位に小さな花弁文が陽刻される。釉は薄い青白色である。33は印花合子蓋で、上面に鳳凰が、側面に菊弁が陽刻される。35も印花合子蓋で上面に花文が陽刻され、ややくすんだ青灰色透明釉がかけられている。

34、36、37はいずれも合子の身で、側面が菊弁の型造りである。38は梅瓶と思われ、ヘラによる浮文で外面を飾る。胎は白色精良で、わずかに緑味をおびた青白色透明釉が内外面ともにかけられている。貫入が目立つ。39~42は天目碗である。いずれも口縁部を鼈口にし、小さな高台を削り出す通例の器形である。41はネズミ色の胎をなし焼成も良好であり、釉も禾目風の流れが見え上物である。他は中国製品ではあるが、焼成も良好でなく、胎は肌色をなし、釉にも艶がなく下手物といってよい。42の高台内には今回例の多い花押墨書きが見られる。43は緑釉陶器の小壺である。焼成は甘く胎は肌色を呈するが、粒子は細かく精良である。鮮やかな緑釉を外面にかけており、表面はわずかに鉢化している。内面にも一部釉が流れ込んでいる。磁灶窯系の産と思われる。44、45は陶器C群に属する灯台の口縁部で盤口をなす。胎はいずれもレンガ色であり、44は光沢のある黒褐釉が、45には艶のない茶褐釉がかけられている。50は陶器A群に属する磁灶窯系の黄釉鉄彩大盤である。同一個体の破片と思われるものがまとまって出土している。内底中央部に牡丹文を配し、周間に葉文を環状にめぐらす。内底と体部は2本の圓線で区画し、更に中位と下位も2本の圓線で区画され、体部下位には波状文を、中位に2列に短い線を連ねている。口縁は主縁状に收まり、体部はやや丸味をもつ。底部は上げ底状をなす。釉は外面体部中位以下と、口縁部内側平坦面を除いて半透明の黄釉がかけられている。口縁部内側と外側部下半に重ね焼の火跡が見える。46は瓦質の碗で、やや外に開いた断面四角形の高台が貼りつけられる。内面は丁寧なヘラ磨きがなされ、外面は横方向にまばらな研磨がなされる。高台内には板状圧痕が残る。47は灰釉陶器と思われる壺である。外方に開く断面四角形の高台を貼りつける。胎は灰白色で軟調である。体部下位の一部に釉の痕跡が残るのみでカセているものと思われる。48は三つ巴文の軒丸瓦である。49は「至和元寶」。

Fig. 43~51~56は下層出土遺物である。51は龍泉窯青磁碗で線描の幅広の蓮弁をもつもの。52は白磁碗で高台内露胎部に「朱（花押）」の墨書きが見える。53は陶器B群に属するとと思われる鉢で見込と高台に目跡が残る。54は青白磁平皿である。55は陶器B群の鉢である。56は高台付の須恵器碗で全面回転ナデ調整を行っている。

以上図示した遺物を簡単に説明したが、土師皿類の一括資料がなく上層遺構の切込、道路下での調査等の悪条件から必ずしも遺物の層位の把握が確実にできていないため、溝の造営年代と廃棄年代とを明らかにすることはできない。しかしながら、店屋町工区A・B区、C・D区で検出されている、12号溝と同一方向もしくは直交する溝では、良好な土師皿類の一括資料があり、その廃棄年代は明らかにされている。本溝の廃棄年代についても、それらと同じく14世紀前半に求められよう。

**ピット群** E-I-d・e区、E-III-e区に柱穴と思われるピット群が検出されており、東西方向または南北方向に並びそうな印象はあるが、周辺の掘方によって寸断され、建物とし

ての組織的な把握はできない。

## 2) E区遺構外出土の遺物 (Fig. 45~50 PL. 32・33・46・47)

遺構外出土の遺物は、おびただしいものがあるが、その中から墨書きのある陶磁器を重点的にとり出して紹介する。墨書きのないものでも、残りのよいものや、珍しいものは紹介することにした。今回は出土陶磁器の破片数を種類別に報告するスペースがないが、これまで報告してきたA~D区とおおよそ同じ傾向を見ることができた。数字はできれば来年度にまとめて発表したいと考えている。

**青磁** 1は一般にⅠ類とされている龍泉窯系青磁に先行すると考えられるタイプの碗で0類としたものである。胎は灰色で強く焼け、灰オリーブ色の透明釉がかかる。氷裂はない。底部は小さく、腰の浅い形で器外には太い片切彫の斜平行線が、4本を単位にぐるりと回っている。器内は片切彫と横文で花文を描き、施釉は高台横まで達している。墨書きはあるが不鮮明。2~4は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、2は淡い蜂蜜色を呈す。4はオリーブ色である。見込に「福」字のスタンプが押され、疊付には復原で4個になると思われる人豆大の白い耐火土が付着している。5は同Ⅱ類の碗だが内底に重ね焼の目跡4個が見られる。このような目跡のある青磁は、龍泉窯系でも周辺にはずれる地区的ものではないかと考えられていたが、浙江龍泉でも安福龍泉窯で目土をはさんで重ね焼をしていることが報告されており、龍泉青磁と考えることができる。6、7は14世紀の龍泉窯系青磁碗。非常に厚手で見込には花文がスタンプされているが、釉が不透明で厚いためはっきり見えない。釉は淡色で疊付から外底は露胎。8、Ⅰ類碗に並行すると考えられる龍泉窯系皿。9は灰色ながら砂風の厚い釉がかけられた青磁で、三足の小形香炉の残部である。胎は灰色、精良堅緻。10、厚手の青磁底底部。太く搔き取った鏽文に厚く長石釉がかかっている。釉色は浅い青灰色で氷裂なく、疊付から露胎である。11は越州窯系青磁瓶口部。暗灰色の胎にオリーブ色の釉が薄くかかる。氷裂なし。口縁部に丸く目土が付着。12、13は薄い釉が器外半ばまでかかるオリーブ色の青磁で、器形は龍泉窯に似るが、福建の青磁と思われる。釉は透明で氷裂がある。14は龍泉窯系とも同安窯系とも異なり、その他の青磁と分類した青磁碗Ⅱ類に入る。釉は透明で青みを帯び、氷裂がある。器外には荒いヘラ削り跡が残り、体下半は露胎である。15~17は同安窯系青磁皿。15、16はⅡ類、17はⅠ類である。16は非常に淡い釉色である。

**白磁** 18は広東省潮州窯産と考えられる白磁碗Ⅱ類で、釉は淡い蜂蜜色。氷裂なし。胎はベージュ色を呈している。19、21、22は白磁碗Ⅵ類、20、27、28は同0~II類、23、24、26は同IV類、25は同VもしくはVI類に属する。29は淡色の同安窯系青磁に似た釉がかかる筒形香炉で、器内および折腰以下は露胎である。31は灰ベージュ色の胎土に透明オリーブ色の釉がかかる。

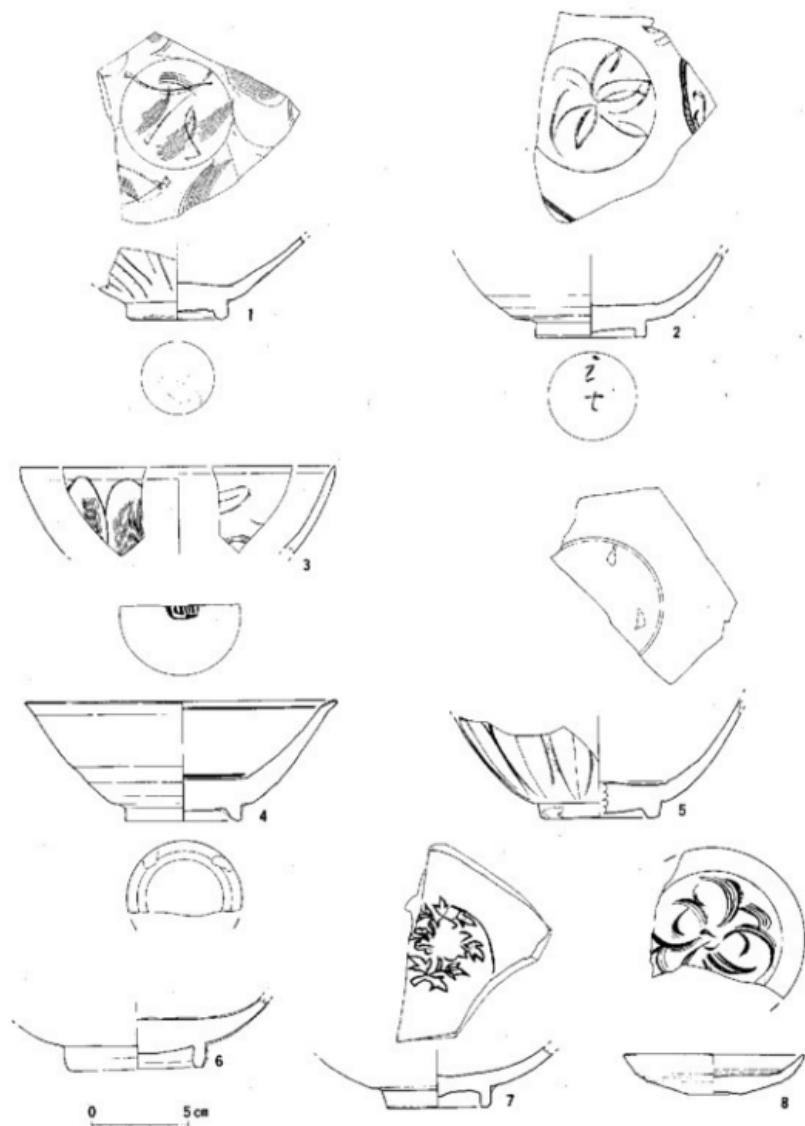


Fig. 45 E区遺構外出土遺物(1)

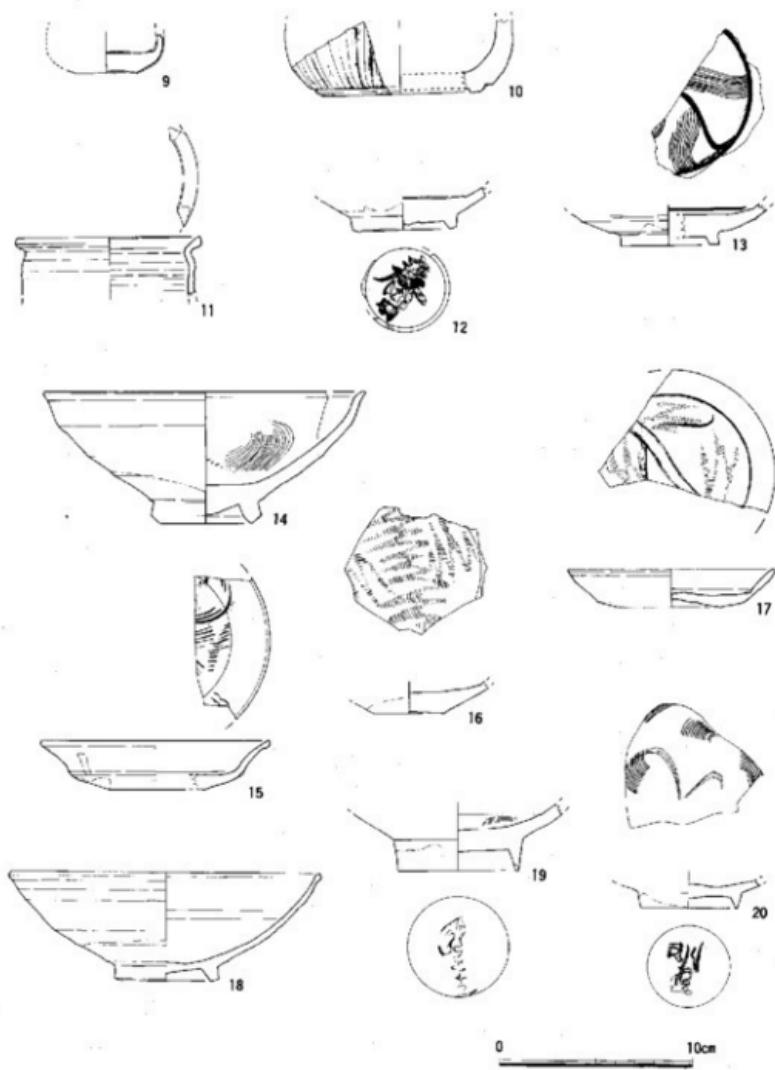


Fig. 46 E区 造構外出土遺物(2)

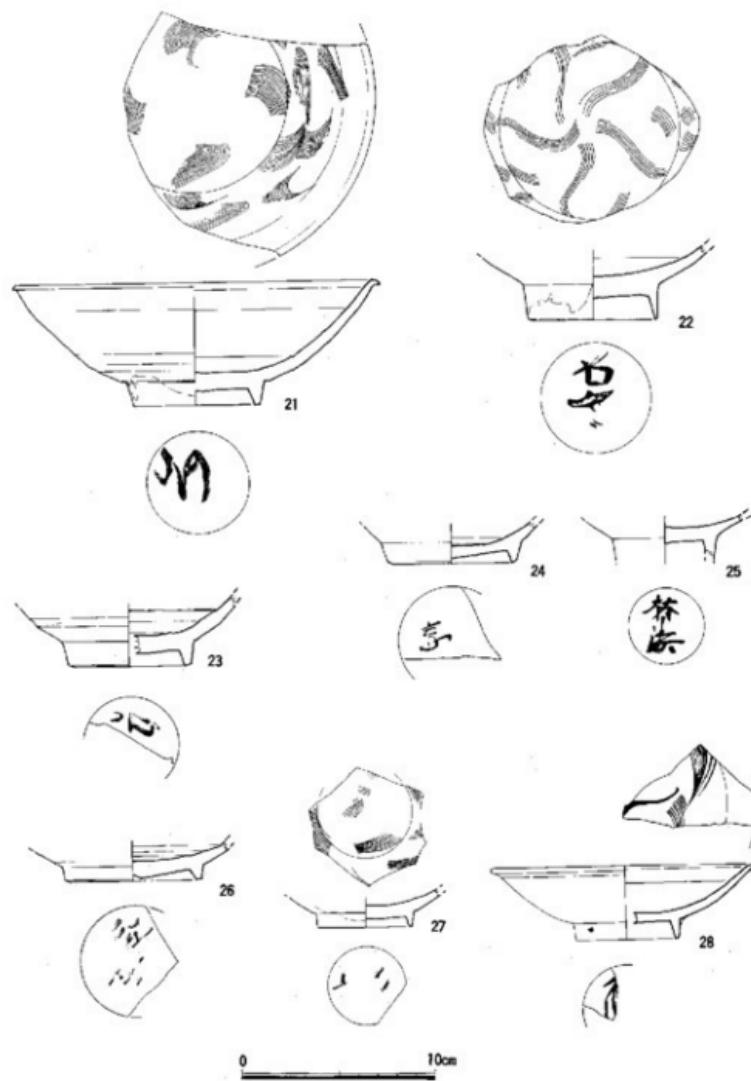


Fig.47 E区 造構外出土遺物(3)

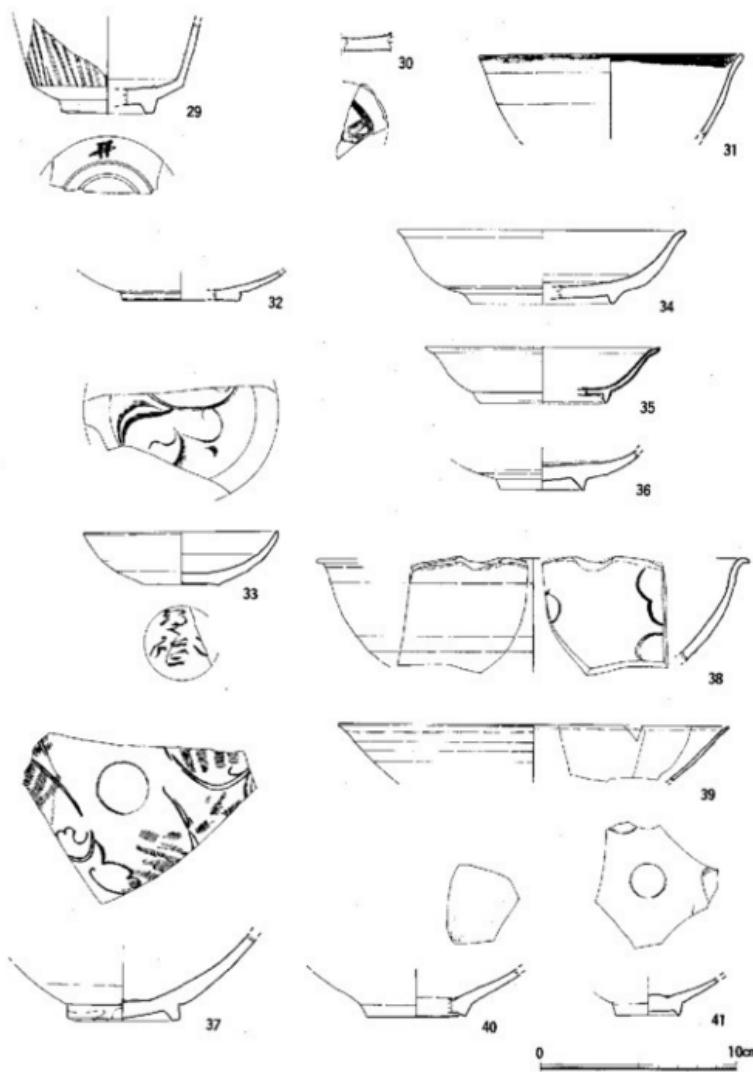


Fig.48 E区 造構外出土遺物(4)

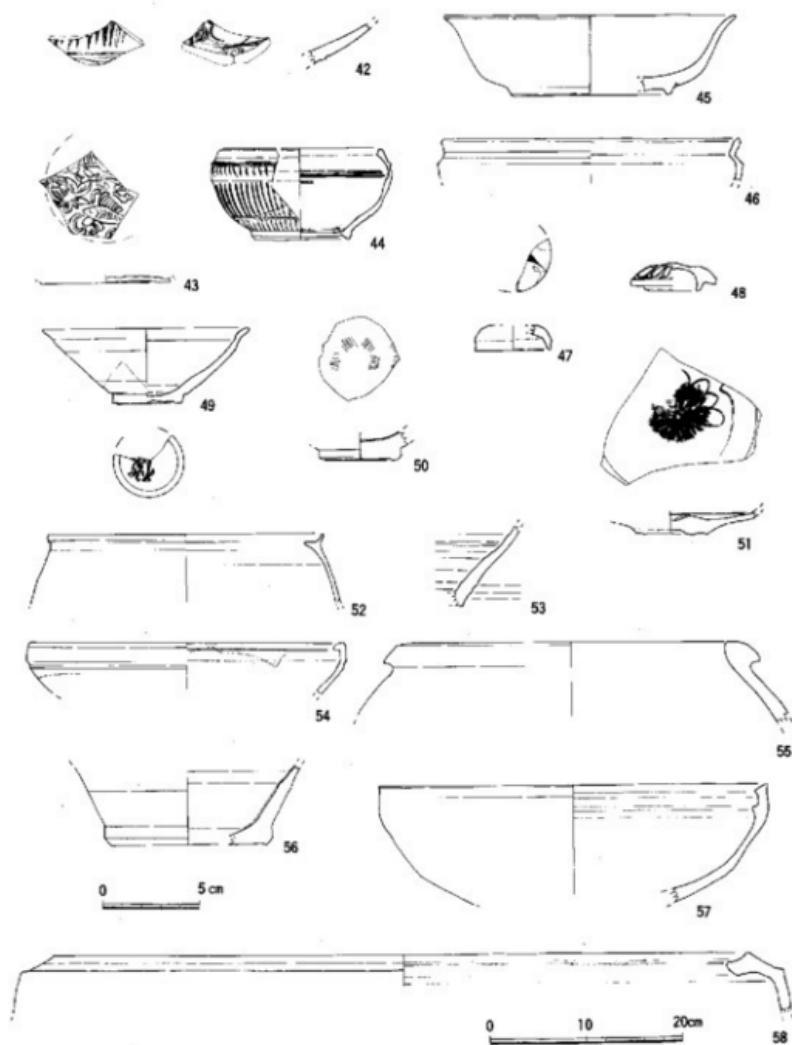


Fig.49 E区 通構外出土遺物(5)

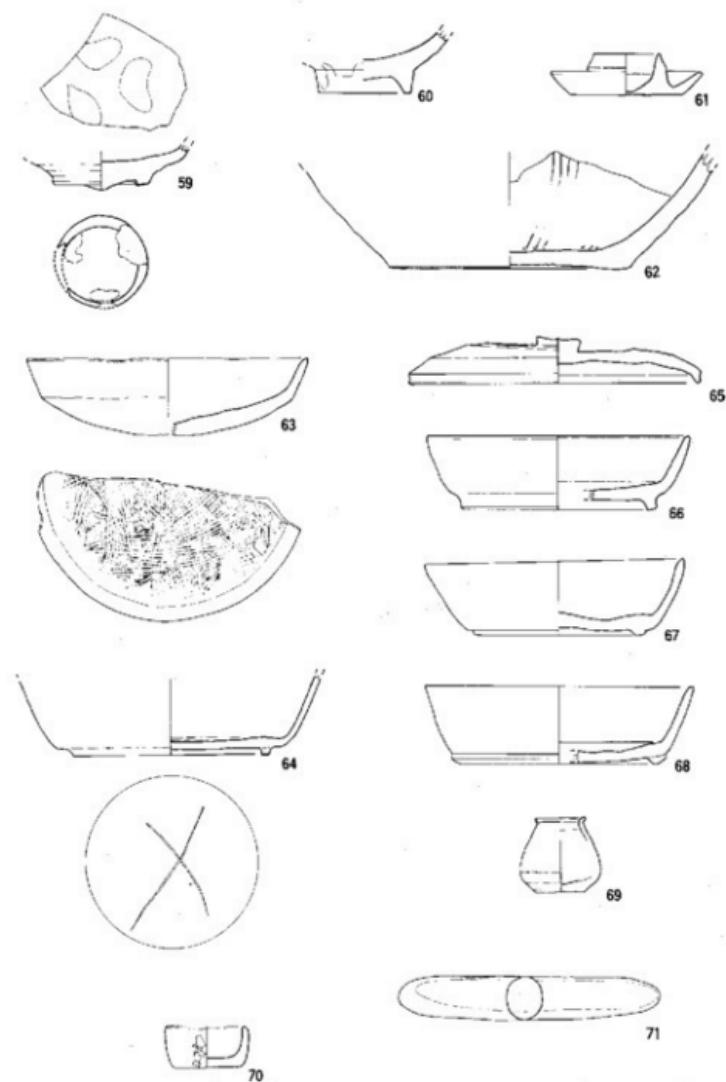


Fig.50 E区 遺構外出土遺物(6)

釉層は薄く、水製はない。外反口縁には鉄錆色の釉がかかっている。32は不透明帶青色の白釉がかかる破片で、口ハゲ白磁の底部と思われる。33は白磁皿貝殻である。34、35は16世紀の白磁。34は胎、釉とも灰色、35は白くよく磁化しているが、釉は粘性がある。36は國産の白磁か。底部が非常に特徴的である。34、36は見込に重ね焼のための輪形の釉切がある。

**青白磁** 37は見込に小さな茶漬のある碗で、器壁が直線的に開き笠型になると思われる。細いヘラ描きの花文の間を櫛による刺突文で埋める、古式の文様が施される。胎は灰白色で、淡い空色の透明釉がかかっている。水製はない。38、大ぶりな鉢で、口縁を大きく外弯させ、何箇所かを更に強くおさえて輪花にしている。素早いタッチの曲線で文様が描かれている。土は灰白色でやや粗め、釉は淡青色透明釉である。39は口ハゲ碗で幅太の覆輪がかぶせてあった上手の碗である。胎は白色で、釉は透明、やや黄味がかった柔い色調で、酸化ぎみの炎で焼成されたもの。器内壁は鋸く整った凸線で区分して、花形に作っている。40、41、も見込に小さな茶漬を作る小形の碗である。40はやや下手で、灰青色の釉がかかっている。42は外面に同安窯系青磁に見られるような拂描平行線文を施している。空色をおびた透明釉がかかる。43は口ハゲの印花文皿である。胎はややベージュがかった白で、草色をおびた透明釉がかかる。底部も施釉されている。44、青白磁小壺。型造りで肩で継いでいる。胎は灰がかかり、やや粗い。釉は濃いめの青色を含んでいる。45、青みを帯びた透明釉が豊付をまわって高台内側にまで見られる。16世紀以降のものである。46、胎、釉とも青灰色を帯びている。47は梅花形の小形の平合子蓋。48は菊花形の小壺の蓋。ともに粗雑な型造りで釉色も灰色が強い。

**黒釉茶碗** 49は小形の建盏タイプの茶碗である。土は破面灰色、露胎は灰褐色で、細かい黒点は見えるが粗くはない。釉はやや透明感のある褐色で、天目釉というよりは飴釉というべきであろうか。釉尻に釉が厚くたまることはないが、口縁部では薄くなっている。50は同じく建盏タイプの茶碗の底である。胎は49とよく似るが、釉は黒耀石のように黒く、見込に厚く溜っている。表面に細かい文様の痕跡が残っている。伝世品に建盏タイプの茶碗に金彩で「寿山福海」の文字をあらわしたもののが知られているが、それと同種のものと思われる。文様は痕跡だけで金彩であったか銀彩であったかは知ることができない。同様の細かい文様が認められる破片は、これまで他にも數片出土しているが、文字の部分はまだ出土していない。

**陶器** 51、型造りの印花文ある平皿。胎は極く細かい灰ベージュの土で、器内にはオリーブ色の青磁系の釉がかかるが、大部分ではよく溶けず不透明である。底部の成形は雑で凹凸しており、布目が残っている。底に茶色に火跡が残っている。磁社窯系陶器である。52は行平。53は丈の低い小口瓶で、肩に青釉のかかる磁社窯斗温山窯の产品。ともにA群の陶器である。54は非常にきめの細かい土で、チョコレート色を呈す。口縁を除き黒褐色の釉が薄くかかる。国産かも知れない。55、土はよく焼きしまった煉瓦色で、白い砂粒がべらっと混じっている。黄

褐色の不透明な釉が内外に施されるが、口唇部で削り落として重ね焼をしている。56、暗灰色の上に白い砂が多量に混じる粗い土である。器内には青緑色を帯び、オパール化した空色ガラスが厚くかかっている。C群の盤口瓶で、ガラスのるっぽとして用いられたと考えられる。底部は外から熱に当たって色が変化している。57、褐色の土に白い砂粒がたくさん混じっている無釉の鉢である。筋目はたててないが擂鉢として用いられたと見え、内底部が滑らかに擦り減っている。58は口縁の内折した大型容器である。中心暗灰色、外側赤褐色に焼けた土で、中に大量の白砂をかむ。外に斜めの、内に青海波のたたき目がある。釉は茶褐色不透明である。55～58はC群の陶器。

**国産遺物** 60は黄灰色の粘性の強い不透明釉をかけた碗で、施釉時の指頭把持痕跡が残る。產地、時期不明。61は上師器灯明皿である。内底に筒状の部品を貼りつける。煤が付着している。糸切底で江戸時代のものである。62は瓦質の擂鉢である。内面は磨耗がはげしく櫛目が痕跡程度に残る。外体部は指頭圧痕が残り、一部ハケ目調整痕がある。外底には板状圧痕が残る。14世紀頃のものである。63は体部のみを回転ナデ調整し、円底をヘラナデ、外底を板状工具で手持ち削りを行なう上師器杯である。8世紀前半代のものであろう。64～68は須恵器である。65は蓋で天井部のみ回転ヘラ削りで他は回転ナデ調整を行なう。受け部は下方にのびる。66～68は高台付の杯である。64は外底に「メ」形のヘラ記号をもつもので焼成が甘い。66はやや高い高台をもつ。67は焼成良好で堅緻であるが、器形にゆがみがみられる。68は幅広の逆台形の高付をつけるもので、焼きが甘く軟質である。これらの須恵器はいずれもほぼ8世紀代におさまるものであろう。70は滑石製の小さな器で、丁寧な削りを行ない表面は滑らかである。火熱を受けた痕跡もなく、何の用途に充てられたものであろうか。71は硬質砂岩と思われる棒状の礫で、一端に敲打痕と擦痕が残り、側面にも擦痕が見られる。工具として用いられたものであろうが、時期不明である。69は陶器小壺である。無釉の焼き締めで、備前焼風であるが、胎は精良で細かく、あるいは中国製品かもしれない。

#### 4. F区の調査

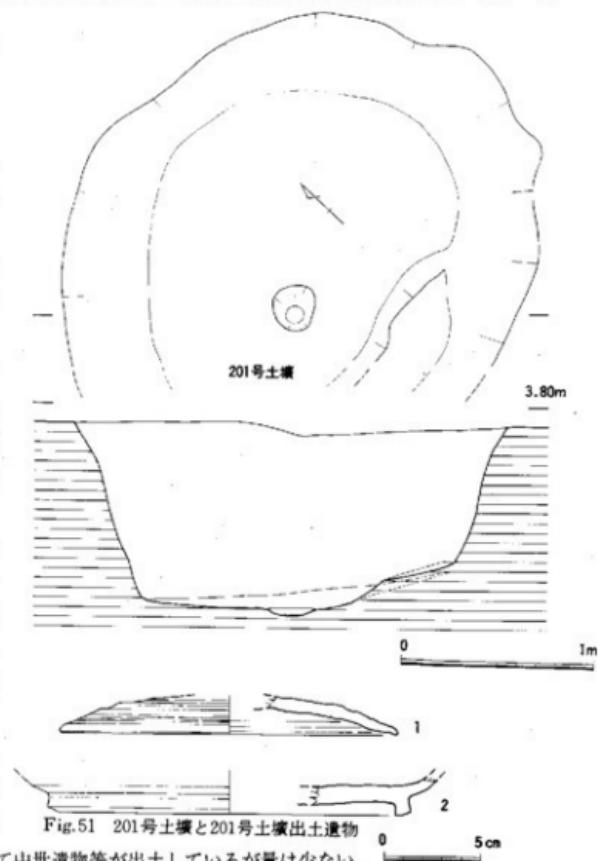
F区は7月10日より表土掘削を開始し、同13日より発掘作業を行なった。暑氣極まる季節であったが、終了は8月11日ではば1箇月を要した。F区の対象面積は360m<sup>2</sup>であったが、歩道確保の必要上、a区の一部について調査不能であった。包含層は薄く、地山砂層の検出面も標高3.5m前後で周辺よりやや高くなっているが、遺構は上部と下部に分けて検出しており、土壌類には200番台を溝には20番台を付している。以下検出した遺構、遺物について述べる。

##### 1) 遺構と遺構出土の遺物

**201号土壌** (Fig. 51) F-I-a区上部検出遺構である。土留壁柱に切られるが、径2.2m前後のほぼ円形の掘方と思われる。1m近い深さをもつ。古代から中世にかけての遺物が混在する。13世紀前半代の廃棄物処理土壌か。図示した遺物は、1が須恵器蓋、2が同じく大型の高台付杯で、体部最下位から底部は回転ヘラ削調整を行う。8世紀代の遺物である。口縁内折の大甕もある。

**202号土壌** F-I-b区上部検出の近世廃棄物処理用土壌

で、近世瓦18点に混って中世遺物等が出土しているが量は少ない。



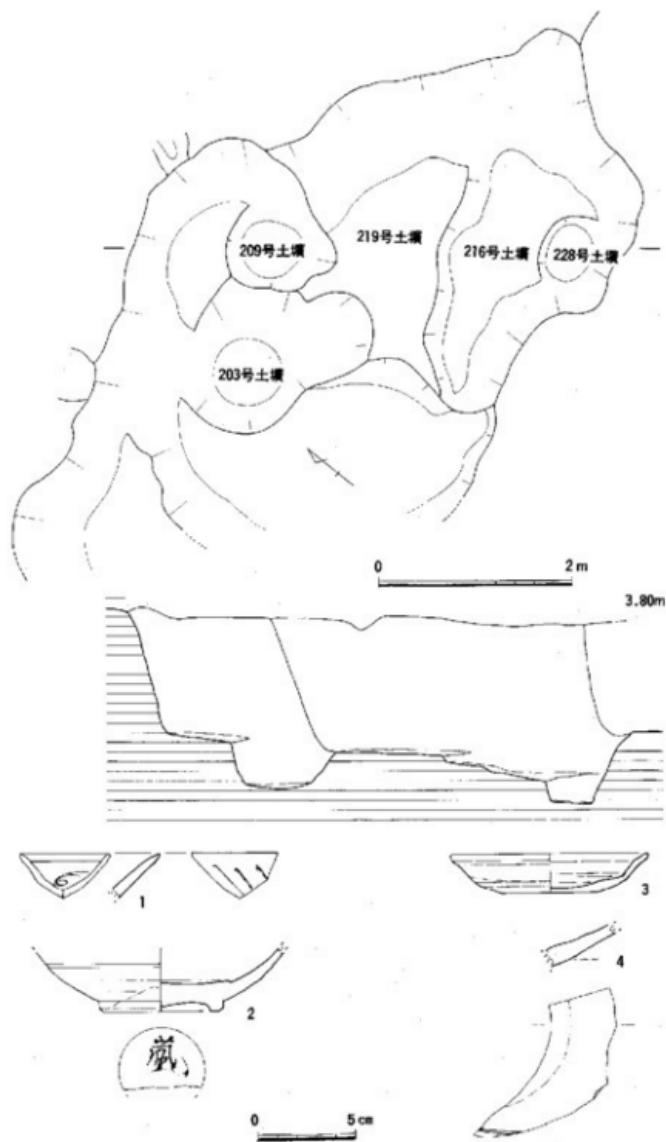


Fig. 52 203号, 209号, 216号, 219号, 228号土壤と203号土壤出土遺物(1)

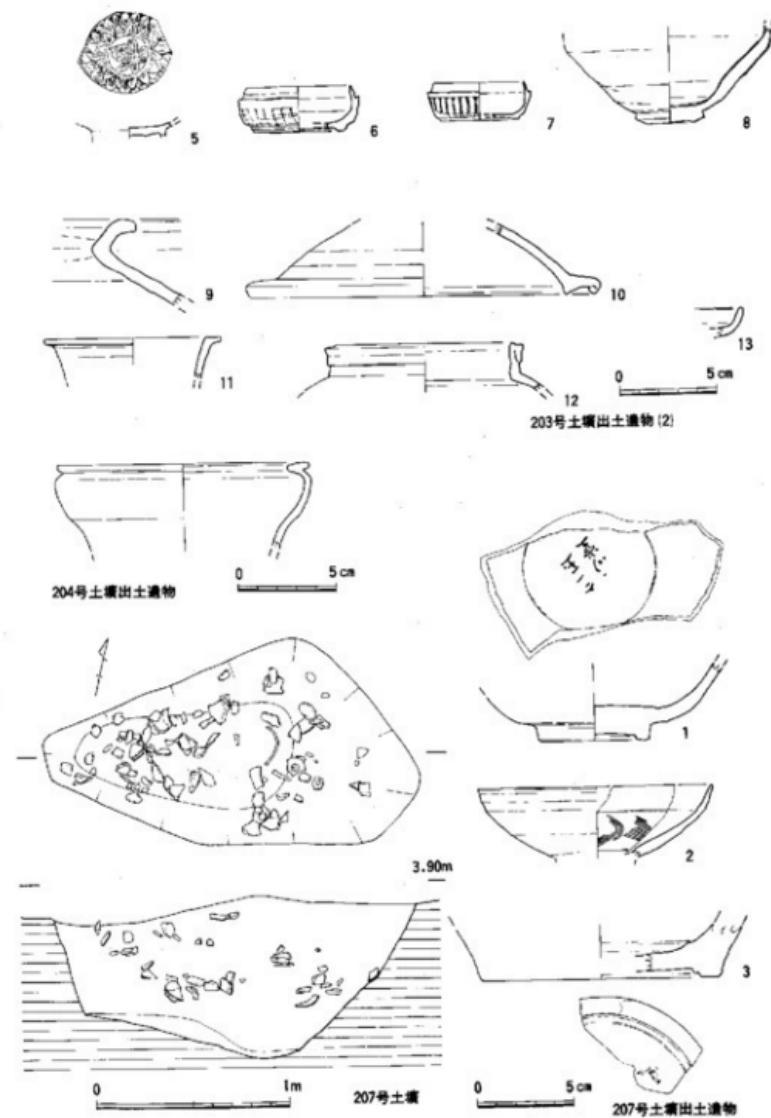


Fig.53 207号土壤と203号(2), 204号, 207号土壤出土遺物

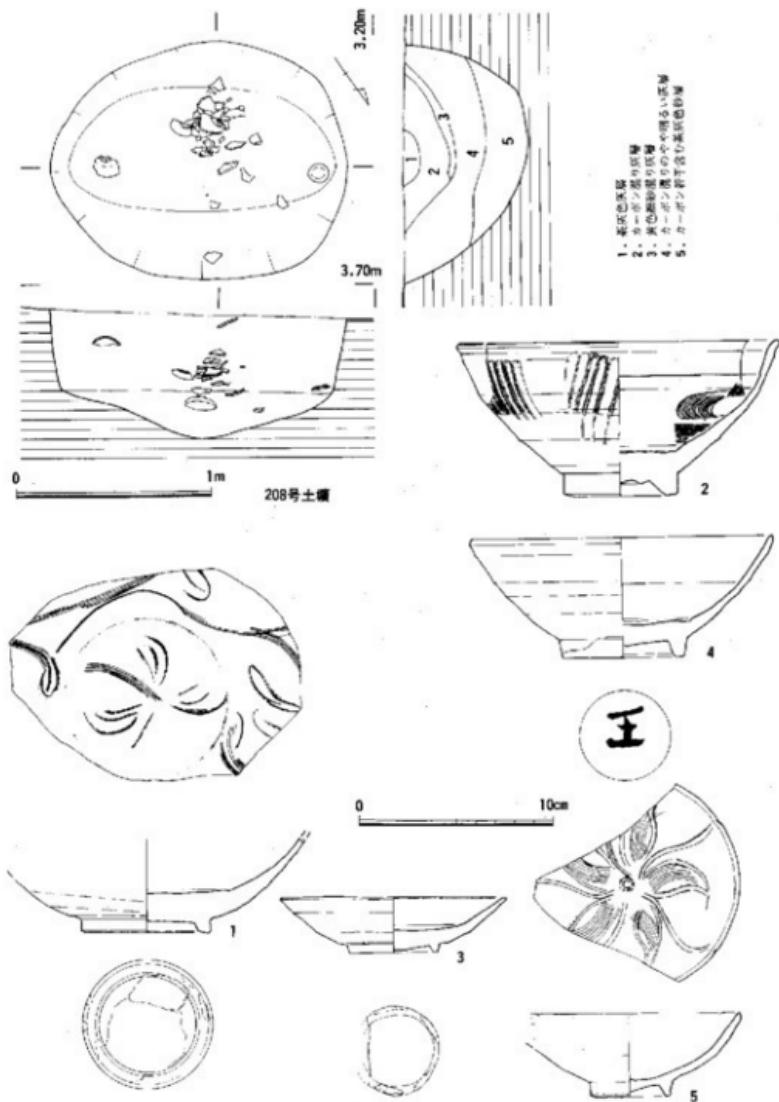


Fig.54 208号土壙と208号土壙出土遺物(1)

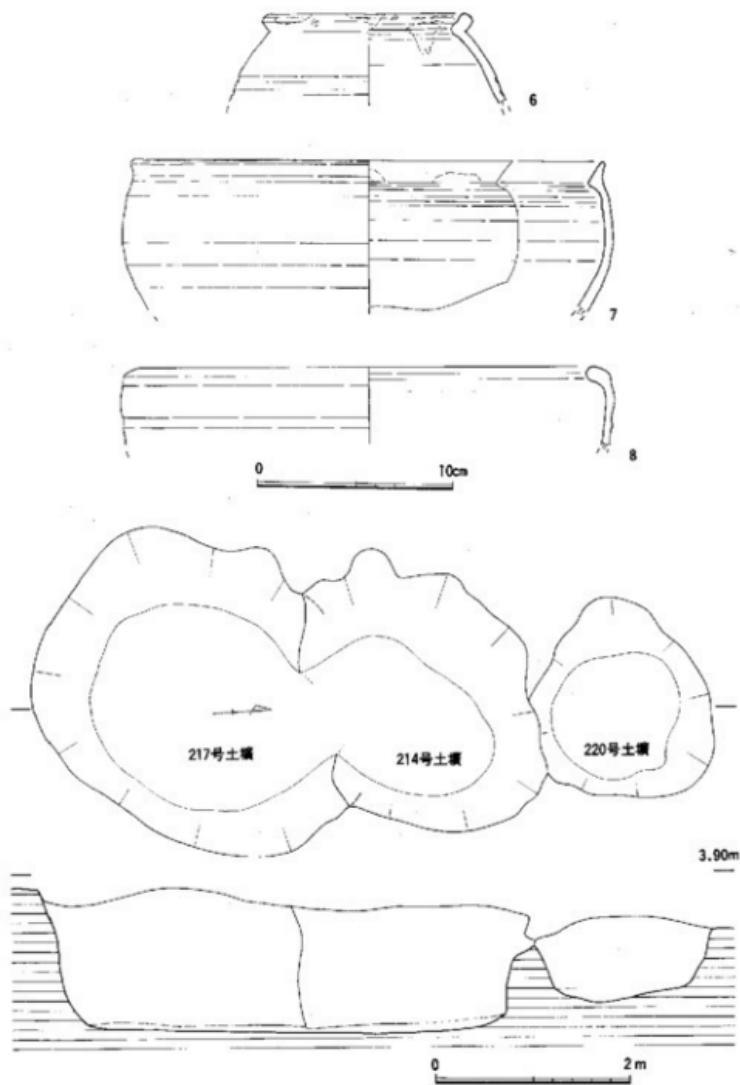


Fig.55 214号, 217号, 220号土壤と208号土壤出土遺物(2)

**203号土壤** (Fig. 52・53 PL. 33・47) F-I-c 区上部検出の近世井戸掘方である。近世陶磁19点瓦61点に混じって多量の中世遺物が出土している。白磁碗、皿類、223点、龍泉窯系青磁105点、同安窯系青磁90点、中国製陶器439点のほか、土師器壺類50点、須恵器類45点などがある。土師皿類も296点見られる。中世の廃棄物処理土壌を新たに掘り抜いたためであろう。図示した遺物は、1が龍泉窯系碗0点、2が外底に「藏口」かと読める墨書をもつ龍泉窯系青磁碗、3は同安窯系青磁平皿、4は高麗青磁であろうか、外体部に白色象嵌がわずかに見える。5は青白磁皿であるが釉は青味をもたない。6、7は菊介印花の平型合子身である。8は上手の天目碗。光沢のある釉が厚くかけられている。9は陶器A群壺、10は全面無釉の磁胎の蓋物で、国産の素地であろうか。11は陶器B群の壺で、越磁風の釉がかかる。12は陶器準A群の小型壺である。13はA群の綠釉陶器で、皿または盤口壺の口縁か。外面は銀化する。

**204号土壤** (Fig. 53 PL. 33) F-I-c 検出の近世井戸である。遺物は少ない。図示した遺物は陶器B群の鉢で口縁平坦面に目跡が残る。

**205号土壤** F-I-b 区上部検出の不定形の土壤である。0.5m程の深さであるが、遺物はほとんど含まれず、時期、性格ともに不明。

**206号土壤** F-I-b 区上部検出遺構である。1.0m×0.8mの長円形で深さ0.3m程。出土遺物はほとんどなく、時期、性格ともに明確でない。

**207号土壤** (Fig. 53 PL. 33) F-III-c 区上部検出遺構である。近世の廃棄物処理土壤で、近世陶磁や瓦に混って多くの中世遺物が出土している。図示した遺物は、1が見込に「金玉満堂」の印を押す龍泉窯青磁碗、2が同安窯系青磁小碗、3が陶器B群の壺で、外底露胎部に「十」と思われる墨書きが見られる。このほか磁州窯または遼あたりの產かと思われる釉下鉄彩の綠釉陶器壺破片がある。近世の荒神祀りに使われたかと思われる塑像も見られる。

**208号土壤** (Fig. 54・55 PL. 33・34・47) F-III-c 区上部検出遺構である。1.5m×1.2mの長円形で深さ0.62mである。内部には灰や炭混じりの砂が層をなして堆積している。遺物はこれらの層に含まれている。図示した遺物は、1が龍泉窯の大型青磁碗で、外底に焼台の一部が付着している。2は外面に幅広の櫛描文をもち、内面体部に細かな櫛描曲線文をもつ青磁碗で、青白磁のような鮮かな釉をかける。通例の同安窯系青磁とは趣が異なる。3は高台付青磁皿で無文、高台脇まで茶緑色のガラス質半透明がかかる。あまり例を見ない。4は白磁碗Ⅱ類で、高台内に「土」の名前が墨書きされている。5は口縁を輪花にし、内面に美しい花文を刻む青白磁であるが、胎は粗く厚手で、釉もくすんだ発色をしている。6は陶器B群四耳壺、7は同じく鉢。8はc群の鉢で口縁内折、オパール現象を見せる茶褐釉がかけられている。なお床面上に土師系切底小皿の完形品が見られた。11径9.0cm、器高1.2cmを計る。13世紀前半代の廃棄物処理土壤であろう。

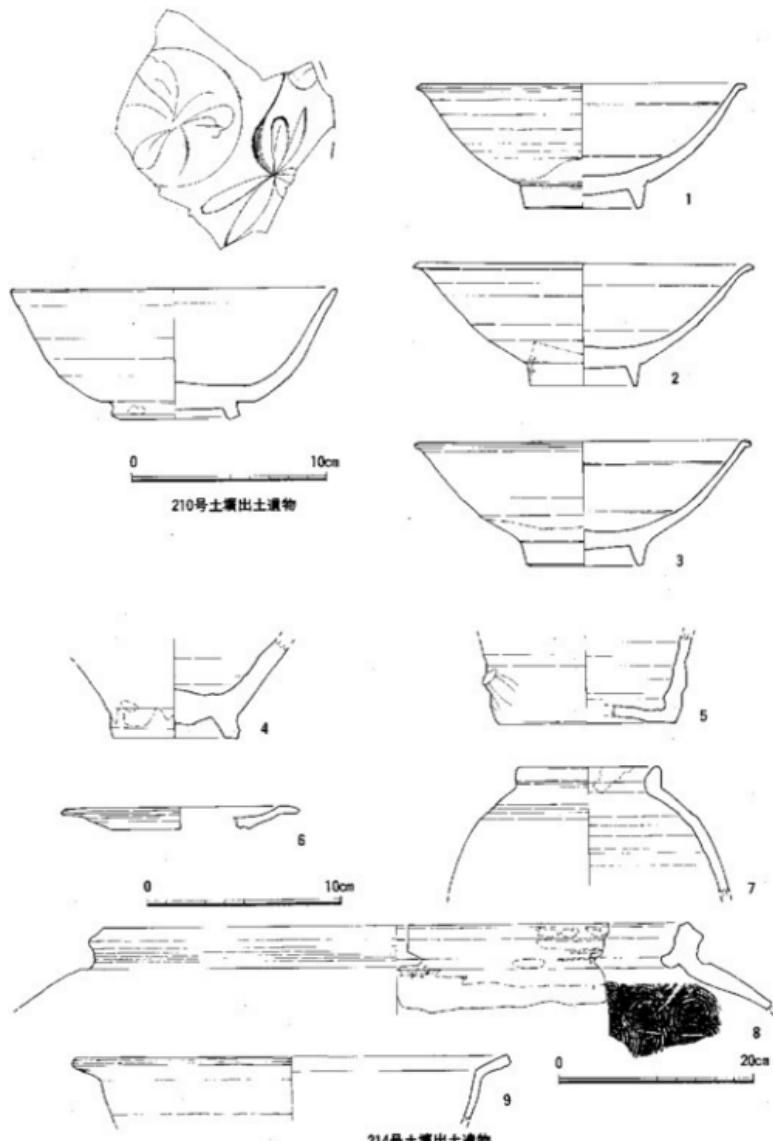


Fig.56 210号、214号土壤出土遺物

**209号土壤** (Fig. 52) F-I-c 区下部検出遺構である。203号上層（井戸）に切られる。近世井戸掘方である。遺物は少量で、近世焼塙壺のほか、8世紀代の土師器、須恵器がある。

**210号土壤** (Fig. 56・60) F-I-e 区上部検出遺構である。218号土壤を切る。遺物は少量で土師皿も破片2点しかなく時期、性格とも明確にしえない。図示した遺物は龍泉窯青磁碗で、貫入の目立つ青緑色の透明釉がかかる。

**211号土壤** F-III-c 区上部検出遺構である。土留壁柱に大半が切られている。出土遺物では土師皿類のみや多いが、計測しうるものは糸切底小皿2点で、口径9cmと10cm、器高1.2cmである。他の遺物は微量である。13世紀代の掘方か。

**212号土壤** F-III-d 区上部検出遺構である。径0.8m程の円形で深さ0.6mの掘方である。土師皿片がやや多いが計測しうるものはヘラ切底小皿1点で口径9cm、器高1.1cmである。この他白磁11点、陶器5点、須恵器9点などがある。12世紀代の廃棄物処理土壌か。

**213号土壤** F-III-d 区上部検出の近代井戸掘方で、白砂で埋め戻しており遺物はない。

**214号土壤** (Fig. 55・56 PL. 34) F-II-e 区上部検出の井戸遺構で、水溜部に方形の板組の痕跡が確認できた。博多での方形井戸例は少ない。217号土壤を切る。遺物は多い。図示した遺物は、1~3いずれも白磁碗皿類である。1は白磁蓋で高台と体部の明確な区分は見られない。5は陶器A群小口瓶である。6は陶器C群の灯明台受け皿部と思われるものである。7は陶器B群の瓶で口縁部内側に目跡が残る。8は陶器C群に属するY字口縁の大型甕で、口径60cmを計る。胎は砂粒を多く含み粗く、内外に緑褐色釉がまばらにかかる。内面には同心円の叩き目が残る。接合はしないが同一個体と思われる破片も40点程ある。9は内外をナデ調整する上師質の火鉢で、焼成は堅い。土師皿は少なく計測しうるものは2点で、いずれも糸切底小皿で口径8cm、9cm、器高1.3cm、1.0cmである。13世紀前半の廃棄物処理土壌であろう。

**215号土壤** (Fig. 57 PL. 34) F-I-d 区上部検出遺構で216号土壤を切る。径3.0m、深さ1.6mの大きな円形掘方である。近世廃棄物処理土壤で、近世陶磁片に混り中世遺物が見られる。1は灰色釉のかかる白磁碗で、見込に3箇所の目跡が残り疊付には目砂が付着している。2は陶器C群の水注で二個の綫耳がつく。不透明なあざき色の釉がかかる。

**216号土壤** (Fig. 52・57 PL. 34) F-I-d 区上部検出である。215号土壤に切られ、219号、229号土壤を切る。14世紀代の井戸掘方で底面の片側に水溜と思われる径0.6m程の穴が穿たれている。図示した遺物は、1が青白磁小壺蓋で受け部を除き淡青色透明釉がかかる。2は見込に劃花文をもち、外底をわずかに抉って高台を造る青白磁碗である。3は内底に片切彫蓮華文をもつ龍泉窯青磁半皿である。

**217号土壤** (Fig. 55・58・59 PL. 34) F-II-e 区下部検出遺構。214号上層（井戸）に切られる。径3.4mの円形掘方で13世紀前半の井戸と思われる。遺物量が多い。図示した遺

物は1が龍泉窯青磁碗I-5類である。2は同じくII類碗であるが、他の遺物より極端に新しく、混入したものであろう。3は同安窯系と龍泉窯との折衷タイプの青磁碗である。4は同安窯系青磁碗で青白磁のような淡青色の釉がかかる。5は越磁またはB群陶器かと思われる蓋か。6はわずかに胎色がかった透明釉をかける青白磁合子蓋で細かな貫入がある。7は内面を構造波状文で埋める青白磁碗である。8は白磁IV類碗、9は白磁高台付皿I-2類である。10は陶器A群の蓋で無釉、11は陶器A群の広口鉢か。胎は白く磁質、透明黄釉がかかる。12は陶器A群の軍持頭部で外面に黒釉がかけられる。13はA群盤でページュの不透明釉がかかる。他に綠釉盤もある。14はB群の蓋または灯明台の受け皿である。15は同皿、16も同群で灯明台受皿部であり、18の本体に接続する形となる。17はB群の広口壺、19はC群擂鉢で、口縁部のみあずき色釉が見られる。

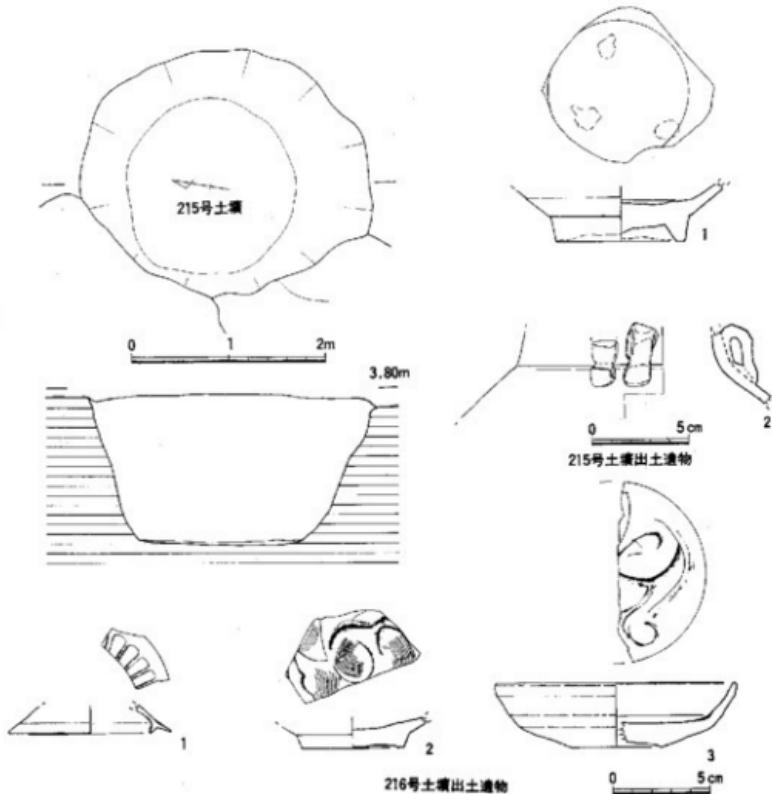


Fig. 57 215号土壌と215号、216号土壌出土遺物

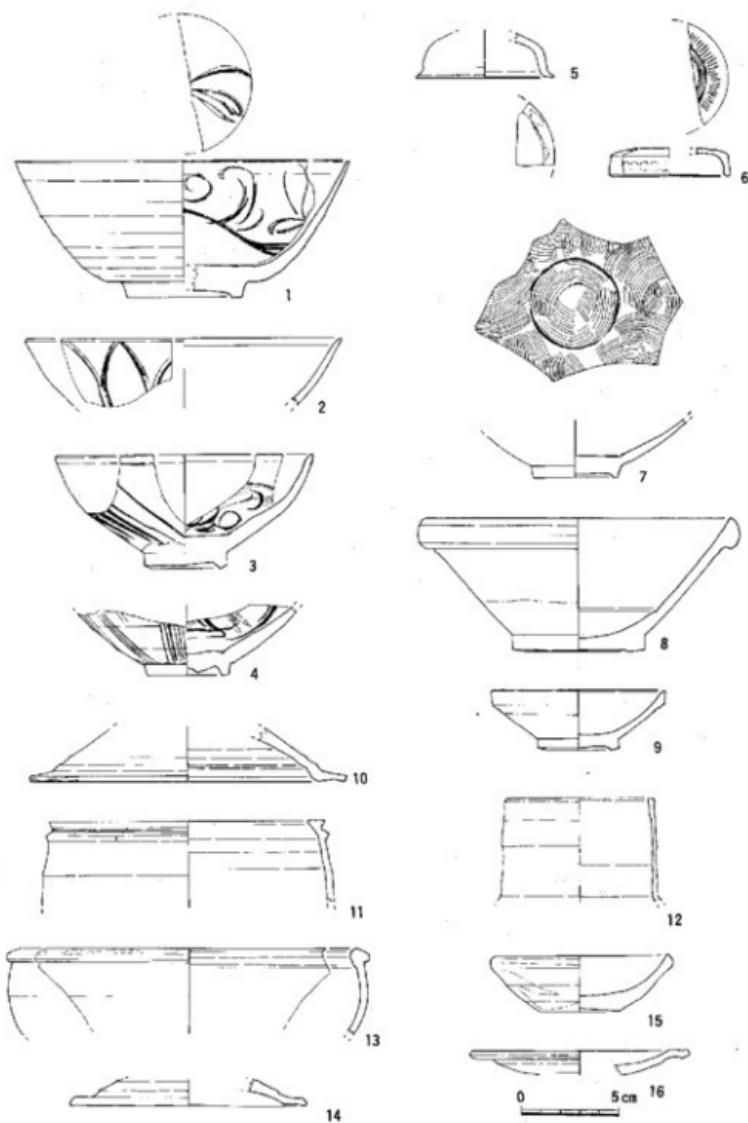


Fig.58 217号土墳出土遺物(1)

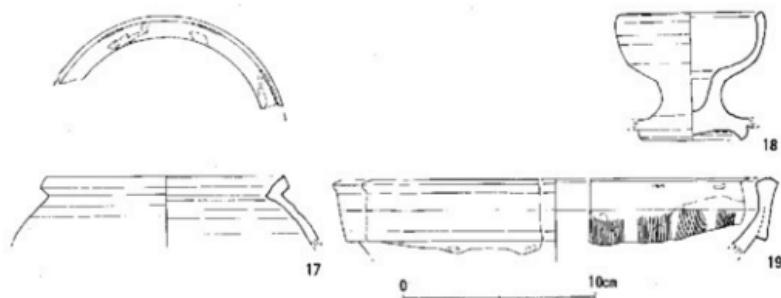
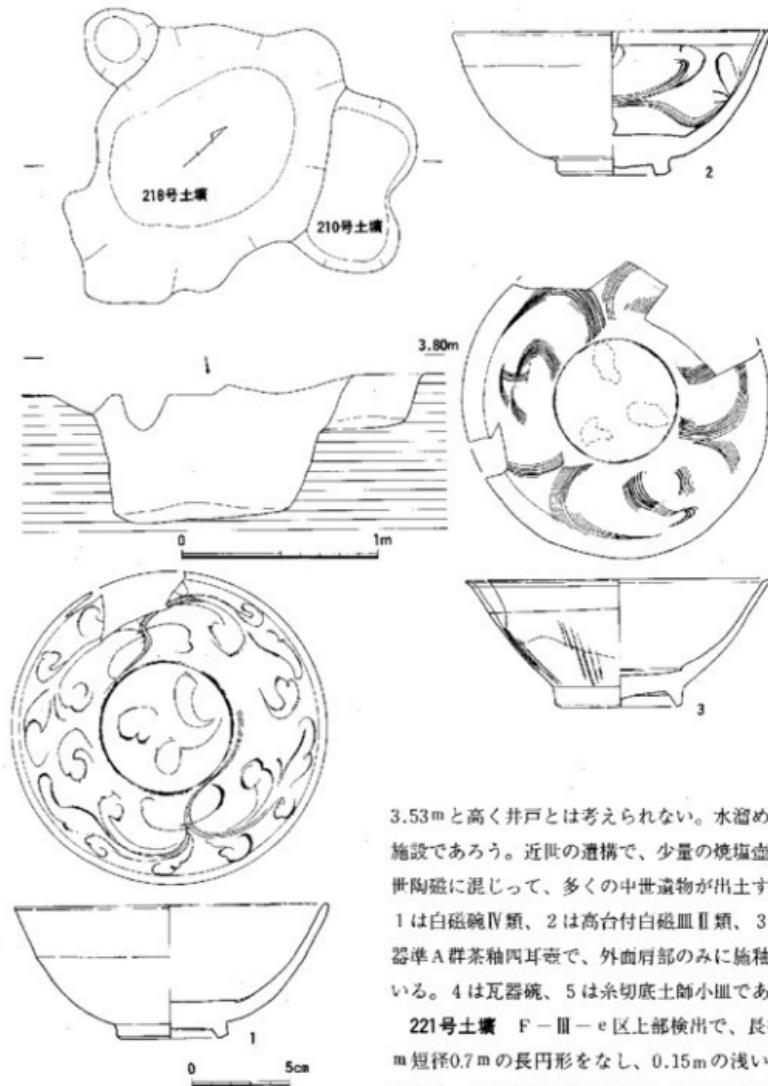


Fig. 59 217号土壤出土遺物(2)

**218号土壤** (Fig. 60 PL. 34・35) F-I-e区上部検出遺構で、210号土壤に切られる。長軸1.8m、幅1.2m程の菱形の掘方で、深さ0.7mを計る。図示した遺物は、1が龍泉窯青磁碗I-5類で内面に片切彫刻花文をもつ。2も同じく龍泉窯青磁碗I-5類で内体部のみに割花文をもつ。3は未分類の白磁碗で、内面体部にラマ式蓮弁様の構描文をもち、外面部に6本1組の粗い放射状構描文をもつ。釉はくすんだ緑灰色で体外半釉である。見込に三箇所の重ね焼の痕跡が残る。図示していないが、PL. 34の4は、内外面に構描文をもち、口縁を外方に捻り出す青磁碗で、濃モスグリーン半透明釉がかかるものである。内面に多量の異物が付着し、極端な下手物で窯系不明。上師皿類で計測可能なものは4点あり、いずれも糸切底小皿で口径9.0cm、器高1.0-1.3cmである。13世紀前半代の廃棄物処理土壤であろう。

**219号土壤** (Fig. 52・61 PL. 35) F-I-d区下部検出遺構である。203号、209号、216号土壤によって大半を切られ掘方全体形は不明。出土遺物は多い。1は龍泉窯青磁小壺で内面と外底無釉、外体部に斜格子状の蓮弁文を刻む。2は同平皿で見込に片切彫魚文をもつ。3も同平皿で見込に片切彫蓮華文をもつ。4は同安窯系青磁碗で外面に放射状構描文、内面に片切彫と構描文をもつ。5は同平皿。6は白磁碗IV類であるが、見込に釉削りがあり、外底の抉りがやや深い。7は白磁皿で内面体部上半が肥厚する。8は白磁平皿VI-1類で見込に片切彫花文をもつ。9も同類で見込に片切彫花文と構描列点文をもつ。10は白磁平皿V類で外底露胎部に墨書きをもつが判読できない。11は青白磁平皿。薄胎で見込に構描文がある。12は陶器準A群の小形壺。13は7世紀代の須恵器鉢である。14は底部に穿孔のある高台付土師器小皿。15は土師糸切底杯で口径13.5cm、器高2.8cm、この他計測可能な上師糸切小皿2点があり、それぞれ口径8.5cm、9.5cm、器高0.8cm、1.5cmである。13世紀代の井戸または廃棄物処理土壤である。

**220号土壤** (Fig. 62・63 PL. 35) F-II-d区上部検出遺構である。径1.6m程の円形の掘方中央に削り貫きの桶状の木製品が据え置かれ、周間に杭が打ち込まれている。底面標高



3.53mと高く井戸とは考えられない。水溜め等の施設であろう。近世の遺構で、少量の焼塙壺、近世陶磁に混じって、多くの中世遺物が出土する。

1は白磁碗IV類、2は高台付白磁盤II類、3は陶器準A群茶軸四耳壺で、外側肩部のみに施釉している。4は瓦器碗、5は糸切底土師小皿である。

221号土壤 F-III-e区上部検出で、長径1.0m 短径0.7mの長円形をなし、0.15mの浅い掘方である。ほぼ8世紀代の土師器、須恵器破片のみ

Fig.60 210号, 218号土壤と218号土壤出土遺物 が少量出土している。当該期の遺構であろう。性

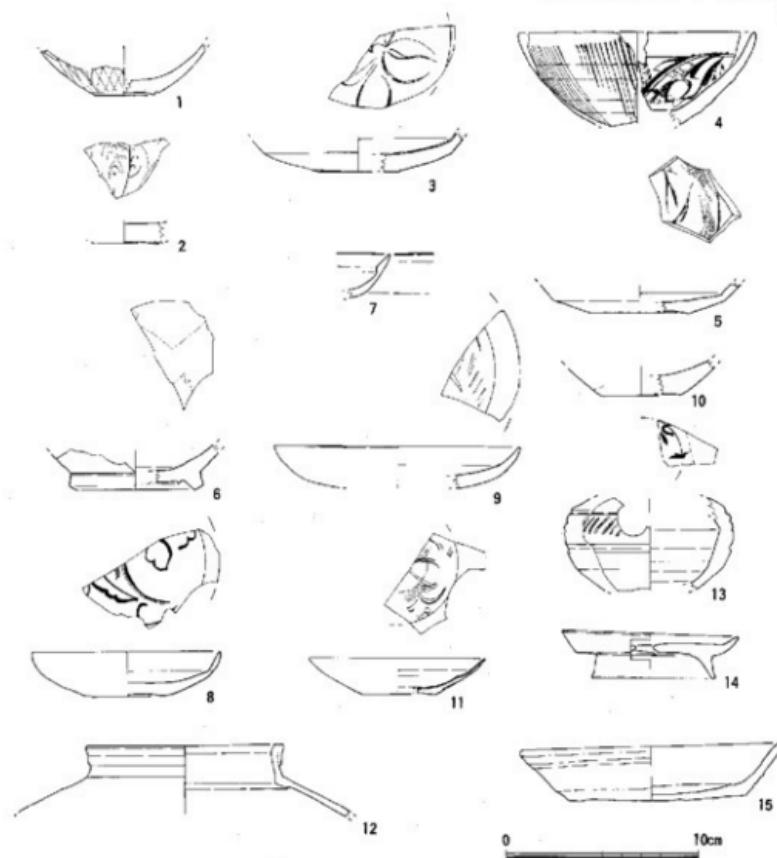


Fig. 61 219号上塙出土遺物

格不明。

**222号土壤 F-III-e区上部検出の小土壤で、糸切底土師杯小片 6点のほか、白磁片 6点などが出土しているにすぎない。中世の遺構であるが、詳細な時期、性格は不明。**

**223号土壤 F-III-e区上部検出の近代瓦組井戸である。10枚の井戸瓦（博）を組合せ、径0.7mの井戸側をなす。廃棄後ゴミ処理用に使われており、近代の遺物が多く見られる。中世の白磁水注破片も1点みられた。**

**224号土壤 (Fig. 63 PL. 36) F-I-d・e区下部検出の不明確な掘方である。近世廃棄物処理土壤である215号土壤に切られる。図示した遺物は、1が同安窯系青磁碗で内外面**

に櫛描文をもつ。2は白磁碗でII-3類に属す。3は同Ⅱ類。4は青白磁小壺で、全体に青白釉をかけ、後に口縁端の釉を削りとる。型造りで外体部に浮花文がある。5は青白磁高足杯である。淡青白色の透明釉がかかる。近世同產品の可能性もある。この他、薄胎で体部が朝顔形に開く青白磁碗もある。土師皿類は小破片が10数点見られるのみで計測できない。時期、性格ともに明確にしがたい。

**225号土壤** (Fig. 63) F-I-d区下部検出遺構である。229号土壤を切る。土留壁柱に切られ全体形は不明である。1.0mの深さをもつ。遺物は少量で、土師皿類はわずか2片のみ。図示した遺物は、1が白磁Ⅱ類碗、2が青白磁合子蓋である。このほか外面に片切彫割花文をもち、縁がかった灰色不透明釉をかける越州窯系青磁の壺もある。12~13世紀の時期と思われるが性格とともに詳細は不明。

**226号土壤** F-I-d区下部検出の遺構である。土留壁柱に切られ全体形は不明。深さ0.4m

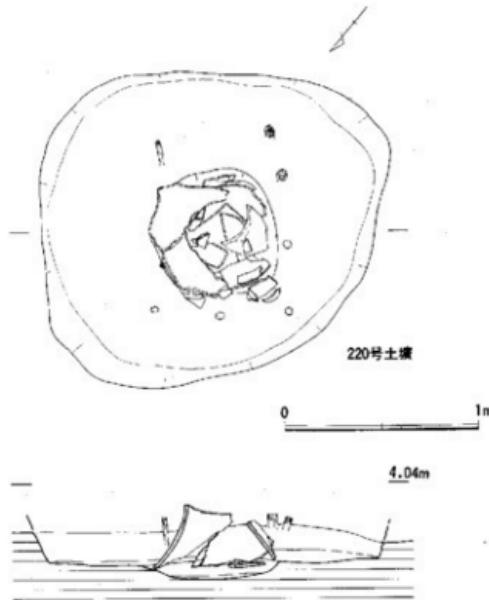


Fig.62 220号土壤

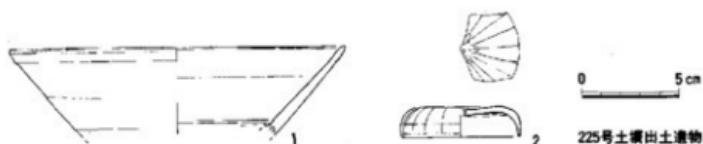
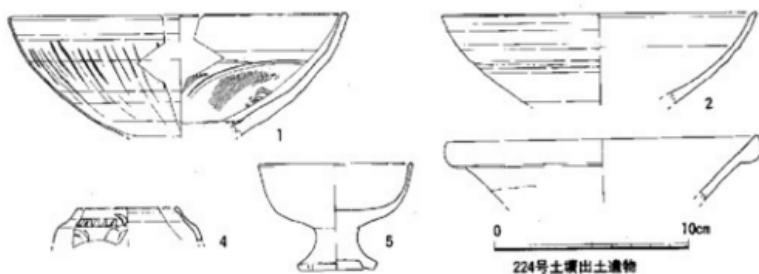
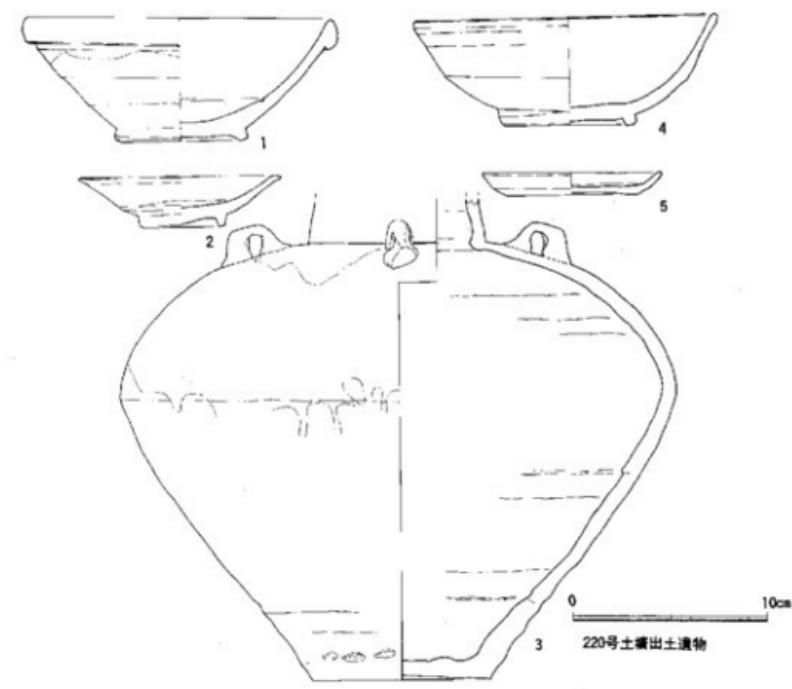


Fig.63 220号、224号、225号土壌出土遺物

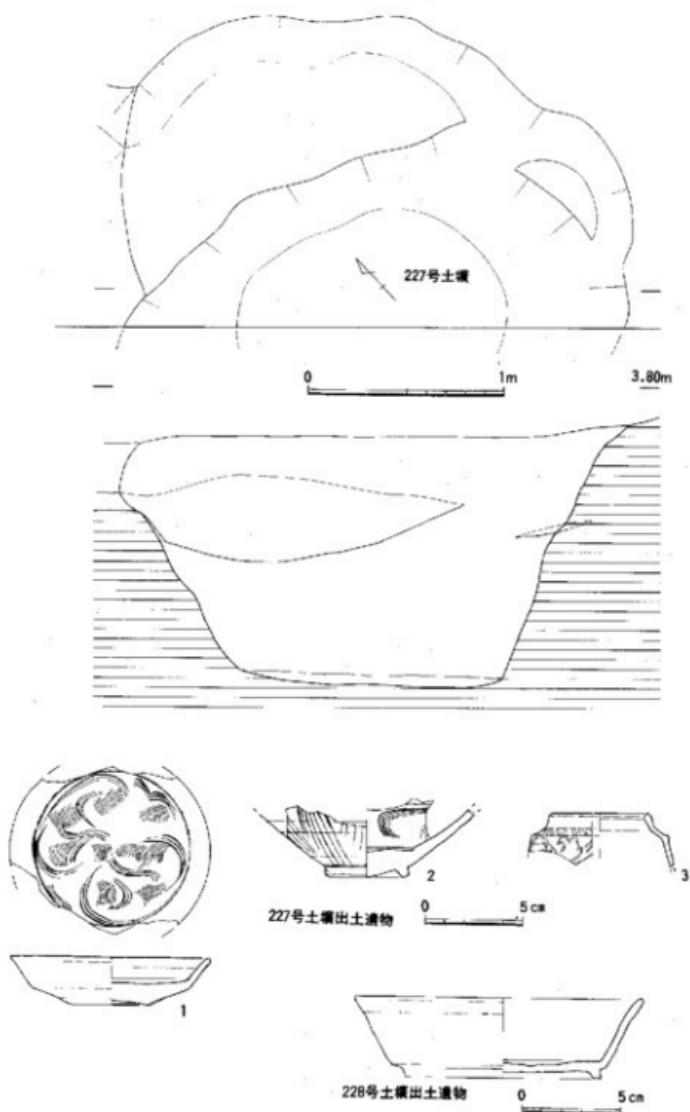


Fig.64 227号土壙と227号、228号土壙出土遺物

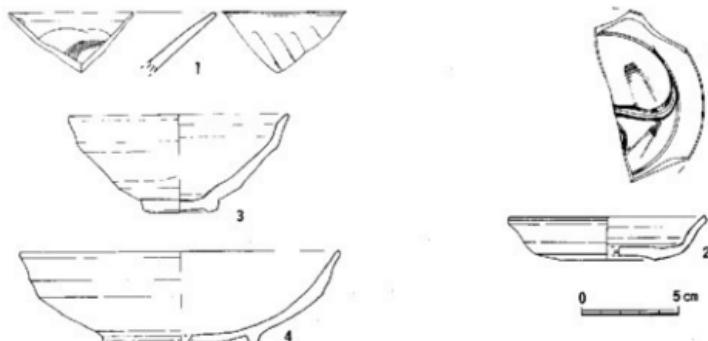


Fig. 65 229号土壤出土遺物

を計る。遺物は殆んど出土しておらず、時期、性格ともに不明。

**227号土壤** (Fig. 64 PL. 36) F-I-e区下部検出遺構である。土留壁柱によって切られ全体形は不明。1.5mの深さをもつ大きな掘方である。遺物は少ない。1は龍泉窯青磁皿1-1類、2は内外面に柳描文をもつ同安窯系青磁碗であり高台脇まで施釉されている。3は青白磁小壺で外面に浮花文があり、口唇部の釉を削りとっている。土師皿類は杯1片1点のみである。この他、奈良時代の焼塙壺、陶器A群の壺物や緑釉壺等も見られる。およそ12~13世紀代と考えられる。井戸であろうか。

**228号土壤** (Fig. 64 PL. 36) F-I-d区下部検出の井戸遺構である。216号、225号土壤に切られ掘方は明確でないが、径0.7m程の木桶組の痕跡がある。図示した遺物は須恵器高台付杯である。この他無鉛の黄釉鉄絵盤と土師皿、白磁の小片が各1点見られるのみである。ほぼ13世紀代と思われる。

**229号土壤** (Fig. 65) F-I-d区下部検出遺構で井戸である。216号、225号土壤等に切られており全体形は不明。径0.65mの木桶組の井側痕跡がある。図示した遺物は、1が外面に放射状の片切影をもち、内面を片切影と柳描文で飾る龍泉窯青磁碗1類である。2は同安窯系青磁皿、3は天目碗、4は瓦器碗である。土師皿類は16点程出土しているが、いずれも小片で計測しえない。このほか陶器類が16点出土している。13世紀頃と考えられる。

**230号土壤** F-I-e区下部検出遺構で、径1.2mのほぼ円形で20cm程の深さをもつ。出土遺物は少なく、土師皿片11点、白磁片3点、青磁片1点、陶器片5点程度である。時期、性格不明。

**231号土壤** (Fig. 66・67 PL. 36・47) F-III-b区下部検出の長軸4.7m、幅2.8mの大

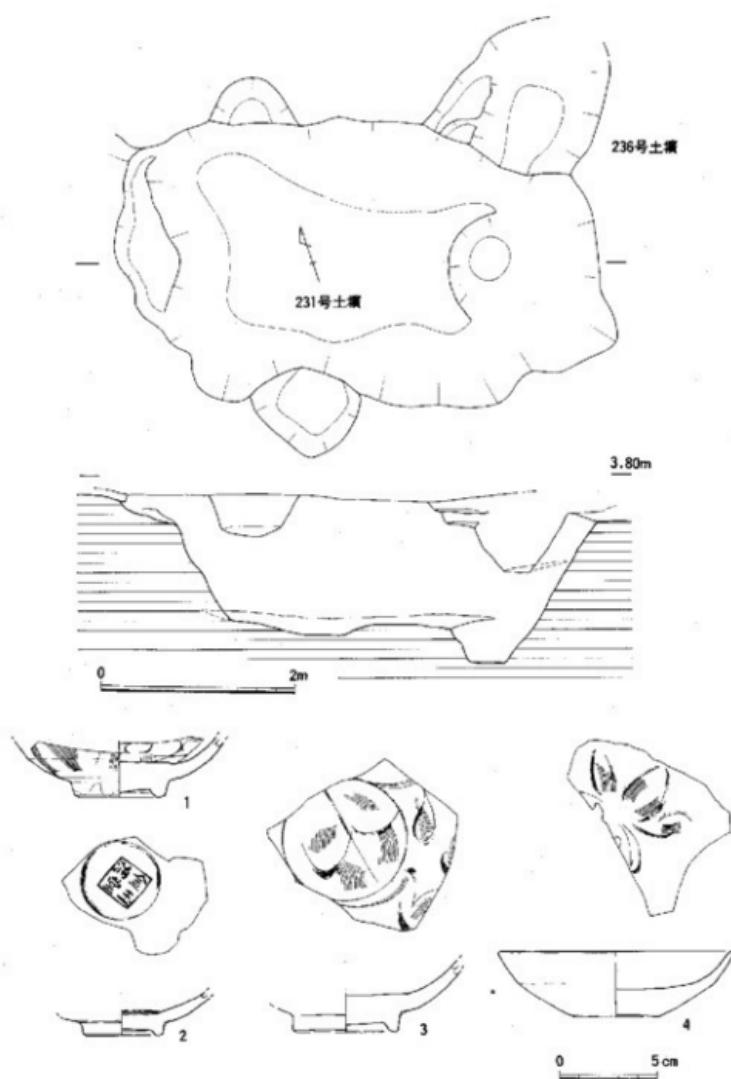


Fig.66 231号,236号土塚と231号土塚出土遺物(1)

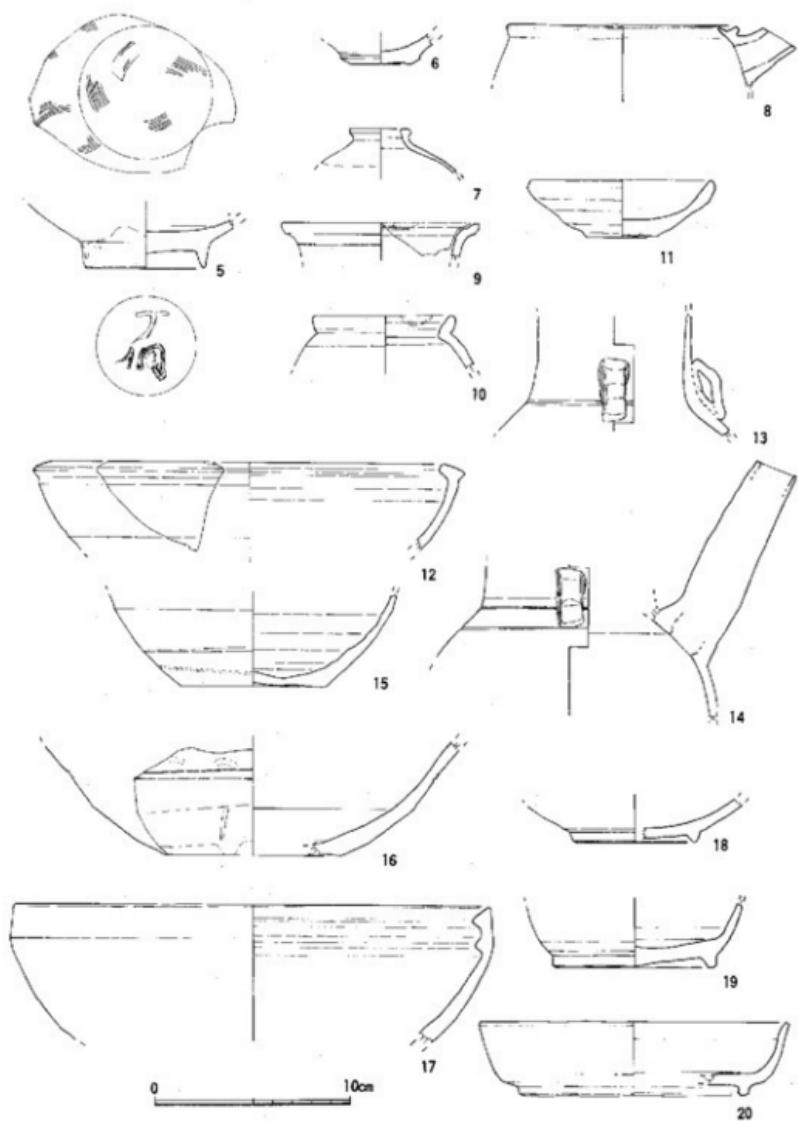


Fig.67 231号土壤出土遺物(2)

きな掘方で、一端に水溜めの小土壌を穿っている近世井戸掘方である。236号土壌を切る。多量の遺物が混在する。1～4は龍泉窯青磁で、1は内外面に櫛描文をもつ碗、2は見込に「金玉満堂」のスタンプをもつ碗、3は内面に片切形と櫛描文をもつ碗、4は見込に片切形と櫛描の蓮華文をもつ平皿である。5は内面に櫛描文をもつ白磁碗で、外底に「丁綱」の墨書がある。6は天目碗である。7～17は中国産陶器である。7、8はA群に属し、それぞれ小口瓶、行平である。9～12はB群に属し、9は水注の口縁部で上面に日跡がある。10は長瓶である。11は皿である。12は平鉢である。13～17はC群に属す。13～15は赤褐色の胎をもち小豆色釉を内外にかける水注である。同形のものが少くとも三個体はある。16は鉢で内底と外体部に日跡が残る。17は粗胎の捏鉢である。18は瓦器碗で内外を丁寧にヘラ研磨する。19、20は高台付須恵器杯である。土師皿類も35点出土しているが、計測可能なものは3点しかない。いずれも糸切底で、口径14cm、器高2.8cmの杯、口径9cm、8cm、器高0.9cm、1.1cmの小皿である。近世陶磁も14点含まれている。

**232号土壌** (Fig. 68 PL. 36) F-II-a 区下部検出の近世搅乱土壌で、少量の近世陶磁と多量の中世遺物が出土している。特に陶器が多い。1は内面に櫛描文をもつ白磁碗、2は磁灶窯系陶器でA群に属す綠釉盤である。内面にヘラ描文があり、外底をのぞいて光沢のある半透明綠釉がかかる。

**233号土壌** (Fig. 68) F-III-c 区下部検出遺構で、235号土壌を切る。12世紀半ばの廐棄物処理土壌である。土師皿類で計測しうるものは、それぞれ口径14.5cm、15cm、15cm、器高4.6cm、2.6cm、2.6cmのヘラ切底杯3点と口径16cm、器高2.8cm、2.6cmの糸切底杯2点、同じく口径10cm、9cm、9cm、器高1.3cm、1.1cm、1.1cmの糸切底小皿3点である。その他白磁片10点、陶器片3点などがあり、奈良期土師器、須恵器も混じる。1は白磁皿、2は糸切底土師器杯、3は瓦器碗、4は土師器碗である。

**234号土壌** (Fig. 68) F-III-d 区検出遺構である。中間杭によって一部搅乱を受けている。12世紀半ばの土壌で掘方上面に幼児頭大の礫数個が置かれている。図示した遺物は白磁合子蓋で、外面のみ灰オリーブ透明釉がかけられている。土師皿は糸切底小皿1点のみが計測でき、口径9cm、器高1.3cmである。白磁、陶器は各13点、10点あるが青磁は見られない。

**235号土壌** F-III-c 区下部検出の深さ0.15mの浅い皿状遺構で、233号土壌に切られる。8世紀代の遺構で、土師器壺、焼塙壺、須恵器等が少量出土している。

**236号土壌** (Fig. 66・69 PL. 36) F-III-b 区下部検出遺構である。231号土壌と土留壁柱に切られ全体形不明。遺物は少ない。図示した遺物は、1が白磁碗IV類。2は釉下鉄彩の鉢で、白磁碗VI-4類の器形であるが、釉は濃いオリーブ色、胎は暗灰色で青磁に近い。見込釉を輪状に削り取る。3は陶器A群蓋で無釉、天井部に焼成後穿孔されている。4はA群小口

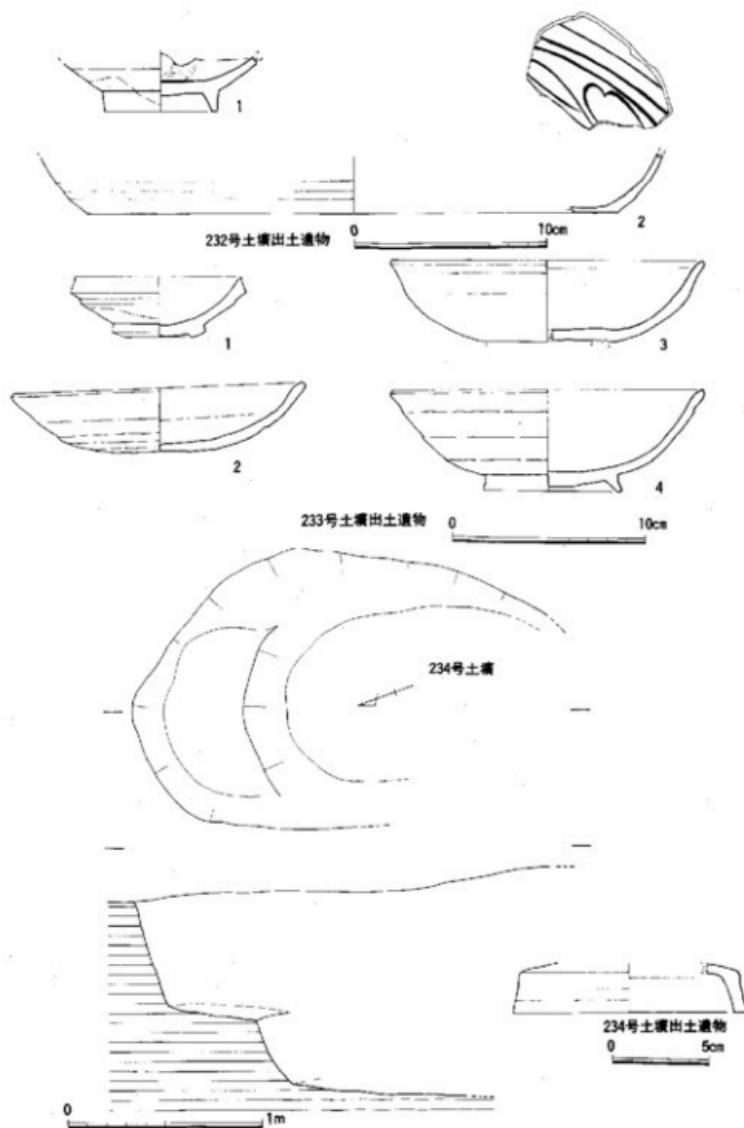


Fig.68 234号土壤と232号、233号、234号土壤出土遺物

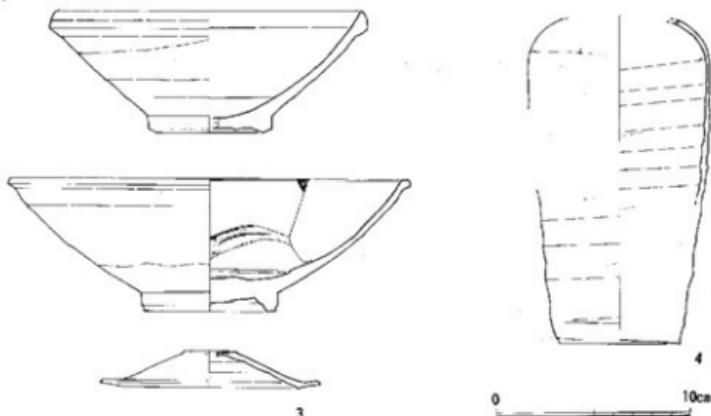


Fig. 69 236号出土遺物

瓶で肩に小豆色の釉がかかる。他に3個体がある。土師皿は微細な破片のみである。12世紀前半代の造構か。性格不明。

**237号土壤** (Fig. 70 PL. 13・14・37・47) F-II-b区下部検出の馬の埋葬施設である。不定形の土壤に頭位を西に向か、脚を折り曲げ横臥させる。首は後に曲げ肩の下に置く。上面には牡蠣殻層があった。体長1.1mの幼駒である。肩と腰の上面に銅錢が1枚づつ置かれていたが、銹がひどく銭種不明。以外の出土遺物は多量であるが、破片であり、副葬品とは考えにくい。埋土中に混入したものであろう。図示した遺物は、1が白磁碗Ⅰ-1類で高台内に「王七口」の墨書がある。2は白磁小碗で見込に茶溜りをもつ。3は白磁碗Ⅱ類であろう。4は内面に描文をもつ青白磁風の皿であるが釉の発色はわずかに黄味を帯びた白である。5は白磁高台付皿Ⅱ類である。6は青白磁合子蓋で外面にのみ施釉されるが、一部鉄漿が付着している。7、8は磁灶窯系陶器の行平で、7は注口、8は把手部分である。別個体である。7の内体部端に茶褐釉が見える。土師皿はいずれも糸切底で、口径15.0cm、器高2.6cmの杯が2点、口径8.5cm、9.0cm、器高1.1cm、1.0cmの小皿2点がある。青磁は含まれていない。12世紀半ば～後半代の造構であろう。

**238号土壤** F-II-b区下部検出造構である。径1.4mのほぼ円形で深さ0.48mの掘方である。遺物は全く見られず、時期、性格ともに不明。

**239号土壤** (Fig. 71・72 PL. 37・47・48) F-II-c区下部検出造構である。長径1.6m、短径1.4mの長円形で深さ1.3mの土壤である。多量の遺物がある。図示した遺物は、1が龍泉窯青磁碗Ⅰ類、2は白磁碗Ⅱ類で外底に墨書が見られるが判読不能。3は同碗Ⅰ-Ⅱ類。4、

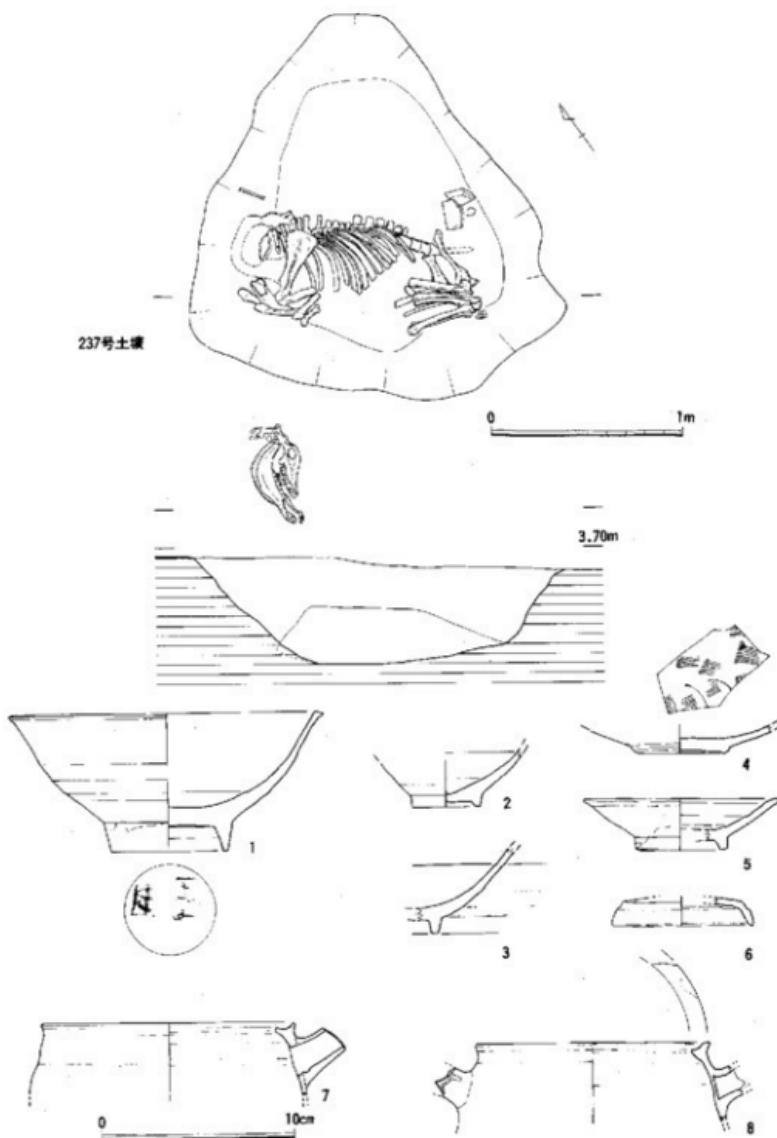


Fig.70 237号土壌と237号土壌出土遺物

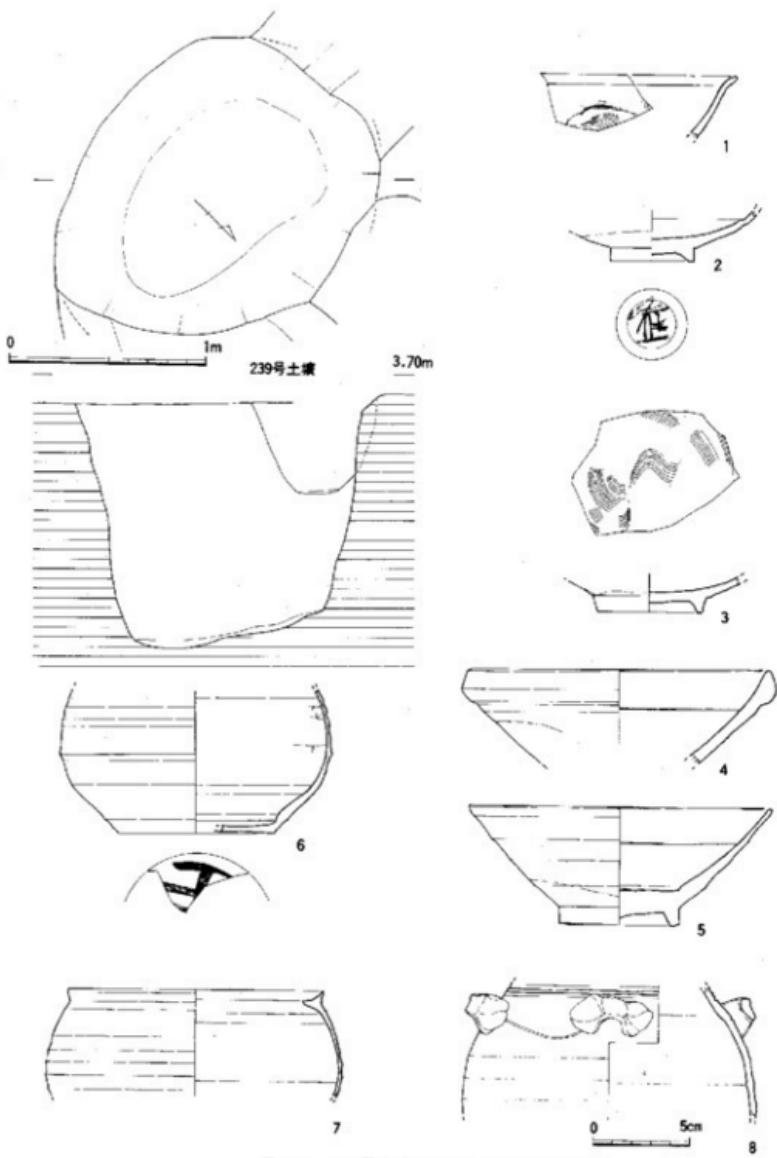


Fig.71 239号土壌と239号土壌出土遺物(1)

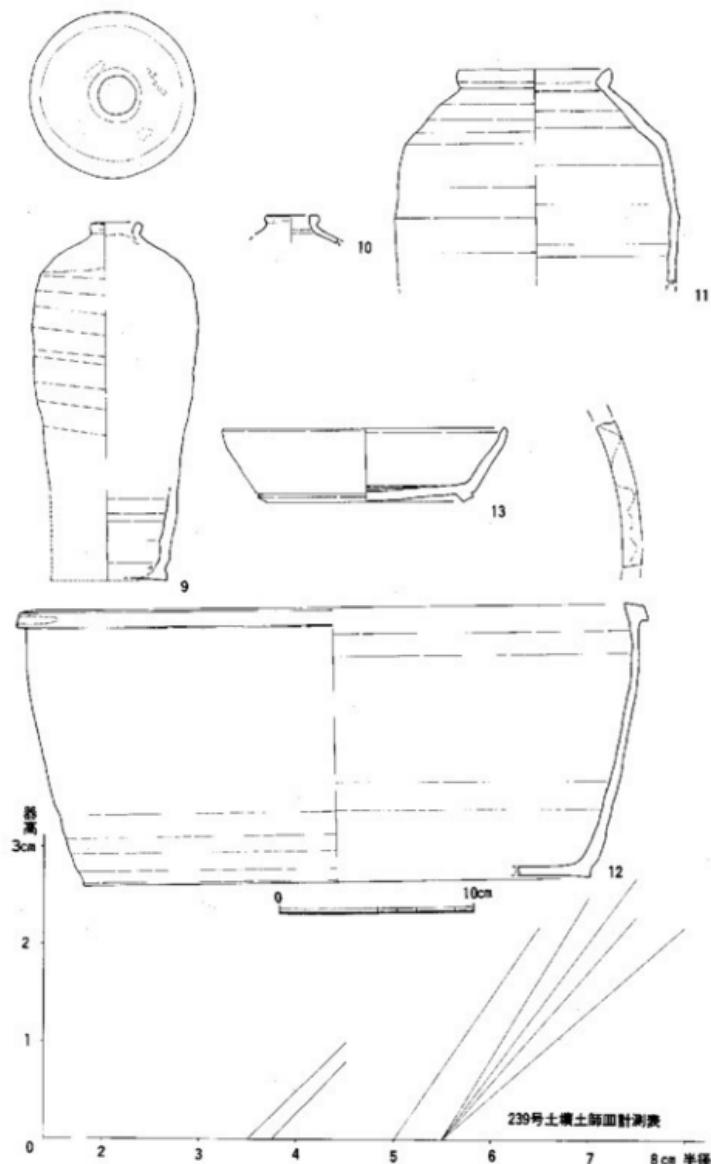


Fig.72 239号土壤出土遺物(2)

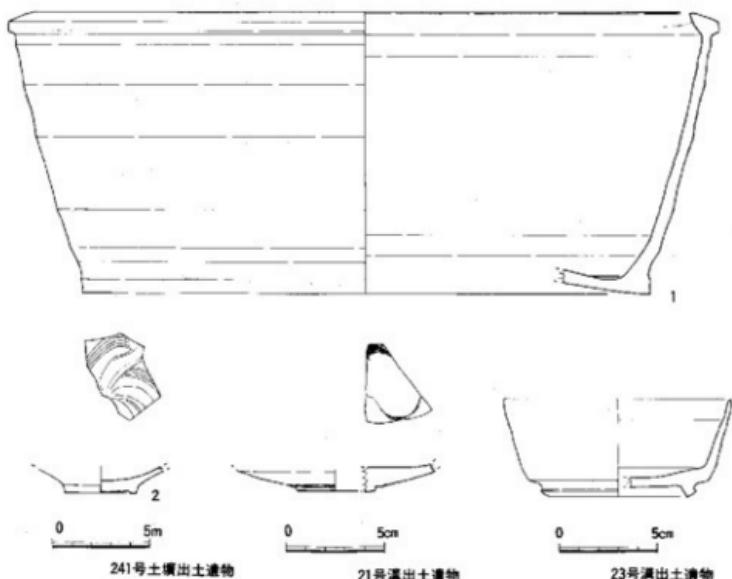


Fig. 73 241号土壌出土遺物と21号、23号溝出土遺物

5は同IV類、Ⅴ類である。6、7は陶器A群行平である。6の底部に「玉」かと思われる墨書がある。8は同B群四耳壺、9、10はA群小口瓶で、肩の施釉部分に目跡が残る。11はB群の長瓶。12はA群の深い盤で口縁は外方に四角に突出する。内面のみ黄オリーブ色の半透明釉がかかる。13は須恵器杯である。土師皿類は計測表に示すとおりである。13世紀半ばの廃棄物処理土壌であろう。

**240号土壌 F-II-a 区下部検出遺構**である。232号土壌に切られ、全体形は不明であるが、深さ1.1mを計る。遺物は少なく、口径12.0cm、器高3.6cmの土師器系切底杯と、口径9.0cm、0.8cmの糸切底小皿があり、他に白磁、陶器、須恵器等が微量みられるにすぎない。13世紀代の廃棄物処理土壌。

**241号土壌 (Fig. 73) F-II-e 区下部検出遺構**で、214号土壌に切られ全体形不明。小上層である。遺物は少ない。図示した遺物は、1が磁灶窯系の陶器A群の深い盤で、T字形の口縁をなす。内面に暗茶オリーブ色の釉がかかる。2は見込に線描き花文をもつ青白磁皿である。土師皿は出土していないが、切り合いから12~13世紀前半頃が考えられる。性格不明。

**21号溝 (Fig. 73) F-III-e 区上部検出の幅0.2~0.5m程の小溝**である。深さも0.2m前

後で浅い。雨落溝であろうか。主軸は真北に対してほぼ直角に向く。図示した青白磁皿のほか、出土遺物は多いが、いずれも小片で土師皿類も計測できない。13世紀代であろう。

**22号溝** F—I—e 区上部検出の小溝で、21号溝と同大。21号溝の南に約0.7mの間隔をおいて平行する。両溝にはさまれた部分が路地であったと思われる。遺物は殆んど見られない。

**23号溝** (Fig. 73) F—I—b・c 区上部検出の小溝で、前2者と同程度の規模である。22号溝の延長線上に伸びており、あるいは同一の溝かもしれない。遺物は少なく、図示した遺物は8世紀代の須恵器であるが、溝の時期は前2者と同じである。

**ピット群** 多くの柱穴と思われるピットが見られ、一部は溝に平行又は直交方向に並びそろであるが、組織的には把握しにくい。

## 2) F区遺構外出土の遺物 (Fig. 74-81 PL. 37・38・48)

**青磁** 1～8は龍泉窯系青磁器。1、2はI類の碗の碗底である。灰色でやや粗い土に縁がかかる釉がかかる。氷裂はない。高台、見込とも小さく、腰は直線的に斜行する。器外は太めの櫛による猫搔文を、器内には片切形の草花文を描く。地は細かい櫛による刺突文でうめている。3はI類の小碗。外底の半分ほどに釉が入りこんでいる。疊付に3個に復原できる耐火土の目跡がある。4～6はI類に対応する皿である。4は釉がオリーブ色、透明で氷裂がある。5は青緑釉で少々なまこがかっている。6は青緑色透明で厚みのある釉である。7はII類碗。釉は青灰色で厚く、釉中に細かい気泡が多く、透明性が少なくなっている。8はIII類の小杯。オリーブの暗い色合で不透明な、砧風の釉が厚くかかる。疊付のみ露胎。9は灰オリーブ色の厚めの釉がかかる青磁の蓋。釉層は厚めで氷裂がある。天井は露胎でうす茶色。11は龍泉窯系でも同安窯系でもない、その他の青磁のII類に入る碗。口縁部は還元して胎は灰色、釉はオリーブ色に焼けているが、下部は酸化ぎみで胎釉とも薄茶色である。器外の平行線は櫛搔である。12は同じくII類の碗。胎釉とともに非常に淡色で、クリーム色を呈する。釉には細かい氷裂がある。器内の文様は櫛でスピードをつけて描いた蓮花文、器外は粗めの片切形で平行線文を施す。13～16は同安窯系青磁。13、14はオリーブ色透明釉。15、16は灰色である。いずれも透明性はあるが氷裂の少ない釉である。17～19は越州窯系の青磁。胎土は細かい。19は蛇の目高台の碗。底部全体に釉がかかり、高台縁際に6箇所、目跡が残る。釉色は薄い蜂蜜色で細かい氷裂がある。この遺跡で発見される中国陶器としては、最も古い時代のものである。

**白磁** 20～22は白磁小碗。20は白泥で器内壁を5もしくは6区に分割するが、この堆線の中央を細く搔き落としている。釉は不透明で厚く、ピンホールが多い。23、25、26は白磁碗0～II類、27～30・33は同II類、29は無文、30には文字のようなものが線書してあるが、釉にピンホールが多くはっきりしない。27・28は器内に櫛による曲線文を施すものである。33はVI-3類で

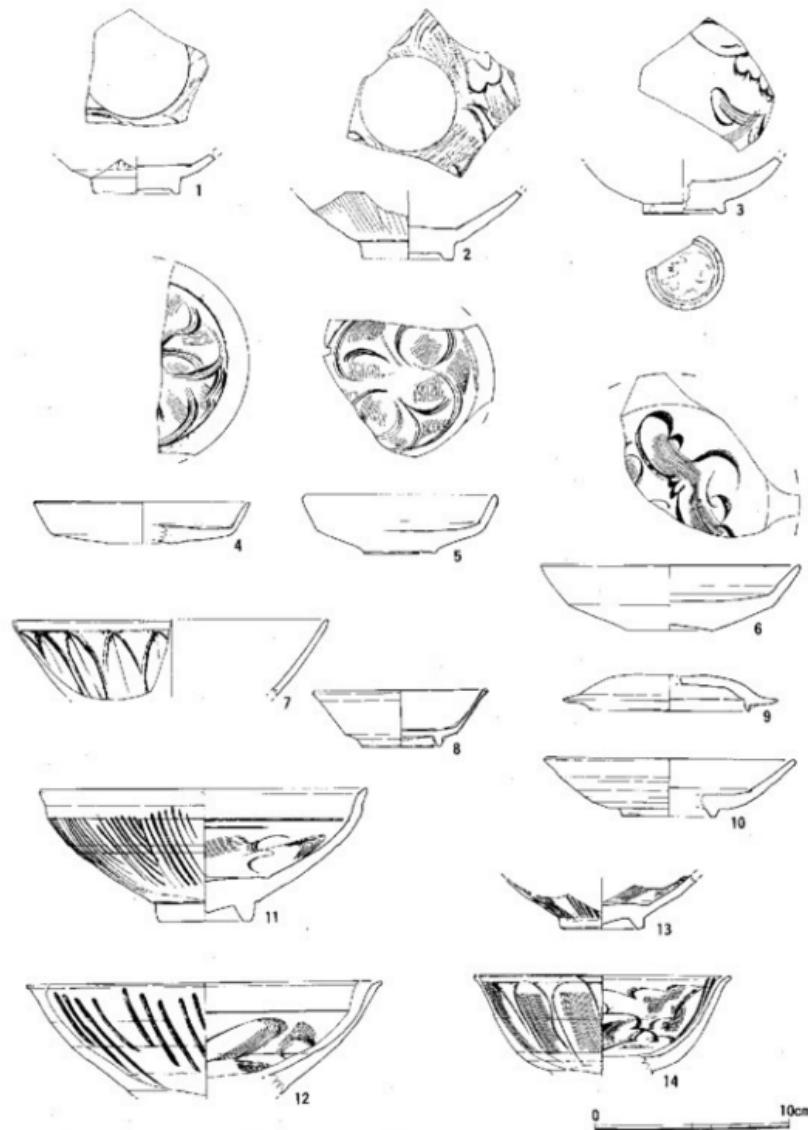


Fig. 74 F区 造構外出土遺物(1)

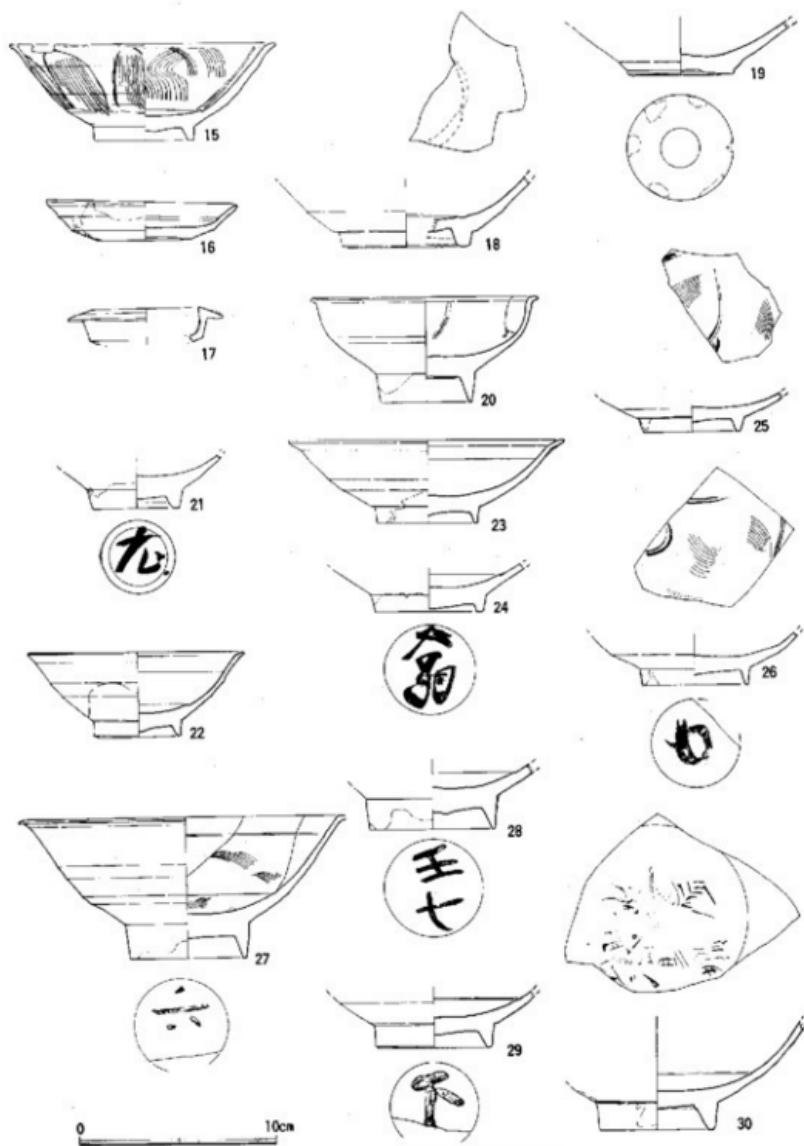


Fig.75 F区 速構外出土遺物(2)

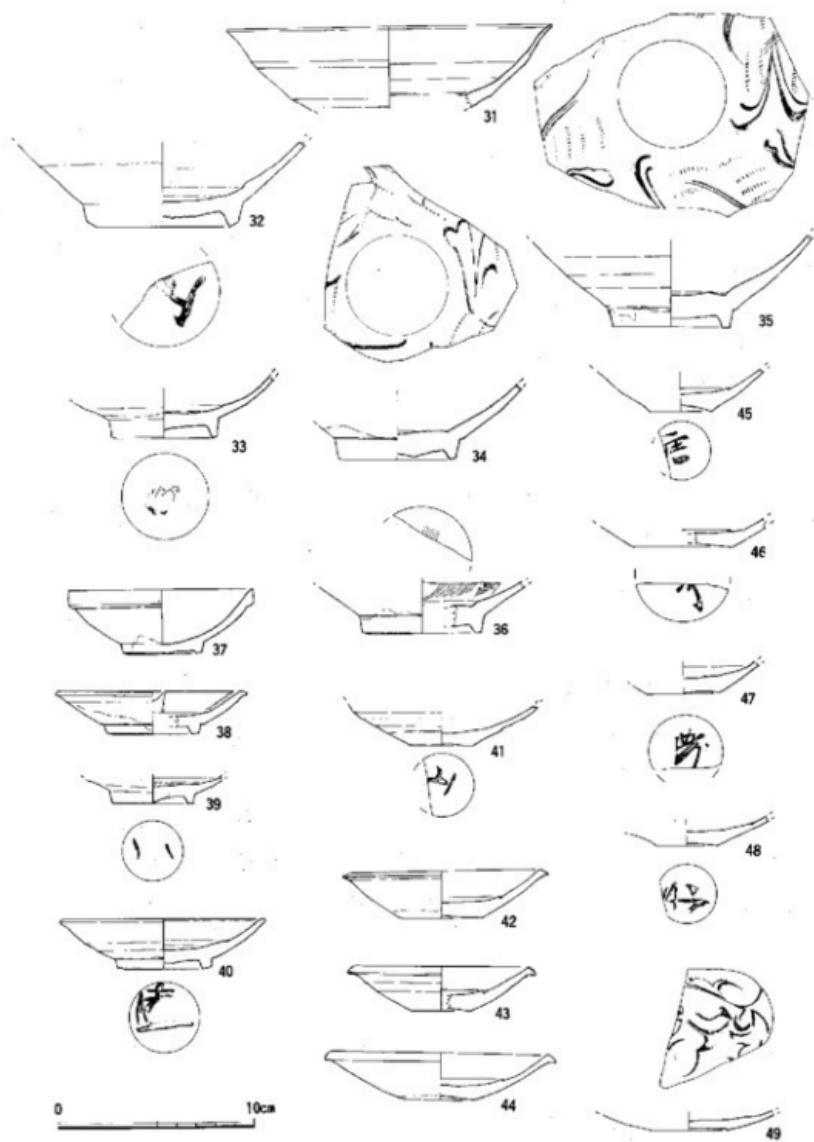


Fig. 76 F区 造構外出土遺物(3)

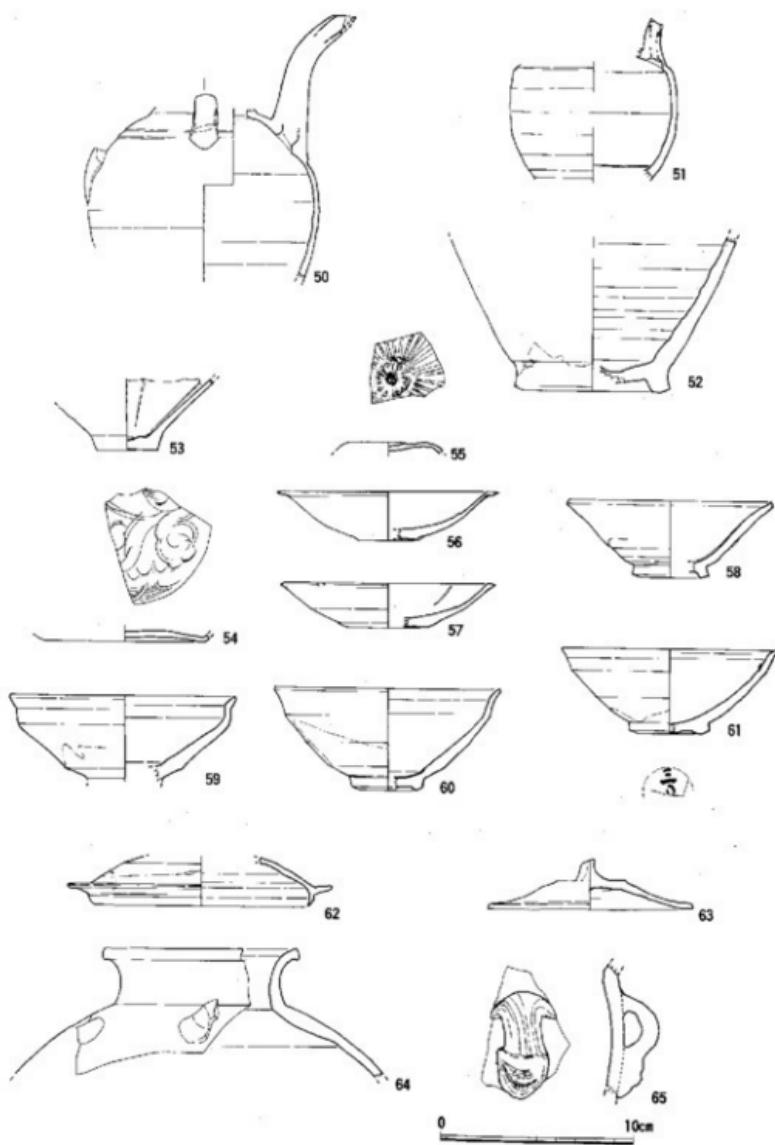


Fig.77 F区 通構外出土遺物(4)

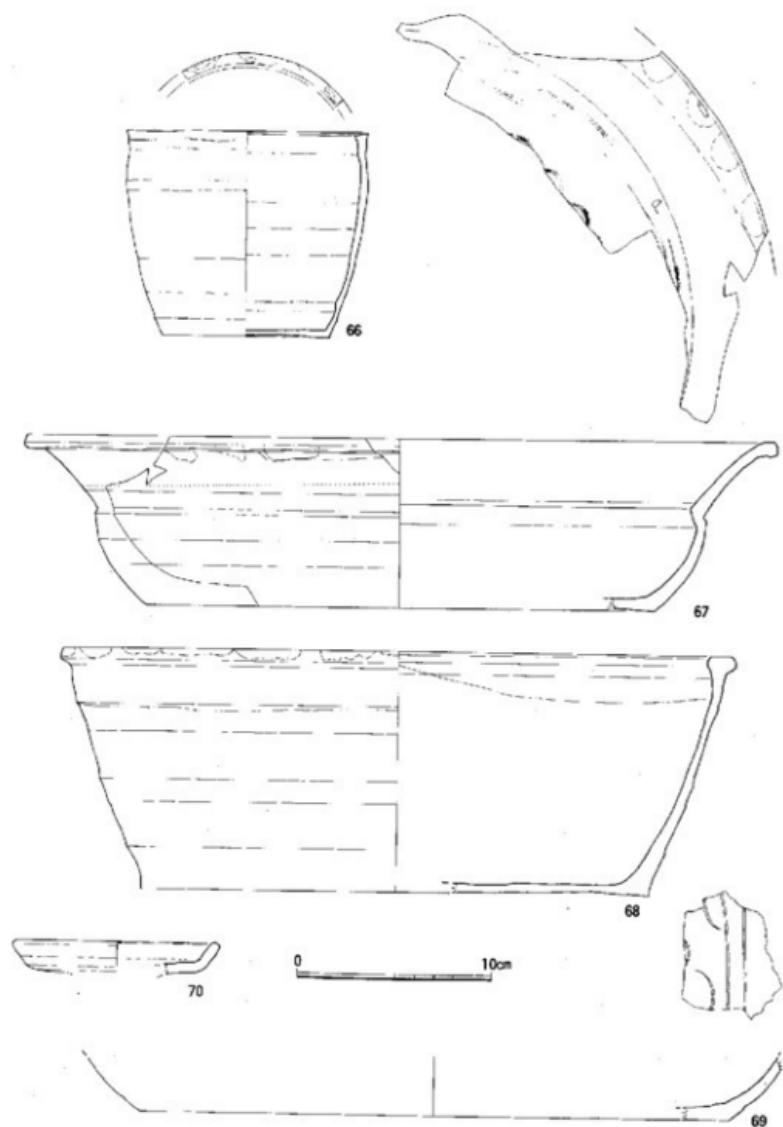


Fig. 78 F区 造構外出土遺物(5)

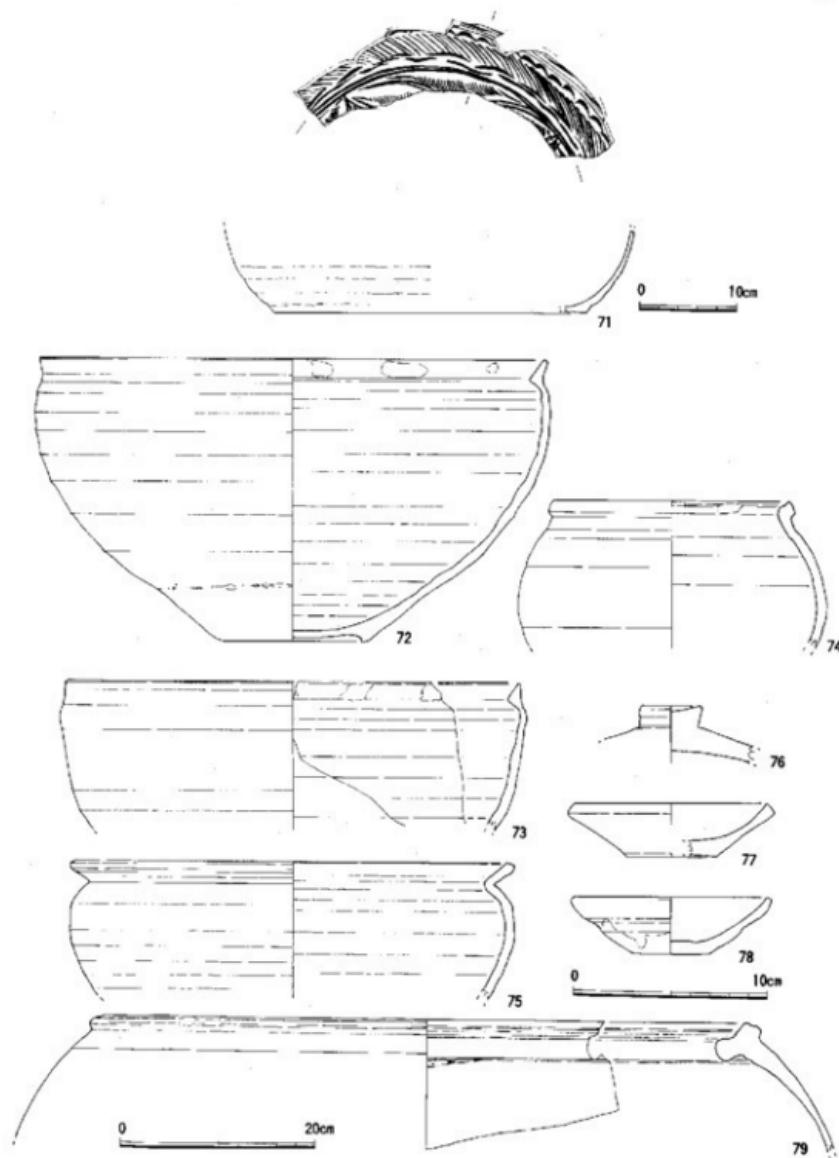


Fig.79 F区 造構外出土遺物(6)

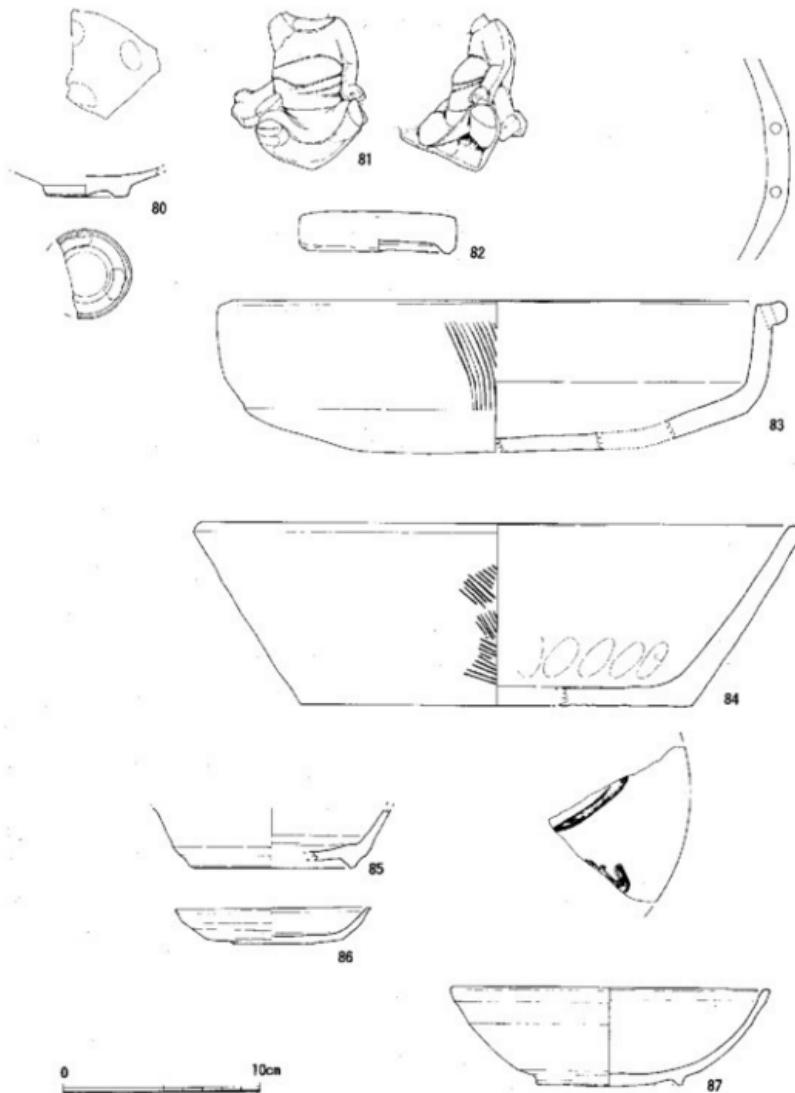


Fig.80 F区 造構外出土遺物(7)

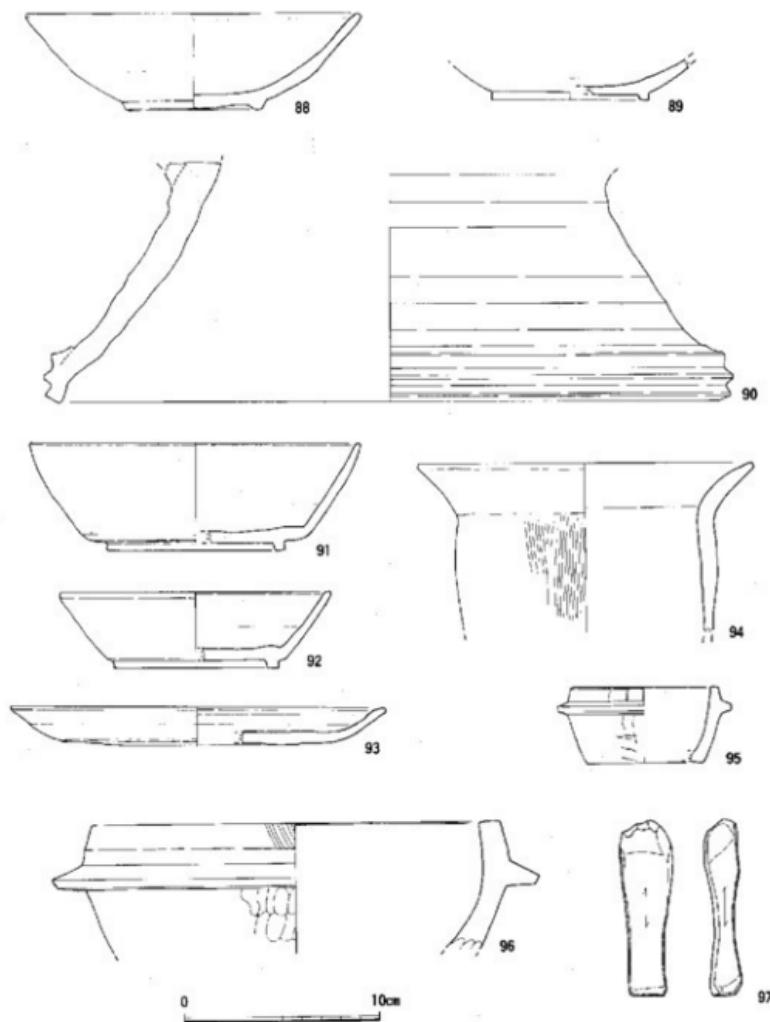


Fig. 81 F区 造構外出土遺物(8)

ある。32はIX類、31は口縁外反で通常の匁類とは異なるが、見込に輪型の釉切が見られる。34～36は胎が薄茶～灰白色、やや粗く、釉は淡オリーブから灰を帯びる透明釉で水製がある。酸化ぎみに焼かれていることの多い碗で、記号化されていないが、11世紀後半～12世紀前半のものと考えられている。37～49は白磁皿。37は高台付皿T-2類、38～40は同じくII類、41は平底皿III類、42～46はIV類である。47、49は平底皿V類である。50は広東省潮州窯を主な産地と考えられている白磁碗II類と、胎釉ともによく似た水注。胎は灰白色でやや粗く、釉は黄白色である。先曲りの長い注口と、対称的位置に把手がつき、頭を巻きこんだ耳が両側につけられている。器内無釉。51は小形水注。注口の先は欠失している。胎は灰白色で堅く焼け、釉は青灰色透明で水製はない。52、白磁壺底部。四耳壺か。

**青白磁** 53は小ぶりの碗。小さな茶溜から6方向に白い堆線が入っている。外底はほとんどくがなく平らである。54は割花文の平底口ハゲ皿。55は菊花型合子蓋、56、57は皿で、口縁部に白堆線を入れて分割している。いづれも白い胎に淡青色を帯びた透明釉がかかっている。

**黒釉磁** 58は広東省の西村窯もしくは潮州窯の茶碗と思われる。胎は灰白色でよく磁化している。オリーブ色を含んだ褐色の鉛釉をかけるが、口唇で釉を削り、その部分に透明釉をかけている。釉尻で一部玉になって釉が溜まっている。ほとんど同じような茶碗が、福建省光沢茅店窯や德化窯でも生産されていたもようで、同定にはなお問題がありそうである。59～61は建蓋タイプの茶碗。59の胎は破面暗灰色で細かい白砂が混じる。やや粗い。60、61は土がより細かく、灰色。露胎はいずれも薄茶である。釉は61は漆黒だが59、61は色が薄くやや透明で鉛釉に近い。

**陶器** 62～71はA群に属する。62、66は灰ベージュの細かい胎土で黄がかった褐色の釉がかかること、胎、釉は、博多でも発見例の増えている福建省泉州郊外、磁灶窯の製品と考えられる小口瓶とよく似ており、ことに62は、蓋の上面の釉上に付着している目土の置き方まで、小口瓶と同じである。63もこれらに似ているが、土の中に砂や小石が混っており、陶汰されていない無釉の陶器である。通常行平と組み合わさる蓋と考えている。67、68、71も磁灶窯製品と考えられている黄釉盤。67、71には鉄絵が描かれている。69は綠釉盤で、砂混じりの灰ベージュ色の土で、光沢あるベンキのような綠釉がかかる。釉下に太い線彫の文様がある。64、65もこれらの盤によく似た土の壺で、泉州近辺の製品と考えられよう。65のような獸面のついた耳は、東南アジアに出土例の多い壺に多く見られ、通常広東地方の壺といわれている。暗オリーブの軟かい感じの釉がかかっている。70は綠釉陶器で、半底の皿か、あるいは盤口瓶の口かと思われる。ベージュ色の粉っぽい土に若草色の釉がかかるが、表面は銀化しており鉛釉と思われる。72～78はB群の陶器。73、74は灰色の胎に青磁系の釉がかかるが、72、75、76は胎は茶色、釉も灰茶から茶褐色を呈している。77、78は茶色、暗灰色と、やや濃い色の土である。土や釉の色調

の変化は、焼成の雰囲気の変化によるもので、必ずしも粘土の違いを示すものではなかろう。79はC群の陶器で、Y字口縁の大形容器。赤茶色の土に白い砂が大量に混じっている。外面は斜線の、内面は青海波のたたきが残る。釉は泥をかぶったようなオリーブ色を呈しているが、釉層の薄いところでは褐色を呈している。

**李朝白磁** 80、胎上はベージュ色でよく磁化している。同色の半透明、冰裂のない釉が、外底を含め全体にかけられている。一部になまこが浮んでいる。見込と疊付に3個づつ、大きめの砂目跡がある。15世紀から16世紀前半の白磁であろう。

**国産遺物** 81は中空の粘土製塑像である。握りしめた左の拳を膝の上に置き、右手は上に突きあげているものと思われる。頭部は欠落しているが、不動明王であろう。時期不明。82は焼塗壺蓋である。外面は丁寧なナデ調整、内面上部には繊かな布目圧痕が残る。18世紀代のものである。83は土師質の平鍋である。外面は体部、底部ともハケ目調整で、内面ナデ調整。部分的に錫状突起があり釣手着装用に2箇所の穿孔がある。江戸期の所産であろう。84は土師質捏鉢である。外面体部と底はハケ目調整。内面体部下半には指頭圧痕が残る。江戸期の所産であろう。底に墨書が残るが不明。85は高台付須恵器杯であるが、酸化炎焼成で赤褐色を呈す。高台は、断面三角形に近い。86は糸切底を残す瓦質の小皿であるが焼成は須恵器に近い。内外面に粗いヘラ研磨がある。87、88は瓦器碗である。87は断面三角の高台を貼りつけ、高台内には板状圧痕が残る。内面と外面上半は黒くいぶされている。88は断面逆台形の高台を貼りつけ、高台疊付に板状圧痕が残る。外体部上半と内面上位が黒色にいぶされている。内外面を粗くヘラ研磨する。89は縁釉陶器碗である。肌色の柔らかい胎でうすい不透明釉がかかる。90は古窯系の須恵器亮の頸部である。胎部との継目が明瞭である。口縁に3本の突帶をめぐらす。91、92は高台付須恵器杯である。断面四角形の高台を貼りつける。全面回転ナデ調整である。8世紀代のものである。93は須恵器皿で回転ナデ調整を行う。94は土師器亮である。口縁部は外に開き、外面横ナデ、内面横ハケ目調整を行い、体部は外面が縱方向のハケ目調整、内面は斜めに粗いヘラ削りを行っている。8世紀代である。95は小形の滑石製石鍋で錫がつくものである。細かな削りで表面は滑らかになっている。96は通常のサイズの滑石製石鍋で錫がついている。ノミ状加工工具の削り痕が明瞭に残される。外面には煤が付着している。97は砥石である。粘板岩製で4面を砥面としている。

## 5. G区の調査

地下鉄祇園町工区における埋文化財調査の最初の調査区である。調査面積は20m×18mの360m<sup>2</sup>で、調査は昭和54年5月13日より6月31日まで行った。調査区は便宜上、二列の中間杭列によって三分割し、大博通り側よりⅠ・Ⅱ・Ⅲ区と呼び、更に4mごとに細分し、西北側より、a～eの符号をつけた。遺構番号は溝について30番、土壙等については300番台とした。以下G区で検出された遺構および遺構出土の遺物について述べて行く。

### 1) 遺構と遺構出土の遺物

**301号土壙** (Fig. 82 PL. 38) G-Ⅲ-e区上部検出遺構である。近世井戸とその掘方で、多量の近世陶磁類に混じり、中世の遺物が見られる。図示した遺物は、1が龍泉窯系青磁の大型碗で内面体部に片切彫りの花文が施され、白濁したオリーブ色の釉がかかる。2は逆円形の断面形をなす焼塙蓋の蓋であり、内面に細かな布目压痕が残されている。17世紀代のものと思われる。

**302号土壙** (Fig. 82) G-Ⅱ-d区上部検出遺構である。近代の瓦組井戸の掘方で、305号土壙を切っている。遺物は各時期混在するが、量は少ない。図示した遺物は分厚い胎の青磁で器形は不明。貫入のある透明なオリーブ色の釉がかかる。

**303号土壙** (Fig. 82) G-Ⅱ-b区上部検出遺構である。近代の地下室状の遺構で廃棄物が多量に投棄されている。378号土壙を切っており、それに由来するとと思われる中世遺物も一部混在する。図示した遺物は「崇寧通寶」の大型銭である。

**304号土壙** (Fig. 82) G-Ⅲ-c区上部検出遺構である。近現代の石組み地下室によって切られている。地下室築造の際の掘方かもしれない。遺物は近現代の陶磁がほとんどで、一部中世陶磁が混在する。図示した遺物は、1が近代高取系の陶器鉢で、2は李朝の皿と思われる底部破片である。見込と高台費付に4箇所の砂目跡がついている。外面底の削り出しは粗雑で、高台輻に差が見られる。全体に白っぽい灰色不透明釉がむらにかけられている。

**305号土壙** G-Ⅲ-e区上部検出遺構である。306号土壙(井戸本体)の掘方である。少量の近世陶磁、中世陶磁が混在して出土している。301号土壙に切られている。

**306号土壙** (Fig. 82 PL. 38) G-Ⅲ-e区上部検出遺構で、305号土壙(近世井戸掘方)の本体部である。径0.9mを計る。内部構造は木桶組と考えられるが、明確な痕跡はない。中近世遺物が混在する。図示した遺物は、1が青磁碗で、龍泉風の分厚い高台の作りであるが、外面体部の櫛彫文と、体部下半までの施釉など同安窯系青磁に共通する点も多い。2、3は磁灶窯系の胎をもつ陶器で、四耳壺および蓋である。2は内面体部上半と外面に茶褐釉がかかる。



302号土壌出土遺物

303号土壌出土遺物

0

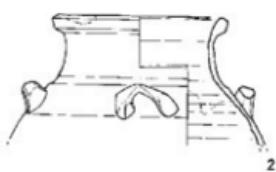
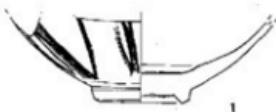
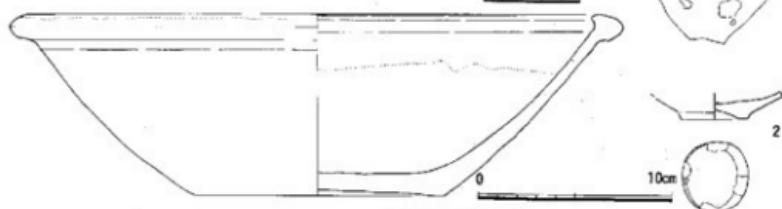
10cm

0 5cm

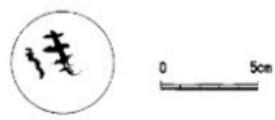


2

304号土壌出土遺物



306号土壌出土遺物



310号土壌出土遺物

Fig. 82 301号, 302号, 303号, 304号, 306号, 310号土壌出土遺物

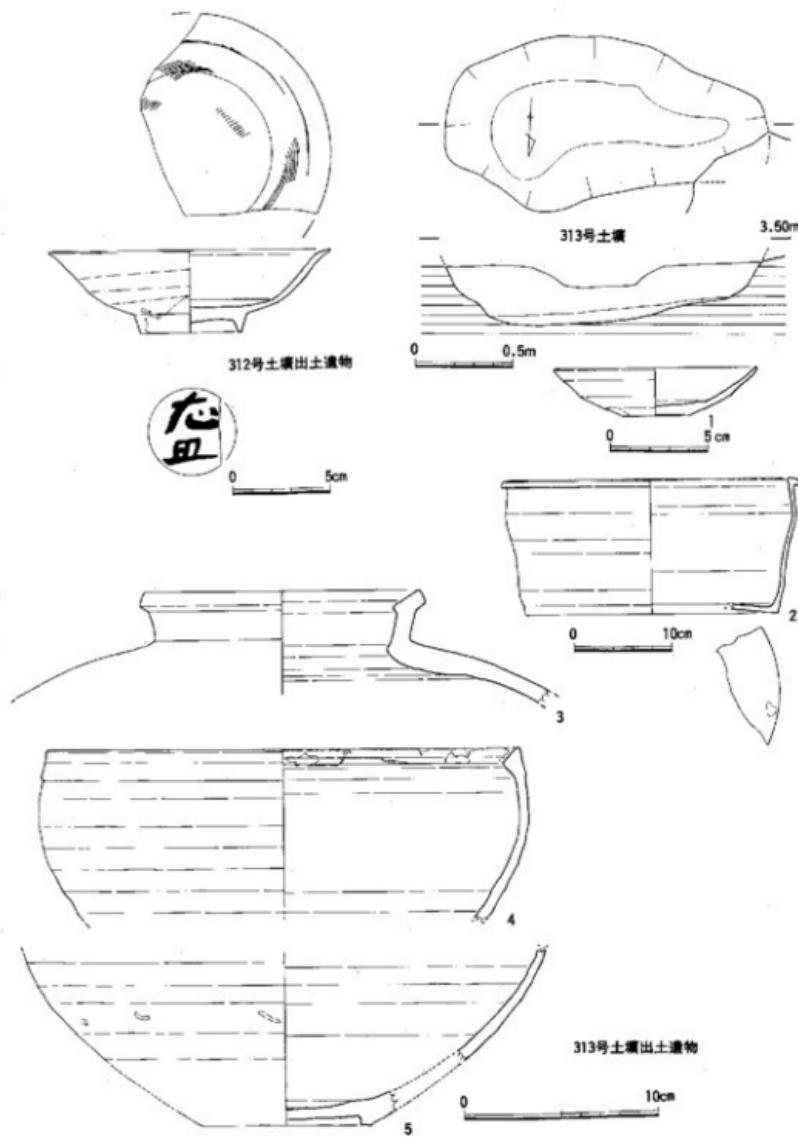


Fig. 83 313号土壠と312号、313号上壠出土遺物

3は乳濁した黄緑釉がかかり、中央部に焼成前の穿孔が見られる。穿孔部および内面は無釉である。

**307号土壤** G-III-b区上部検出の現代擾乱土壤である。

**308号土壤** G-III-a区上部検出遺構である。現代の井戸廃絶後、ゴミ穴にはられたもので、生活廃棄物が多量に投棄されていた。

**309号土壤** G-II-c・d区上部検出遺構である。近世瓦組井戸の本体部にあたる。井戸廃絶後ゴミ処理に使用されている。

**310号土壤** (Fig. 82 PL. 48) G-II-c区上部検出遺構である。309号瓦組井戸の掘方であるが、最下面に方形板組井戸の痕跡が見られたが、明確ではなかった。小破片で図示しえないが中世陶磁破片が多く混在するのも古い井戸掘方を全面的に再度掘り起こしたためと思われる。図示した遺物は白磁碗で、外底高台内露胎部に墨書が見られるが、判読できない。

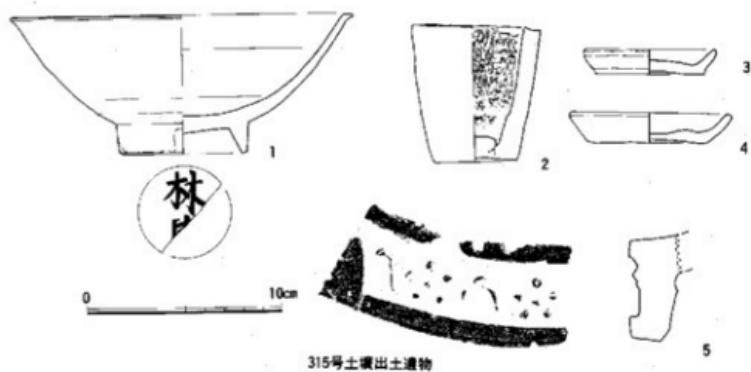
**311号土壤** (PL. 17) G-II-e区上部検出遺構である。362号土壤の上面に営まれている。長軸1.7m幅0.95mの長椭円形をなす浅い皿状の窪みをなし、明確な掘方ではないが、上面に掌から拳大の礫が散漫に集められており、瓦、青磁、土師皿等の小破片が少量介在する。中世後半の遺構と思われるが、性格は不明である。

**312号土壤** (Fig. 83 PL. 48) F-I-a・b区上部検出遺構である。近世の廃棄物処理用土壤である。近世陶磁に混じって石製礫白破片3点や、中世陶磁破片少量がある。図示した資料は、見込みに描描文をもつ高台付白磁皿で、高台内露胎部に墨書が見られるが判読できない。

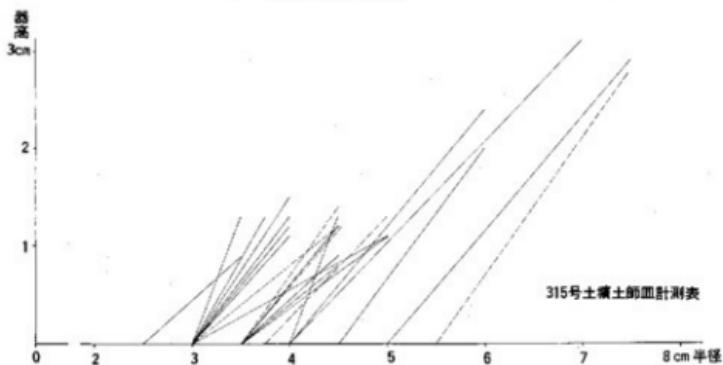
**313号土壤** (Fig. 83 PL. 17・39) G-I-c区上部検出遺構である。長さ1.65m、幅0.9m、現在深さ0.35mの長方形に近い掘方をもち主軸はほぼ東西を向く。壁と床面に酸化鉄層が見られ、黄色砂混り黒褐色上の覆土上に炭混りの灰が多量に見られ、その中に遺物は集中する。13世紀代の火葬墓の可能性がある。図示した遺物は、1が白磁平底皿、2が磁灶窓系の深い盤、3が磁灶窓に近い胎をもつ四耳大壺。4、5はそれぞれ昔筒底をなすB群の陶器鉢である。

**314号土壤** G-I-c区上部検出遺構である。313号土壤に切られる。径0.5m程の不整円形をなす深さ0.25mの浅い土壤である。出土遺物は瓦質上器、土師皿の小破片が各1点のみである。

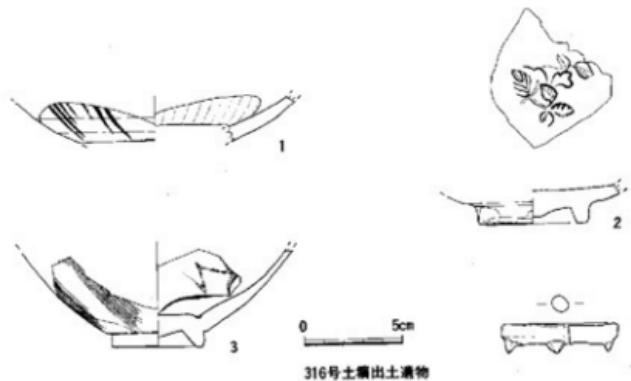
**315号土壤** (Fig. 84 PL. 39・48) G-I-a区上部検出遺構である。近現代のポンプ式井戸の掘方である。下層にあった12世紀半ば頃の遺構を掘り起こしたものと思われ、ヘラ切り及び糸切の土師皿類がまとまって出土している。図示した遺物は、1が高台内露胎部に「林口」の墨書をもつ白磁碗、2が内面に粗い布目压痕をもつ18世紀後半代の焼塩壺である。3、4は



315号土壤出土遺物

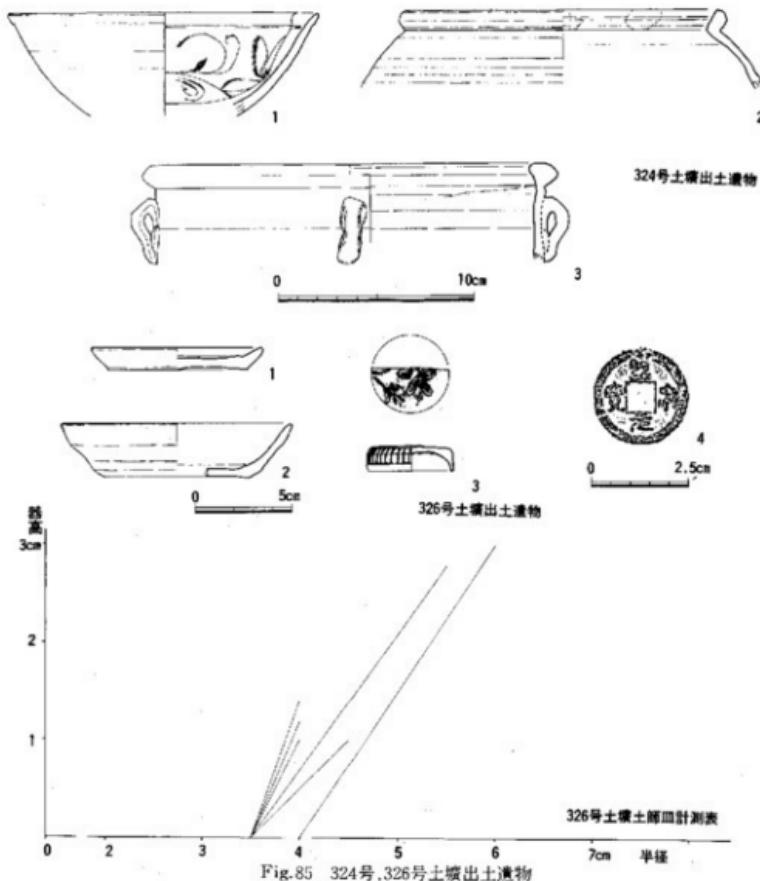


315号土壤土筋面計測表



316号土壤出土遺物

Fig. 84 315号, 316号土壤出土遺物



それぞれ糸切底の上飾皿、杯で、5は近世軒平瓦である。

**316号土壌** (Fig. 84 PL. 18・39) G-Ill-c・d区上部検出遺構である。多量の近世陶磁に混じって中世陶磁がある。図示した遺物は、1が内外面に櫛描文をもつ占いタイプの龍泉窯系青磁碗で、2が見込に印花文をもつ龍泉窯系青磁碗。3が外面に細かな櫛描文、内面に雷光文をもつ同安窯系青磁碗である。4は4つの支柱を貼りつけたドーナツ型の焼台で磁質である。胎土は良質の福建白磁に近く、中国製品か。

**317号土壌** G-Ill-d区上部検出遺構である。1.1m×0.9mの長円形で、0.2mの浅い掘方

をもつが、中に環1個が置かれるのみで遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**318号土壙** G-III-d区上部検出遺構である。0.95m×0.6mの長方形をなし、深さ0.5mの掘方に灰が充填されているが遺物は全く見られず時期不明。

**319号土壙** G-III-c区上部検出遺構である。径0.5m程の不整円形をなし、深さ0.4mの掘方で、下層に灰が見られた。遺物は少量で、土師杯小破片5点、青白磁合子身、白磁碗破片各1点が出土したにすぎない。13世紀代と思われるが性格は不明である。

**320号土壙** G-III-c区上部検出遺構である。0.8m×0.6mの長円形をなし、深さ0.1mの浅い掘方である。灰、炭等はなく、黒褐土中より土師皿、白磁碗小破片が少量出土しているにすぎない。13世紀代と思われるが性格不明。

**321号土壙** G-III-c区上部検出遺構である。一部を319号土壙に切られる。現存長0.9m、幅0.55mの不整長円形をなし、深さ0.4mを計る皿状の掘方をもつ。床面に灰層が見られ、上を茶褐色細砂が覆う。遺物は微量であるが切り合いから13世紀頃かと思われる。性格不明。

**322号土壙** G-III-c区上部検出遺構である。遺物は全く見られず、壁面に酸化鉄層が見られることから木根の可能性が強い。

**323号土壙** G-III-c区上部検出遺構である。304号土壙に接する不定形の落ち込みで、少量の遺物が出土したにすぎない。近世の遺物も少量ながら見られることから、304号土壙の一部と考えられる。

**324号土壙** (Fig. 85) G-III-c区上部検出遺構である。2.7m×2.4mの長方形をなし1.05mの深い掘方である。上面で別に332号土壙が検出されており、それよりも古いものである。図示した遺物は1が龍泉窯青磁碗、2がB群陶器の四耳壺と思われる口縁部である。3は赤褐色の胎で茶褐色の釉を施した四耳付きのC群鉢である。13世紀代の井戸であろうか。

**325号土壙** G-III-a区上部検出遺構である。326号土壙(近世井戸掘方)の本体部である。井戸側の明らかな痕跡はないが、おそらく桶組みと思われる。遺物は見られない。

**326号土壙** (Fig. 85) G-III-a区上部検出遺構である。325号土壙(井戸本体)の掘方である。側壁柱に切られ全体は不明であるが、直径3.2mのはざみ形をなすと思われる。近世陶磁に多くの中世遺物が混在する。図示した遺物は1、2が糸切底土師小皿および杯で、口径はそれぞれ9cm、12cmである。3は青白磁合子蓋。型造りで側面に菊弁、上面に草花文を陽刻している。4は「至和元寶」である。

**327号土壙** (Fig. 86 PL. 39・48・49) G-III-b区上部検出遺構である。1辺2.2m程の隅丸方形で深さ1.3mの掘方である。12~14世紀代の遺物が混在しており廃棄物処理用土壙であろう。土師皿類は微細な破片のみである。図示した遺物は、1が白磁小碗で高台内露胎部に略字で「忠□」の墨書が認められる。これと同様の墨書が312号土壙などに数列認められる。

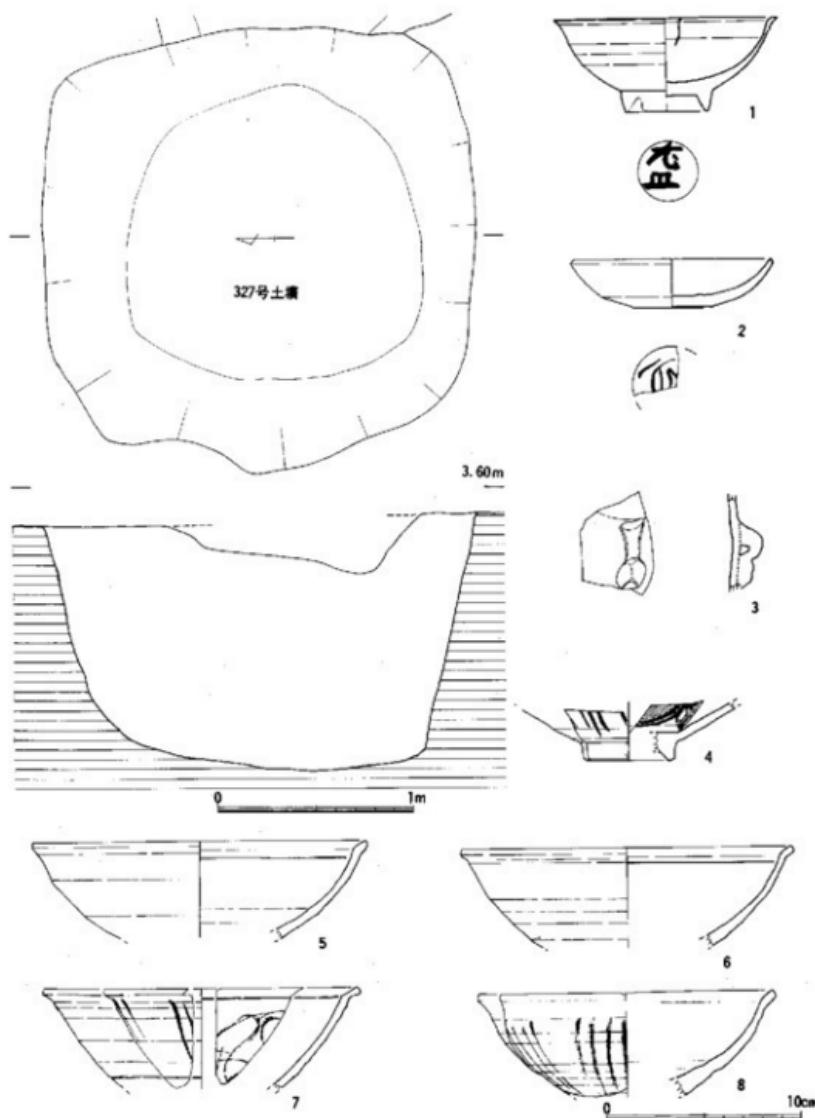


Fig.86 327号土壇と327号土壇出土遺物

2は白磁平底皿で底部露胎部に墨書が認められるが判読できない。3は磁灶窯系の縁軸耳付壺の肩部破片で、外面にやや白濁した縁軸が施されている。低火度焼成のため胎は赤褐色を呈す。4～8はいずれも同安窯系青磁碗である。4は高台置付脇まで施釉され龍泉窯碗に近い。5、6は外面無文で、内面口縁直下に沈匿線がめぐり、口縁は外に聞くものである。7は片切形りで外面体部に放射状の沈線を、内面体部に花文を施し、口縁部は外に屈折する。9は外面のみに片切形の放射状刻線を施し、口縁は外方に聞く。

**328号土壙 G-I- b 区上部検出遺構** 現代石組地下室とその掘方によってきられおり全体形は不明であるが、径2.6mのほぼ円形をなすものと思われ、深さ1.5mを計る。遺物はやや多いが、小破片で図示しない。13世紀代の廃棄物処理用土壙であろうか。

**329号土壙 G-I- c 区上部検出遺構** 現代地下室掘方。223、228号土壙に切られる。浅い黒褐色土の落込みで掘方は明確でない。遺物は微量で時期、性格ともに不明である。

**330号土壙 G-I- c 区上部検出遺構** 中間坑の攪乱によってほとんど掘方の形態は不明で、遺物も見られない。

#### 331号土壙 欠番

**332号土壙 (Fig. 87 PL. 18・49) G-I- c 区上部検出遺構** 324号土壙(井戸)廃棄後にその上面に掘り込まれる。1.35m×1.0mの不整長円形をなし、深さ0.4mで二段掘りの浅い皿状の断面形をなす。内面には灰が充填されていた。図示した遺物は、1が見込みに輪状に露胎部を作る白磁碗Ⅳ類で、高台内に「四郎」と読める墨書が残されている。2～4は白磁平底皿で、2は見込みに片切形の蓮華文を施すⅥ類で、基筒底状にわずかにえぐった外底露胎部に墨書を残すが判読できない。3、4はⅢ類である。5は白磁水注または四耳壺である。6は大目碗で、漆黒の釉が外面体部下半までかけられている。7～9は土師皿および杯でいずれも糸切底である。13世紀後半の遺構で火葬墓の可能性もある。

**333号土壙 G-I- c 区上部検出遺構** 近世土壙である316号土壙に大半を切られ全体形は不明であるが、0.3m程の深さをもつ浅い掘方で、灰が充填されている。図示していないが、口径9cm、器高1.2～1.5cmのヘラ切底の小皿3点と11径15cm、器高2.9cmの糸切底杯1点が完形で出土している。12世紀中頃の火葬墓であろうか。

**334号土壙 (Fig. 88 PL. 19) G-II- e 区上部検出遺構** 一部II区境に接し全体形は明確でないが、長軸2m強、幅0.9m程の長円形をなし、深さ0.7m程の掘方をもち主軸はほぼ東西を向く。内部は灰が充填され、焼標と陶磁破片が散在する。土師皿類はいずれも小破片であるが糸切底では13世紀代におさまるものであろう。図示した遺物は内面に橈描文をもつ白磁で、高台内露胎部に墨書をもつが、判読できない。火葬墓であろうか。

**335号土壙 (Fig. 88 PL. 19) G-II- d・e 区上部検出遺構** 長軸2.8m、幅1.1

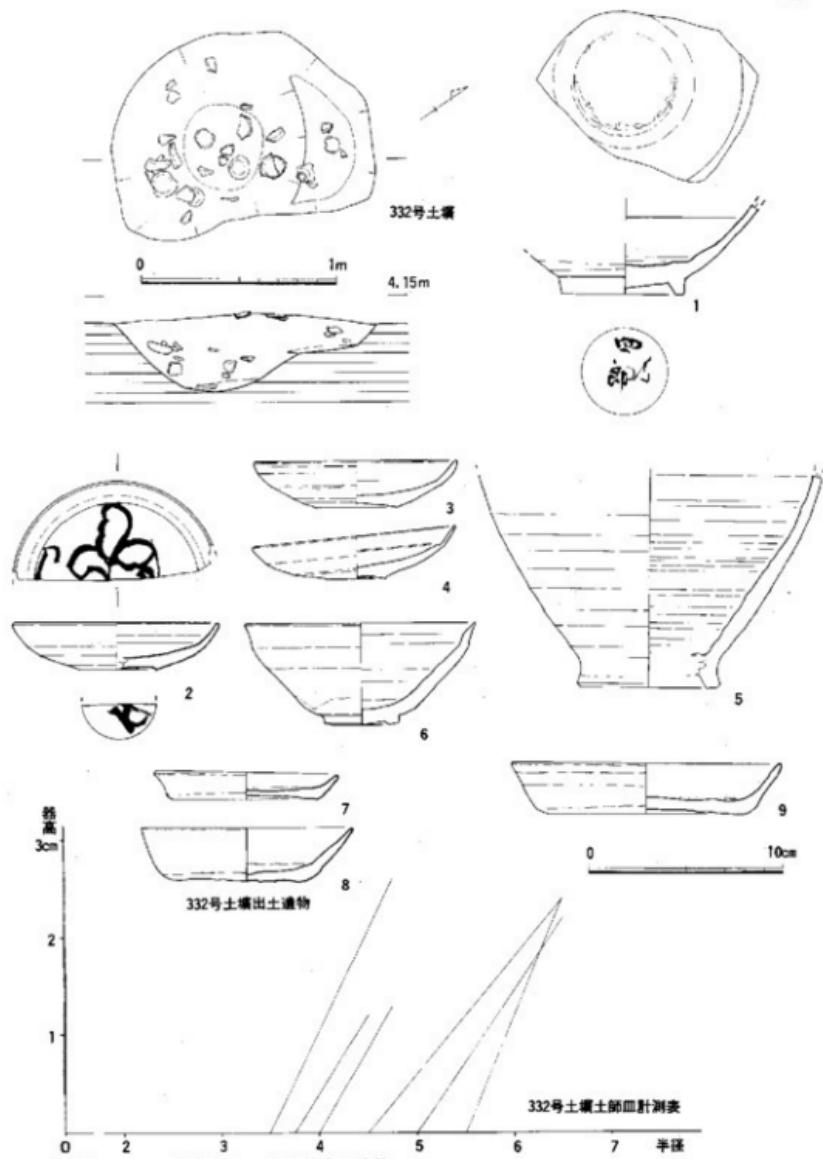


Fig.87 332号土壤と332号土壤出土遺物

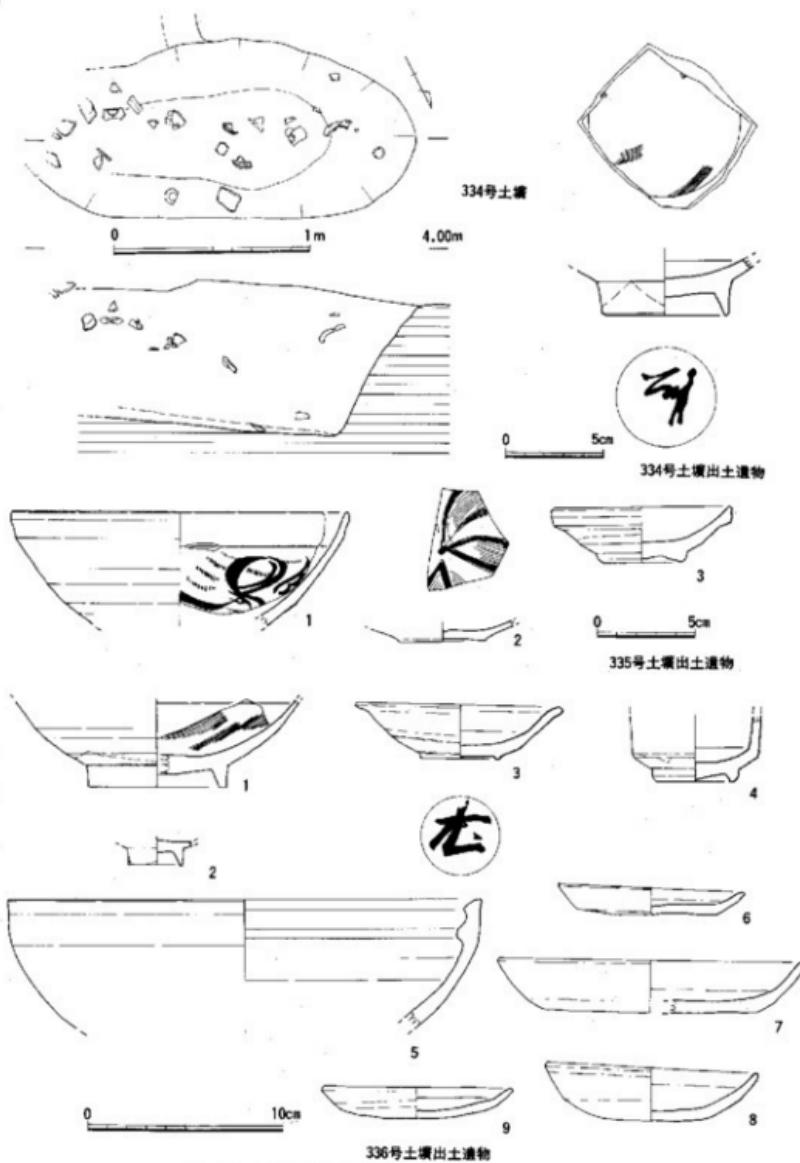


Fig.88 334号土壤と334号、335号、336号土壤出土遺物

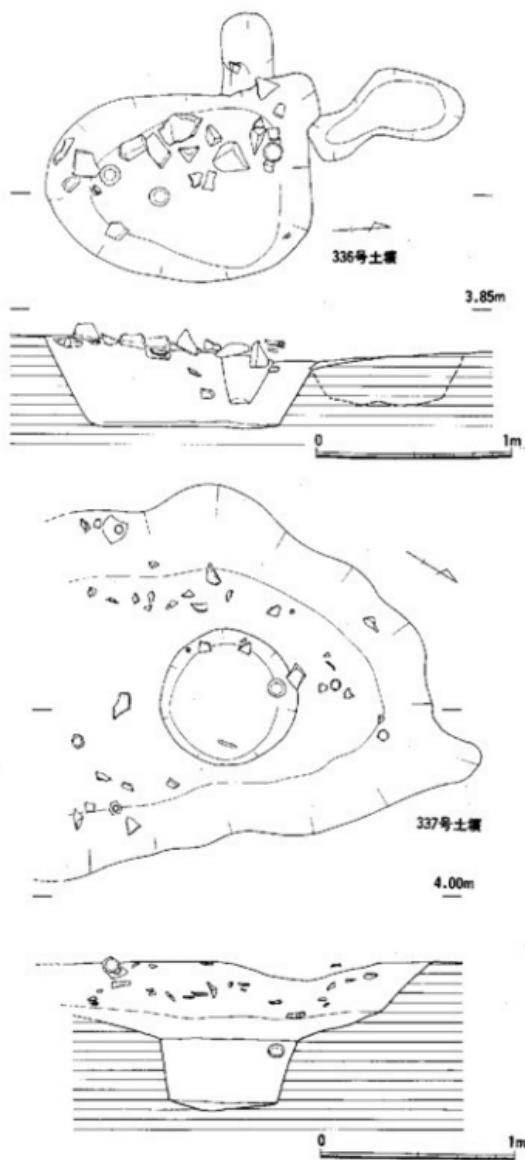


Fig.89 336号, 337号土壤

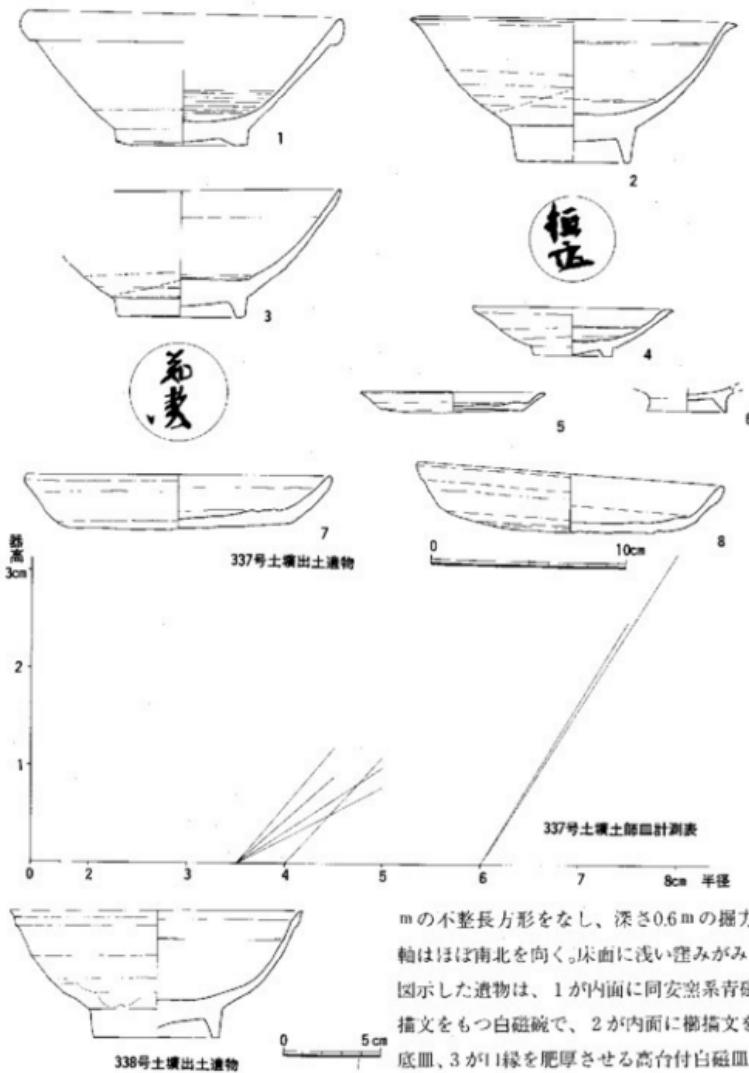


Fig. 90 337号, 338号, 339号土壌出土遺物

mの不整長方形をなし、深さ0.6mの掘方で、主軸はほぼ南北を向く。床面に浅い溝みがみられる。図示した遺物は、1が内面に同安窯系青磁風の櫛描文をもつ白磁碗で、2が内面に櫛描文をもつ平底皿、3が口縁を肥厚させる高台付白磁皿である。ほぼ13世紀代の遺構と思われるが、性格は明確に

しがたい。

**336号土壙** (Fig. 88・89 PL. 39・49) G-II-d区上部検出遺構である。長軸1.3mの不整形で深さ0.45mの掘方をもつ。覆土は黒褐色土で上面には水平に幼児頭大から拳大の礫や遺物が散在している。馬と思われる臼歯も1点出土している。図示した遺物は、1が白磁碗で底部の造作など例の少ないもので未分類である。内面に櫛描文をもち、ごく淡い鉛色のガラス質釉が高台脇までかけられる。2は内面体部に櫛描文をもち、口縁を外に水平に引き出すVI類白磁碗である。3はわずかに高台を削り出した白磁皿II類で、高台内に「恵」の略字であろうと思われる墨書が見られる。4は白磁香炉で内面無釉、外面は腰部まで半透明の灰オリーブ色釉がかかっている。5は白磁小碗の高台である。6は胎の粗い陶器C群に属する捏鉢である。7は糸切底土師小皿、8は糸切底土師杯で、それぞれ径9cm、13cmで、器高1.2cm、2.6cmを計る。9は丸底の研磨上器杯で内面のみをヘラ研磨している。10はヘラ切り丸底の須恵器皿である。ほぼ13世紀代の遺構と思われるが、性格は不明である。

**337号土壙** (Fig. 89・90 PL. 20・39・49) G-II-e区上部検出遺構である。一部中間杭の攪乱によって切られており、全体形は不明であるが、径2m前後の不整円形の深皿状の掘方に径0.7mの正円形の穴を穿っている。井戸側等の痕跡は確認できないが、井戸であろう。遺物は散漫に分布する。図示した遺物は1~3が白磁碗で、それぞれIV、VI、IX類である。2の高台内には「桓□」の、3には判読できない墨書が残されている。4は高台付白磁皿である。5~8は土師皿類で、6の高台付皿をのぞいていずれも糸切底である。計測表に示すように小皿は径9~10cm、器高0.8~1.2cmに集中する。12世紀後半に位置づけられる。

**338号土壙** (Fig. 90 PL. 40) G-I-e区上部検出遺構である。側壁柱などによって大半を切られ掘方は明確でない。黒褐色の落込みで、近世陶磁3点、骨片、土師皿、丸底碗片等、少量の遺物が検出されている。図示した遺物は白磁碗で、内面体部上に沈圓線をもち、口縁がわずかに肥厚する。近世の廃棄物処理用土壙であろうか。

**339号土壙** (Fig. 91 PL. 40) G-I-e区下部検出遺構である。338号土壙に切られ、一部H区にかかる。長軸1.6m、幅1.4mの不整長方形で深さ0.7mの掘方をもつ。出土遺物は少量であるが比較的まとまりがあり、4点の白磁碗小片と、瓦器碗類小片7点、須恵器片4点のほか、図示した遺物がある。1は青磁小碗で見込に茶溜をもち、内面体部に小さなヘラ描文を施す。内面と外面体部下半まで茶味のあるオリーブ釉がかけられ、小さな低い高台を削り出す。潮州筆架山窯など広東省産の青磁であろう。土師皿類は実測図および計測表に示すとおり、ヘラ切底の小皿がまとまっており、ほぼ12世紀前半に位置づけられよう。遺構の性格は明確でないが、1の青磁碗の所属年代を考える上で重要な遺構である。

**340号土壙** G-I-e区上部検出遺構である。1.1m×1.2m程の不整形の遺構であるが掘方

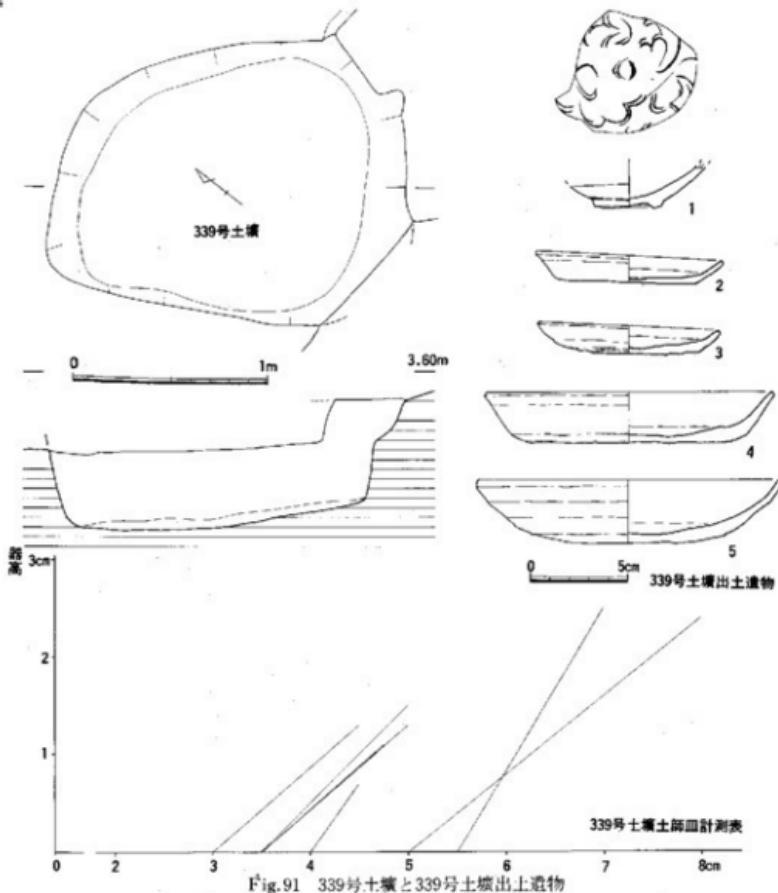


Fig. 91 339号土壌と339号土壌出土遺物

は明確でない。遺物も少量でいずれも小片であり、時期、性格ともに不明。31号溝上に営まれており14世紀半ば以降であろう。

**341号土壌** (Fig. 92 PL. 21・40) G-I-e区上部検出遺構である。長軸1.5m、幅0.8m、深さ0.5mの深皿状の断面形をなし、334号土壌と同じく主軸はほぼ東西方向をとる。遺物は少なく、時期を断定できるものはないが、ほぼ13世紀代におさまるものと思われる。図示した遺物は濃いマリンブルーのガラス玉で、熱破碎を受け一部銀化している。銅銭1枚も見られるが鋪がひどく銭種は不明。土壌草もしくは火葬草であろう。

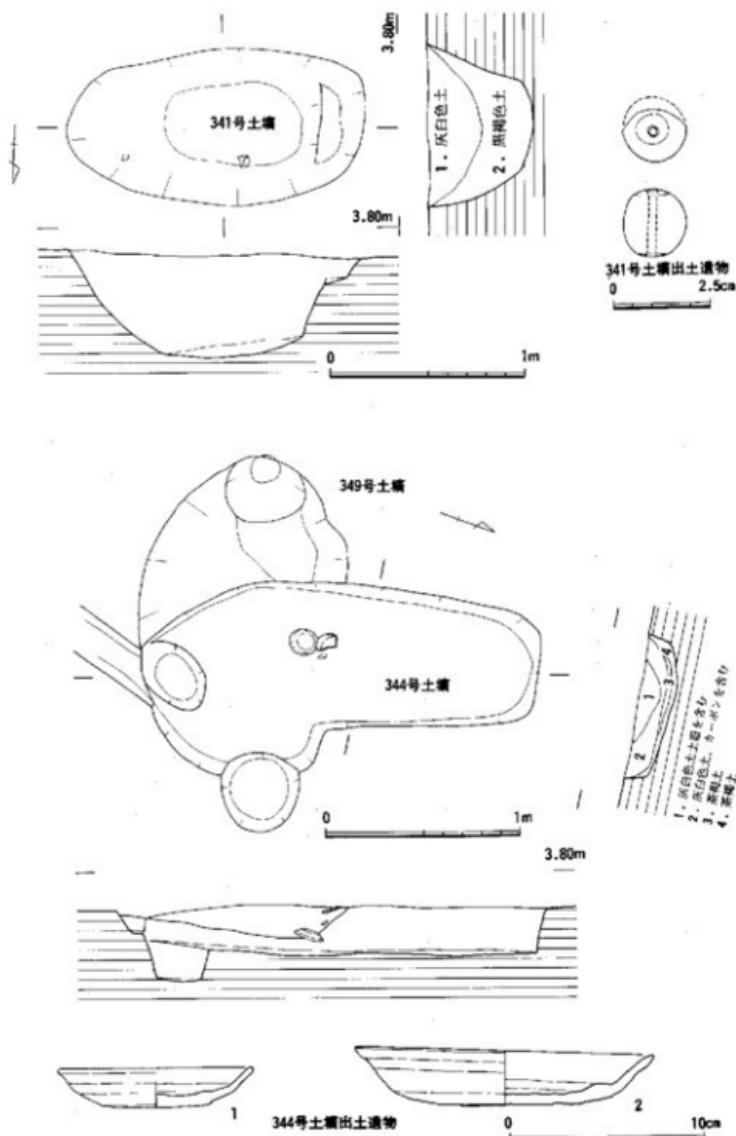


Fig.92 341号, 344号, 349号土壇と341号, 344号土壇出土遺物

**342号土壤** G-I-d 区上部検出遺構である。0.45m×0.4m程度の小さな掘方で0.2m程度の深さをもつ。遺物は微量で時期性格ともに明確にできない。

**343号土壤** G-I-d 区上部検出遺構である。342号土壤と同様の規模・内容で時期・性格ともに明確にできない。

**344号土壤** (Fig. 92) G-I-c・d 区上部検出遺構である。長軸2.05m、幅0.75mの不整長方形で、深さ0.25mを計り、主軸はほぼ南北を向く。遺物は少なく、口径10cm、器高1.8cmの瓦質皿(1)、口径15cm、器高2.7cmの糸切底土師杯(2)のほか、口径9.0cm、器高0.9cmの糸切底土師小皿が見られるのみである。これらの遺物は床面よりやや浮いた状態で出土している。12世紀後半代の土師墓もしくは火葬墓であろう。

**345号土壤** (Fig. 93 PL. 40) G-I-d 区上部検出遺構である。一辺1m強の不定形で深さ10cmの浅い落ち込み状の土壤である。遺物は少量で、図示した口ハゲの白磁平皿のほかに、計測不能の土師皿小破片2点が見られるのみである。14世紀前半代と思われるが性格は不明。

**346号土壤** G-I-c 区上部検出遺構である。側壁柱および現代攪乱に切られ全体形は不明。径0.7m程度の円形をなすか。深さ0.3mで浅い。遺物は全く見られず、時期、性格ともに不明。

**347号土壤** G-I-d 区上部検出遺構である。側壁柱および現代攪乱に切られた全体形は不明。深さ0.8mを計る。遺物は認められず時期、性格ともに不明。

**348号土壤** G-I-d 区上部検出遺構である。側壁柱に切られ全体形は不明であるが、深さ0.9mを計る。遺物は少なく、土師杯破片11点、白磁皿類碗破片3点などが見られるのみである。13~14世紀代の遺構と思われるが性格は不明。347号土壤とはほぼ同形で、同様の機能をもっていたものであろう。

**349号土壤** (Fig. 92) G-I-d 区上部検出遺構である。344号土壤に切られる。浅い皿状の掘方をもつ。須恵器片5点と土師皿片4点が見られる。12世紀代の遺構であるが性格不明。

**350号土壤** G-I-e 区下部検出遺構である。明確な掘方ではないが床面に数個の拳大の礫を置く。出土遺物は少なく、土師皿片2点、白磁碗片5点、龍泉窯青磁碗片1点のほか、須恵器片数点が見られるのみである。時期、性格ともに明確にしない。

**351号土壤** G-I-e 区下部検出遺構で、350号土壤に接する。明確な掘方ではなく、浅皿状の落込みで、床面上に拳大の礫数個が散在している。遺物はやや多く、須恵器壺・杯などの破片が30点あり研磨土器破片6点や白磁碗皿8点なども混在する。時期、性格ともに明確でない。

**352号土壤** (Fig. 93) G-I-b 区上部検出遺構である。井戸側等の内部構造は明らかでないが、近世井戸の掘方であろうと思われる。径1.1mのはば正円形の平面をなす。

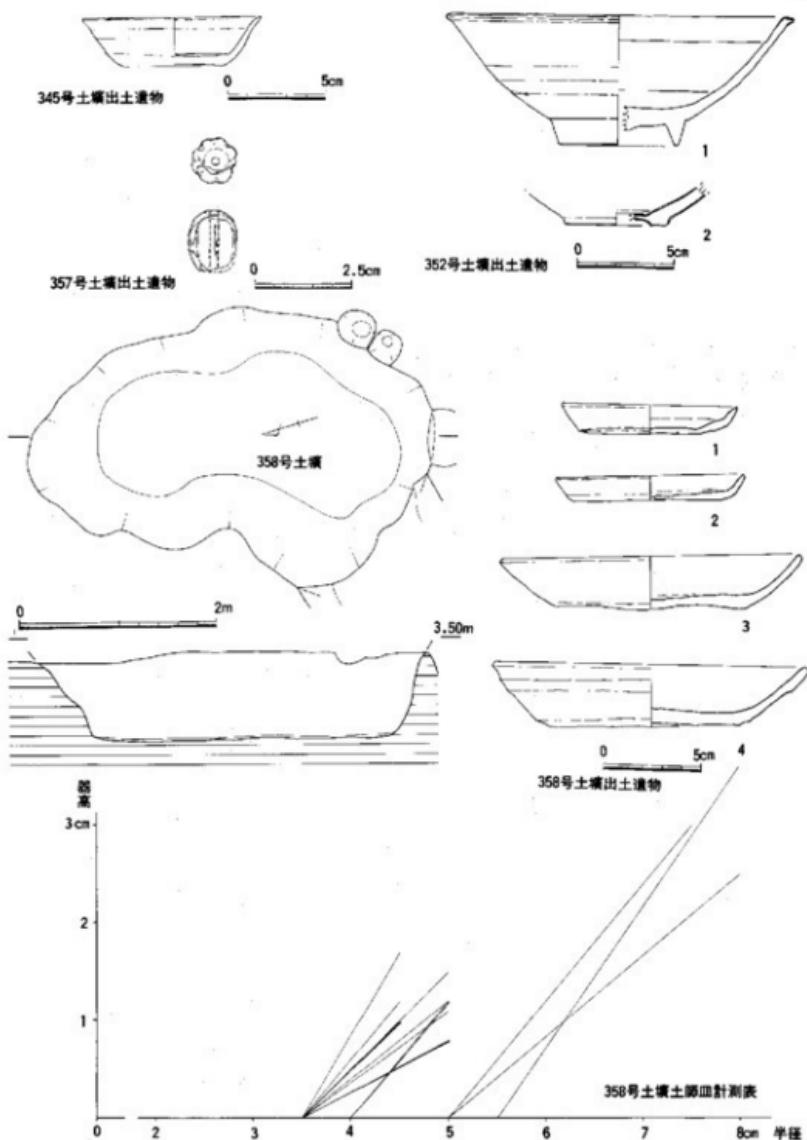


Fig. 93 358号土壤と345号, 352号, 357号, 358号 土壤出土遺物 (1)

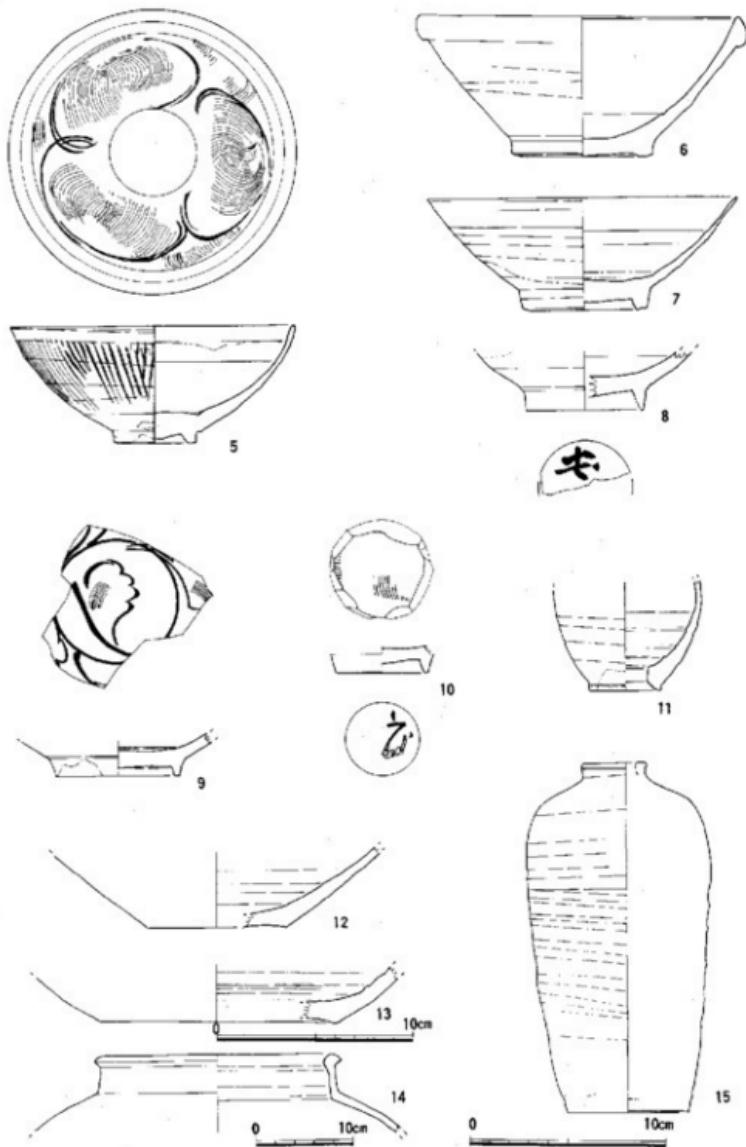


Fig.94 358号土壤出土遺物(2)

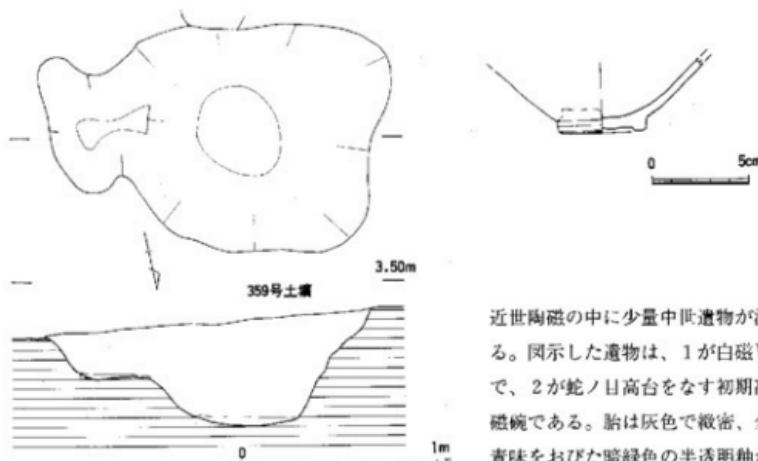


Fig. 95 359号土壤と359号土壤出土遺物  
いる。精製品である。

**353号土壤** G-I-b区上部検出遺構である。径1m程のはば円形をなし、深さ0.2mと浅い。出土遺物は少なく、土師小皿破片1点のほか須恵器小破片3点が出土したのみである。時期、性格ともに不明である。

**354号土壤** G-I-b区上部検出遺構である。長軸1.2m、幅0.8mの長円形をなし、深さ0.3mを計る。遺物はいずれも小片で図示しえないが土師皿類4点、白磁碗7点、陶器5点などがみられるが青磁は含まれない。時期・性格ともに明確でない。

**355号土壤** G-I-a区上部検出遺構である。径0.9mのはば正円で深さ0.3mを計る。中位に疊1個がみられるが、遺物は皆無であり時期、性格ともに明確でない。

**356号土壤** 欠番である。

**357号土壤** (Fig. 93 PL. 22・40) G-I-e区下部検出遺構である。径0.65mの掘方の底に更に径0.2mの小穴を掘る。遺物は微量である。図示した遺物は濃緑色のガラス玉で側面に8本の刻みを入れている。時期、性格ともに不明。

**358号土壤** (Fig. 93・94 PL. 22・40・41) G-II-b区下部検出遺構である。長軸4m、最大幅3mの大きな不整形の掘方で、深さ0.9mを計る。覆土は黒褐色砂質土で多量の遺物が出土している。図示した遺物は1~4が土師器皿、杯で、計測表に示すとおりいずれも系切底で、口径は杯で15~16cm、小皿で9~10cmに集中する。5は同安窯系青磁碗で内外面に櫛描文

近世陶磁の中に少量中世遺物が混在する。図示した遺物は、1が白磁皿類碗で、2が蛇ノ目高台をなす初期高麗青磁碗である。胎は灰色で緻密、全面に青味をおびた暗緑色の半透明釉がかけられるが、高台置付は釉を拭きとつて

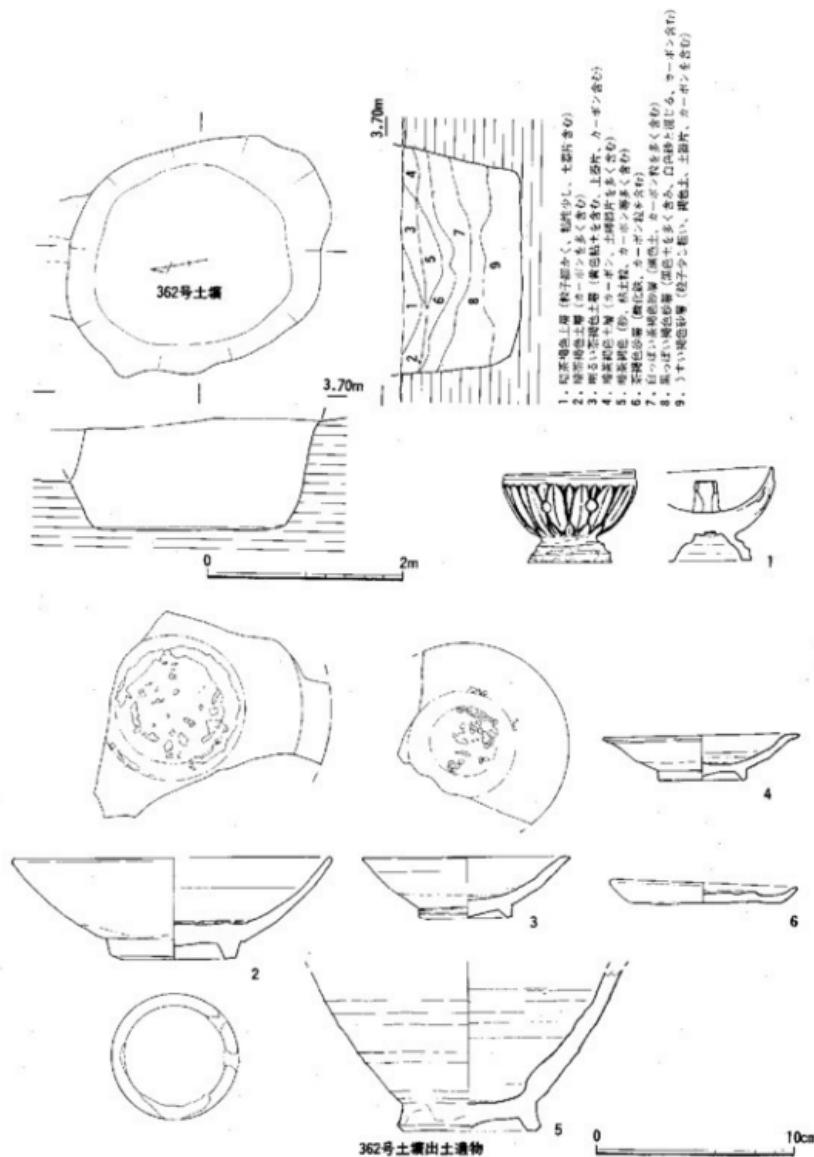


Fig. 96 362号土壙と362号土壙出土遺物

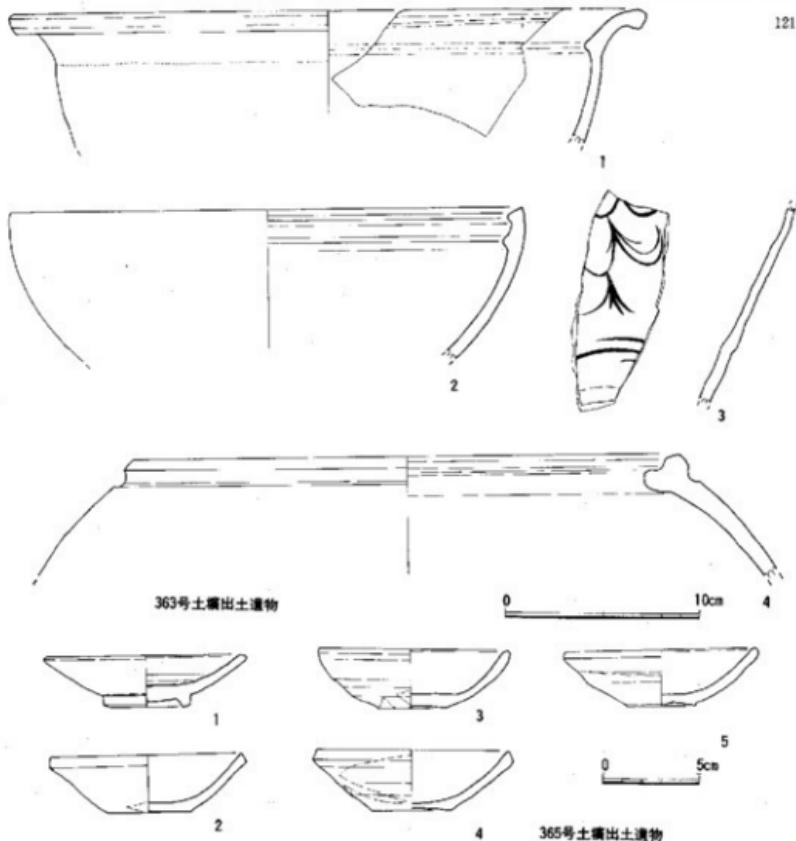


Fig. 97 363号, 365号土壌出土遺物

をもつが、分厚い底部と高台外面までの施釉法は龍泉に近い。6~10は白磁碗である。6がIV類、7がII類、8、10がIに分類されるが、9は模およびヘラ描による文様を施し、高台脇までに施釉するもので未分類である。8、10の外底高台内に墨書が見られるが判読できない。10は縁辺を意図的に打欠いている。11~15は陶器である。11は底部に穿孔したB群壺であるが、むしろ穿孔部を口縁と見なすべきかもしれない。12はB群の鉢、13も同群の鉢であるが胎土と釉は越州窯風である。14は口径25.5cmの大型の短頸壺で、胎は茶褐色で大小の砂粒を多量に含んでおり、白味の強いうぐい色不透明釉がかけられている。15はA群磁灶窯系の小口瓶で、頸部から肩部にかけて黒褐釉がかけられている。その他、動物骨、瓦類もみられ、12世紀後半

の廃棄物処理用土壌である。

**359号土壌** (Fig. 95) G-II-c 区下部検出遺構である。長軸1.7m、幅1.15mの不整形土壌で深さ0.6mを計る。図示した遺物は天目碗で、通例とは底造りが違い、胎上も緻密で磁質である。釉は茶褐色が強く禾口がある。遺物は少なく、時期、性格ともに明確でない。

**360号土壌** G-II-c 区下部検出遺構である。長軸0.7m、幅0.5mの小土壠である。出土遺物は微量で時期不明。柱穴の可能性がある。

**361号土壌** G-II-e 区上部検出遺構である。335号土壠によって切られる。浅い茶褐色砂の落ち込みで明確な掘方ではない。出土遺物は須恵器、土師質土器破片のみが少量で、9世紀代の遺構であろうか。

**362号土壌** (Fig. 96 PL. 2・23・41) G-II-c 区下部検出遺構である。径2.8~2.2mの長円形掘方で深さ1.1mを計る。遺物は多量で埋土全体に散在する。図示した遺物を説明する。1は青白磁の灯台型である。埋土の上層から出土し完形である。やや粗雑な作りの二段になる脚台をもち、碗部は二重に作る。この外側では鍋弁を型造りにしており、透気孔を2箇穿つ。内面底は薄胎で1mm程の厚さしかなく、中央部に灯芯を置く透しをもった筒状施設が見られる。胎は白いがやや粗く、高台内および二層部内部を除きうすい青白釉がかかる。珍貴な資料である。2はⅣ類白磁碗で見込釉を輪状に削り、その露胎部と高台唇付に重ね焼の痕跡を残している。3、4も同様に見込釉を輪状に削る高台付白磁皿である。5は白磁水注または四耳壺で高台は小さい。その他白磁碗79点、同皿23点、同安系窯青磁碗5点、同皿1点、龍泉窯青磁碗7点、天目碗2点、中国産陶器37点、國產陶器2点、瓦107点、須恵器47点などの破片が出土している。土師皿類も169点出土しているがいずれも小片で、計測可能なものは糸切小皿の3点のみで口径8~9cm、器高0.9~1.3cmである。13世紀代の廃棄物処理用土壠である。

**363号土壌** (Fig. 97 PL. 41) G-II-c 区下部検出遺構である。310号土壠（近世井戸掘方）によって切られる。多量の中世遺物に混じって近代遺物も見られるが中間抗擾乱によるものであろう。図示した遺物は、1が鍔状の口縁をもつ磁灶窯系黄釉盤、3も同様の胎をもつ磁破片で、外面にヘラ描文が施され濃オリーブ色の釉がかかる。2は粗い胎の捏鉢、4はY字口縁の大型甕で内面に同心円の印目が残る。12世紀代の廃棄物処理土壠である。

**364号土壌** G-II-a 区上部検出遺構である。F区との区境にかかり全形は明らかでない。近世の擾乱土壠であり中~近世遺物が混在する。東播系と思われる赤っぽく焼けた捏鉢破片も見られる。

**365号土壌** (Fig. 97 PL. 41) G-II-III-b 区上部検出遺構である。長軸3.45m、短軸2.8mの楕円形掘方の井戸で、床面の片側に偏って径0.9mの木桶組構造と思われる水溜掘方が見られる。掘方埋土は白色砂、黒色粘質砂、暗褐色砂の互層である。遺物は少量で、近世磁器

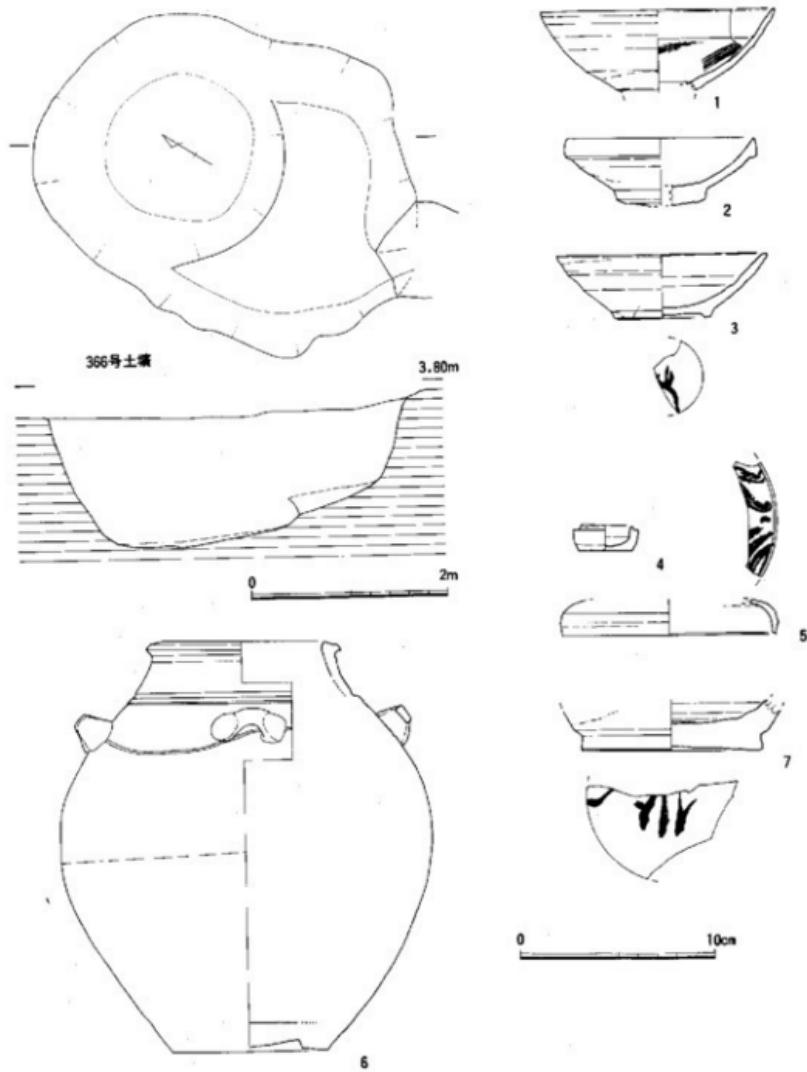


Fig. 98 366号土壌と366号土壌出土遺物

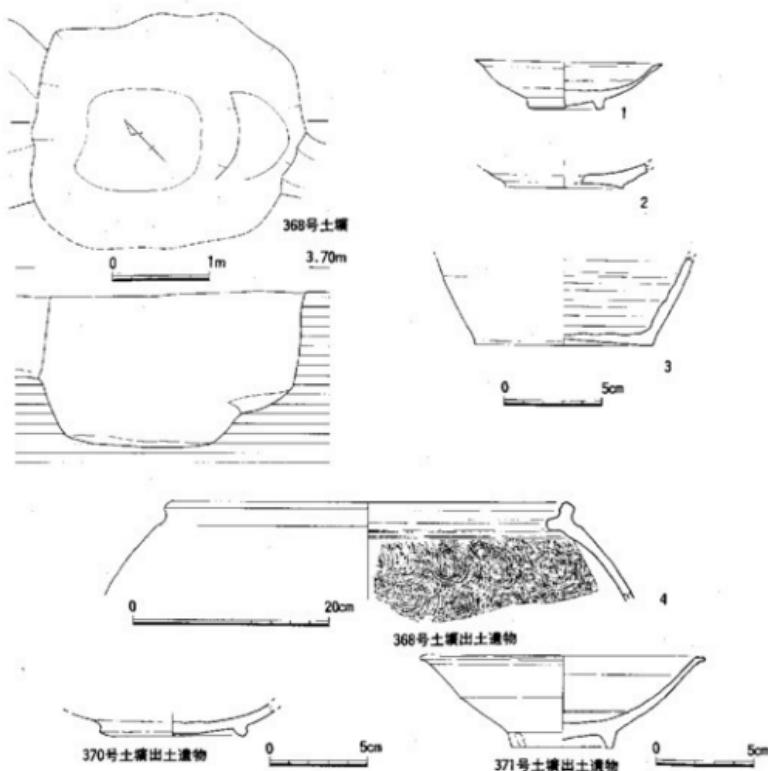


Fig.99 368号土壙と368号、370号、371号土壙出土遺物

がありこの時期に營まれたものであるが、図示したように陶器B群の平皿4点（2～5）がまとめて出土しているのは注目される。中世遺構を掘り抜いたのであろうか。

**366号土壙** (Fig. 98 PL. 41・42) G-II・III-d区上部検出遺構である。長軸4m、幅3.2mの長円形で深さ1.5mの大きな掘方である。中央部は中間坑によって攪乱を受けている。覆土の上層部分には木炭、焼跡、焼土を含む。出土遺物は多いが、図示しうるものは少ない。1が同安窯系青磁小碗で、内面体部に櫛描文をもつ。2は高台付白磁皿、3は高台をわずかに削り出した白磁皿で外底に墨書きが見られるが判読できない。4は青白磁の小型合子身で、5は

青白磁の大型合子蓋である。6は陶器B群四耳壺で内外面全体にくすんだオリーブ色の釉がかけられているが、外面は異物が多数付着しており、高台付に輪状に目跡が残る。7は赤褐色の胎をもつ陶器C群壺で、外底部に墨書が見られるが判読できない。土師皿類は小破片で計測できないが、いずれも糸切底である。13世紀代の廃棄物処理用土壤であろう。

**367号土壤** G-III-d区下部検出遺構である。366号、368号土壤に切られ全体形は不明である。出土遺物は少量で、時期、性格ともに明確にしえないが、切り合いから13世紀頃と考えられている。

**368号土壤** (Fig. 99) G-III-e区下部検出遺構である。310号、324号、土壤によって切られている。長軸2.7m、幅2.2m程の長方形をなすと思われる掘方で深さ1.6mを計る。遺物は多いが、8世紀代から13世紀代までのものが混在する。図示した遺物は、1が白磁高台付皿、2がA群またはB群に属する陶器皿で灰ベージュの胎をもち黒褐色が内外面にかかる。

**369号土壤** G-I-e区下部検出遺構である。31号溝を切る。中間杭によって攪乱を受け、遺構の全体形は明確でない。遺物は微量で鉄片1点が見られる程度である。切り合いから14世紀半ば以後と考えられるが、性格は不明である。

**370号土壤** (Fig. 99) G-III-a区下部検出遺構である。長軸1.2m、幅0.6mの長円形で、浅い掘方をもち上面に人頭人の平石を置く。9世紀頃から13世紀頃までの遺物が混在している。図示したものは黄褐色に焼けた研磨土器である。廃棄物処理土壤である。

**371号土壤** (Fig. 99) G-III-a区下部検出遺構である。308号土壤によって切られる。掘方は長軸1.6m、幅1mの長円形をなす。図示した遺物は白磁碗である。土師皿類17点が出士しているが小片で計測できない。13世紀頃までの遺物が混在し、廃棄物処理用土壤であろう。

**372号土壤** G-III-b区下部検出遺構である。307号土壤に切られる。径0.8m、深さ0.5mの掘方である。出土遺物はほとんどなく、時期、性格ともに不明。

**373号土壤** (Fig. 100 PL. 24・42) G-III-b区下部検出遺構である。形1.0-1.1mのほぼ正円で、深さ0.8mの掘方である。床面よりやや上に、4の陶器B群の四耳壺破片が重なるように置かれている。この四耳壺はほぼ完形に復元され、内面と外面体部下位まで施釉され、口縁部平坦面および内面に目跡が残されている。黒褐色砂質土の覆土中に他の遺物も散在する。1は白磁碗で、高台脇に施釉時の指痕が残っている。2は白磁高台付皿で、内面および外面体部下半まで白い化粧土を施し、その上に施釉している。見込釉は輪状に削りとる。3は磁灶窯系陶器の小口瓶で薄胎である。内外面に巻上げ痕が顕著で、外面体部に墨書が見られるが判読できない。陶器盤などの破片も少量見られる。土師皿類も8点みられるが小破片で図示できない。いずれも糸切である。12世紀後半代の火葬墓の可能性がある。

**374号土壤** (Fig. 101 PL. 24・42・49) G-II-a区下部検出遺構である。365号土壤

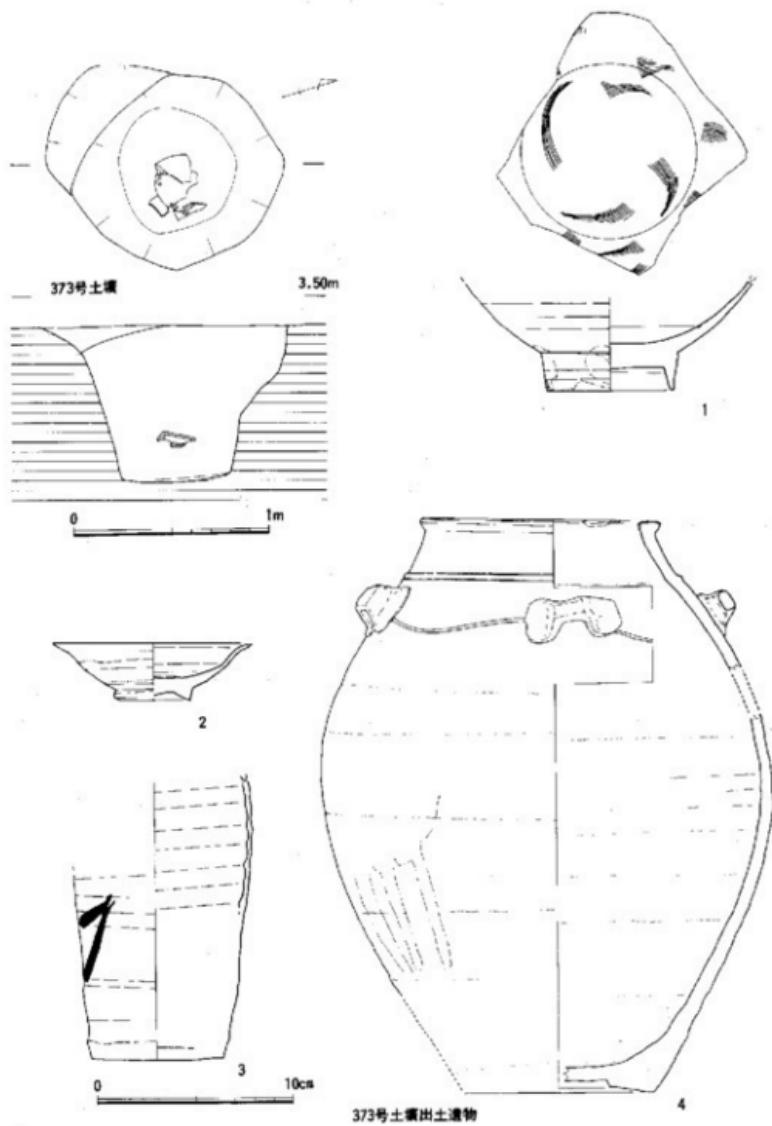


Fig.100 373号土壙と373号土壙出土遺物

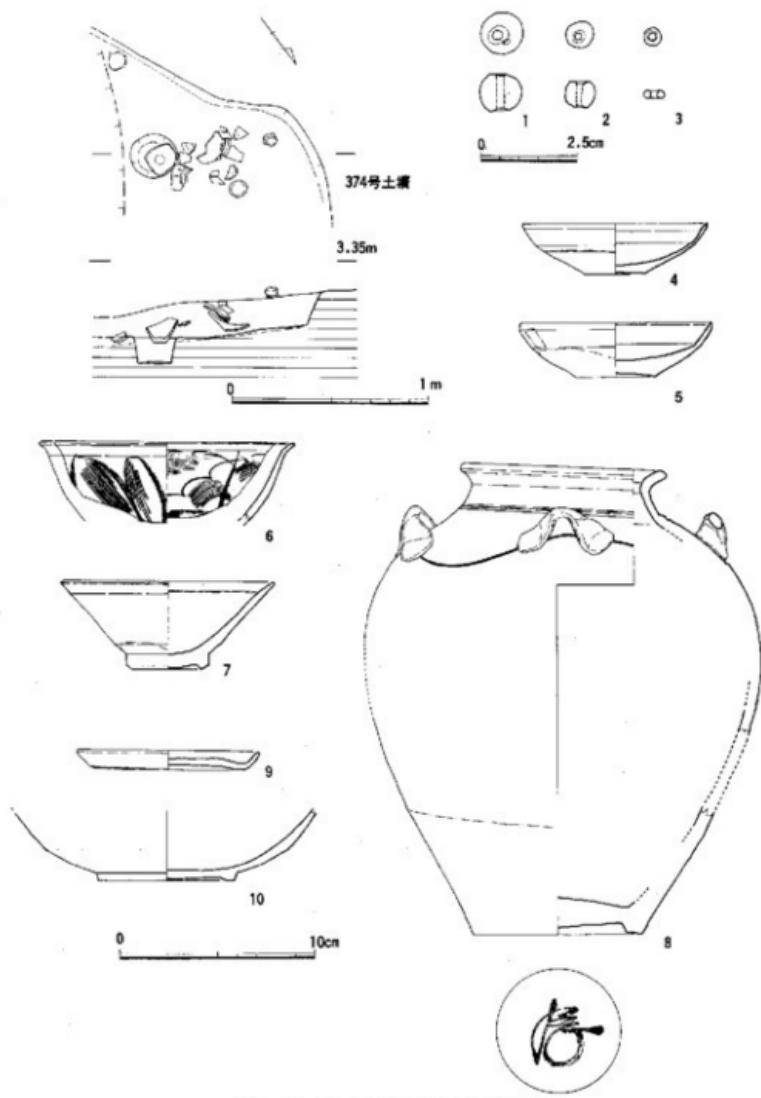


Fig.101 374号土壤と374号土壤出土遺物

I 高速鐵道関係埋蔵文化財調査概要

128

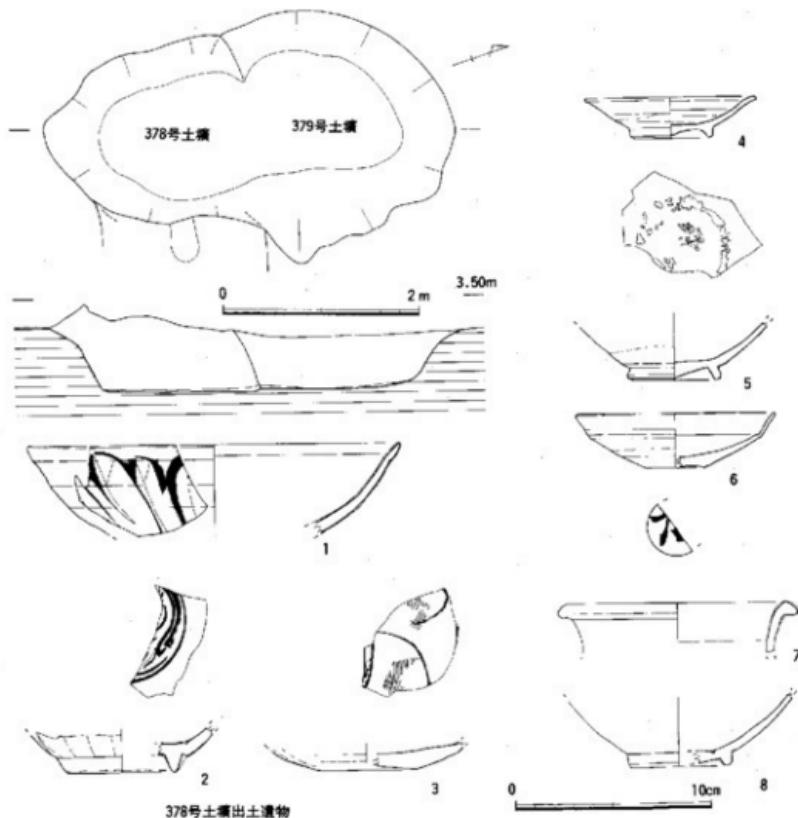
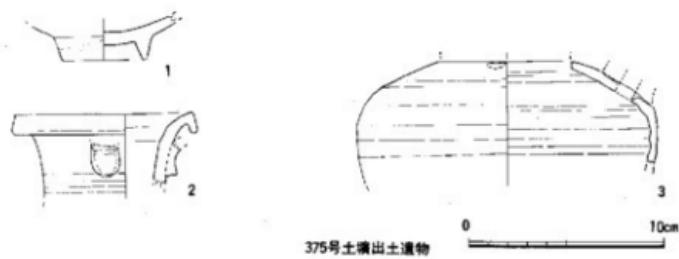


Fig. 102 378号, 379号土塗と375号, 378号土塗出土遺物

に切られ全体形は不明。浅い掘方の床面に小穴を穿ち、8の陶器四耳壺の底部が挿し込むように置かれている。黒褐色砂質上の覆土中に、四耳壺の胴部以上の破片と多くの遺物が散在している。1～3はガラス玉である。1は赤味の強い茶褐色であるが表面は銀化している。串刺し団子状のガラス棒を折りとり、破面を研磨したものである。2はマリンブルー、3はスカイブルーの発色である。4、5は白磁平皿である。6は龍泉窯系青磁碗で、外面に片切彫と櫛描の蓮弁文をもち、内面にもヘラと櫛による施文を行う、古いタイプである。7は口縁部内面にうすい飴色の釉が輪状にかかり、内面および外面体部下半までに黒釉を施す天目碗である。広東省西村窯などに故地が求められている。8はB群の陶器四耳壺で、内外面にオリーブがかった不透明釉がうすくかかる。外底に草書の墨書が見られるが判読できない。9は糸切底土師小皿で、口径9.5cm、器高1.0cmを計る。10は瓦器碗で外面黒色、内外面を研磨している。8の四耳壺を蔵骨器とした火葬墓を、上部掘方で壊したものであろう。12世紀半ば時期が考えられる。

**375号土壤** (Fig. 102 PL. 42) G-II-b区下部検出遺構である。地山白色砂層中に茶褐色砂が浅い皿状に落ち込んだもので、明確な据方ではない。図示した遺物は1が白磁碗、2、3が同一個体と思われる白磁水注である。他に口径8cm、器高0.9cmの糸切底土師小皿1点があり、遺物量は少ない。13世紀頃か。性格は明確でない。

**376号土壤** G-II-b区下部検出遺構である。303号土壤に切られる。長軸2.0m、幅1.6mの不定形掘方で深さ0.8mを計る。出土遺物は少なく、いずれも小破片で白磁碗7点、同安窯系統1点、同皿1点、龍泉窯系碗8点、上師杯片2点が見られるにすぎない。13世紀後半代の廃棄物処理土壤か。

**377号土壤** G-II-d区下部検出遺構である。長軸1.3m、幅0.9mの長円形で、深さ0.5mを計る。遺物は少量で、須恵器杯、土師質土器等の小片が出土しているにすぎない。9世紀代の遺構である。

**378号土壤** (Fig. 102 PL. 42) G-II-a区下部検出遺構である。379号土壤を切り、303号土壤に切られる。掘方の全体形は不明であるが、深さ0.9mを計る。出土遺物はやや多く、各時期混在する。図示した遺物は、1が外面体部に鎬蓮弁文をもつ龍泉窯青磁碗である。2は同じく碗で腰の屈曲が強く、体部外面に鎬蓮弁を、見込にヘラ描き割花文をもち、高台付を除いてガラス質の濃緑色透明釉が厚くかけられている。3は龍泉窯青磁皿で茶味の強いオリーブ釉がかかる。4は高台付白磁皿、5も高台付の白磁深皿と思われあまり例を見ない器形である。見込に輪状の目跡が残る。6は白磁平皿で外底に墨書が見られる。「尤」の半欠か。7は白磁壺、8は青白磁碗で無文、乳潤した淡青色半透明釉が内外面にかかる。口ハゲになる

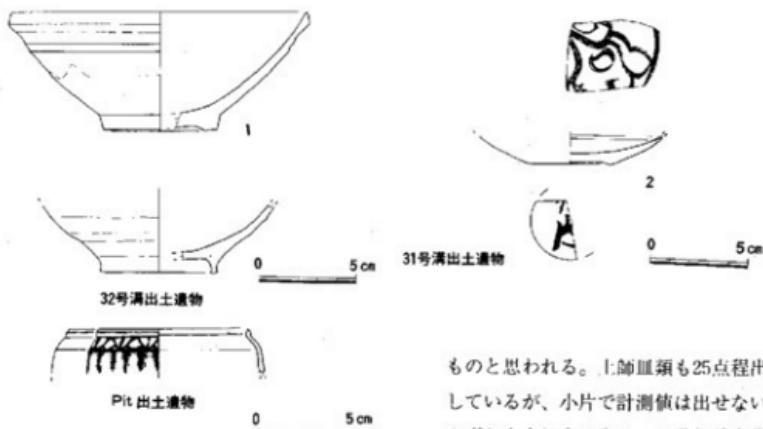


Fig. 103 31号、32号溝、Pit 出土遺物

ものと思われる。上師皿類も25点程出土しているが、小片で計測値は出せない。いずれも系切底である。14世紀前半代の廃棄物処理用土壌である。

**379号土壌** (Fig. 102) G-II-a 区下部検出遺構である。378号土壌に切られる。378号土壌とはほぼ同形同大の掘方であるが、白磁碗、皿、陶器四耳壺、須恵器、土師杯の破片が各1点出土しているにすぎない。13世紀頃かと思われるが性格不明。

**31号溝** (Fig. 103 PL. 25) G-I-d-e 区下部検出遺構である。北側片面にのみテラスをもつ二段掘りの溝で、掘方上面最大幅2.5m、下面幅0.9~0.7mを計る。次年度報告予定のH区途中まで二、三の土壌に切られながら約13mが検出されているが、H区側ではテラスは認められない。検出距離は長くないが、主軸はほぼ東西をとるものと思われる。E区で検出された大規模な12号溝とほぼ直角をなす。素掘りで土留め等の施設や水の流れた痕跡もなく、出土遺物も少ないとから、極めて短期のうちに埋没しており地割等の区画を示す溝ではないかと思われる。図示した遺物は、1が口縁を肥厚させる白磁碗で、2が内面にヘラ描の花文をもつ白磁平皿で、外底部に墨書きがみえるが、判読できない。

この他白磁碗Ⅲ類1点、皿類1点、龍泉窯青磁小碗1点、陶器6点、須恵器16点などの小片がある。土師皿類には計測可能な大型の杯があり、系切りで口径16cm、器高2.7cmを計る。340号、341号、369号土壌等に切られており、12世紀後半から13世紀前半頃が考えられる。

**32号溝** (Fig. 103) G-II-c 区下部検出遺構である。363号、310号土壌に切られ3.8m程が検出されている。幅0.3m、深さ0.25m程のV字形の断面をなす浅い小規模な溝で、やや湾曲するものの主軸は真北に近いが、わずかに2°程東偏する。西側に掘立柱建物群と思われるピット群があり、これらの雨落溝の役割を果たしたものであろう。出土遺物は図示した高台付の研磨土器の碗のほか、土師皿類の小破片6点が出土しているのみである。12世紀後半から

13世紀の時期で把えられる。

**33号溝 G-II-e 区下部検出遺構** ある。幅0.95m、深さ0.5mで断面V字形をなす。両端を362号、366号土壤に切られ、わずか1.5mの長さしか検出されておらず、確実に溝とは断定できない。主軸方向はほぼ南北をとる。出土遺物は土師皿小破片が6点みられるのみである。切り合いでから12世紀後半から13世紀にかけての時期が考えられる。

**ピット群 (Fig. 103)** G-I 区と II-c 区を中心に、上下両面で多数の柱穴と思われるピットが検出されている。これらのピットは大型の土壤等の見られない部分にのみ検出されているもので、本来は広く分布するものであり、検出されていない区域は後世の遺構掘込等により消失していると考えられる。31号溝には平行または直交する方向で柱筋が並ぶように見えるが、個々のピットについては時期の認定が困難で、かつ長期にわたることが考えられ、ピット間の同時性を把握できない。そのため敢て掘立柱建物の推定復元は行っていない。遺物は微量で小破片かつ混在が多い。Fig. 103に示した遺物は、G-II-c 区下部検出構造の383号ピットから出土した青白磁小壺で外面に菊弁を刻み、口縁の口ハゲ以外は半透明のスカイブルーの釉がかかる。

## 2) G区遺構外出土の遺物 (Fig. 104~109 PL. 1・42・43・49・50)

**青磁** 1~3は龍泉窯系碗I類、4は同双層碗の底である。5~8はI類碗に対応する皿である。5は古式な文様を有しており、釉にはなまこが少し出ている。9は青緑色の、佔に近い釉がかかる。10は龍泉窯系青磁香炉。口は円いが身は隅丸方形で、四面のパネル状印花文が見られる。釉は緑を帯びたガラス質で厚くかかり、冰裂がある。明代中期の青磁か。12~16は同安窯系青磁。15は黄色っぽい冰裂釉のかかる大鉢で、フィリッピンなどではよく出土例がある。17~21は龍泉窯・同安窯系に属さない青磁のII類である。22は越州窯系青磁、23は高麗鐵絵青磁の瓶の肩、胎土は灰色で砂をかみ粗い。淡いオリーブを帯びた透明釉がかかる。24の印花皿は高麗青磁と思われる。外底を全面に施釉し、白い目を3個置いている。釉は青緑色不透明で、水裂がある。

**白磁** 25はIV-3、見込に重ね焼きのため釉をはいだ跡がある。27はVI-1類、土は黄白色、釉も同色で不透明、冰裂がある。酸化気味で焼成不足である。他にVI類、VI類の碗、高台付皿I-2、同II類と平底皿VI類などで、墨書のある遺物を中心に紹介した。しかし28の「鄭口」、30の「□忠」と39の花押の他、判読は困難である。また44~46は胎土灰色やや粗、釉は青みを帯びた透明釉で、青灰色に見える杯である。施釉は下半露胎で、釉の上に砂をおいて重ね焼をしている。中国物のように思われるが、なお例の増すの待ちたい。

**青白磁** 49~51は青白磁としては珍しくない皿、および合子である。53~55は同一個体と思わ

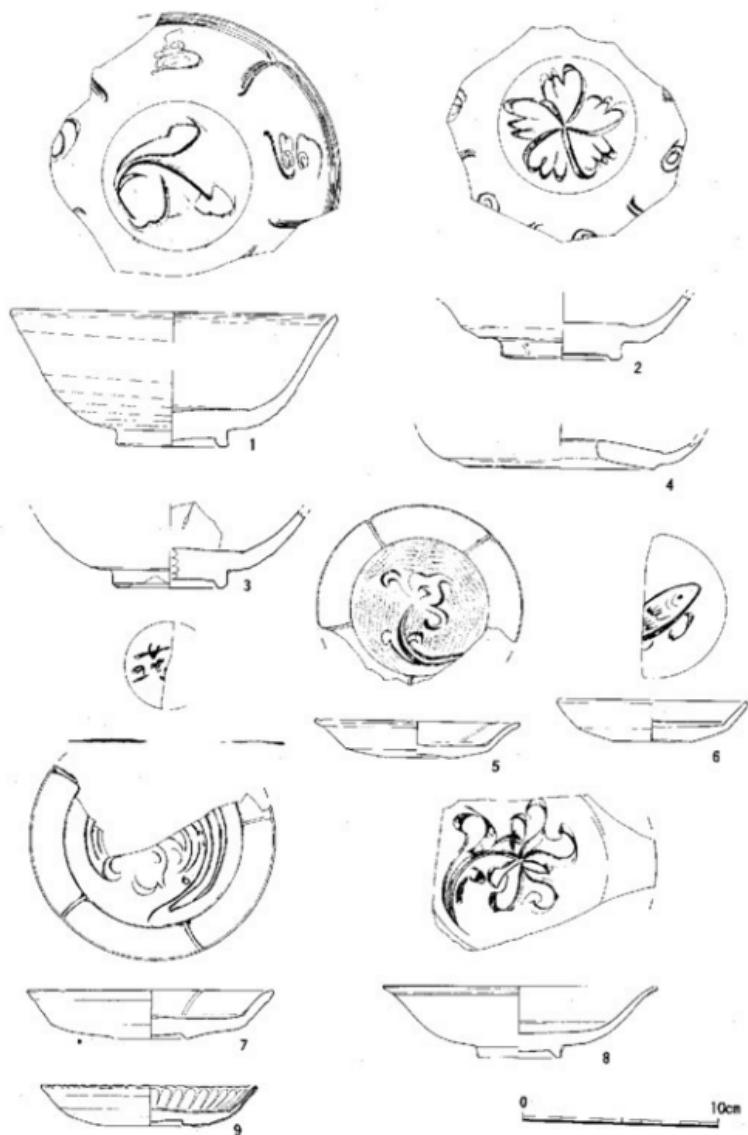


Fig.104 G区 遺構外出土遺物(1)

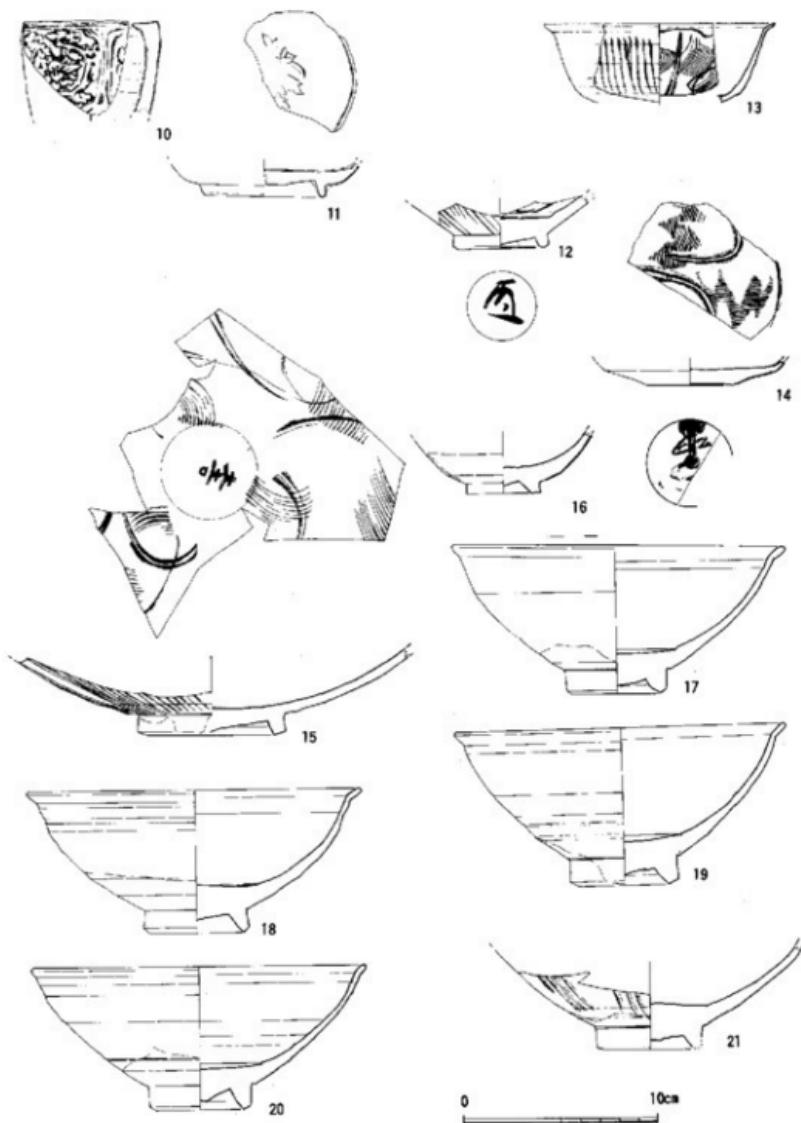


Fig.105 G区 遺構外出土遺物 (2)

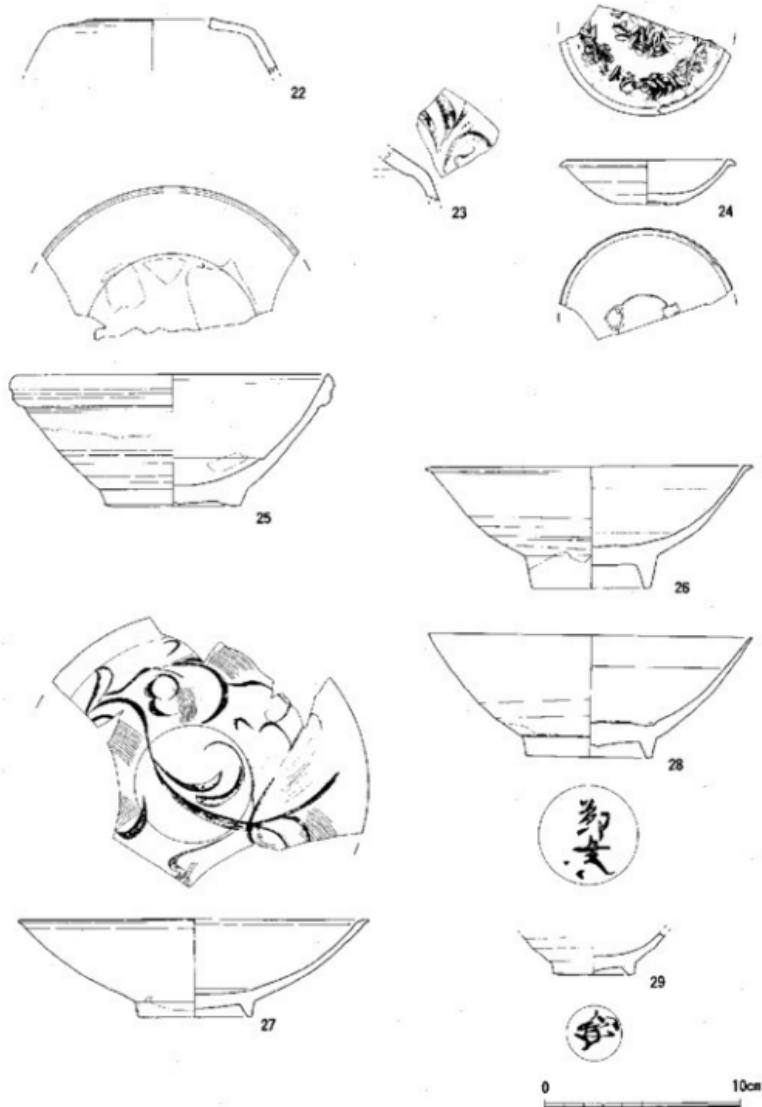


Fig.106 G区 遺構外出土遺物(3)

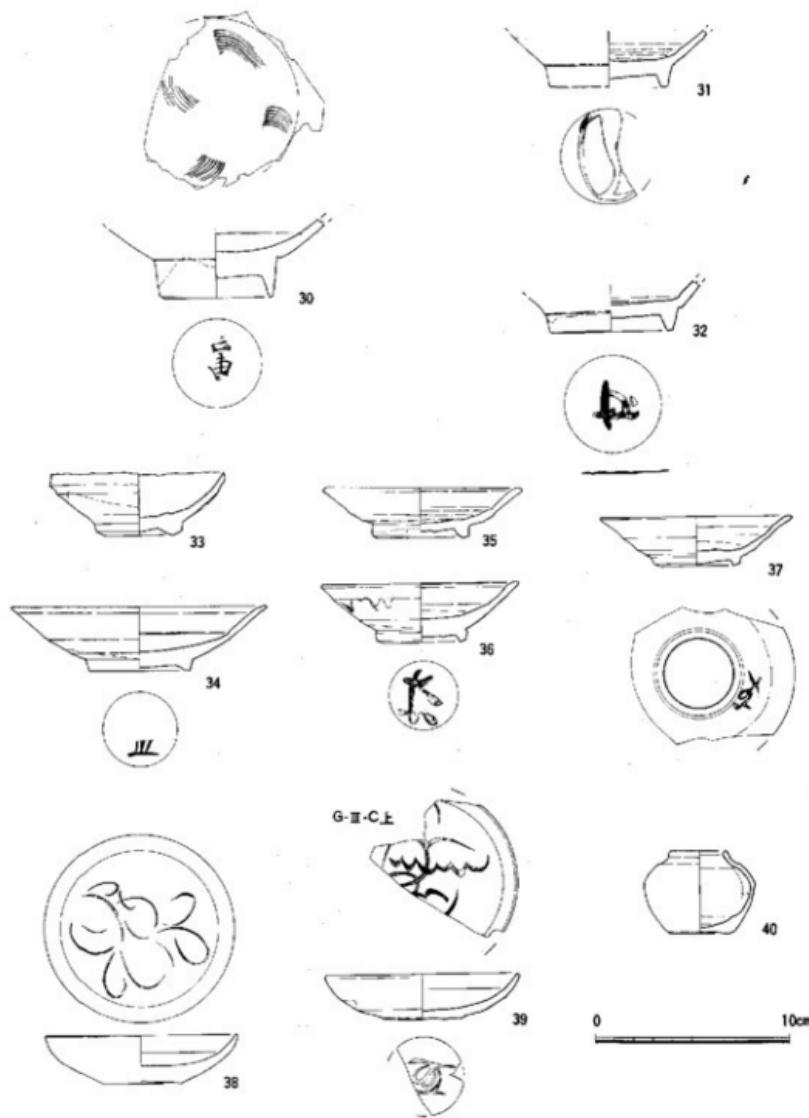


Fig.107 G区 逸構外出土遺物(4)

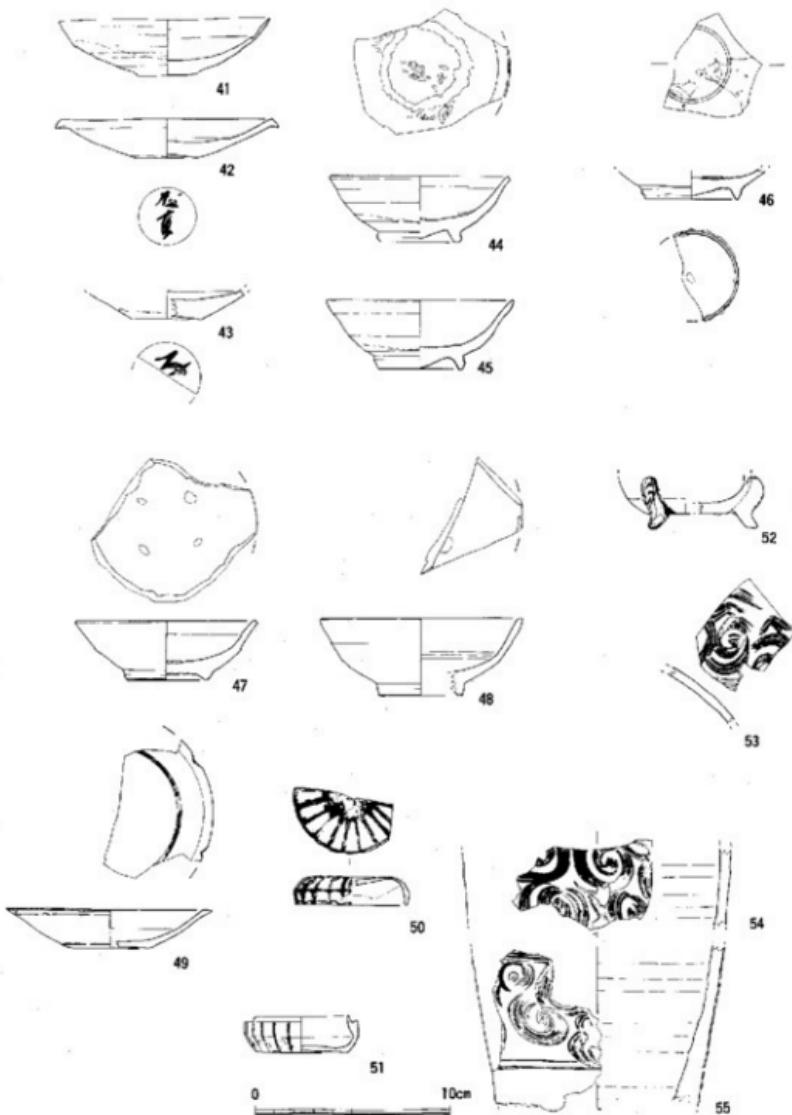


Fig.108 G区 造構外出土遺物(5)

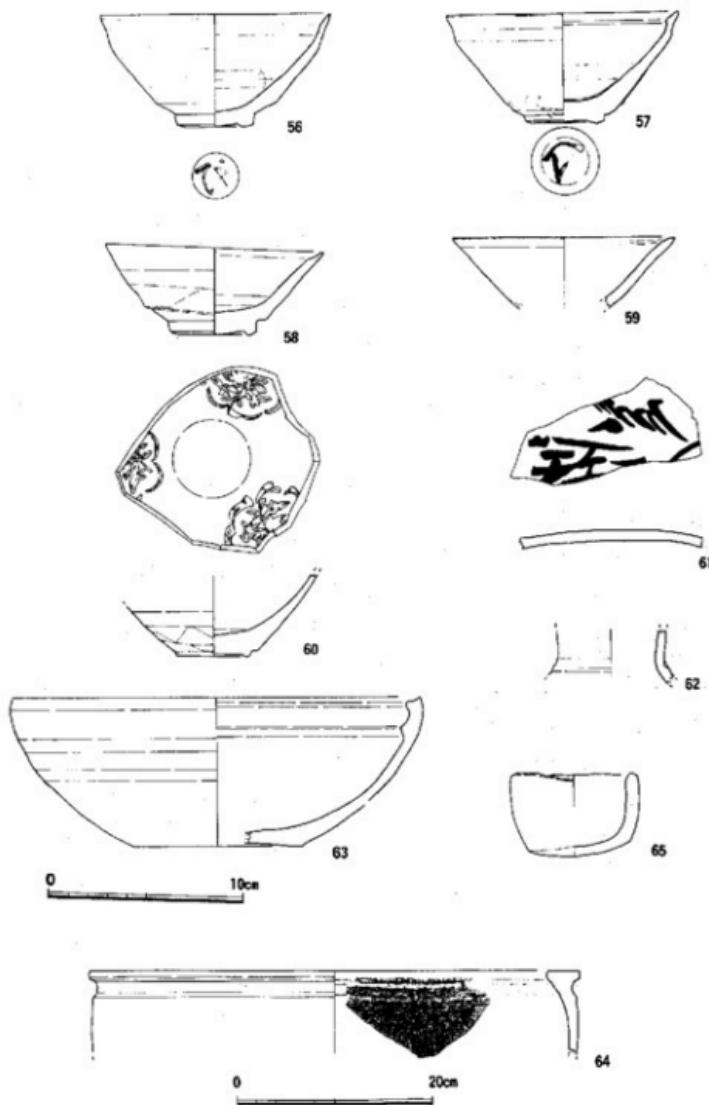


Fig.109 G区 遺構外出土遺物(6)

れる厚手の破片で、13~14世紀の梅瓶である。

**黒釉磁** 56は胎土暗灰色、57はやや薄めで灰色を呈し細かい。露胎は両者とも薄茶色で、57には一部下釉をかけたと思われる茶色の部分が残っている。釉は黒く、表面に茶色の禾目ができるかかっている。建盏タイプの茶碗である。58、59は広東省広州西村窯、もしくは潮州窯製品と思われる茶碗である。胎は灰色、黒褐色のガラス釉がかかるが、口縁では黒褐色釉は削りとり、透明釉をかけている。60は江西省吉安のいわゆる吉州天目である。胎は肌色がかったベージュ色で、ザラついた感じがある。器内及び器外の高台近くまで黒釉をかけ、釉の及ばない部分には更に一度薄い釉汁をかけていると思われる。その後に狭く平坦な高台脇を削り出し、外底を浅くしている。器内壁に窓でかこんだ花文を3箇配している。文様は同一モチーフを切り紙細工で切りとり、薬灰をしませて黒釉の上に貼りつけ焼いたものであろう。62は60に比して濃い色の胎であるが、印象はよく似ている。天目のような黒い不透明な釉がかかっている。瓶の頸であろう。

**李朝陶器** 47、48は李朝の陶器と思われる。いずれも砂目の杯であるが、47はもろい黄白色の砂まじりの胎に青い透明釉がかかり、48は暗灰色の胎にうすく透明釉がかかっている。

**陶器** 61は黄釉掲彩盤。胎は褐色の細かい土に同色の砂粒が見える。通常のA群の土ではなく、c群の土である。釉は不透明で灰オリーブ色である。鉄絵文は文字の一部と思われる。63は灰褐色の土に、白い大粒の砂粒を多量に含んだ無釉の鉢。すりこ木を用いて擂鉢として用いているため、器内は磨滅して平滑になっている。64、T字口縁の大形甕である。c群の陶器であるが遼元炎で焼かれ、釉は不透明灰オリーブ色、胎は白黒の砂粒混じりですっかり暗灰色に焼けている。内外に細かいたき目が見える。

**土師質土器** 65は手捏ね整形の小型容器である。内外面ともに黒褐色に焼け、外面にはススが付着している。滑石製品にも同様の器形が見うけられる。煮沸用であろう。

## 6.まとめ

以上、博多遺跡群における地下鉄1号紫園町工区E・F・G区の調査概要を述べてきた。ここで調査成果について若干まとめておきたい。

今回の調査地点は、現標高5.0m前後であり、最下遣構検出面（地山白色砂層検出面）の標高は3.2~3.5m前後であり、地表下1.2m前後は、近世以降の搅乱や建物基礎によってほぼ壊滅状態であって、中世遺物包含層は非常に薄い。これは上呉服町付近の標高6m程の地点である博多駅築港線関係調査区などでの遺物包含層の厚さ（地表下4m前後）に比べると雲泥の差である。このようなうすい包含層をもちらながら、遣構自体は多く、しかも旧博多駅前の繁華街であったためか近現代の搅乱土壌も多く、遣構自体の検出状況は良好でないといわざるを得ない。

遣構は廃棄物処理用と思われる土壌と井戸掘方が大半を占めている。これらの遣構からは多くの遺物が出土しているが、单一時期の一括遺物を出土する例は少なく、多少の差こそあれ、掘削時以前の遺物が混入しているのが通例である。また遺物を殆ど含まない土壌もあり、性格を把握できない。今回の調査区では明確な埋葬遣構は少なく、わずかに2基程の土塚墓らしきものが検出されたのみである。時代的な吟味は今のところ行っていたいが、これは、A~D区において比較的多くの墓が検出されていることも含め、中世各期において、土地利用の違いを示すものであろう。F区で馬の埋葬遣構が検出されている（237号土壌）。馬骨についてはこれまでの出土例では埋葬遣構をもつものはなく、殆どが溝から散在して出土するものである。幼馬に対する哀惜の情によるのであろうか。

これらの遣構によって寸断されつつも、溝遣構が検出されている。これまでの路線内調査区A~D区でも溝が検出されており、雨落ち溝等の小規模な溝を除き、まとめてみたのがFig. 110である。このうちA区3号溝は、南東側立上りしか検出されていないがFig. 2の地形図に見られるように、この付近から鶴田神社方面に開析している谷状地形が見られ、その自然谷の一部と思われ厳密には溝といい難い。A区からB区にかけて、調査区を斜断する5号溝は、主軸を真北よりN-88°-Eのほぼ東西方向をとる。この溝は上下2層に分けられ、上層では14世紀前半代の糸切底土師皿類がほぼ完形の状態で大量に廃棄されており、これが溝廃絶の時期を明確にしている。また、溝最下面では遺物量は上層より少ないものの、糸切底を全く含まない、ヘラ切底のみの土師皿類が出土しており、この溝の造営年代は少なくとも11世紀後半代に求められる。B区6号溝は現町筋に直交し、N-41°-Eの方向をとる。出土遺物には16世紀終末期の古唐津があり、豊臣秀吉によるといわれる太閤町割（1587年）の際のものかと思われる。C区7号溝は、多くの遣構に切られ必ずしも良好な状態ではないが、主軸方位は真北よりわず

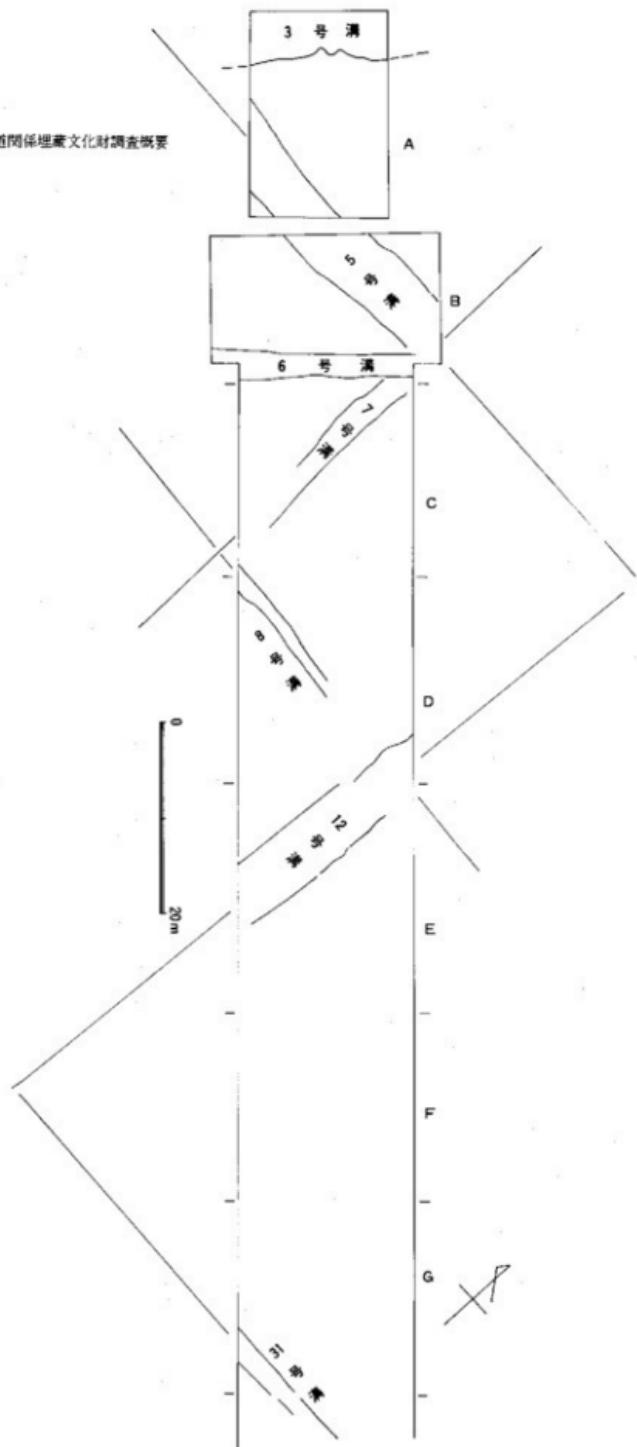


Fig.110 A~G区内検出主要溝概念図(1/600)

かに西に傾き磁北方向に近い。5号溝同様14世紀前半代の土師皿類が上層部分に多量に見られ、廃絶年代もこの時期に求められる。D区8号溝はやや小規模な溝である。わずかに歪みを見せるが、主軸方位は真北の東西方向よりわずかにずれ、7号溝とは約100°程の角度をなす。この溝の最上面には、火葬頭骨110体分の集積する遺構があり、この遺構は1333年、菊池武時の鎮西探題襲撃の際の菊池方將兵の首級である可能性が強く、8号溝の廃絶年代も14世紀前半代である。D区からE区にかけて検出された12号溝は、5号溝とほぼ同人でかなり大規模なものである。主軸は真北にはば近く、5号溝とはば直角をなす。この溝も14世紀前半代に廃絶されたものであろう。G区31号溝は、やや小規模な溝であるがH区側に伸び、H区においては数回の作り変えが観察される。方位はほぼ真北に対し東西方向を向く。12世紀後半から13世紀前半頃の時期が考えられる。これらの路線内で検出された溝は、14世紀前半代以前に當まれているほぼ東西南北を向くものと、現町割と平行もしくは直交する16世紀終末以降のものとが見られた。東西南北を向く溝は規模の大小こそあれ広く分布しており、鎌倉期以前の博多の地割を示すものといえよう。また、太閤町割以前の博多の町割を示すものとして、永禄6(1563)年以前に描かれたとされる「聖福寺古絵図」がある。この古絵図は、聖福寺を中心に寺内町まで描かれており、明確な方位こそ示されないが、基本的な方向については、のちの太閤町割の町筋に近いものである。近年、博多駅築港線の調査において、太閤町割を良好に残すという現町筋より、わずかに西偏する15、16世紀代の溝が確認され、また東に隣接する博多第35次調査地点では、幅6m程の基幹道路と思われる道路遺構が検出されており、道路方向も築港線検出溝等と同一方向で、現町筋より20°程西偏する。道路は両側に側溝をもち、たび重なるかさ上げ工事により道路面は版築のような層の堆積を見せている。また側溝も少なくとも6回の改修、築を行っている。この道路遺構の初源は今のところ不明であるが、14世紀から16世紀末までは継続使用されている。この方向の道路は、14世紀以前の東西南北の町筋と、太閱町割との間を埋めるものであり、また、「聖福寺古絵図」と同一期の町筋を示すものとして極めて重要な知見である。

出土遺物は多種多様である。遺物の数量および比率については後日を期したいが、既に報告した店屋町工区の場合と概ね同様であろう。弥生時代の遺物は殆ど認められず、周辺で発見されている臺棺墓地の分布から見ると東長寺付近から柳田神社付近にかけて開析する谷状地形の谷頭部周辺にのみ集中するようである。古墳時代の遺物は少ない。前方後円墳が確認された第28次調査地点に近接しているが、関連遺構、遺物は見られず、少量の須恵器、土師器等が見られるのみである。奈良時代の遺物は調査区全域から出土している。主として8世紀前半から半ばにかけてのものである。これらの遺物は後世の擾乱を受け、プライマリーな状態で出土する例は少ない。わずかに168号土塚が見られるのみである。外底に「福」の墨書をもつ須恵器杯

も見られた。周辺調査地点でもかなりの遺物が出土しており、また石帯、帶金具等も各地で見られ官衙的性格の建物の存在も予想されている。平安時代前中期の遺物は少なく、遺構は確認されない。11世紀後半から遺物が増え、12~13世紀代では膨大なものとなる。とりわけ中国製陶磁の量は圧巻である。博多の貿易都市としての面目躍如たるものがある。この時期の磁器には外底部に墨書をもつものが少なからずあり、今回の調査地点では、Fig. 7に示す花押墨書が7点まとまっており、この他Fig. 83のような「恵」の略字と思われる墨書3点、「林」1点、「四郎」1点、「丁綱」1点などが目立つ。この花押墨書は店屋町工区C、D区に2点見られるが、「丁綱」墨書を多数出した第4次調査地点には認められない。これらの墨書の意味については、亀井明徳氏によって「陶磁販売の所有権者を区別する表示である」という明確な解釈がなされている。(『綱首・綱司・綱の異同について』日本貿易陶磁史の研究 1986)。14世紀以降の貿易陶磁については量、質ともに衰える傾向を見せるが、博多駅築港線調査区をはじめとする上呂服町付近では、かえって量、質ともに豊かなものがあり、博多遺跡群における中心的な区域が、時代とともに移っていくのかもしれない。

以上、簡単にまとめてみたが、今回報告した地点は博多遺跡群全体からするとわずかな面積でしかない。その成果については周辺地点の調査結果を踏まえて総合的に見る必要がある。発掘調査件数は増え、それなりの成果は得られているが、まだまだ充分な体制とはいいがたい。また、遺物・遺構の多いこともあるが、整理報告が進んでいない部分も多い。今後いっそう整理報告の体制も整え、博多遺跡群の調査成果の総合的な把握をすることが必要であろう。

# 写 真 図 版

## PLATES

※縮尺不同  
遺物番号は挿図と一致する。



吉州天目碗 G 区道桥外出土 底径3.77cm



青白瓷灯明台 362号土壤出土

口径 6.75cm

底径 4.23cm

高 4.72cm



博多道路群周辺航空写真



舊金山市 (舊金山市街)



1. 下水管移設立会調査風景



2. 中間杭布設立会調査風景



1. 神園町工区遠景（北から）



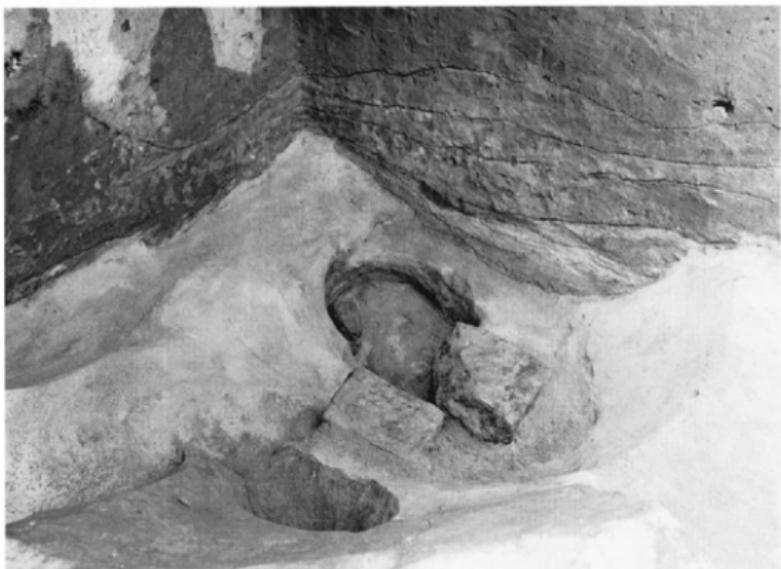
2. G区調査風景（南東から）



1. E区調査風景（東から）



2. E区12号溝調査風景（南から）



1. 103号土壤 (東から)



2. 113号土壤 (西から)



1. 114号土壤（南西から）



2. 117号土壤（北から）

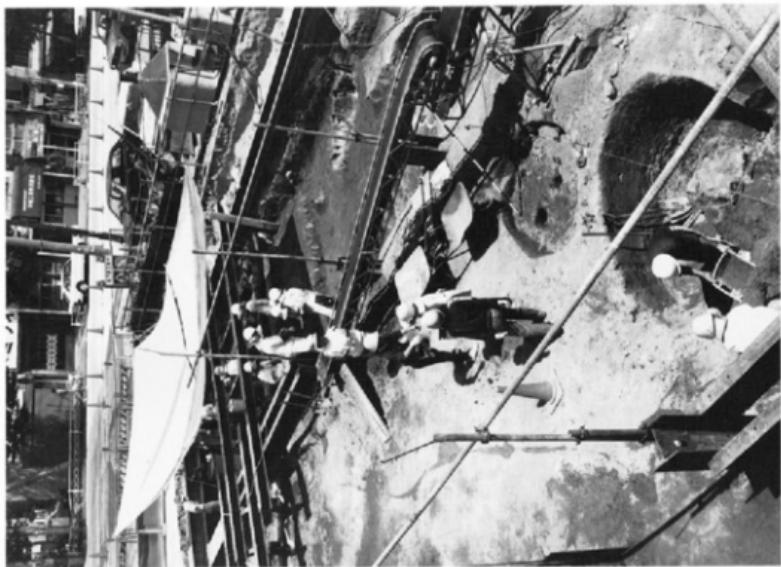


1. 12号溝全景（南から）

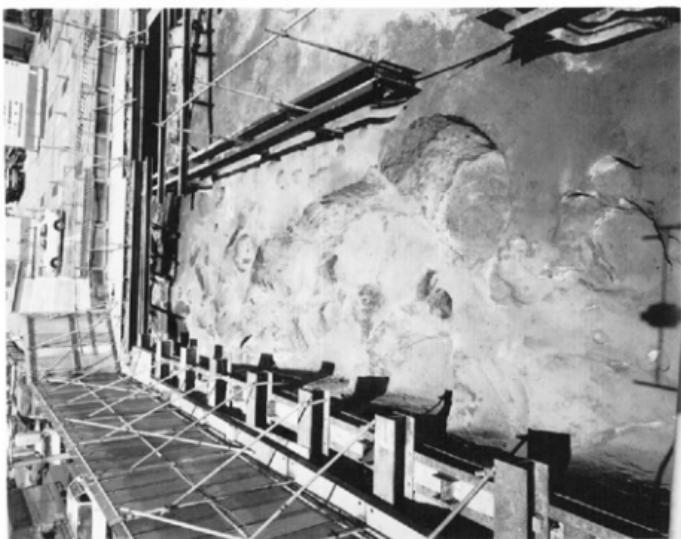


2. 12号溝土層断面（南から）

1. F区調査風景（南から）

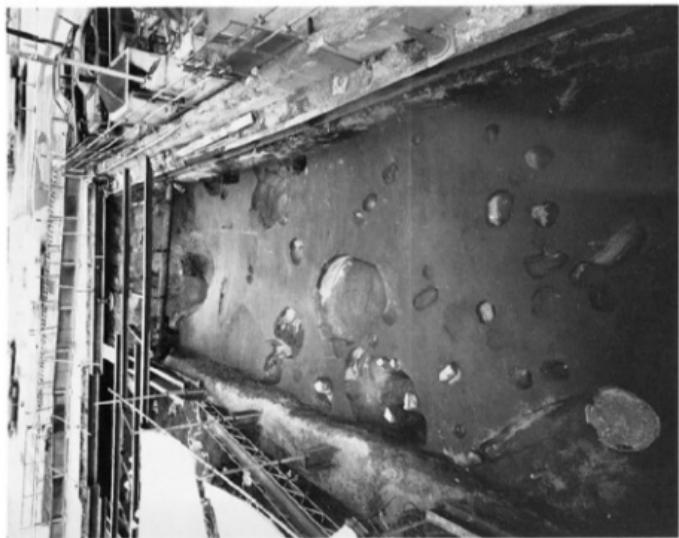


2. F-II区道構全景（南東から）





1. F - I 区道橋全景 (南東から)



2. F - II 区道橋全景 (南東から)



1. F一四区21号溝（北東から）



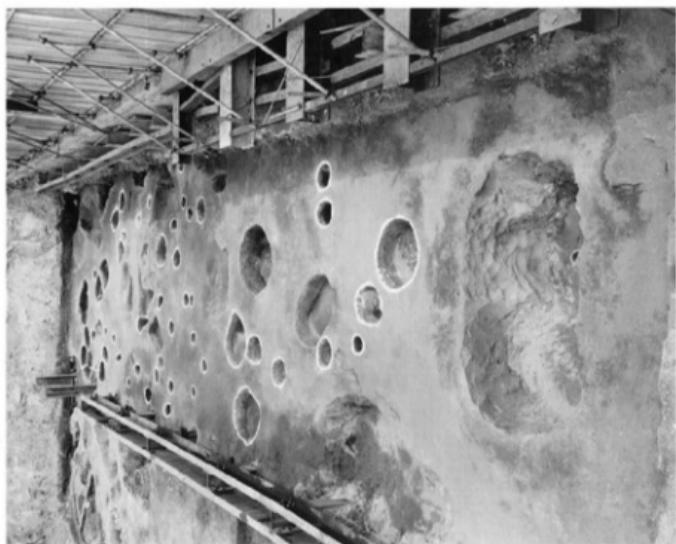
2. 237号土塙馬骨検出風景



1. 237号土壤上面、馬骨出土状況（南西から）



2. 237号土壤下面、馬骨出土状況（南西から）



1 G-I 区上部爆破全貌 (北面から)



2 G-I 区下部爆破出遭機全貌 (北面から)



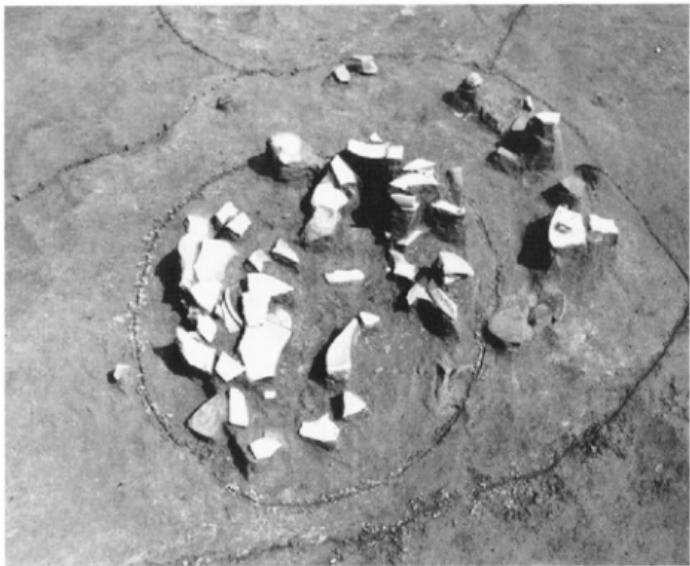
1 G-II区下部構造全般 (北西から)



2 G-III区下部構造全般 (北面から)



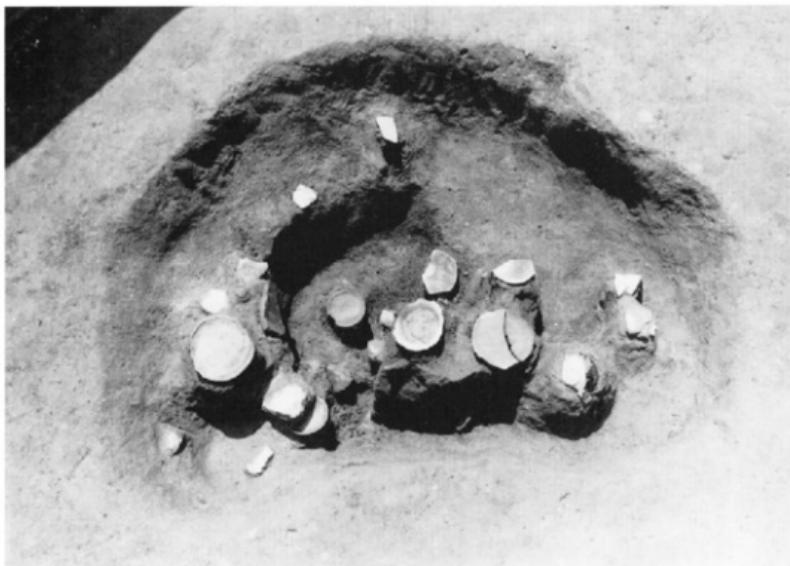
1. 311号土壙 (南西から)



2. 313号土壙 (南から)



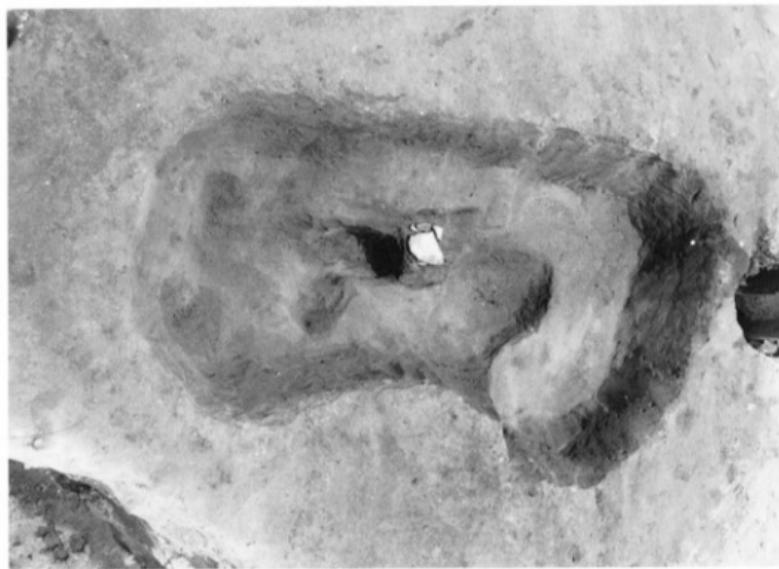
1. 316号土壤（北から）



2. 332号土壤（北から）



1' 33号土器 (西水口)



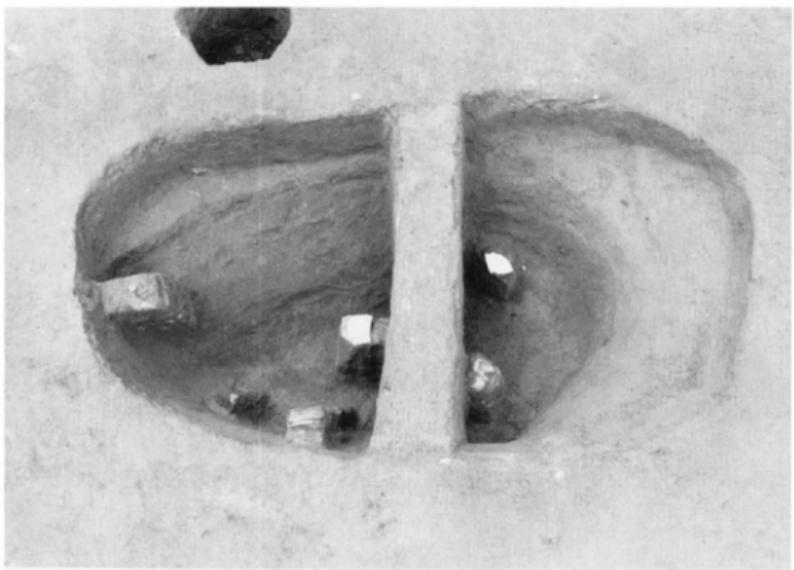
2' 33号土器 (西水口)



1. 337号土塙 (北西から)



2. 337号土塙、墨書白磁出土状況 (北西から)



1. 341号土壙（北から）



2. 341号土壙土層断面（西から）



3. 341号土壙ガラス玉出土状況（西から）



1. 357号土壙（東から）



2. 358号土壙（北から）



1. 362号土壤 (西から)



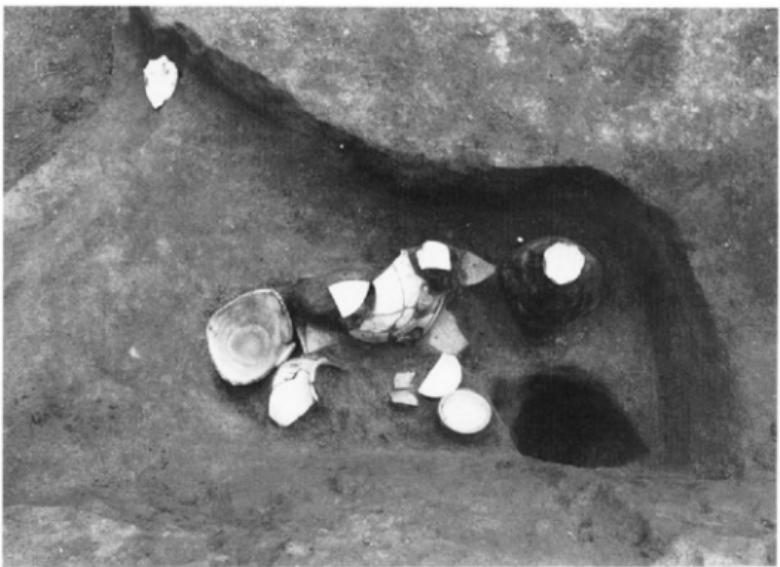
2. 362号土壤土層断面 (北から)



3. 362号土壤、灯明台出土状況 (北東から)



1. 373号土壙（南から）

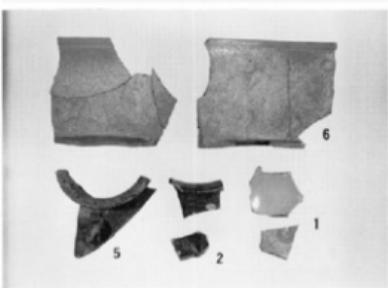
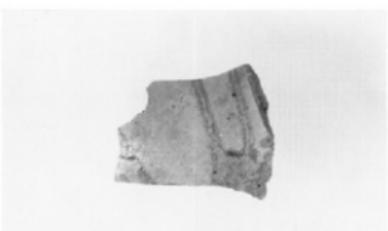


2. 374号土壙（北から）

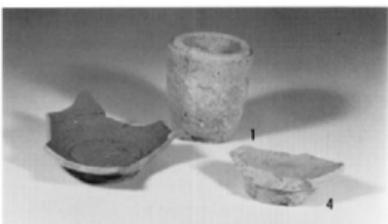


106号土壤出土遺物

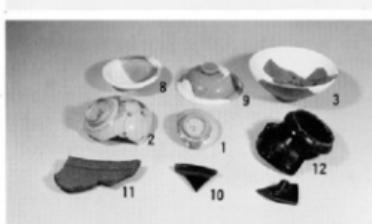
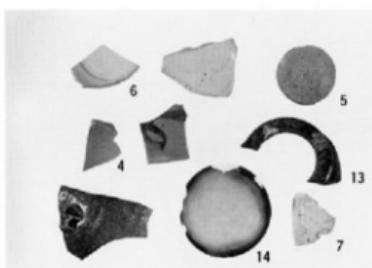
106号土壤出土遺物



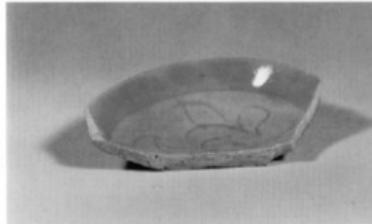
104号土壤出土遺物



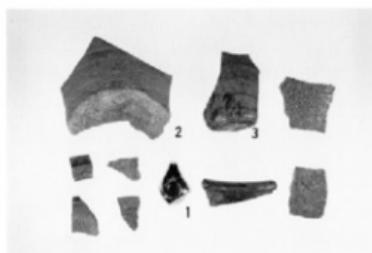
107号土壤出土遺物



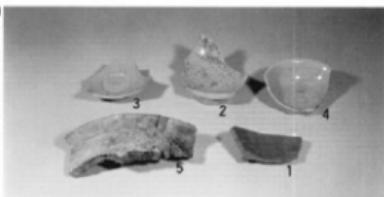
108号土壤出土遺物



109号土壤出土遺物



III号土塘出土遺物



III号土塘出土遺物



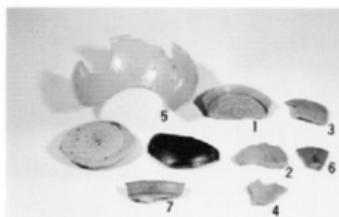
II2号土塘出土遺物



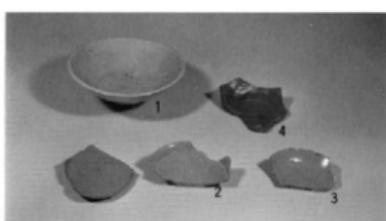
II3号土塘出土遺物



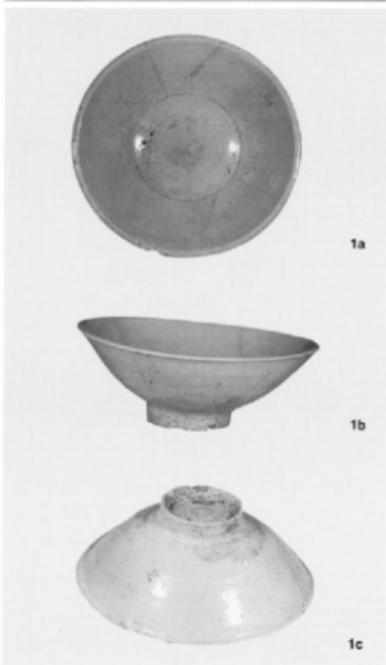
II4号土塘出土遺物



II5号土塘出土遺物



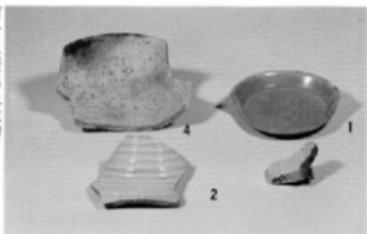
1a



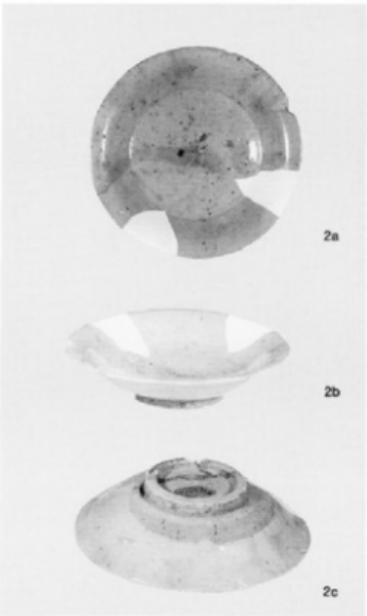
1b

1c

117号土塘出土遺物



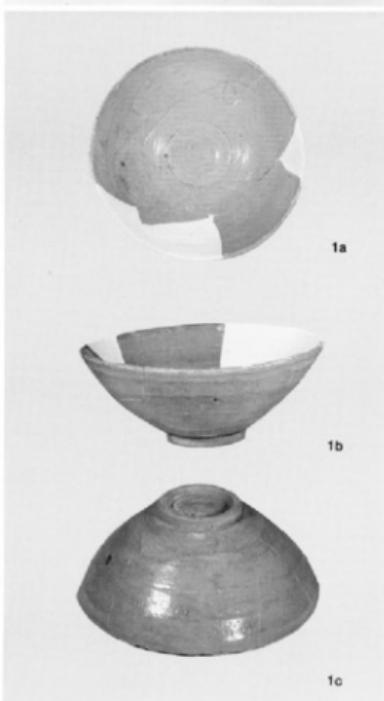
118号土塘出土遺物



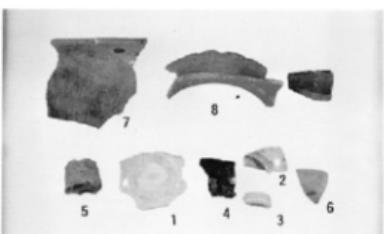
119号土塘出土遺物



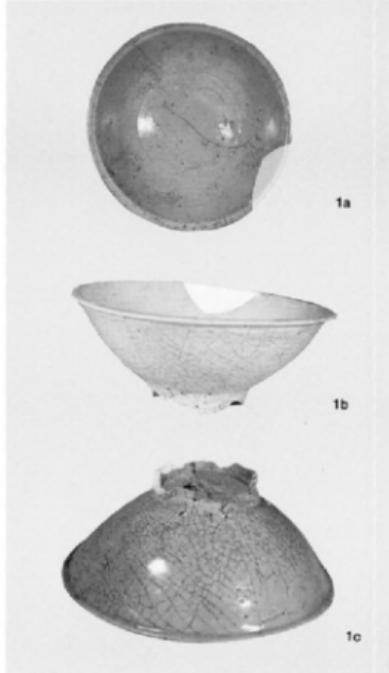
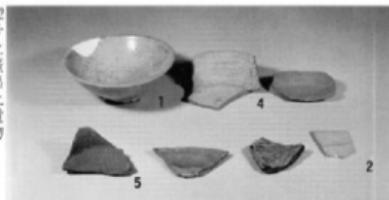
120号土塘出土遺物



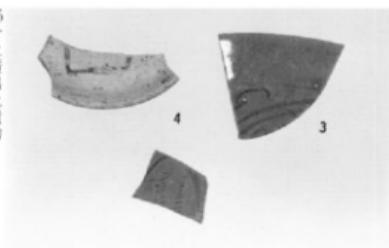
121号土塘出土遺物



12号土壤出土遺物



125号土壤出土遺物



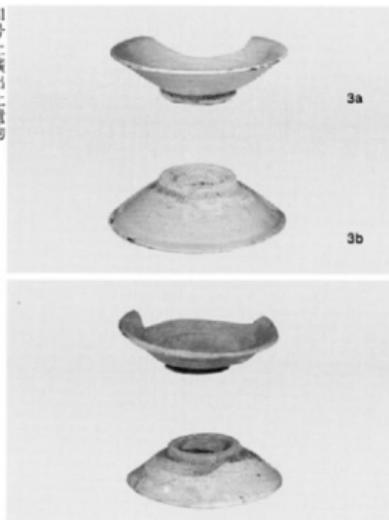
125号土壤出土遺物

125号土壤出土遺物

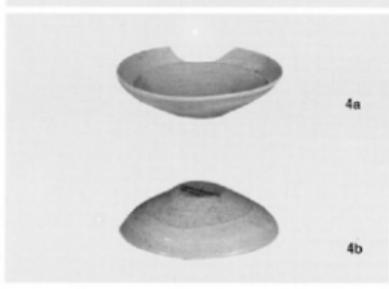
125号土壤出土遺物

125号土壤出土遺物

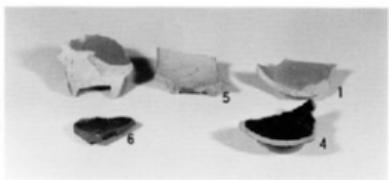
13号土壤出土遗物



138号土壤出土遗物



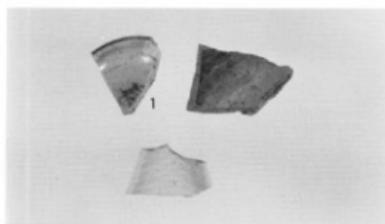
142号土壤出土遗物



143号土壤出土遗物



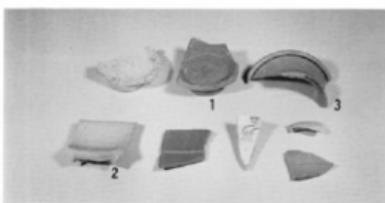
146号土壤出土遗物



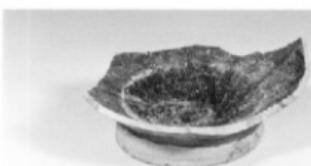
148号土壤出土遗物



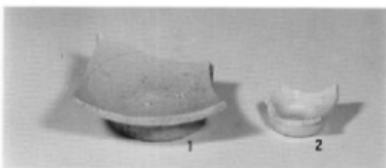
150号土壤出土遗物



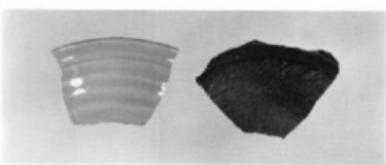
156号土壤出土遗物



157号土壤出土遺物



158号土壤出土遺物



160号土壤出土遺物



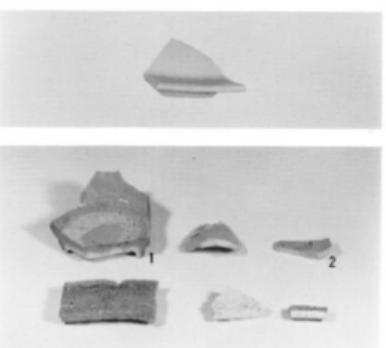
161号土壤出土遺物



162号土壤出土遺物



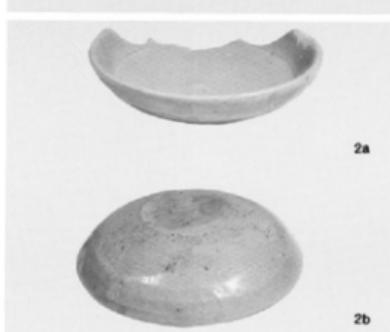
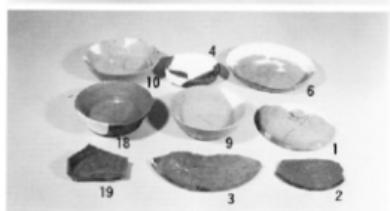
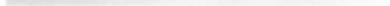
165号土壤出土遺物 166号土壤出土遺物



157号土壤出土遺物

1a  
1b

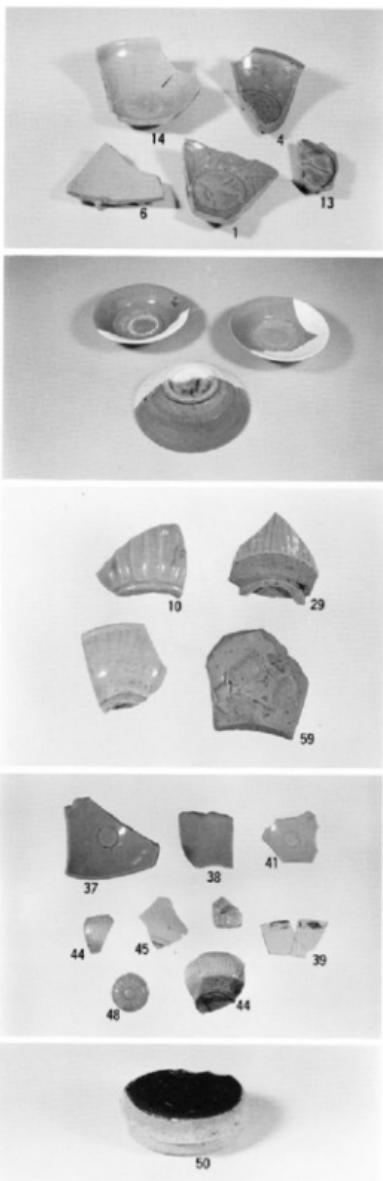
168号土壤出土遺物

2a  
2b5  
1113  
1416  
17

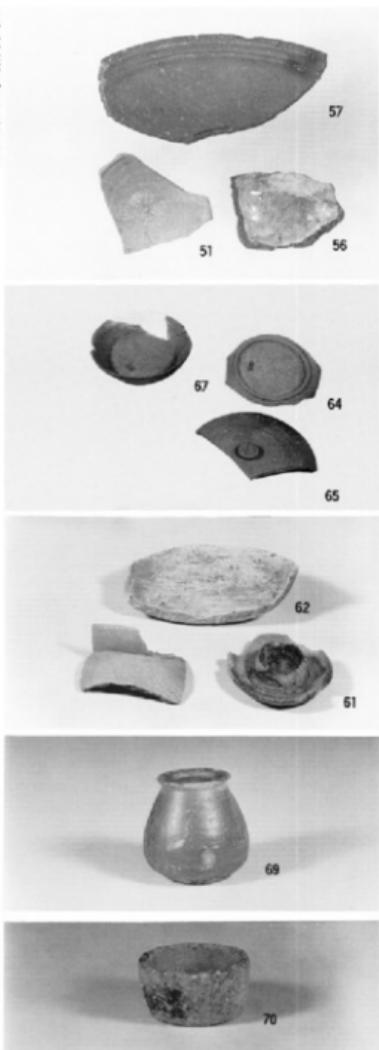
12号溝出土遺物



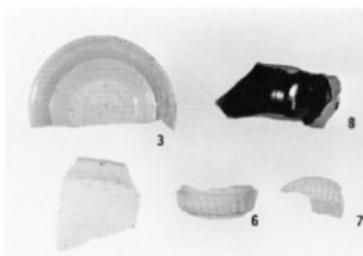
E区遣拂外出土遺物



## E区遭構外出土遺物



33号土壤出土遺物



34号土壤出土遺物



35号土壤出土遺物



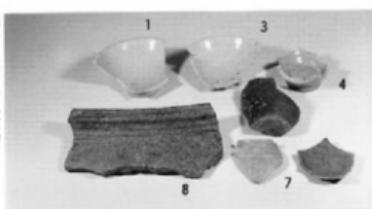
38号土壤出土遺物



208号土壤出土遺物



211号土壤出土遺物



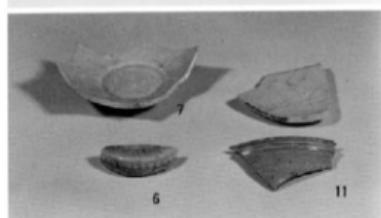
215号土壤出土遺物



216号土壤出土遺物



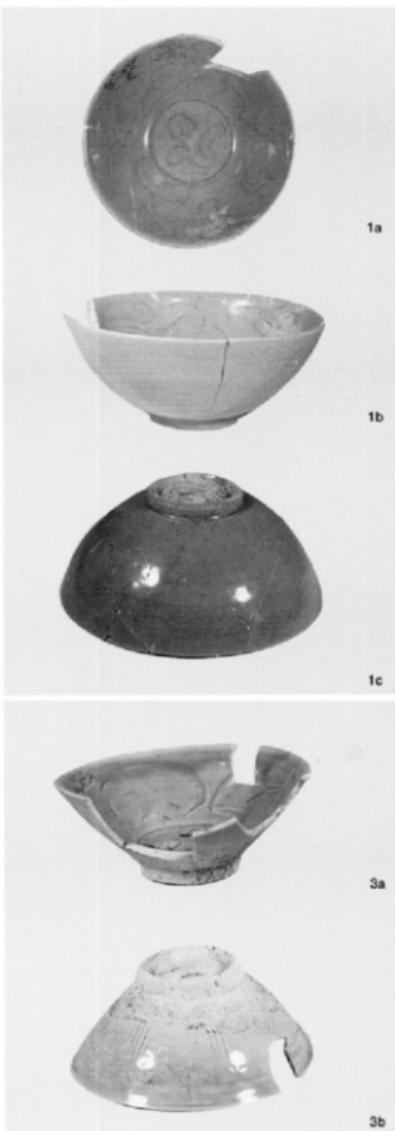
217号土壤出土遺物



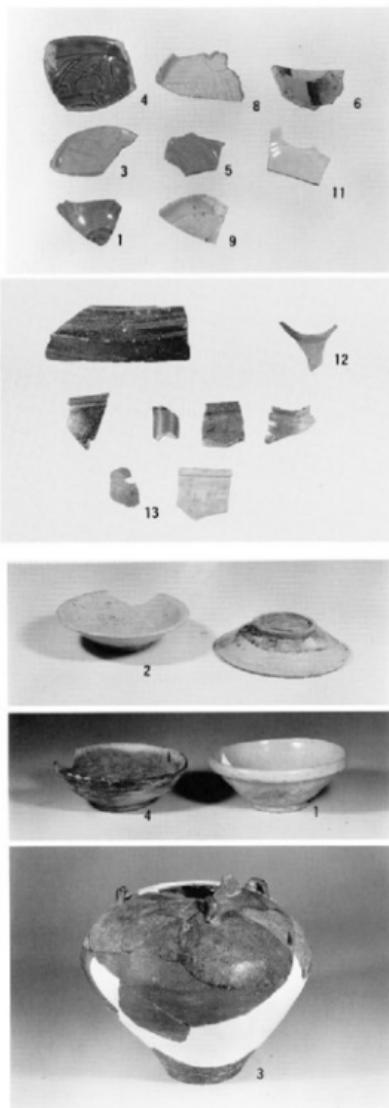
218号土壤出土遺物



218号土壤出土遺物

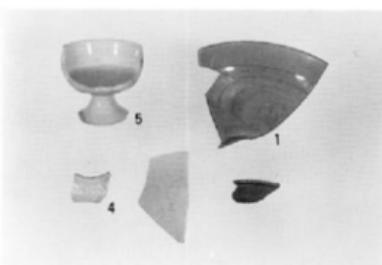


219号土壤出土遺物

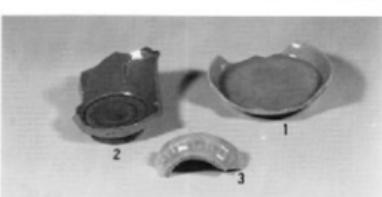


220号土壤出土遺物

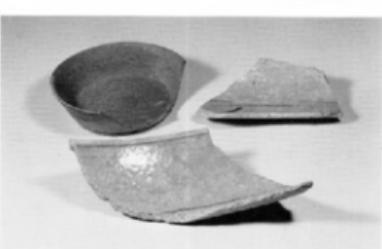
24号土壤出土遺物



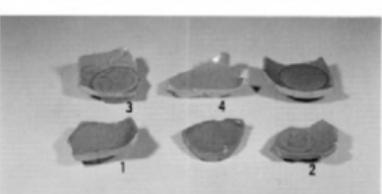
27号土壤出土遺物



28号土壤出土遺物



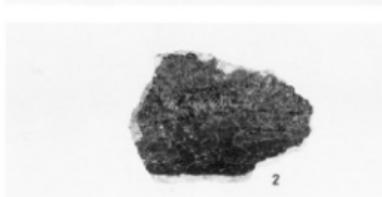
29号土壤出土遺物



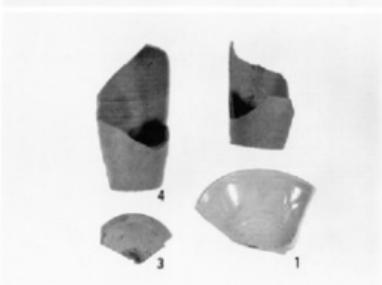
21号土壤出土遺物



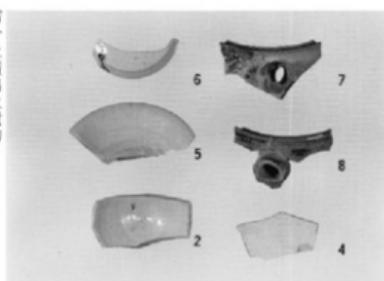
22号土壤出土遺物



26号土壤出土遺物



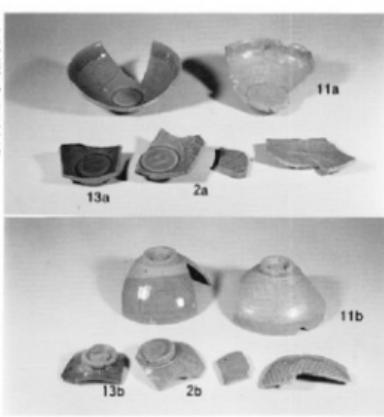
25号土壤出土遺物



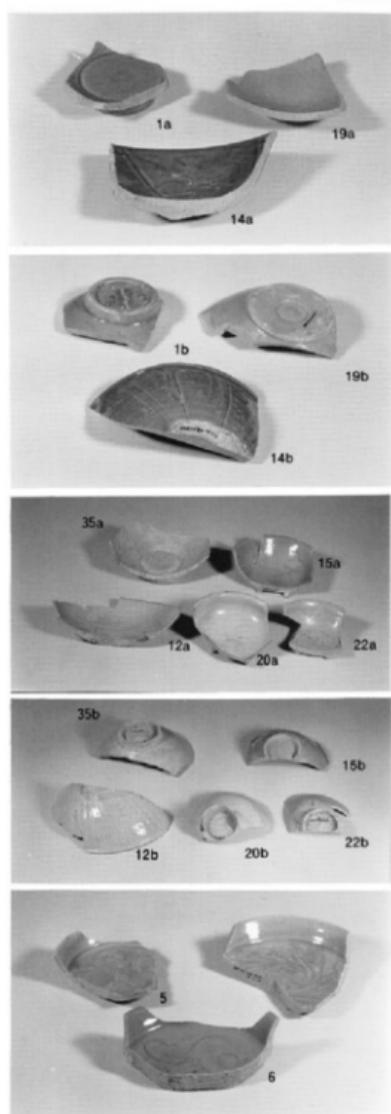
230号土壤出土遺物



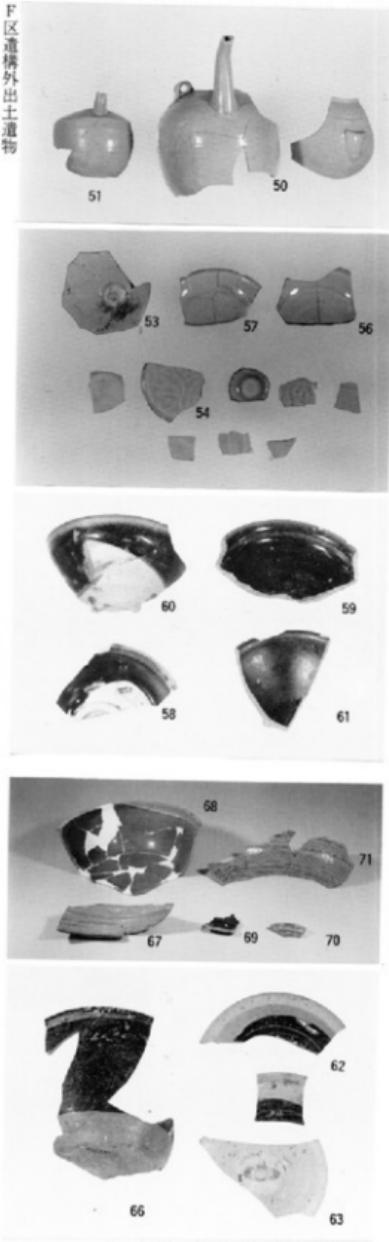
F区遺構外出土遺物



F区遺構外出土遺物



F区遺構外出土遺物



F区遺構外出土遺物

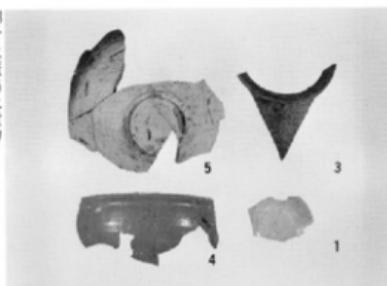


301号土壙出土遺物



306号土壙出土遺物

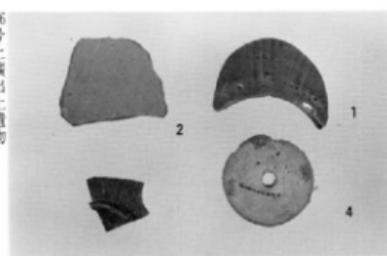
313号土壤出土遺物



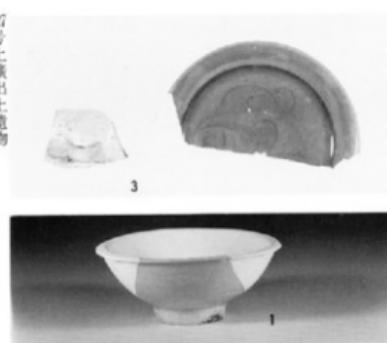
315号土壤出土遺物



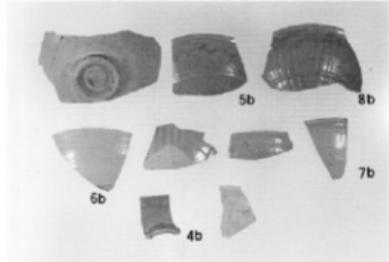
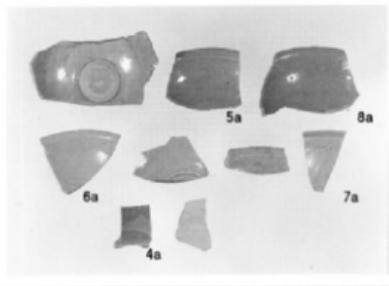
316号土壤出土遺物



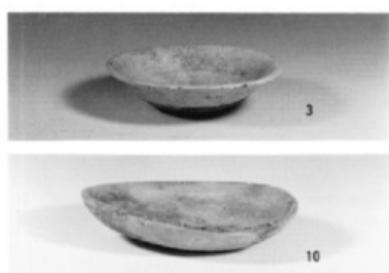
317号土壤出土遺物



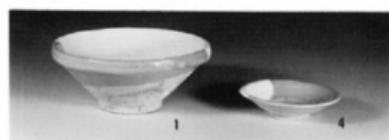
317号土壤出土遺物



316号土壤出土遺物



317号土壤出土遺物



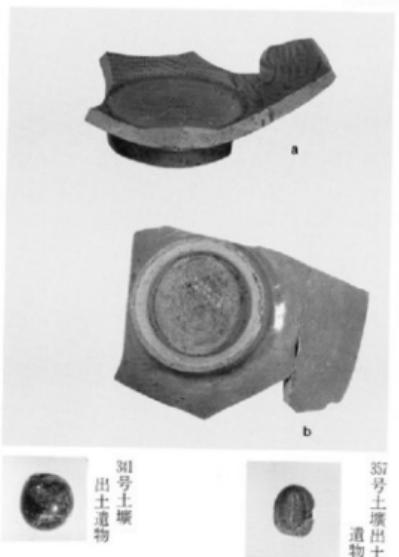
38号土壤出土遺物



38号土壤出土遺物

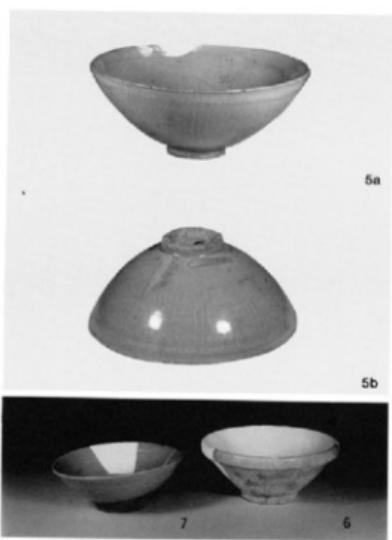


38号土壤出土遺物



38号土壤出土遺物

38号土壤出土遺物



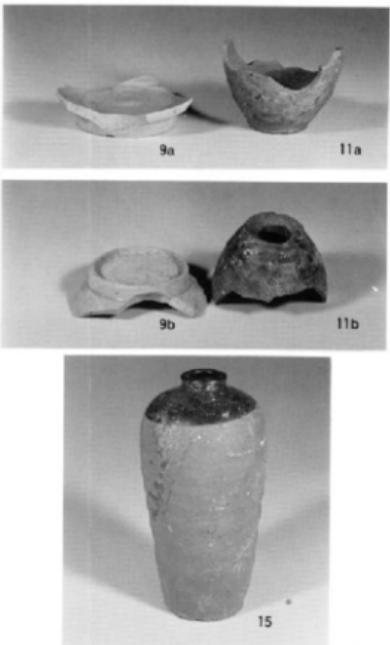
5b

5a

6

38号土壤出土遺物

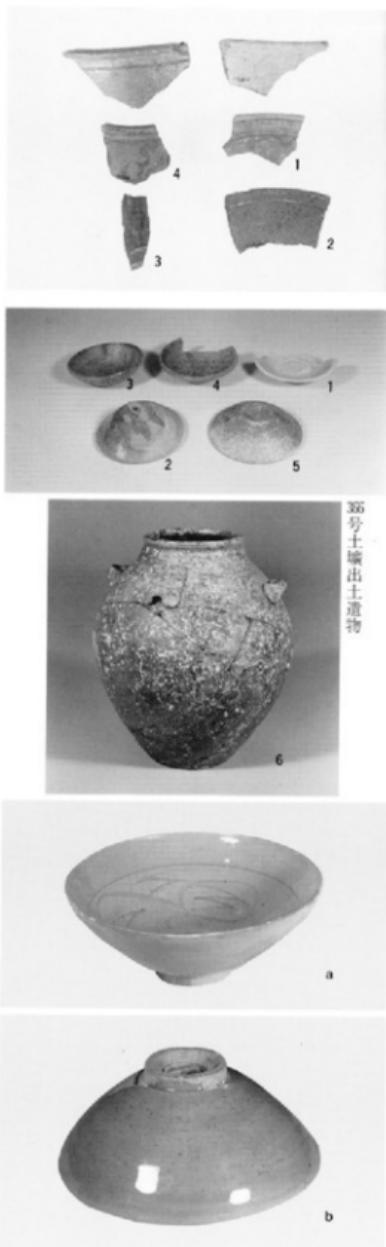
338号土壤出土遺物



337号土壤出土遺物

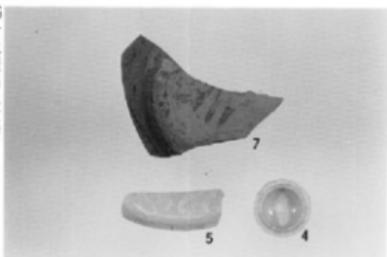


335号土壤出土遺物



335号土壤出土遺物

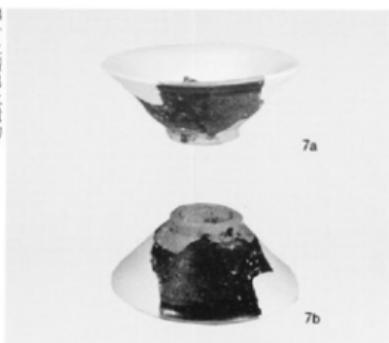
366号土壤出土遺物



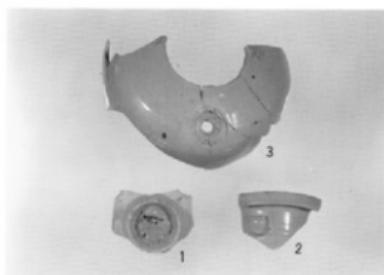
373号土壤出土遺物



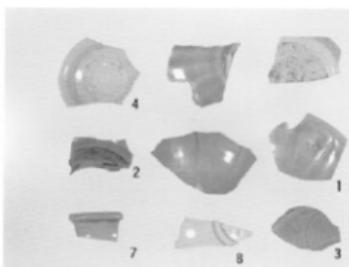
374号土壤出土遺物



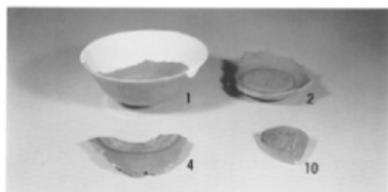
375号土壤出土遺物



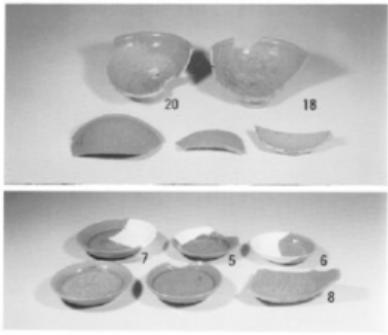
375号土壤出土遺物



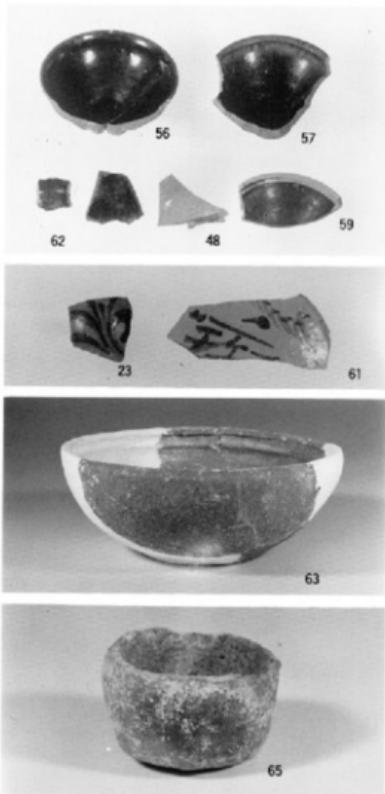
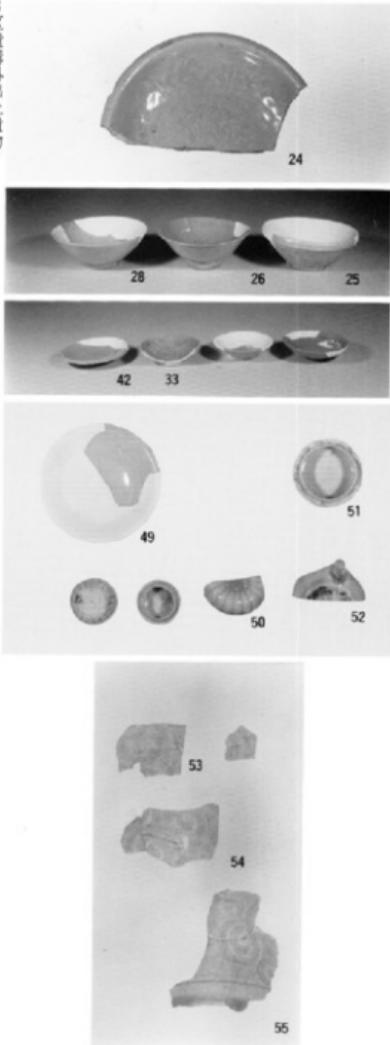
378号土壤出土遺物



G区遺構外出土遺物



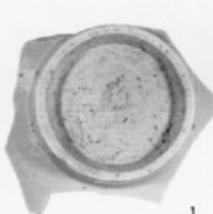
G区遺構外出土遺物



104号土壤出土



105号土壤出土



1

104号土壤出土



4

105号土壤出土



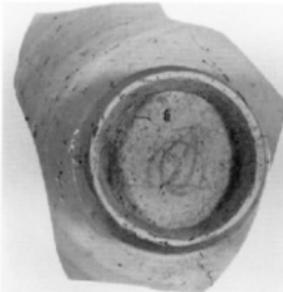
3



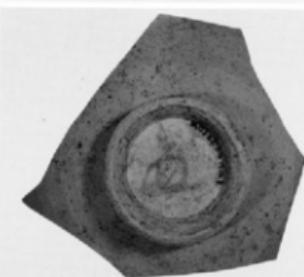
4



1



2



107号土壤出土

110号土壤出土

出土遺物墨書集成 (2)

E区

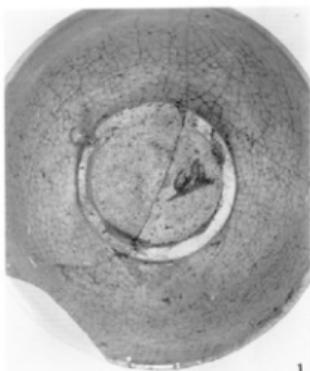
PL.45

115号土壤出土



3

112号土壤出土



1

115号土壤出土



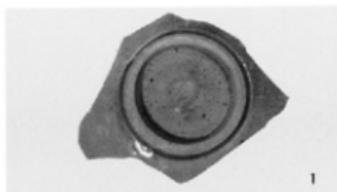
4

131号土壤出土



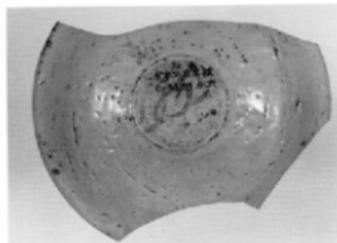
1

111号土壤出土



1

113号土壤出土



1

116号土壤出土

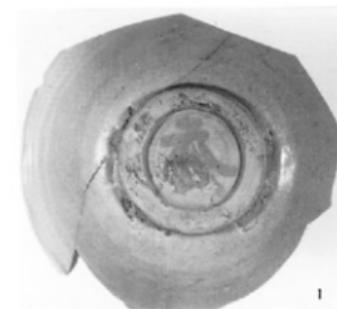


1

115号土壤出土



111号土壤出土



1

出土遺物墨書集成 (3)

E区

PL. 46

16号土壤出土



12号溝出土



22



52

12号溝出土



26



E区遺構外出土



出土遺物墨書集成 (4)

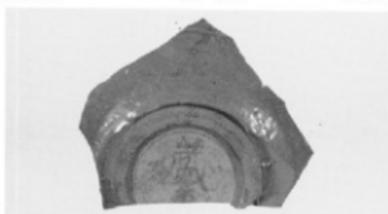
E・F区

PL. 47

E区遺構外出土



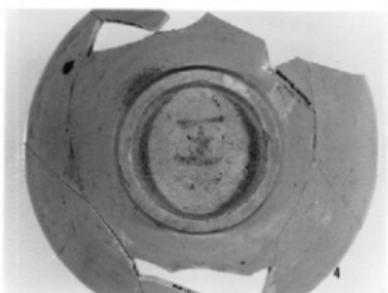
25



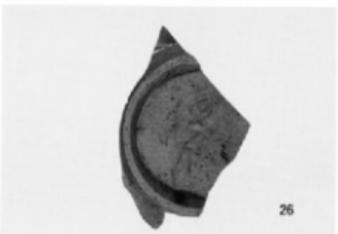
26号土壤出土



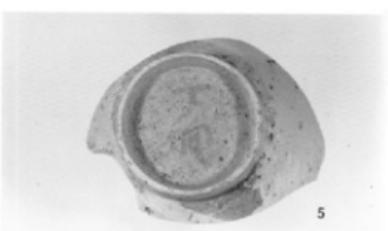
12



28号土壤出土



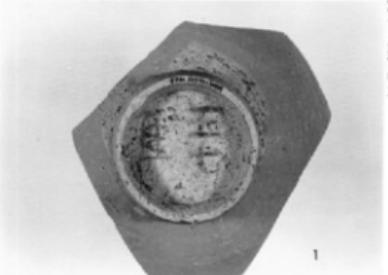
26



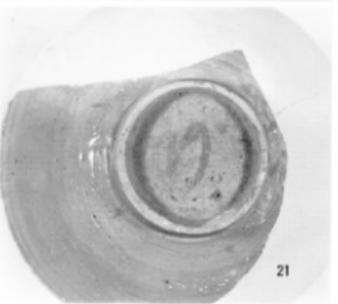
29号土壤出土



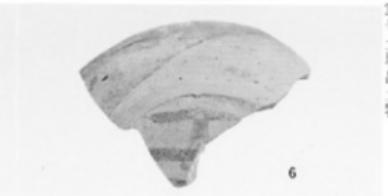
49



27号土壤出土



21



29号土壤出土物

6

出土遗物墨书集成 (5)

F · G区

PL. 48

28号土壤出土遗物



2

F区遗物外出土遗物



29



32



21

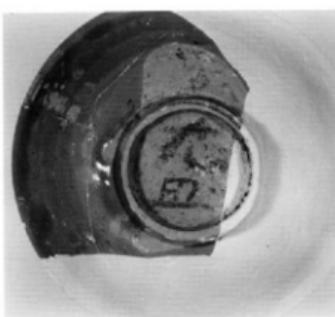


41

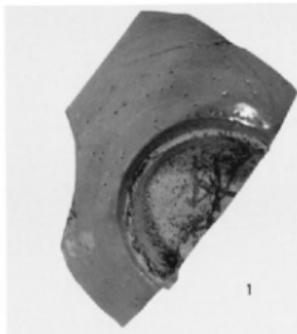
30号土壤出土遗物



312号土壤出土遗物



315号土壤出土遗物

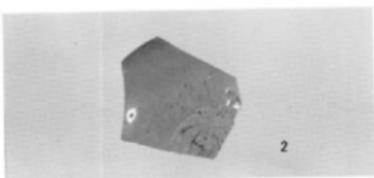


37号土壤出土遗物



1

27号土壤出土



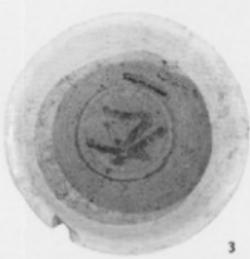
2

32号土壤出土



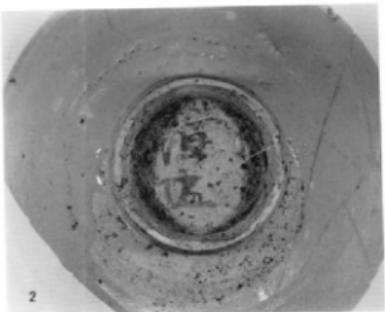
1

36号土壤出土



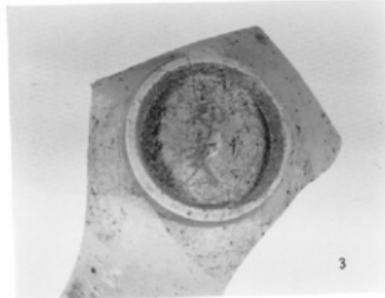
3

37号土壤出土



2

37号土壤出土



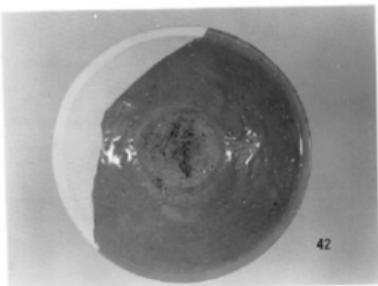
3

37号土壤出土



4

G区遗物外出土



42

G区  
遺構外出土  
遺物

3



30



12



31



39



32



28



36



34

多は沖の浜なるべしといへり。恐らくは他に当時の現況を記せしものなく、筑前続風土記以下満て百年の後に書けるもの故、甚判然ならず。続風土記等の説信すべしといへども、博多記等

の云へる處も又捨かなければ、爰に向説を掲げて後人の考定を持つ。今伝ふる處の博多古図の如きも少しく疑ひなきに非らず。

或は後世の作なるへし。僅に前の博多の面影を見るべきものは、再興より百八年前、文明二十一年宗祇法師博多へ來りし時、其宿所なる龍宮寺より出で一見したる博多の形狀左の如く、明ぬれば月二十一日九此所のさまを見侍るに、前に入海はるかにして志賀の島を見渡して沖には大船多くかゝり、もろこしの人も乘りけんと見ゆ、左は大となき山ども朝霧にかさなり、右箱崎の松原遠くつらなり、仏閣僧坊數をしらず、人民の上下門を並へ軒を争ひて其境四方に広しと書けり。

### 袖の湊之事

袖の湊の事、筑前続風土記に天文二十一年より博多へ大明西蕃の諸国より商舶の来る事止ぬ、其後袖の湊も埋もりつらんとあれと、宗祇紀行博多の状況をいへるに、沖に大船の多くかゝりたるさまを書き、袖の湊の事をいわざるを見れば、文明の頃既に袖の湊はなきか如し。されと其趾は天止の頃迄も機に残りしものと見え、細川幽斎玄蕃印と号の記中日たかく侍りければ天正二十一年五月廿五日、博多見にまかりけるに、爰を袖の湊と里人のおしへの事也。

ければ

いさゝらはともにぬらさんたひころも

袖のみなどのまくらに

日もくれぬいさ船よせてねもしなん

ひしきものには袖のみなどを

又豊臣勝俊羽柴秀吉と号九州道の記に、博多と云處に四五日ありける内に、袖の湊ことくしくいはれたるはいつくそ尋はやと申ければ、あるし心ある人にてしるへしけるに、あるしの云、

今こそ潮のさし来て水もすこし侍れ、常はむけにいふかいくさふらふのをとそ在ける、まことに唐土船よせつくへき浦とも覺へすとあり。此道の記は博多再興の後天正二十年の事也。

高シ。是昔入海ナリシ時、南北ノ地ヲ穿ツ事深ケレハ、漂滞或  
ハ船具ノ類出ル事多シ。此水道吳服町の東側、一時埋レテ半地

トナリシ事アリ。是ハ年行司勝野次郎左衛門ト云者、水難ヲ恐  
レ、薄ニ請ヒ、己カ宅地ニアル所ヲ埋ム。ソレヨリ、流水東西  
ニ貫通セヌナリス。明和元年甲申七月、松屋利八ト云者、此所

ニ住シケルカ、此水道ハ、元來古跡ナリシニ、勝野力所為ニテ  
埋メシ事、本意ナラサル事ナリトテ、元ノ如ク決リ通サン事ヲ  
請フ。著是ヲ許シ、又雜費ノ料トシテ、銀子ヲ与ヘラル。是ニ  
依テ、己カ屋下ヲ埋種ニシテ、裏手東町ノ界マテ、貫通スル事  
ヲ得タリ。今アル所、凡東西長六町余、幅一間許ナリ。博多  
人ノ伝ヘシトテ、總括ヲ今モ、商家ニ  
用ヒビンシリ。長崎ノモノ類ナリ。

## 11 「筑前旧志略」

### 袖港

袖港ハ博多ノ入海ニシテ、古唐船ノ着シ港ナリ。一説ニ此港今  
ハ埋レテ人家トナリ、其跡市街中央ノ東西ヲ貫キテ、僅ニ横一  
間計リノ水道ト成レリトゾ。(博多人是ヲ大水道ト云ヘリ) 或  
ハ博多ノ東西二入海アリ。唐船ナドモ其所ニ繋ケリ。此港博多  
ノ左右ニ有リテ衣ノ袖ノ如クナレハ、袖港ト名付シモノナラン  
トモ云ヘリ。此港ニ唐船ノ来リ初シ頃ハ詳ナラズト雖共、天文

二十年マデハ正ニ來泊セリト云ヘリ。其後ハ豐後國府内ニ異給  
ヲ着ル事トナレリ。

### 新拾遺

### 前大納言爲定

いかにせん唐船のよる方もしらぬにさわく袖の港を

## 12 「石城遺聞」

### 豊太閤再興以前の博多の事

大正十五年豊太閤再興以前の博多の位置に二説あり。筑前風  
土記元禄半中月、同拾遺文保年中書、石城志田元祇著共に今博多  
を前の博多の地なりとし、今の大水道を以て貫通す。今は長崎町より  
起り、西町千戸町を経、片土居町・片町・鶴屋町・川端町・新川端町の境を通り、郡  
橋川支流に入る。之を他の浄の水と云ふ。清巾一闇乃至一闇二三歩あり。此下木  
瀬橋下土居町より川端町に至る。明治十二年内外有志の寄附金をもつて石垂を  
覆ひ保溝を削ぐ。其追額額所用舟橋二艘するをもつて舟小路と分す。船橋ハ明治  
十二年福井有志にて袖の濱の趾とする説なれども、博多古古拾遺  
元文年中祇著には矢倉門の外側を袖の濱の趾となし、今の博多は以

前の沖の浜にして、守護領は比恵村・大飼村近なるへし、比恵村  
田地に百葉の址及び町名残り、比恵の土手を今も百葉上手と云、  
住吉村の内字ならひ松下り口より住吉の宮御見合の邊迄を云ふと云矣、  
櫛田宮の旧社地なりと云ひ、又博多記元祇著にも、古しへ  
の博多は比恵村あたり今養島塩原邊にして櫛田の社も同所なら  
んか、比恵村辺の字に牛町鷲町・社家町等の町名あり、今の博

川ハ、昔ハ住吉ト博多ノ間ヲ流レテ、瓦町ノ西ニテ、那珂川ニ

入レリ。博多ノ東北ニハ、川ハナクテ、袖港ノ入海アリシナリ。

古来中国ハサラナリ。異国舟モ來リ集ビシ所ニテ、詠歌多シ。

新意 波コユルソテノミナトノウキ枕

統千載 ウキテソ独ネハ流レケル

統千載 思ヒツ、イハヌハイト、心ノミ

同 サハクハ袖ノ漆ナリケリ

同 シラレシナソテノ漆ニヨル波ノ

統千載 油ソフ袖ノミナトタヨリニチ

月モウキネノ影ヤテシケリ

拾遺 年月ハナミタノサハク我ソテノ

新千 淡ヤコヒノトマリナルラム

新千 芦間ナキ油ノソテノミナトニモ

新千 サハルハ人ノヨルヘナリケリ

新千 イカニセン唐土船ノヨルカタモ

新千 シラヌニサハク袖ノ漆ヲ

千五百 ウトカリシ唐土船モ寄ハカリ

千五百 ソテノ漆ララフ白波

今冬 千鳥ナクソテノ漆ラヒユカシ

モロコシ船ノヨルノ寝覚ニ

定家

古今 新城 恋ワフル袖ノミナトノ波マクラ

夜ノウキネノ数ツモルラム 前大納言忠良

夫木 日クルレハ袖ノミナトヲユク蜜

サワク恩ヒノ程見ユラム 光俊

同 松浦湯ソテノミナトニコキ寄ン

同 唐土フネノトマリモトメハ

同 トコノ海ニナカレテヲツル油川

同 抽ノ漆ノサワク名モウシ

同 影ナレテヤタル月カナ人シレス

同 ヨナ（サワク袖ノ漆ニ

前大納言為定 蒼公モ、筑紫二下リ玉フ時、博多ヨリ宰府ニ移シマイラゼン

トテ、先此所ニ、暫留メケレハ、

同 流レ来テ誤ナカラニカタシキノ

同 抽ノ漆ノ磁襖ワヒシキ

ト読玉ヒシト言伝ヘタリ。慶長五年庚子春、博多ノ市中、火灾

アリテ、広野トナリシカハ、國主小早川秀秋、其臣桂主水、三

井四郎左衛門ニ命シ、其焼灰ヲ以テ、入海ヲ埋メラル。又港橋

モ、焼落タリシヲ、三間短クシテ掛タリ。同十八年癸丑ノ冬、

黒田長政、又寺田茂兵衛、坂井六兵衛ニ命シテ、埋メ残セシ所ヲ埋メ、其上ニ町家ヲ立。漆橋ヲモ、更ニ短ク替セセラル。

東町、呉服町、西町、等ノ地ハ甚低クシテ、魚町筋、石堂筋ハ

此町と新川端鏡天宮の側迄東西に通れる溝也、昔の入海の埋  
れしハ、金吾中納言秀秋の時の事なりしどい。

○渡橋の名は「渡舟是ハ昔」古へ入海に架して渡浜に通ひしと云。

今鏡天神の側にある石橋の邊也と云。此橋の長八十丈間有しと  
そ。又は百丈拾間なりしとも。今は石橋長僅に二間余なり。

光泉寺 本廟に見えたり

時宗

袖濱山と号す。称名寺に屬す。始は同寺の境内にありしか、い

つの頃爰に移せしならん。寺内に文殊堂有今此寺。

むかし此町に上原紹意出名詳ならずと云者有。年行司十二人の内也。

## 10 「福岡県地理全誌」 博多

袖濱址

(中略)

古ハ、博多ノ東北守護領ト、（或）渡浜ノ間ニ、入海アリテ、西北ヨリ入テ、東南ニ至リ、住吉村堅松村ノ辺マテモ、斥地ナリシトカヤ。博多ノ西南モ、今ノ原町港橋ノ辺マテ、皆西北ノ海ニ臨メリ。海水此辺ノ少シ東ニ止リ、猶其東南ハ、斥地長ク続キテ、那珂川ハ、斥地ノ中ヲ流レテ海ニ入ル。入海ハ、今ノ寺町ノ西北ヨリ、港橋ノ辺マテ、博多ノ中間ヲ打過リ、東北ノ入海ト、西北ノ大海ト相通ス。是ヲ中海ト云テ、唐船ノ入シ所ナリ。

中頓、奥浜ト云シ所ハ、入海ノ中ニ在シ洲ナリ。中海東北ノ方ハ狭シ。西北ノ方、今渡橋アル辺ニ、長キ橋有テ、通路トセリ。此入海、博多ノ中ヲ打過リテ、袖ノ形ノ如クナリシカハ、袖ノ渡ト名付シナルヘシ。今蓮池入定寺本岳寺ノ間ヨリ、東町、吳服町、西町、土居町、片土居町ヲ経テ、川端町鏡神社ノ側ニ至ルマテ、東西幅一間許ノ溝通レリ。是ヲ大水道ト云。是袖港ノ残レルナリ。港橋ト云モ、袖濱ノ残レル溝ニ掛シ故ナリ。石堂播种書寫山性空上人弟子也、住太宰府本山寺、三衣一鉢、不畜余財、掛替シ事アリ。本朝高僧伝卷七十二、太宰府本山寺祖高明、（著）、

せらる。此時宗門始て九州に行はる。道場に住せし僧も、此事

を伝え聞て大坂に登り、薬如の門徒となりて宗旨を改め、薬原

山妙行寺と号す。其後故有て山号を袖添山とあらたむ。此僧本寺に願ひて当寺を輪番とせり。本州及諸國の同宗の寺は、皆此輪番に來し僧支配せり。天正年中兵火に罹りて什物等悉く焼失す。其時裏柏屋郡三苦村に在し願念と云僧、焼跡に残りし本尊を奉持して己か草舍に安置せり。其後此所に道場を仮に構へ、

仲吉と云僧法(後国菊)を住持たらしむ。此時門跡より横越に當寺再興の事請ねし書を、左証として遂に本堂成就す。兵亂の後に輪番の僧も來ざりしかば、原田の臣笠人炊助與長か末子彦兵衛と云者を後住とし、名を從善と改む。其比、織田信長公本願寺と不和なりしかば、門跡大坂に籠城す。從善馳登りて城中に力を合す。門跡悦て感狀を与へらる。次の僧を教善と云。文様

元年大閣名護屋御在陣の時、教如上人大閣に僕間の為彼地に向あり。當寺に一宿せらる。此時門跡の印書并其家宰よりの書翰あり。慶長五年長政公御入国有し時、門跡より使者を差て贈り物あり。これを當寺に託して拂しむ。

慶長七年台命ありて関東及北国の同宗の寺は、教如の門下に属せしめ給へり。此時東西二派に分るといへとも、末子は其心に任すへしとなり。住持松安たまたま在京にて居たりしか東派に属す。子メ改派の事を相談せざりし故に、本州及其余の末寺ハ、

皆西門跡の直末寺となりしといふ。

#### 川端町

大水道 又稱「小瀬」。古ハ東西に通れる入海有て、油井と号せり云々。

此水道は蓮池町の入定寺と本巣寺の間より数町町、土居町、片土居町を経て、此町と新川端鏡天神の側まで東西に通れる溝なり。

昔の入海の埋れしは金吾中納言秀秋の時の事なりしと云。

漆橋 一名淨瓶橋と云。是は

此橋は古入海に架して漆浜に通ひしといふ。今鏡天神の側にある石橋の邊なりといふ。此外曰云ふる地あれとも一定しかなし。

故に茲に渡しぬ。此橋の長さ八十丈間有しといへり。又は百丈十間なりしともいふ。今は石橋の長さ僅に二間余なり。

此町に寒具屋敷戸あり。土産考に出す。(中略)

光泉寺 本廟に見えたり。

袖添山と号す。称名寺に属す。始は同寺の境内にあり。

いつの比こそに移せしにや。寺内に文殊堂あり。

#### 9 「筑前国統風土記拾遺」

#### 川端町

○大水道 本廟に古は東西二港れる入海有て、油井と号せり云々。此水道板(一間許りなる溝)東西に通せり。今是を大水道といふ。此水道池町入定寺と本巣寺の間より放町、土居町、片土居町、を経て

は、宝暦四年甲戌の冬再興せり。其來由は、社地の東家に住む円庵安井氏、一日元願が許へ訪ひ来りて語りけるは、我過し神無月廿一日の夜、不思議の雲夢を得たり。其あらましは、わが西隣なる楊池の辺に逍遙せしに、酒掃いと清らか也。かたはらにひとりの異人ありしに、いかなる故にやと尋ね侍りしに、かの人答て曰、汝しらずや、此所こそかけまくもかしこき少彦命の鎮ります地也、委しき事をしらんと思は、吾子に問ふべしと聞へて、夢覚ぬ。吾子いかんしてしれる事ありや。予答て曰。抑、楊池は靈址なる事、土人の口碑に在、殊に此御神は、大己貴命と御心を一にして、力を戴て、天が下をみそはなし、病を療るの方を定め、又、鳥獸・昆虫の災異を攘はんが為に、禁厭の法を定めて、万民を救ひ玉ひし事、載て日本紀に詳也。されば、本朝の医の祖神にてましますゆへ、予、つねに京都五条天神、紀州栗島大明神、及び当國砥崎明神など、殊に尊崇し奉りぬ。是皆、少彦名命にておはしませば也。かゝる夙志あるにより、夢中にも予が事を示し玉ひしならんか、神託疑ふべきにあらずとて、安井氏と共に、彼所に至りて点検するに、風色おづから物ぶりて、靈祠も既に荒廃に及べり。かくたうとき御神靈の、呻露にうづもれさせおはしますをみるに忍びず、且は神夢の告のおごそかなりしを感じて、御社を再造し奉らん事を相談り、同志の輩につのりしかば、諸方より寄附の捧げものあ

りて、財用乏しからず、神殿・拝殿・鳥居・玉垣に至るまで、かたの如く作り出せり。かくて、同六年丙子閏十一月、落成を告ければ、同廿八日酉刻、神廟によりて正遷宮の規式あり。神主松部山城守利寛、其子出雲守利雄等、是をつとむ。以田の神主松部山城守利寛、其子出雲守利雄等、是をつとむ。以来當社を司らしむ所也。又、末社三区建立す、大国、大己貴命社に合せ、夷子、事代主稚荷、なり、又、埋もれし小池も、土をう祭る。夷子、事代主稚荷、なり、又、埋もれし小池も、土をうがち、石をた、みて、めぐりに、玉垣を造り、云。当社の祭は、二月十一日、八月十一日にて、神樂、及び宮坐等あり。又、節分には、追儺の祭ありて神物出る也。又、月毎に、朔日・十一日・廿一日・是を三節といひて、詣る人多し。余は、当社の記事に詳也。これはさいつごろ、神官利寛が需によりて、元願ひそかに是を撰せり。神翁は從一位萬江大納言吉原家貞明御榮成院  
香原久勝寺附安井氏と予ど、是を修飾し、明和元年  
十一月十一日、弘前に掲げ奉ぬ。

## 8 「筑前国続風土記附録」

土居川口町

妙行寺  
本編に見えたり。眞宗  
東仏堂七層四面

袖濱山と号す。東本願寺に属す。寺伝にそのかミ冷泉津の邊舊原なりし比一字の道場あり。天台宗にて寺号もなく、唯蘆原道場とのみいへり。明応の比、本願寺の蓮如上人大坂にて教化相議り、同志の輩につのりしかば、諸方より寄附の捧げものあ

させ玉へと、二なう所望ありける故、<sup>アマツ</sup>鏡容とて、御秘藏の鏡に匿りし流させ、千万緒の御心をこめて、筆をとらせられし両像に、配を取そへ、泣々僧正へ伝へ玉ふ。其画影ともに、桜井宮の宝物に伝りて、今、御境内の社の神像是也。世に菅公自画の像といふ者多し、何ぞ多く画伝へ玉ふべきや。かゝる深き由縁有てこそ伝りもせめ。子彼御所に仕へて神像を押し来るに、誠に覺へずも感涙しけるは、自然の心なるべし。薫蓋に坐し玉ふてい、墨をか、せ玉はぬは、謙讓の御心よりと、いと恐れみおもへりと云々。此説、当社の事にあづからずといへども、世の人の惑を解に足りぬれば、しるし侍りぬ。元禄の頃、續敷御影、並に沖浜の神詠、京都に在しを、松下見林、当社に寄附せられしと云。松下翁は、本朝の神籍に博洽の人なれば、其采由を抑極めてこそ盡に寄納せられしなるべし。又、大質如心が自記の略に云。元禄癸未正月廿九日、博多市中焼亡しける頃、四方の在家は悉く焼失けるに、此御社は烟のあとだにも無りければ、人々不思議の思ひをなして、いといやまひける。此趣は、尼山和尚の東林後錄のうちにもしるし置れぬ。其時社僧周榮、御社をむかしの跡に移し奉る。則今の社所也。神前に古井

天神の御尊像上らせ玉ひぬ。社僧良州驚きおそれみて、則、神殿に移し入奉ひぬ。此井泉は某が再興し置けるに、かゝる奇瑞不可思議なる事の、有難くおぼへ侍りければ、此度広前に神燈をかげ奉りて、いよ／＼和光の天に満、地に輝き、御社いやましに繁榮し玉はん事を、いのり侍る也。

時あれば神のみかげをくみでしる占井の水のきよきためしに

癸丑霜月、白得庵慈溪如心、行年八十二、謹アマツ書ス。今接に、此記と、博多記の説とは、離類せり。既に東林錄にもしるされねば、博多記恐らくは非なるべし。又、八百五十年御忌の時、東長寺鳳山、院家の需により、詩歌二十五首、紳縚家より奉納有。

楊池社

西司上東側に在、所祭少彦名命也。此所、むかしは袖の添の入江なりしが、滻桑相交りて、わづかばかりの小池なりもて行しも、なを年を逐ふて埋もれたりしかど、岸の柳は世々に植えしにや、今に一團余りの大木ありて、土人、柳が池と称し侍る。

後堀河院貞應元年四月十四日、此所より海夫人シンドウを綱引し侍りしと云事は、仏寺門、龍宮寺の下に詳也。合せ考ふべし。今之社十八年癸丑十月十九日午刻ばかりに、社僧の奴、此水を汲しに、

ともに巡見ありて、願の旨を許し玉ふ。猶又雜用の類として、

銀子を賜ぬ。是より、己が屋下を埋桶にして、裏手東町の堀まで、貫通する事を得たり。總じて東西の水筋、所によりて広狭淺深あり。見渡闇の名、諸書におみて、まだ見侍らず、只九州

軍記に処々出たり、又古國には、今の作り出町の東、堅柏村の西にあたりて、見渡闇あり。しかれども、其址さだかならず。

(元)文明の頃、宗祇法師の筑紫記行にも、刈萱の闇の事は書たれども、此闇の名はあらず。按するに、むかし府大道より、博多へ往来の非常をいましめん為に、仮に闇所をもうけしなるべし。

### 湊橋

いにしへより入海に架して、湊浜へ通ひし橋也。其址、今、鏡天神のかたはらにある石橋の辺なりともいひ、又、片土居町の石橋のある處也ともいふ。一説に、今の呉服町のあたりを中島といひて、此所に湊橋あり、博多をも中島の郷といひけるよしいひ伝へり。むかし、府大道より湊浜へ往還の順路なれば、左もあるべし。聖武天皇、积の行基に勅して、諸国の經界を定め

寺积ノ高明ハ播州書写山ノ性空上人ノ弟子也。住ス太宰府本山寺ニ。三衣一鉢。不レ蓄二余資ヲ。念佛誦経之外。勤ニ建立ヲ。而造ニ博多橋。下略今接ニ、博多橋ハ即湊橋ナラン歟。又、冷泉橋

といへるも、此橋の事なりといふ、是は後世の名なるべし。いにしへ此橋の長さ八十二間ありといへり。或説には、百二十間なりともいふ。川端の石橋、享保の頃までは三間程の板橋なり、元文己未四年六月、石橋になる。

### 網輪天神

綱風土記曰。網輪天神、網場町にあり。菅丞相左遷の時、袖添にて船より揚らせ玉ひしが、海辺にてしかせ玉ふべきものもなくて、併みおはしましけるに、所の海人、舟の綱をたぐり、輪の如く重ねしを數せまいらせければ、暫く御休みまし／＼ける。

後に、此所に御社を建て、網輪の天神と号す。今、網場と称するは、よこなまれる也。此社、始は袖添の入海の側にあり。慶長元年、今の地に移せり。杜僧の寺を成就院と云、真言宗なり。

十一月廿五日祭礼あり。博多記に曰。此社、昔は土居町鐵治の住ける家の裏にあり。後、今の所に遷せり。中領網場町より門ありて、乾に向へり。其後、巽にむかひて宮造せり。後に又大水道を前にして、乾に向ひ建たりしが、元禄十六年正月廿八日、須崎町より出火せし時、此社も焼亡せり。是よりむかしの宮所に移して、巽にむかふ云々。末註是を略す。以下是に依ふべ。

桂秋翁が南嶺子曰。菅贈大相國、思ひかけずも太宰ノ權帥に貶任しまし／＼し時、天台坐主法性坊尊意僧正、多年御交り深かりしかば、比叡山より下られ、せめての御遺言に御姿を書留め

の古歌を擧たり。しかれども、正しき処なれば、附会に近し。

### 大水道

蓮池町入定寺、本岳寺の間より、川端町鏡天神のかたはらまで、東西に溝通れり、今、是を大水道と云。いにしへ、袖の濱の入海の址也。貝原翁曰、天文廿一年より、異國の舟絶て来らず、此時より袖濱も漸あせて埋もれり。長政公此国を初て領し正ひ慶長五年まで、わづかに四十九年なりしが、此袖濱は既になくなりぬ、土地変遷の速なる事かくの如し、と。今按に、此入海は自然に埋もれたるにはあらず、人力を以て埋められし也。或記曰、博多、中の海埋められしは、慶長五年正月の事也、其頃、市中焼て広野となりしかば、國主金吾中納言秀秋、桂主水・三井四郎衛門に命じ、其焼灰を以て入海を埋められしが、又、湊橋も焼落たりしを、三間短めて懸たり。同十八年の冬、長政公、寺田茂兵衛・坂井六兵衛に命じて、先年埋め残せし処をうめ、其上に町家を立て、湊橋をも又みじかめて掛直させ玉ふ云々。此説を以て証とすべし。又、熊本氏おもへらく、いにしへ入海ありし跡は、今博多の東南の外郭、田となりし所にて、今、大水道といへるは、房州堀なるべしと。是は大なるあやまり也。白杵安房守が濱をほりしは、博多の外郭要害の為也。市中に濠を構へて、何の益あらんや、殊に房州などが住せし処は、矢倉門なりしといへば、論するにも及ばず。もし此溝を以て入

海の跡とする時は、沖浜の地狭くして、彼海東諸國記にいへる、西北四千戸の説にかなはず、とおもへるか。今、方十町の境地なれども、町並によりて戸数の入りの間数、三十間に余れる處多かれ巴、往古繁榮の時、透間もなく民屋作り並べしならば、さばかりの戸数にも待りぬべし。たとへば、今長崎のごときも、境地は博多より狹しといへども、莞を並べ、軒をきしりて、所せく家造せし故、民戸は四十に余り、籠は一万に及べりと云。是を以て見る時は、此溝より西北、何ぞ四千戸の地にあらずといふべけんや。加之、海東諸國記は、吾邦の書に非ず、朝鮮人の作れる処なれば、徵とするにたらず。世人往々かの説を以て、博多の考証とせるは、未だ深く思はざればなり。又、東町・呉服町・西町等の地は、甚低くして、魚町筋・石堂筋は高し。是むかし入海なりし時、南北の両岸なりし事、いちじるしく。殊に、西町・呉服町辺の地を穿つ事深ければ、漂落、或は船具の類出る事まゝ多し。是又其証也。此水道、呉服町東側、今は埋もれて平地となれり。是は年行司なりし勝野次郎右衛門といふ者、水難を恐れ、公訴して、おのれが宅地にある所を埋みけるとなん。それより流水東西に貫通せずなりぬ。明和元年七月、今の家主松屋利八は、此水道は元來古跡なりしに、勝野氏が所為にて埋め置るよし、本意ならざる事也とて、本の如く決り通さんよしを、公に訴へけるに、町奉行、森氏・時枝氏

るへし。今博多は漢の浜・北浜の四千戸なるへし。比恵村田地の内杯にも百堂の跡、町の名共残り、比恵の土手を百堂土手と今も云也。瓦町口も春吉村田地にして、ならひ松と云らんや。

廻り道、湯道有て誓固村のやうに通りしとかや。是宰府の海道と見へたり。

## 7 「石城志」

### 袖 湿

いにしへ、唐船の入し港也、むかし、比恵の川は、博多の東には流れず、住吉と博多の間を通りて那珂川に入、其古川の跡、今に残りて見ゆ。博多の東に入海あり、それより西の方郡那珂川まで、入海通りたりしを、袖の湊といへり。此入海、北より西へうちめぐりて、袖の形の如くなれば、名づけしにや。今、入定寺と本岳寺の間より、片原町といふ所の湊橋まで、東西に溝通り、今、是を大水道と云。是袖湊の残れる水筋也。湊橋といふも、袖の湊の旧跡によれる名也。

新後撰 浪こゆる袖湊のうき枕うきてはひとりねはなかれぬ

る

惟宗忠宗

統千載 思ひつついはぬはいと心のみさくは袖の湊なりけ

り

後源草院少将内侍

今按に、末永氏早庵云、浦と湊は附属して体用の所なれば、袖

湊の浜辺は、則袖の浦といひつべし、出羽国に袖の浦ありといへども、諸国に同じ名所のある事めづらしからずとて、袖の浦

此櫛橋田宮と住吉の宮の間に見へたり。博多の西、入海合住る。西の入海の内に長浜・須崎邊陸地有り。福崎山の根迄唐浦と云有。今考るに福岡六町通りと見へ侍る。管弦橋辺有り。

松浦湯袖の漆にこきよせん

唐土舟の泊り求めて

為 家

阿 とこの海に流て落る泪川

袖漆のさへく名もうし

徵書記

草根集  
名残たる波にやぬらす唐人の

袖漆のあけのそほ舟

正徵書記ハ東福寺白雲派下の僧也、正徵字ハ清岩、童名ハ

幸菊丸、後花園院長禄二年五月九日七十九歳にて死去す。

此僧和歌ハ冷泉院為尹卿の門弟にして、今川貞世ノ指南也  
と云う。よめる歌二万六千首有り。

天正十五年夏細川玄旨齋此所にきて  
立出る袖の漆の夕す・み

片數程の浦風そふく

いざさらハ共にぬらさんたひ衣

袖漆の波の枕に

日も暮ないさ舟寄むねもしなん  
ひしき物にハ袖漆を

ひきき

## 5 「博多記」

袖の漆之事

袖の漆 此所往昔唐船の入漆也。昔比恵川ハ博多の東二ハ流れ  
す、住吉と博多の間を通り那珂川二人ル。其川の跡今も残れり。

博多の東二入海あり。夫より西の方那珂川迄入海通たりしを袖  
の漆と云り。此入海北より南東より西へ打廻て袖の形の如ク、  
夫故に名とす。今博多の入定寺と本岳寺との間より片原町と云  
所の漆橋迄東西溝通し、今ハ是を大水道と云り。吳服町勝野氏  
の家の側を通りて大水道有しを、勝野氏の家の内に水仕入窓、  
吳服町南迄大水道通り、東町も大水道通り、勝野屋敷ふさかり、  
今ハ東西に通らざる也、袖の漆入海中絶たり。

## 6 「博多古説拾遺」

博多切り之事并唐舟不來事

(中略)

一 博多の占國を見るに、弘安式年蒙古國より數千艘此津に來  
りし時、博多の沖に有し筑石を再興ありしとかや。此時繪圖  
又其後の國を見るに、守護領は今の大剣村・春吉村の田地な

醍醐人道前太政大臣女

統古今  
人しれぬ袖の漆があた波ハ

名のミサハケとよる舟もなし

定 家

同 千鳥なく袖の漆をとひ来かし

唐土舟の夜のねさめに

前大納言忠良

新古今 又 千五百書  
恋化る袖の漆の波枕

いく夜うきねの数つもるらん

前大納言為定

新古今 十二  
いかにせん唐土舟のよろ方も

しらぬにさへく袖の漆もを

惟宗 忠宗

同 波こゆる袖の漆のうき枕

うきてそ独ねハなけれける

源家長朝臣

新古今 又 千五百書  
波こゆる袖の漆の羅小舟

里のしるへを誰かおしえし

後嵯峨院

統古今  
おなしくは唐土舟もよりならん

しる人もなき袖の漆に

津守 国助

統古今  
泪そふ袖の漆を便にて

月もうきねの影宿しけり

後深草院少将内侍

思ひ簡いはねハいと・心のミ

さへくハ袖のみなと也けり

中臣 裕臣

しられしな袖の漆による波の

上にハさへく心ならねと

津守 国助

新古今  
蘆まなき泪の袖の漆にも

さへる人のよるへなりけり

従二位行家

統後嵯峨  
年月ハ泪のさへく我か袖の

漆や恋のとまりなるらん

三 宮

千五百書  
うとかりし唐土舟もよる計

袖の漆をあらふしら波

光 慎

夫木  
日暮れハ袖の漆を行室

さへく思ひの程や見ゆらむ

さはくおもひの程や見ゆらん

同 有 家

まつら湯袖の湊にこきよせん

唐土船のとまりもとめは

て後、慶長元年正月といふ僧、御社を再興して、今地にうつせり。十一月廿五日祭礼あり。社僧の寺を綱輪山梅松寺成就院といふ。真言宗なり。東長寺に属す。

#### 4 「筑前国名所記」上巻

同

為 家

とこの海の流れておつる汨川

袖の湊のさはく名もうし

袖 湊

経後撰

式子内親王

影なれてやとる月かな人しれす

夜な／＼さはく袖のみなとに

(中 略)

綱輪天神

綱場町にあり。昔丞相左近のとき、袖湊にて船よりあからせ玉ひしか、海辺にてしかせ玉ふへき物もなかりしかば、所の海人の網をたくり、輪のことくかきねしを、しかせまゐらせければ、しばらく御休ましくける。後に此所に御社を立て、綱輪の天神と号す。今綱場と称するは、よこなまれるなり。

博多の内なり。むかしは今の袖のみなと橋より北の方へ大なる入海有て、もろこし船を繋ぎしとなん。其入江のかたち袖に似たりしゆへに、大古より袖のみなと、いひしとかや。篤信編集せし新名寄に曰、むかし箱崎松原の西南博多の東北に入海あり。それより南の方那珂川迄入海つゝ、またりしを袖の湊といへり。いつしか入海はなくなりぬ。今博多の入定寺と本岳寺の間より片原町の湊橋まで南北に溝通れり、是袖のみなとの残れる水筋なり。今湊橋と名付しも袖湊の旧跡によれる名なり。

経後撰

式子内親王

影調て宿る月かな人しれす

夜な／＼さはく袖湊に

前太政大臣

経後撰

海土小舟よる方もなし涙せく

袖の湊ハ名のミさハけと

海邊にも、網敷の天神の社あり。昔丞相左近の時、先此浦に上り、網をしまして生じ玉ふ所なりと云。博多の綱輪の天神の故事のこととし。筑前國原野の浦にも、綱輪の天神と此社始は袖湊の入海の側にありしといふ。其地分明な

らず。大かた今の社地の辺なるへし。近古兵火などにかかりて、所々

に社地をかへ、後にはあるかなきかのことくなりしを、世静り

の方はひろく、西北の方はせはし。西北の方、今の港橋ある辺に、長き橋ありて、通路とせり。此入海博多の中を打めぐりて、袖のかたちのことくなりしかば、袖漆と名付しにや、今博多の入定寺と本岳寺の間より、港橋迄 東西に溝とほれり。今はそれを大水道と云、是袖漆の残れる也。唐土船の泊りし所なれば、さばかり大なる港なるへきに、古今の交替かくの如し。港橋と云漆の入海ありし也。

惟宗 忠宗

浪こゆる袖のみなどのうきまくら

うきてそひとりねはなかれける

続千葉

おもひつ、いはぬはいと、こゝろのみ

さはくは袖のみなどなりけり

同

しられしな袖の漆による波

うへにはさはくこゝろならねは

同

泪そふ袖の漆をたよりにて

津守 国助

夫木 日暮れは袖のみなどを行く蟹

月もうきぬの影やとしけり

従二位 行家

新月 泪のさはく我が袖の

涙やこひのとまりなるらん

新月 泣の袖の漆にも

蘆間なき泪の袖の漆にも

さはるは人のよるへなりけり

新月 泣の袖の漆にも

いかにせんもろこし舟のよる方も

しらぬにさはく袖のみなどを

三 宮

千五百 うとかりし唐土船もよるはかり

袖の漆をあらふしらなみ

續古今 千鳥なく袖の漆をとひこかし

唐土船のよるのねさめに

前大納言 忠良

こひわふる袖の漆のなみまくら

いく夜うきねの数つもるらん

かしは瓦町のうらより、袖の湊迄南北に通りてありしが、いつのほどにかうつもれて、今はわづかに残り、片原町のうらにあります。博多の南方に門を立てる所をは、今も矢倉門と云て、其名のみ伝はれり。吉宗天寺盛なりし神は、故秀吉公の此町を再興し玉  
ふ時も、奉行人むかしの故実を尋、南北を縱とし、道を広くす。  
屋宅も広くして、おほくは富人おり。是を本町とす。継町凡  
九筋有。むかし太宰府へ通し、又唐船の着し海辺に通するか  
ために、南北の路を広くせしるべし。東西を横として道せは  
し。屋宅もせはくして、富人はまれなり。今博多町数百十三町  
あり。町の名は、既に提要上巻に記したれば、爰に記さず。改長

公船の城を築、東西に外郭をかまへ、大門をひらき、博多の間、那珂川に中島を築き、博多より石を口を出て、浦崎にいたる。是後往來の通路がといへども、博多の内道のはばは、東西に秀吉公如此すたれたるをこ  
て構町なれば、ふるきによりてそはし。  
いにしへ博多にありし入海を袖湊といふ。唐船の入し港なり。  
昔博多の東北に入海あり。西北より入で、東南にいたり、住吉の辺、堅橋のあたりまでも、斥地なりしとかや。又博多の西南も、今のかたはら町、港橋の辺までは、皆西北の海に臨めり。  
海水此辺の少東南にとまり、猶其東南は、斥地なかつゝき、那珂川は斥地の中を流て、海に入る。入海は今之守町の西北より、港橋ある迄まで、博多の中間を打めくり、東北の入海と、西北の大海上と相通す。是を中海といひて、唐船の入し所なり。

中比奥浜といひし所は、入海の中にありし洲なり。中海東北  
地とぞ成にける。

(中略)

袖 湊

残りし民屋さへ、又兵火に焼れて焦土と成ぬ。住なれし里の、立さりかたくおもへる者は、わら屋を結び、昔をしたふ輩も有しに、天正十五年春三月豊臣秀吉公、島津義久の服せざるを攻めとて、九州に下向し給ふ。島津はとなく降参ありしかば、帰りのほらせ給はんとて、六月三日稚崎にいたり玉ひ、二十余日遅留したまひしが、同十日博多の址を見玉はんとて、南蛮船にのり、博多に至り給ふ。此時博多の富商神屋宗湛と云者、兵賊の難をさけて、かりに肥前松浦郡唐津に寄居せしか、博多に來り、秀吉公を拜謁し、進物をさく。此宗湛はもとより茶会を好みけるか、其比天下に名を得し茶人千の利休、天王寺屋宗及等に会し、我數奇の程をも、世上にあらはさんとおもひ立、去年の十月の末に、唐津を出、長州赤間関より舟に乗り、仲冬半(暦)に京着して、京大坂境にて茶道に名ある僧侶に会せり。秀吉公此事を聞て、甚感し玉ひけるか、翌天正十五年正月三日大坂御城におるて、諸大名を招き、茶の会あり。此時宗湛をも同じく召て、茶を赐はる。其時石田治部少輔取持、所々の銘名器共見せしむ。さて進物を獻し、秀吉公を拜謁す。進物は虎皮一枚、枕一斤也。沈此時天王寺屋宗及是を取つぐ。又、秀吉公の命にて、近侍しける。諸大名にも招請せらる。又、秀吉公の弟大和大納言秀長卿、大和の郡山に在城し玉ひけるにも、參謁し、懇遇を

蒙る。如此兼てより、秀吉公の恩顧有し者なりしかば、今年、秀吉公筑紫に下り給ひし時も、侍候しける。六月十一日より、秀吉公博多町を立んとて、指図を書せ玉ひ、翌十二日より町わりをし玉ぶ。其經營は黒田忠高に仰付らる。奉行は瀬川三郎兵衛、長東大蔵大輔、山崎志摩守、小西攝津守等也。下奉行三十人あり、此所の老人共を呼出し、博多の町を十町四方に定め、堅横の小路をわり、民屋を營み作らせられける。秀吉公博多町わりをし玉ぶ。其經營は黒田忠高に仰付らる。奉行は瀬川三郎兵衛、長東大蔵大輔、山崎志摩守、小西攝津守等也。下奉行三十人あり、此所の老人共を呼出し、博多の町を十町四方に定め、堅横の小路をわり、民屋を營み作らせられける。秀吉公博多町わりをし玉ぶ。其經營は黒田忠高に仰付られし時、秀吉公は「下人にもたせ置たる様をとりよせ」秀吉公の御胸へにて。即時に鐵輪をならへて、町わりの構築をしなり。幸高見給ひ、始々増損して、秀吉の工にして、其秀の敏速なる事を「你美し船ひ、すなはち良想盡。」秀吉公が心ひ、船を増損して、其秀の敏速なる事を「你美し船ひ、すなはち良想盡。」秀吉公は「下人にもたせ置たる様をとりよせ」秀吉公の御胸へにて。即時に鐵輪をならへて、町わりの構築をしなり。幸高見給ひ、始々増損して、秀吉の工にして、其秀の敏速なる事を「你美し船ひ、すなはち良想盡。」秀吉公博多の津は、當昔異敵防禦の所として、且太宰府への通路なれば、北を外面とし、南を内面とし、町わりは、南北を縱とし、東西を横とせり。又南の方の外郭に、横二十間余の堀の跡ありて、瓦町の西南のすみより、辻堂の東に至る。是南方の要害の固なり。其土堤今もあり。此堀を房州堀と号す。白井安房守鑑康といひし人はほらせたる故なりといふ。然れば元龜天正の比、始て堀しなるへし。或は其前大内家守護の時よりも、此要害有しを、白井氏修補せしにや、いたまた詳ならず。白井安房守は大友宗麟の一族に、立花道長の母本孝院の兄なり。大友の命をうけて、天文より元龜の始まで、志摩郡守を歴任し、志摩郡の政所となる。都中の事を司どる。酒井立花山の城にうつり後、助のため博多に移り、朝鮮へ船をはり、艦隊を襲撃、由子か兵には、其弟白井新介が次を被選、露満鍋大共に天正六年十一月十日明暦の初やうやく田と成しきと、其堀の形残りて、今もあらはに見ゆ。又西一面の堀も、む

神宝 天神尊像御自作長九寸 不動明王正法教作長三尺 駿進像著仕出山之像  
二歩座像帝泉寺本尊 水道と号す。又むかしは湊の浜の北なる海つらには、石壁長  
阿弥陀像高さ五寸 十一面觀音像唐松後表裏七寸右 三十三所  
也。延喜七箇天神真筆經ノ切 天狗御衣ノ切レ 同御歌集一冊  
老松の松かさ 緑起二卷 石鳥居、宮守北ノ坊天台宗太宰府支配

### 3 築前国続風土記 卷之四

博多那珂郡  
に屬す

(中略)

今此所の形勢を見侍るに、東は箱崎の松原につらなり、西は橋をへたて、福岡につき、南は住吉に隣り、北は海に向ひ、那太の白浜、志賀島、唐泊、能古浦など、はるかに見えわたりて、海つぐのなかまきはまりなし。今も他国の商船、爰にあつまれり。三方は地廣平にして、麗国に道通せり。就中南は平原の地長くづき、肥前筑後豊前後に通して、往来しけし。西に那河川あり。東に石堂川あり。市の中には櫻戸の民軒をならへ、富人門をつらね、いちらくにはよろつたからおほく、民生日用の食貨ともしからず。且古寺名刹また多し。まことに四方輻輳の地にして、天府の邑といひつへし。此所南北の中程に、古は東西に通れる入海ありて、袖添と号せり。是唐船の人し港也。此入海より北を、湊の浜といふ。今は入海なくなり、其跡

のみわつかに残りて、横一間許なる溝、東西に通せり。今是を淡の入海より南を、守護領と号して、大内氏より治む。湊の浜は大友の領なりしといへり。海東諸國記には博多の居民万余戸、小武殿、大友殿と分ち領せり。小武は西南四千余戸、大友は東北六千余戸とあり。此海東諸國記といへる書は、朝鮮人の筆作にて、成化七年に成る。我朝の文明三年に当れり。此時の治むる所、かくのことくなりしにや。然るに此時博多全盛なりといへども、今の繁榮に及ぶへからず。今は袖添の入海もことく人家となり、北の海浜も築出して、其地甚廣まれり。今を以入海より此の地を見れば、昔の奥の浜に倍すへし。然ども猶六千余戸を容るべき地なし。諸国記に記せる所は、おそらくは當昔わか國の人、其事を張皇して、異客にかたれるを聞伝て、妄に信し、かく書たるならん。十里松の事を、武備志に百里のつゝけりと書る類なるへし。文明より後、度々焼失し、天正の時に至りて、又大友家と龍造寺度々合戦ありしかば、わつかに

## 1 「筑前名寄」

袖の湊 博多にあり。古唐船の入し湊也。昔瀬崎の松原の西、博多の東に入海あり。それより西の方、那珂川まで入海つゝきたりしを、袖の湊といへり。いつしか入海はなくなりぬ。今博多の入定寺と本岳寺の間より、片原町と云所の港橋まで東西に溝通れり。是袖のみなとの残れるなり。港橋と名づけしも、その他の湊の跡によれる名なり。

式子内親王

（中略）  
かけなれてやどる月かなひとしほ

夜な／＼さはぐ袖のみなとに

続古今

ちどりなくそでのみなどをとひこかし

もうこしふねのよるのねさめに

忠 良

千五百番歌合

恋わぶる袖のみなとの波まくら  
幾夜うきねの数つもるらん

為 定

新拾遺  
いかにせんもろこしぶねのよる方も

しらぬにさはぐそでのみなとを

## 2 「筑陽記」

<sup>袖湊</sup>自上古往昔唐船を繫し所也。今ハ川端町と云所に鐵橋

川に小橋あり。古の湊の遺跡也とて湊橋と号す。此川筋市中を北に流れて石堂川に入ル。昔ハ此川より西ハ入海にて其形衣の袖に似たるとて号けるとかや。又の名ハ冷泉津と云。八十五代吉兆の勘文也とて冷泉の並相下向也。因而爾云と也。(中略)

沖 浜 博多西浜を云。往昔袖の湊の沖に有故云來る成ベシ。

(中略)

○鏡天洞宮在相模川源町縁起云、昔承相綱輪より此所に移り座まし、

暫休らひ鏡に向ひ給ひて

鏡にもなき罪科は見えやられてやつれ姿のかすむ春かな

肖像を自刻直玉ふ。因て宮居を嘗み鏡天神と祠之。昔而此所伝

教大師草創の名藍の地也。延暦年中大師入唐の為当地に下向、連日風波あれて出帆の期なし。大師心中に大聖不動に祈願す。

明王の加護持焉にして矜加羅制多連虚空に現し忽順風に大洋を

涉て顯密の願を得。帰朝の時明王の尊像を一刀一札に彫刻し建

寺で明王山冷泉寺と榜して安置之。其後代わり年移り寺院廢絶して今は其跡もなし。

目 次

編 者	書 名	成 立 時 期	刊 行 本	頁
1 貝原益軒	【筑前名寄】	元禄四年(一六九二)	【益軒全集】四卷	4
2 安見有定	【筑陽記】	宝永二年(一七〇五)	聖福寺文庫(卷一・二のみ)	4
3 貝原益軒	【筑前国続風土記】	宝永六年(一七〇九)	【益軒全集】四卷・『福岡県史資料』続四編	5
4 末永虚舟	【筑前国名所記】	享保十七年(一七三二)ころ	な	
5 鶴田自反	【博多記】	元文元年(一七三六)ころ	な	
6 熊本敬鄉	【博多古説拾遺】	明和三年(一七六六)	【日本都市生活資料集成】港町II	11
7 津田元願・元貫	【石城志】	寛政十年(一七九八)	【筑紫史談附録】	12
8 加藤一純・鷹取周成	【筑前国続風土記附録】	影印本(同刊行会)	文献出版刊	16
9 青柳種信ほか	【筑前国續風土記拾遺】	な	な	
10 白井匡風ほか	【福岡県地理全誌】	明治十年(一八七七)	な	
11 末永茂世	【筑前旧志略】	明治十九年(一八八七)	【筑前史料叢書】	18
12 山崎藤四郎	【石城遺聞】	明治二十二年(一八八九)	福岡市三養堂刊	20

は「東北の方はひろく、西北の方はせはし」として、「東北の入海」が「西北の大河」に通じていたという理解をしている（七・八頁）。つまり、益軒が考えた袖ノ瀬は、博多の東側の方に大きき口を開けていたのである。その他の地誌もおおむねこの理解によっているが、2の「筑陽記」はこれとは逆の理解をしている。すなわち、博多の西端の川端町に「横瀬瀬川」があり、「昔ハ此川より西ハ入海にて其形衣の袖に似たるとして号けるとかや」（四頁）として、袖の瀬は博多の西側に大きく口を開けていたとするのである。近世の博多地図には、袖ノ瀬の位置を記したものがあるが、博多の東側にあつたとするものが多い。しかし、古い繪図の中には、西側にその位置を記したものもあり、その位置の确定には、さらに細密な検討が必要であろう。

また益軒は、袖ノ瀬の現状について、「今は入海なくなり、其跡のみわづかに残りて、横一間許なる溝、東西に通せり。今是を大水道と号す。」と記している（五頁）。つまり、宝永期には袖ノ瀬はなくなり、博多の東西を貫流する溝＝大水道がその名残りとして存在するというのである。この大水道と称された溝は、その後呉服町の勝野氏の屋敷地のために、呉服町付近で一部埋め立てられ、享保期には貫流しなくなっていたが（十頁「博多記」）、明和元年（一七六四）松屋利八がこれをいたみ、貫通せんことを藩に訴え、それが許されて本来のように貫通したという（十頁「石城志」）。近世後期にもこの溝は博多の東西を貫流していた（十七・八頁）。その後、明治十三年に至り、博多の有志の寄附金をもって、この溝の一部に石蓋を覆い、「便路を開いた（二〇頁「石城遺聞」）。また、博多の片原町にある港橋（湊橋）は、袖ノ瀬にかつて掛かっていた橋の名残りであるとするが（八頁）、その位置については必ずしも一定していない（十四頁「石城志」）。

袖の瀬に関する記事は、「石城志」が最も詳しいが、この「石城志」は貝原益軒の説を下敷にして、それと相反する理解をする「博多古説拾遺」を批判している。このほか、博多の地形についてのべ、「殊に、西町・呉服町辺の地を穿つ事深ければ、漂漂、或は船具の類出る事まゝ多し。」と考古学的知見を記していることは注目される。

以上、簡単に、袖の瀬に関する地誌の理解を記したが、その時期についていずれの地誌も明示していない点は、問題であろう。今後検討すべきである。また、袖ノ瀬の理解は、古代・中世における博多周辺の地形認識と深く関わっている。近世において博多と箱崎松原の間を流れられた比恵川（石堂川）は、昔は住吉と博多の間を流れ、瓦町の西で那珂川と合流し、博多の東北には元来川ではなく、袖の瀬の入海があった、という貝原益軒の見解に代表されるように（八頁）、袖ノ瀬の位置及び時代を画定するためには、同時に、博多周辺の河川や入海の状況といった地理景観の復元を余儀なくさせられるのである。これは極めて困難な問題であり、文献史学のみで解決するものではない。その究明には、考古学、地理学、地質学、国文学といった隣接諸科学との交流が不可欠であることは言うまでもない。

## 解題

博多の袖ノ湊に関する資料は、大別すると文献史料、文芸資料、地誌、絵図の四つに分かれる。その中で最も記事の豊富なものは、近世から近代にかけての地誌類であり、これを「博多袖ノ湊関係史料集」(地誌編)として本書に収録する。

博多袖ノ湊に関する近世・近代の地誌は多数あるが、本史料集では、それらの中から代表的なものを十二編選び収録した。もとよりこれら地誌の記事をそのまま史実とする事はできないが、地誌の編纂者が、伝承や歴史学・地理学的な知見にもとづき、袖ノ湊をどのように認識したかが如実に示されている。そのような近世・近代の袖ノ湊觀は、今日の袖ノ湊研究にも大きな示唆を与えるものと考えられる。

博多に関する近世地誌は、時代的に三期に分類される。第一期のものは、元禄・宝永期に編纂された1~4であり、3の『筑前国続風土記』(以下『続風土記』と略す)を代表とする。第二期のものは5~7であり、第一期の地誌類のように筑前一国にわたるものではなく、博多のみを記述の対象とする点に特色がある。それらを代表するのは7の『石城志』であろう。第三期のものは、近世後期の福岡藩による『続風土記』再吟味の結果として成立した8~9である。いずれも叙述の網羅性・客觀性を主眼としており、その史料的価値は高いが、博多に関する記事は『続風土記』を出ないものが多い。伊藤常足の『太宰管内志』は藩撰地誌ではないが、成立時期からするところのグループに入れられる。

1~9の近世地誌を代表するのは『続風土記』である。その博多に関する記事は、網羅的ではないが、内容は詳細で、遠見に満ちており、博多研究の嚆矢とも言うべきものである。後世の地誌の多くはこれを参照しており、その影響は極めて大きい。この『続風土記』を中心にして、近世における袖ノ湊觀をみてみよう。

袖ノ湊(袖湊)は「いにしへ博多にありし入海」(七頁)であり、その名称の由来については、「此人海博多の中を打ちめくりて、袖のかたちのことくなりしかば、袖湊と名付しにや」と記している(八頁)。往昔博多にあつた入海が、着物の袖の形をしていたので「袖湊」と称したというのであり、他の地誌との説と同一である。また、袖ノ湊については、「唐船の入し港なり」(七頁)という性格規定をしている。しかし、その規定は文献史料から具体的に導きだされたものではなく、和歌などの文芸資料の分析結果によるものであろう。ただし、いずれの地誌も、袖ノ湊の存在時期については明示していない。

次に、袖ノ湊の具体的な位置・形状について、貝原益軒は、博多の「南北の中程に、古は東西に通れる入海あり」とし(五頁)、この「入海」即ち「中海」

付  
編

博多袖ノ湊関係史料集(1)  
地誌編

福岡大学  
佐伯 弘次  
神奈川県立金沢文庫  
福島 金治

福岡市  
高速鉄道関係埋蔵文化財報告VI  
博 多

1987(昭和62)年3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区大名1丁目7-23

印刷 桑文社印刷株式会社  
〒812 福岡市博多区博多駅南4丁目15-17